新潮文庫

新版　大統領に知らせますか?

ジェフリー・アーチャー
永井　淳訳

新潮社版

3963

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

改訂版への著者覚書

『大統領に知らせますか？』の初版執筆にあたって、わたしは物語を六年ないし七年の近未来に設定した。その近未来が過去になってしまった今の時点では、物語の信頼性がいくぶんか損われてしまった。

それ以降わたしは『ロスノフスキ家の娘』という作品を書いているが、その主要な登場人物であるフロレンティナ・ケインは、アメリカ合衆国初の女性大統領となる。従って、『大統領に知らせますか？』の書きなおしにあたっては、初版の焦点であったエドワード・M・ケネディという実在の名前を残すよりも、わたしが創造した架空の大統領を登場させるほうが理にかなっているように思える。そうすればこの作品は『ロスノフスキ家の娘』およびその前篇である『ケインとアベル』にも、ごく自然に結びつくからである。

『大統領に知らせますか？』のストーリーの大筋は変っていないが、この改訂新版では重要なもの、些末なものを含めて、多くの書きなおしがおこなわれた。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

新版　大統領に知らせますか？

CamScannerでスキャン

CamScannerでスキャン

一月二十日　火曜日

午後十二時二十六分

「わたくし、フロレンティナ・ケインは、厳粛なる誓いのもとに……」

「わたくし、フロレンティナ・ケインは、厳粛なる誓いのもとに……」

「……アメリカ合衆国大統領の職務を忠実に執行し……」

「……アメリカ合衆国大統領の職務を忠実に執行し……」

「……持てる能力の最善を尽して合衆国憲法を保持し、守り、擁護するものであります。神よわれを助けたまえ」

「……持てる能力の最善を尽して合衆国憲法を保持し、守り、擁護するものであります。神よわれを助けたまえ」

第四十三代大統領はドウェー聖書に片手をのせたまま、ファースト・ジェントルマンにほほえみかけた。それは一つの闘いの終りであると同時にもう一つの闘いのはじまりでもあった。フロレンティナ・ケインは闘いというものを熟知していた。彼女の最初の闘いは下院議

CamScannerでスキャン

員に選出されるためのものであり、続いて上院議員に選ばれ、最後にそれから四年後、アメリカ合衆国初の女性副大統領になるための闘いを経験していた。彼女は熾烈な予備選挙運動のあと、六月の民主党大会の五回目の投票で、ラルフ・ブルックス上院議員に辛勝した。十一月には、ニューヨーク州選出の元下院議員である共和党候補との、さらに激しい闘いにも勝ち抜いた。フロレンティナ・ケインは十万五千票差で大統領に当選したが、これは全投票数のわずか一パーセントというアメリカ史上最少の僅差であり、一九六〇年にジョン・F・ケネディがリチャード・ニクソンにつけた十一万八千票差よりもなお小さかった。

　拍手はしずまったが、大統領は二十一発の礼砲が鳴りやむまで待った。フロレンティナ・ケインは咳ばらいをして、キャピトル広場に集まった五千人の熱心な市民と、テレビの画面に見入る二億の国民と相対した。大統領就任式につきものの毛布や重々しい外套も、今日は不要だった。一月末にしては珍しく暖かい陽気で、議事堂の東正面に面した立錐の余地のない芝生も、濡れてはいたがクリスマスに降った雪は消えていた。

「ブラッドリー副大統領閣下、最高裁判所長官閣下、カーター元大統領閣下、レーガン元大統領閣下、聖職者および国民のみなさん」

　ファースト・ジェントルマンは新任の大統領にじっと視線を向けながら、妻のスピーチ原稿のなかの、自分が考えた言葉やいいまわしを耳にするたびに、ときおりにっこりほほえんだ。

彼らの一日はこの日の朝六時三十分ごろに始まった。夫も妻も、前の晩彼らに敬意を表し

て催されたすばらしい就任式前のコンサートのあと、あまりよく眠れなかった。フロレンティナ・ケインは就任演説の最後の検討をおこなったが、聞かせどころに線を引く程度で、大幅な手直しはしていなかった。

この日フロレンティナは、起床と同時に衣裳だんすからブルーのドレスを選んだ。そして最初の夫リチャードが死ぬ直前にくれた小さなブローチをつけた。

フロレンティナはそのブローチをつけるたびに今は亡きリチャードを思いだした。あの日彼は整備工のストライキのせいで飛行機に乗れなかったにもかかわらず、フロレンティナがハーヴァードの卒業式でおこなう演説に間に合わせるために、車を雇ったのだった。

リチャードは《ニューズウィーク》が大統領職へのロケット発射台と評したその演説を、ついに聞くことなく終った——彼女が病院に駆けつけたときは、すでに息を引きとったあとだったからである。

彼女は夢想からさめて、自分が地上最強のリーダーである現実の世界に戻った。だが最強のリーダーではあっても、リチャードをこの世に生きかえらせる力はなかった。彼女は鏡をのぞいた。自信にみちあふれていた。なんといっても、パーキン大統領の予期せぬ死からすでに二年近く大統領の地位にあった。彼女が大統領の死を知ったのは、最も古くからの友人で、将来夫となるエドワード・ウィンチェスター相手のゴルフ・マッチで、四フィートのパットを沈めようとしていたときだと知ったら、世の歴史家たちは驚くだろう。

ヘリコプターが頭上を旋回しはじめたとき、彼らはプレーを中断した。ヘリコプターが着

陸すると、海兵隊大尉がとびおりて彼女のほうに駆けより、敬礼していった。「大統領閣下、大統領が死去されました」そして今、アメリカ国民は引きつづきホワイト・ハウスに女性を受けいれる意思を表示したのだった。アメリカ合衆国は史上はじめて、みずからの能力でだれもが渇望する政治的地位を射とめた女性大統領を誕生させた。彼女は寝室の窓から、早朝の陽光のなかできらめくポトマック川の静かな広々とした川面を眺めた。

彼女は寝室を出て、夫のエドワードが彼女の二人の子供たち、ウィリアムとアナベル相手におしゃべりしている家族用食堂にまっすぐ足を向けた。三人にキスをしてから、家族揃って朝食の席についた。

彼らは過去の話に笑い興じ、未来について語りあったが、時計が八時を打つと、大統領は執務室へ行くために席を立った。官房長のジャネット・ブラウンが外の廊下の椅子に腰をおろして待っていた。

「おはようございます、大統領閣下」

「おはよう、ジャネット。万事順調かしら？」彼女はほほえみながらいった。

「そうだと思います」

「結構だわ。いつものとおりにやりましょうよ。わたしのことは心配しなくていいわ、あなたの指示に従うから。なにから始めればいいの？」

「電報が八百二十四通と手紙が二千四百十二通届いていますけど、各国元首あての返信以外は後まわしでよいと思います。各国元首あての返信は十二時までに用意しておきますわ」

CamScannerでスキャン

「日付は今日にしてね。そのほうが喜ばれるわ。用意ができしだい一通残らずわたしが署名します」
「承知しました。では今日の予定です。皮切りはまず十一時にレーガン、カーター両元大統領とコーヒー、そのあと就任式に出発します。就任式のあとは上院の昼食会に出席、それからホワイト・ハウス前で就任祝賀パレードを観閲します」
ジャネット・ブラウンは、フロレンティナがはじめて下院議員に当選した選挙で彼女のスタッフに加わって以来十五年間ずっとそうしてきたように、ホッチキスで綴じた3×5インチのインデックス・カードの束を渡した。それは大統領の一時間刻みの予定表だったが、今日はむしろふだんより少なかった。フロレンティナはカードにざっと目を通してから、官房長に礼をいった。エドワード・ウィンチェスターが戸口に現われた。フロレンティナが彼のほうを向くと、エドワードはいつもと同じように愛情と尊敬の入りまじった微笑をうかべた。彼女はパーキン大統領の死を告げられたあの特別な日に、十八番ホールをおえたあとでほとんど衝動的に彼と結婚する決心をしたことを、ただの一度も悔んだことはなかったし、たぶんリチャードもその決心に賛成してくれるだろうと確信していた。
「十一時まで事務をとるわ」と、彼女はエドワードにいった。彼はうなずいて、この忙しい一日にそなえるために立ち去った。
ホワイト・ハウスの前には早くも祝賀の人垣（ひとがき）ができていた。

「雨が降ってくれるといいんだが」シークレット・サーヴィス長官H・スチュアート・ナイトは、声をひそめて補佐官にいった。この日は彼にとっても生涯で最も重要な一日だった。「大部分の人間は無害なことがわかっているが、こういう特別な日は神経がぴりぴりしてかなわんよ」

群衆はおよそ百五十人をかぞえた。うち五十人はミスター・ナイトの部下だった。常に大統領より五分先を行く先導車が、すでにホワイト・ハウスまでの沿道を丹念にチェックしはじめていた。シークレット・サーヴィスが沿道の小さな人垣を見張っていた。なかには手にした小旗を振る人々もいて、彼らは就任式を一目見るために集まってきたのだった。将来自分の孫たちに、フロレンティナ・ケインがアメリカ合衆国大統領に就任した日に彼女をこの目で見たと語り伝えることだろう。

十時五十九分に執事が正面玄関のドアをあけると、群衆の間から拍手が湧き起った。大統領とその夫は微笑をうかべた顔また顔に向って手を振りながらも、経験と職業的な直感によって、群衆のなかの五十人が自分たちのほうを見ていないことを感じとった。

二台の黒塗りのリムジンが午前十一時にホワイト・ハウスの北口に音もなく停った。海兵隊儀仗兵が不動の姿勢をとって、北面玄関でケイン大統領の出迎えを受ける二組の元大統領夫妻に敬礼した。大統領みずから出迎えるのは、ふつう各国元首がホワイト・ハウスを訪問するときだけだった。彼女は自分で四人を書斎へ案内し、エドワード、ウィリアム、アナベ
[illegible]

二人の元大統領のうちの年長者が、自分の健康が衰えたとしたら、過去八年間妻の料理に頼らざるをえなかったからだとこぼしていた。「彼女は何年もフライパン一つ汚したことがなかったんですが、このところ日ましに料理の腕をあげています。だめ押しに『ニューヨーク・タイムズ・クック・ブック』を一冊渡しておきましたよ。あの社の出版物でわたしをけなさなかったのはあの本ぐらいのものですな」フロレンティナはぎごちなく笑った。早く事務的な話を始めたかったが、二人の元大統領が久しぶりのホワイト・ハウス訪問を楽しんでいるようすだったので、二十年近い政治生活の間に第二の天性となってしまった仮面をかぶりながら、熱心に相手の話を聞いているふりをした。

「大統領閣下――」フロレンティナはその呼びかけに対する自分の本能的な反応を周囲に気づかれないように、すばやく考えをめぐらさねばならなかった。「十二時を一分すぎました」

彼女は大統領報道官をちらりと見て、おもむろに腰をあげ、元大統領夫妻をホワイト・ハウスの階段のほうへ案内した。海兵隊軍楽隊が最後の『大統領万歳』を演奏した。一時きっかりに、彼らはふたたびこの曲の最初の演奏をおこなうことになる。

二人の元大統領は、自動車行列の先頭の車、ボディは黒塗りで屋根は円形透明の防弾リムジンに案内された。下院議長ジム・ライトと上院与党院内総務のロバート・バードが、議会を代表して、すでに二台目の車のなかに坐っていた。リムジンのすぐうしろにはシークレット・サーヴィスで満員の二台の車が続いた。フロレンティナとエドワードは五番目の車に乗っていた。そのつぎがニュー・ジャージーのブラッドリー副大統領夫妻だった。

H・スチュアート・ナイトはもう一度所定のチェックをおこないつつあった。彼の五十名の部下はいまや百名にふくれあがっていた。正午には、地元の警察とFBIを加えて、その数は五百名になるだろう。CIAは計算に入れないでだ、とナイトは憂い顔で考えた。事実CIAがきょうの就任式の警備に参加するかどうかを彼は聞いていないし、シークレット・サーヴィスの長官である彼でさえ、群衆のなかにまぎれこんだCIAをかならず見つけだせるとはかぎらない。彼は見物人の拍手がしだいに大きくなるのを聞いた。大統領を乗せたリムジンが議事堂めざして走りだしたのだ。

エドワードが上機嫌でおしゃべりをしていた。が、フロレンティナの心はよそにあった。ペンシルヴェニア・アヴェニューの群衆に向って機械的に手を振りつづけたが、心はふたたび演説に飛んでいた。改築されたウィラード・ホテル、新築中の七つのオフィス・ビルディング、インディアンの岩壁住居に似た積み重ね式の共同住宅、新しい商店やレストランや広々とした遊歩道などが窓外を通りすぎて行った。FBIを収容するJ・エドガー・フーヴァー・ビルディングは、一部上院議員たちの度重なる改名の努力にもかかわらず、いまだに初代長官の名を冠したままだった。過去十五年間のこの通りの変貌ぶりは、まさに今昔の感があった。

議事堂に近づいたとき、エドワードが大統領の夢想を破った。「神のご加護を祈るよ、ダーリン」彼女はうなずいて夫の手を握った。六台の車が停った。

ケイン大統領は議事堂の一階に入った。エドワードがちょっと立ちどまって、運転手の労

をねぎらった。ほかの車から降り立った人たちが、シークレット・サーヴィスに囲まれて群衆に手を振りながら、演壇のそれぞれの席へ進んだ。その間式部長が地下道を通ってケイン大統領をレセプションの会場へ案内しつつあった。十歩あゆむごとに海兵隊員が挙手の礼で迎えた。ブラッドリー副大統領が彼女を迎えた。二人はとりとめのない話をしながら立っていたが、たがいに相手の返事を聞いていなかった。二人の元大統領が微笑をうかべながら地下道を通って姿をあらわした。年長のほうの元大統領ははじめて年齢相応に見えた。髪の毛が一夜にして白くなってしまったかのようだった。彼とフロレンティナはまた儀礼的に握手をかわした。彼らはきょう一日で通算七回この儀礼を繰りかえさなければならない。式部長が小さなレセプション・ルームを通って二人を演壇に案内した。すべての大統領就任式と同じように、この日も議事堂の東階段の上に臨時の演壇が設けられていた。群衆が総立ちになって、壇上から手を振る大統領と二人の元大統領にひとしきり拍手を送った。やがて彼らは無言で腰をおろして、儀式の開始を待った。

「アメリカ合衆国国民のみなさん、わたくしが大統領に就任する今現在、合衆国の前には全世界的な数々の重大問題が立ちふさがっております。南アフリカでは、黒人と白人の間で熾烈な内戦が戦われております。中東では昨年の戦争による荒廃が復旧しつつあるとはいうものの、両陣営ともに学校や病院や農場の再建以上に軍備の立てなおしに力を注いでおります。中国とインド、パキスタンとソ連の国境には、世界最強にして最も人口の多い四つの国家間

の戦争の危機が依然として潜在しております。南アメリカは極右と極左の間を揺れ動いておりますが、いずれの側も国民の生活を改善する能力をそなえているとは思われません。北大西洋条約機構の最初の加盟国のうちの二国、フランスとイタリアは、いままさに条約から脱退しようとしております。

「一九四九年に、ハリー・S・トルーマン大統領は、合衆国はその全力をあげて自由諸国を脅やかす敵と戦う用意があると宣言しました。今日、その気前のよさが失敗を招いた、アメリカは過去も現在も世界の指導者としての重責を負うには力が弱すぎたのだ、とある人はいうかもしれません。うちつづく国際危機を目の前にしては、いかなるアメリカ人でも、なにゆえこれほど遠い国の出来事に関心を持たねばならないのか、なにゆえ合衆国外の自由の擁護に責任を感じなければならないのか、という疑問をいだくかもしれません。

「わたくしはこれらの疑問にわたくし自身の言葉で答える必要がないのです。『何人も孤島にはあらず』と、イギリスの詩人ジョン・ダンはいまから三百五十年も前に書いています。『人はみな大陸の一部なり』アメリカ合衆国は大西洋から太平洋まで、北極から赤道まで拡がっています。『われもまた人の一人なりせば、誰がために鐘は鳴ると問うなかれ、そは汝がために鳴るものなれば』」

エドワードは就任演説のそのくだりが気に入っていた。それは彼自身の気持を充分に表わしていた。だが聴衆が過去にフロレンティナ独特のレトリックの連発に対して示したあの熱狂ぶりを、いまもなお示すだろうかどうかと内心は心配だった。彼の耳に波のようにつぎつ

ぎと押し寄せる盛大な拍手が、その懸念を一掃した。魔術の効果はまだ衰えていなかった。
「国内にあっては、わたくしたちは自由世界の羨望の的となるような医療制度をうちたてます。それはすべての国民に最良の医学的助言と援助を受ける平等な機会を提供するでありましょう。いかなるアメリカ人をも、経済的な理由で死なせてはならないのです」
多くの民主党員が老人医療保障制度に関するフロレンティナ・ケインの考え方を理由に、彼女に反対票を投じていた。ある白髪の老開業医は、「アメリカ人は自分の両足で立たなければならない」と、彼女に語った。それに対してフロレンティナは、「彼らがすでに寝たきりだとしたら、いったいどうやって立たせるのですか？」と反論した。老医師は「神よ、女性大統領からわれらを救いたまえ」と答えて、共和党候補に投票した。
「しかしこの政権の主要な政策は法と秩序の回復であり、わたくしはこの目的に向って、許可なき銃器の販売を違法とする法案を下院に提出する考えであります」
聴衆の拍手は熱狂的とはいえなかった。
フロレンティナは昂然と胸を張って続けた。
「そこで国民のみなさん、わたくしはあなた方に提案します、今世紀の終りをして、合衆国が力のみならず正義においても世界をリードする時代、合衆国が宣戦布告——病気と、人種差別と、貧困に対する——をする時代たらしめようではありませんか」
大統領が着席すると、全聴衆がいっせいに立ちあがった。
十六分間にわたる就任演説は十回にわたって拍手で中断された。しかし新しい行政府長官

が群衆の心をつかんだと確信してマイクロフォンの前から退いたとき、彼女の視線は熱狂する聴衆のほうを向いてはいなかった。並居る壇上のお歴々の間を縫って、彼女はたった一人の人を捜し求めた。彼女は夫に歩みより、頬(ほお)にキスをし、彼の腕をとって、てきぱきと手際(てぎわ)のよい式部官に導かれて演壇をおりた。

H・スチュアート・ナイトは物事が予定どおりに運ばないことが気に入らなかったが、とりわけこの日はなに一つ予定どおりに運ばなかった。だれもが少なくとも三十分は昼食に遅れそうだった。

大統領が部屋に入ると、七十六名の招待客がいっせいに立ちあがった。これらの男女はいまや民主党を支配する人々だった。彼女の支持を決定した北部エスタブリッシュメントが、ラルフ・ブルックスを支持した人々を除いて、今日この場に顔を見せていた。

昼食会の出席者の何人かはすでに彼女の政府の閣僚に決っていた。そして全員が彼女をホワイト・ハウスへ送りかえすうえでなんらかの役割を演じていた。

大統領は昼食をとる暇もなかったし、食欲もなかった。だれもがいちどきに彼女に話しかけたがったからである。この日のメニューはロブスター・ビスクに始まってロースト・ビーフへという、彼女のお好みの料理が特別に用意されていた。最後にシェフが腕によりをかけて作ったこの日の呼び物(ピエス・ド・レジスタンス)、ホワイト・ハウスを象(かたど)ったアイス・チョコレート・ケーキが運ばれた。エドワードはじっと見守ったが、妻は目の前のくさび形に切り分けられた大統領執務室(オーヴァル・オフィス)に手をつけなかった。「だから彼女はダイエットの必要がないんだわ」と、マリア

ン・エイドルマンが感想を洩らした。意外な抜擢人事で司法長官に就任したマリアンは、児童の権利の重要性についてエドワードと話していたところだった。エドワードは話に耳を傾けようとしたが、あまり頭に入らなかった。またの機会にゆっくり拝聴することにしよう。

最後の握手が終り、ホワイト・ハウスの最後に残った部分がこわされるころ、大統領とその一行は就任パレードに四十五分遅れていた。彼らがホワイト・ハウス正面の観閲台に到着したとき、二十万の群衆のなかでいちばんほっとしたのは、大統領の到着を待って一時間以上も不動の姿勢をとりつづけていた大統領親衛隊員だった。大統領が着席すると同時にパレードが開始された。各州の軍隊が行進し、海兵隊軍楽隊がスーザの行進曲からアーヴィング・バーリンの『ゴッド・ブレス・アメリカ』にいたるあらゆる曲を演奏した。各州ごとに繰り出される山車のうちのいくつかが、たとえばイリノイ州のそれのように、ポーランド系のフロレンティナの背景を示すさまざまな趣向をこらして、本来生まじめで厳粛な行事に華やかな彩りと陽気さを添えていた。

彼女はいまだに、移民の娘に国家最高の官職を託すような国は、世界中どこを捜してもほかに見当らないと感じていた。

えんえん三時間に及ぶパレードがようやく終り、最後の山車が通りのはずれに消えたとき、フロレンティナ・ケインの官房長であるジャネット・ブラウンが、大統領の耳に口を近づけて、いまから最初の就任記念舞踏会までの間になにをしますかと質問した。

「閣僚指名と各国元首への返信に署名して、あすのために机をかたづけておくわ」と、間髪

を入れず答えが返ってきた。「それで最初の四年間は暇をもてあますこともないでしょう」

大統領はまっすぐホワイト・ハウスに戻った。南柱廊玄関を通り抜けるとき、海兵隊軍楽隊が『大統領万歳』を演奏した。大統領は、執務室に入る前からコートを脱いでいた。堂々たるオーク材にレザーばりのデスクに向って腰をおろし、一息入れながら部屋のなかを見まわした。あらゆるものが彼女の注文どおりに配置されていた。背後にはタッチ・フットボールに興じるリチャードとウィリアムの写真が飾られていた。目の前にはアナベルが好んで使った、ジョージ・バーナード・ショウからの引用句の入った文鎮があった。『ある人々は物事をありのままに見て、なぜかと問う。わたしはありもしないことを夢見て、なぜそうであってはならないのかと問う』フロレンティナの左手には大統領旗が、右手にはアメリカ合衆国の旗があった。デスクの中央にでんと坐っているのは、ウィリアムが十四歳のときに紙粘土で作ったワルシャワのバロン・ホテルの模型だった。煖炉では石炭が燃えていた。エイブラハム・リンカーンの肖像が就任宣誓をすませたばかりの大統領を見おろし、出窓の外では緑の芝生がワシントン記念塔まで切れ目なしに続いていた。大統領は微笑をうかべた。彼女はわが家に戻ってきたのだ。

フロレンティナ・ケインは公文書の山に手をのばして、自分の内閣で働くことになる人々の名前にざっと目を通した。任命は三十人を超えていた。その一つ一つに飾り書きで署名した。最後が官房長のジャネット・ブラウンだった。大統領はそれらの辞令をただちに議会へ届けるよう命じた。報道官が今後四年間のアメリカの歴史を口述することになる書類を受け

CamScannerでスキャン

とって、「ありがとうございます、大統領閣下」と礼をいい、そのあとでつけくわえた。「つぎはなにをなさいますか？」

「常に最も大きな問題から取組め、とリンカーンがいっているわ。だから銃砲所持規制法の草案の検討から始めましょう」

報道官は身震いした。なぜなら彼女は、これからの二年間における下院の戦いが、リンカーンが直面した南北戦争に劣らぬ苦戦になりそうなことを、知りすぎるほどよく知っていたからである。いまだに多くの人々が武器の所持を奪うことのできない生得権とみなしていた。彼女はこの問題で「一家の分裂」などという、リンカーン時代と同じ事態に到らぬことをひたすら願うだけだった。

三月三日　木曜日夕刻（二年後）

午後五時四十五分

ニック・ステームズは家へ帰りたかった。朝の七時から働きづめで、もう午後の五時四十五分だった。昼食をとったかどうかさえ思いだせない。妻のノーマは、彼が夕食に間に合うように帰宅したためしはないし、たまにそんなことがあったとしても、料理はすっかりさめてしまってとても食べられたものじゃないと、あいもかわらずこぼしつづけていた。そういえば、最後にきちんと夕食を食べたのはいつのことだったろうか？　彼が午前六時三十分に家を出たとき、ノーマはまだベッドのなかだった。子供たちが学校へ行くようになってから、彼女の仕事らしい仕事といえば夫のために夕食を作ることだけだった。どのみち彼に勝目はなかった。もし彼が失敗者なら、彼女はそのことで愚痴をこぼすだろう。ところが彼はだれの目にもりっぱな成功者だ。ＦＢＩの支局をあずかる最年少の捜査官だが、毎晩夕食に間に合うように帰宅していながら、四十一歳の若さでそれだけの地位につけるはずはない。いずれにしろ、ニックはこの仕事を愛していた。仕事は彼の情婦だった。少なくとも妻はその点に感謝すべきだろう。

ニック・ステームズは九年間ワシントン支局長の地位にある。ワシントン支局は全米で三

番目に大きく、守備範囲は最も狭いが――ワシントンD・Cの六十一平方マイルだけだ――刑事担当十二、公安担当十、合計二十二の捜査班を抱えている。つまり彼は世界の首都の治安を維持しているのだった。もちろん、ときにはやむをえず帰宅が遅くなることもある。だが、今夜は特別に努力して早く帰るつもりだった。彼は時間の余裕があるときは妻を深く愛していた。今夜は早く帰って妻を喜ばせてやるつもりだった。インターフォンを取りあげて、刑事部長のグラント・ナーナを呼びだした。

「グラントか」

「なんでしょう、支局長」

「わたしは家へ帰るよ」

「あなたに家があったとは知りませんでしたよ」

「きみだってそうだろう」

ニック・ステームズは受話器をおいて、黒い長髪を指でかきあげた。彼はFBI捜査官というより、映画に出てくる犯罪者にふさわしい男だった。どこもかしこも黒一色だからである。黒い目、浅黒い肌、黒い髪、スーツに靴まで黒ときているが、少なくともこの二つは捜査官のすべてに共通するものだった。上着の襟には合衆国とギリシャの国旗をあしらった飾りピンをつけていた。

数年前に一度、彼は昇進と、通りをへだてたFBI本部に移って、十三名の長官補佐の一人として長官を助ける機会を提供されたことがあった。だがデスクに縛りつけられた長官補

佐という役目は彼の流儀に合わなかったので、その誘いを断わって支局にとどまった。それはいわばスラム街から宮殿への栄転だった。ワシントン支局はペンシルヴェニア・アヴェニューにある旧郵政省ビルの四、五階と八階を占めている。部屋は鉄道の客車にやや似ていて、もしこれがゲットーにでもあれば、スラムといわれても仕方のないところだった。

太陽が高層ビル群の陰に沈むと、ただでさえ薄暗いニックの部屋はいちだんと暗くなった。彼は電灯のスイッチに近づいた。「資源を節約せよ」（訳注 "Don't be foolish" にかけた省資源スローガン）と、蛍光塗料で書いたステッカーが、スイッチに貼りつけてあった。黒っぽい地味なスーツを着た男女のひっきりなしの出入りが、旧郵政省ビル内のＦＢＩワシントン支局の所在を示しているように、この政府による落書は、ペンシルヴェニア・アヴェニューのこの洞穴のような建物の二つのフロアを、連邦エネルギー局の独裁者たちが占有していることを示す役割を果していた。

ニックは窓ごしに通りをへだてた新しいＦＢＩ本部を眺めた。そこは一九七六年に完成した醜悪なモンスターのような建物で、エレベーターでさえ彼の部屋よりも大きい。だが彼はいっこうにそのことを気にしなかった。彼の身分はすでに十八級に達しており、ＦＢＩで彼以上の高給取りは長官だけしかいない。いずれにせよ、黄金の手錠をかけられて引退させられるまでは、デスクの前に坐る気はなかった。彼は現場の捜査官と絶えず接触し、ＦＢＩの脈搏を肌で感じていたかった。ワシントン支局長の地位にあって、坐って死ぬのではなく、立ったまま死ぬのが望みだった。彼はもう一度インターコムに手をのばした。「ジュリー、

CamScannerでスキャン

わたしはもう帰るよ」
　ジュリー・ベイヤーズは、つと顔をあげて、ランチタイムがきたかのようにちらと腕の時計を見た。
「はい、わかりました」と、彼女はびっくりしたような声で答えた。
　秘書室を通り抜けるとき、彼はジュリーににやりと笑いかけた。「ムウサカ（訳注　スライスしたナスの間にひき肉をはさんで、チーズや香料入りソースをかけたギリシャ料理）、ライス・ピラフ、それに女房が待っている。マフィアには内緒だよ」部屋の外に片足を踏みだしたところで、専用電話が鳴った。もう一方の足を踏みだせばそれでおしまいなのに、ニックはなんの電話か確かめずにいられない男だった。ジュリーが間髪を入れず立ちあがった。ニックはいつもながらちらと目についた彼女の美しい脚に見とれた。「いや、いいんだよ、ジュリー。わたしが出る」彼はつかつかと部屋へ戻って、鳴りつづける電話をとった。
「ステームズだ」
「こんばんは。首都警察のブレイク警部補です」
「やあ、デーヴ、昇進おめでとう。そういえば最後に会ったのは……五年前かな。あのころきみはまだ巡査部長だった。どうだ、元気かね？」
「ありがとうございます、いたって元気ですよ」
「それで、警部補、どえらい犯罪にぶつかったかね？　チューインガムを盗んだ十四歳の子供をつかまえたが、容疑者が盗品をどこに隠したか、わたしの優秀な部下に調べてもらいた

CamScannerでスキャン

い、というわけかい？」
　ブレイクは笑って答えた。「それほど面倒な頼みじゃないですよ、ステームズさん。実はウッドロー・ウィルソン・メディカル・センターに、ＦＢＩの長官に会いたいという男がいましてね。なんかえらく重大な話があるんだそうです」
「わかるね、その感じ。わたしが自分で会ってみたいくらいだ。その男はわれわれが雇っている内報者の一人かな、デーヴ？」
「わかりません」
「名前は？」
「アンジェロ・カセフィキスです」ブレイクはステームズに名前の綴り（つづり）を教えた。
「なにか特徴は？」
「わかりません。電話で話しただけなんです。ＦＢＩが耳をかさないとアメリカに不幸なことが起きるというだけでして」
「そういったのか？　そのまま切らずに待ってくれ、いまその名前を調べてみる。き印かもしれんよ」
　ニック・ステームズは当直支局員に通じるボタンを押した。「当直はだれだ？」
「ポール・フレデリックスです、支局長」
「ポール、き印箱（ナット・ボックス）を出してくれ」
　ＦＢＩ内部で親愛の情をこめてき印箱と呼ばれているものは、夜中に火星人が自宅の裏庭

CamScannerでスキャン

に着陸したとか、全世界を征服しようというCIAの陰謀を発見したなどという電話をかけたがる連中の名前を網羅した、3×5インチの白いインデックス・カードのコレクションだった。フレデリックス捜査官がき印箱を目の前に用意して、電話に戻った。
「どうぞ、支局長。名前をいってください」
「アンジェロ・カセフィキスだ」
「そいつは頭のおかしいギリシャ人ですよ、きっと。外国人はなにをいいだすかわかりませんからね」
「ギリシャ人は外国人じゃないよ」と、ステームズは嚙みついた。彼の名前は、短縮される前は、ニック・スタマタキスといった。彼は死んだ父親がすばらしいギリシャ姓を英語風に変えたことを、いまだに許せないと思っていた。
「すみません。その名前はき印箱にも内報者リストにもないようです。その男はだれか知合いのFBIの名前を出していますか？」
「いや、ただFBI長官と話したいといってるだけらしい」
「われわれもみんなそうじゃありませんか？」
「冗談はやめとけよ、ポール、さもないと規定以上の週間当番勤務をやらなきゃならなくなるぞ」
各支局員は年間に一週ずつき印箱の当番を引き受けて、不寝番で電話の応対をし、抜目のない火星人を撃退したり、CIAの卑劣なクーデター計画の裏をかいたりしなければならな

かった。なかんずくFBIをわずらわせることなくそういった電話を自分で処理しなければならない。支局員のだれもがこの仕事には怖気をふるっていた。ポール・フレデリックスは急いで電話を切った。こんな仕事を二週間もやらされたら、例の小さなインデックス・カードに自分の名前を書き入れるはめになりかねない。

「で、きみはどう思うかね、デーヴ？」と、ステームズはうんざりした表情で、デスクの左のひきだしから煙草を取りだしながらブレイク警部補にきいた。「そいつの話し方はどんなふうだった？」

「ひどく逆上していて、支離滅裂でしたよ。新入りの部下を一人会いに行かせたんですがね。アメリカはおれの話に耳をかすべきだといいはるだけで、わけはいわないんだそうです。ひどくおびえていたらしい。脚に弾傷があって、ちょっと厄介なことになるかもしれません。傷口が化膿しているんです。病院へくるまで何日かほっといたらしいです」

「どこでどうして撃たれたのかな？」

「そいつはまだわかりません。目撃者を捜してるんですが、いまのところまだ見つかっていないし、カセフィキスもいつ撃たれたのか話そうとしないんです」

「ご指名はFBIか？　一流好みというわけだな？」ステームズはそういったとたんに後悔したが、もう手遅れだった。あえて取りつくろおうとはしなかった。「ありがとう、警部補。すぐにだれか人をやって、明朝きみに結果を知らせるよ」ステームズは電話を切った。すでに六時だった――なぜおれは部屋に戻ったんだろう？　いまいましい電話め。グラント・ナ

CamScannerでスキャン

ーナだっておれに劣らず手際よくこの電話を捌いていただろうし、彼なら一流好みうんぬんといった軽率な言葉も口に出さなかっただろう。それでなくてもFBIと首都警察の間はうまくいっていないのだ。

　ニック・ステームズはインターコムを取りあげて、刑事部長を呼びだした。

「グラント」

「あれっ、もう帰ったんじゃなかったんですか？」

「ちょっとわたしの部屋まできてくれないか」

「いいとも、すぐ行きますよ」

　グラント・ナーナは数秒後にトレードマークの葉巻をくわえてやってきた。きちんと上着をつけていたが、これはニックの部屋へくるときだけの習慣だった。

　ナーナは絵に描いたような経歴の持主だった。テキサスのエル・カンポで生れて、ベイラー大学で学士号をとった。それから、法律の学位をとるためにサザン・メソジスト大学で学んだ。ピッツバーグ支局に勤務する若い捜査官だったころ、FBIの速記者をしていた未来の妻ベティと知りあった。夫婦の間には四人の息子が生れ、みんな揃ってヴァージニア工科大学を卒業し、二人はエンジニア、一人は医師、一人は歯科医になった。ナーナは三十年以上もFBIに勤務している。その勤務歴はニックより十二年も長かった。事実ニックはかつて新入りのころ彼の下で働いていた。だがナーナは彼に対してなんの恨みも持っていない。いまや彼は刑事部長であり、仕事を愛しているし、ニックを――プライヴェートなつきあい

では彼をそう呼んでいる——大いに尊敬しているからである。

「なにかあったんですか、ボス？」

ステームズはナーナが部屋に入ってくると同時に顔をあげた。身長五フィート九インチ、五十五歳、太りすぎで、いつも葉巻をはなしたことがないこの刑事部長は、FBIの体重制限からすればたしかに「望ましい」人物ではなかった。身長が五フィート九インチなら、百五十四ポンドから百六十一ポンドまでの体重が要求される。ナーナは年四回の全FBI職員の体重測定日がくると、いつも人目をはばかって小さくなっている。これまで何度もこの重大なFBI規則違反のために、余分な贅肉をそぎおとさなければならなかった。とりわけ痩せていることが「望ましい職員」の条件であったフーヴァー時代に、それで大いに苦労した。

それがいったいどうしたというんだ、とステームズは思った。グラントの知識と経験は、ワシントン支局の廊下で毎日出会う、若くてスマートな、スポーツマン・タイプの捜査官一ダースに匹敵した。ナーナの体重の問題については後日話しあうことにしよう、と彼は思った。これまで何度自分にそういい聞かせたかしれなかった。

ニックはウッドロー・ウィルソン・メディカル・センターの妙なギリシャ人の話を、ブレイク警部補から中継されたとおりに繰りかえした。「病院へ部下を二人やってもらいたいんだ。今夜の当直はだれだ？」

「アスピリンです。しかしその男が内報者かもしれないと考えられるなら、アスピリンを行かせるのはよしたほうがいいでしょう」

「アスピリン」というのは、ワシントン支局最古参の捜査官のニックネームだった。フーヴァーの下で働いていた若いころは、何事につけてもやり方が杓子定規で、それが周囲の頭痛の種だった。今年の暮には引退することになっていて、不遇に対する憤りはすでにノスタルジアに場所を譲りつつあった。
「そうだ、アスピリンはよしておけ。若いやつを二人行かせろ」
「カルヴァートとアンドリューズはどうでしょう？」
「いいだろう。すぐ二人に指示してくれ、わたしはいま帰ればまだ晩飯に間に合う。なにかあったら自宅へ連絡を頼む」
グラント・ナーナが出て行くと、ニックは秘書に二度目の浮わついたさよならの微笑を送った。ジュリーはこのワシントン支局で唯一の魅力的な存在だった。彼女は顔をあげて、そっけない微笑を返した。「FBI捜査官のために働くのはいっこうにかまわないけど、結婚するのはごめんだわ」と、彼女はいちばん上のひきだしの小さな鏡に向って呟いた。
グラント・ナーナは、自分の部屋へ戻ると、刑事部への内線電話を取りあげた。
「カルヴァートとアンドリューズをよこしてくれ」
「はい」
力強いノックの音がして、二人の捜査官が入ってきた。バリー・カルヴァートはだれが見ても大男で、靴を脱いでも六フィート六インチはあったが、彼が靴を脱いだところを見た者はそれほど多くはなかった。当年とって三十二歳の彼は、刑事部で最も野心的な若手の一人

と見られていた。ダーク・グリーンの上着に黒っぽい地味なズボンをはき、不格好な黒革の短靴をはいていた。褐色の髪は短く刈られ、右寄りできちんと分れていた。ティア・ドロップ形の飛行士用の眼鏡だけが、唯一型破りだった。いつも五時三十分の正規の勤務時間後遅くまで残って仕事をしているが、これはなにも出世競争のためばかりではなかった。彼は仕事そのものを愛していた。同僚たちの知るかぎりでは、仕事以外にだれか愛情の対象になる人間はいないようだった。少なくとも一時的な遊び以上の相手はいなかった。カルヴァートは中西部出身で、インディアナ大学で社会学の学士号をとったあとFBIに入り、その後クォンティコのFBIアカデミーで十五週間の講習を受けた。彼はどの角度から見てもFBIマンの典型だった。

対照的に、マーク・アンドリューズは型破りのFBI新入生だった。イェール大学で歴史学を専攻したあと、イェール・ロー・スクールで教育をおえた。それからどこかの法律事務所に入る前に、数年間冒険的な生活を体験してみたいと考えた。犯罪者と警察を裏面から学ぶことが将来役に立つだろうと考えたのである。ただしFBIに応募した理由として、そのことを挙げたわけではなかった——FBIを一種の学問的実験と考えることは許されないからである。事実、フーヴァーはFBIを外交官などと同じ専門職とみなして、いったんFBIをやめた捜査官の復帰を認めなかった。身長六フィートのマーク・アンドリューズは、カルヴァートと並ぶと小柄に見えた。血色のよいハンサムな顔、青い目、シャツの襟までかぶさるほど長くのばした巻毛の金髪。二十八歳の彼は刑事部では最年少の捜査官の一人だった。

服装はいつもファッショナブルで、ときには規則にマッチしないこともあった。ニック・ステームズは、一度彼が赤いスポーツ・ジャケットに茶色のズボンという派手な格好をしているのを見つけて、帰宅してもっとまともなものに着替えてこられるように、勤務時間中に暇をやったことがある。FBIを困らせるな、というわけである。マークの人間的魅力が刑事部において多くの厄介なトラブルから彼を救っていたが、彼にはアイヴィ・リーグの教育とマナーを埋めあわせてなお余りある確固たる意志があった。自信家だが、人を押しのけてまで自分の昇進をはかろうとするようなところはなかった。そして自分の一生の計画を他人には話さなかった。

グラント・ナーナはウッドロー・ウィルソンで彼らを待っているおびえた男の話を伝えた。

「黒人ですか？」と、カルヴァートが質問した。

「いや、ギリシャ人だ」

カルヴァートの驚きが顔にあらわれた。ワシントンの住民の八〇パーセントが黒人であり、犯罪容疑で逮捕される者の九八パーセントが黒人だった。ウォーターゲートの忌わしい不法侵入事件が、ワシントンをよく知る者の目に最初から疑わしいと映った理由の一つは、だれも口に出してはいわなかったが、この事件に黒人が一人も関係していないという事実だった。

「どうだ、バリー、うまくやれそうか？」

「ええ、報告は明朝でいいですか？」

「いや、なにかあったらボスが直接連絡してくれといっている。なにもなかったら今夜報告

書を出しておいてくれ」ナーナの電話が鳴った。「ミスター・ステームズの車から無線連絡です」と、夜間交換手のポリーが告げた。

「ボスは休むことを知らんようだな」グラントは受話器を手でおおって二人の若い捜査官に小声でいった。

「やあ、ボス」

「グラント、そのギリシャ人は脚に弾傷があって、しかも傷口が化膿していることをあんたに話したかな？」

「ええ、聞きましたよ」

「よろしい、ひとつ頼みがあるんだが聞いてもらえんか？　わたしの教会、聖コンスタンティン・聖ヘレン教会のグレゴリー神父に電話して、その男を病院に見舞ってやるように頼んでもらいたいんだ」

「承知しました」

「それからあんたも家へ帰るんだな。オフィスのほうはアスピリンにまかせておいていいだろう」

「いま帰ろうとしていたところですよ、ボス」

電話が切れた。

「オーケー、きみたち――でかけてくれ」二人の捜査官は灰色にくすんだ汚ない廊下を通って、職員用エレベーターに乗りこんだ。いつものことながら、エレベーターはクランクを回

さなければ動きだしそうもない代物だった。ようやくペンシルヴェニア・アヴェニューへ出ると、彼らはFBIの車に乗りこんだ。

マークがダーク・ブルーのフォード・セダンを運転して、ペンシルヴェニア・アヴェニューをくだり、国立公文書館とメロン美術館の前を通りすぎた。青々とした議事堂の敷地を迂回して、ワシントンの南東部に向うインデペンデンス・アヴェニューに入った。国会図書館に近い一番ストリートで信号を待っているとき、バリーがラッシュ・アワーの混雑に眉をひそめながら腕の時計をのぞいた。

「こんなつまらん仕事はアスピリンにでもやらせればよかったのにな」

「アスピリンを病院へ行かせるやつがあるかい？」と、マークがいった。

マークは自分の冗談ににやりと笑った。この二人はクォンティコのFBIアカデミーではじめて会った瞬間から、たがいに親近感をおぼえていた。十五週間の養成期間の初日に、全訓練生が採用確認の電報を受けとった。新捜査官に採用された全員が、念のために自分の左右両隣の者の電報をチェックすることを命じられた。これは極度の慎重さが要求されることを強く印象づけるための手段だった。マークはバリーの電報をちらと見て、にやりと笑いながらそれを返した。「きみはどうやら本物らしいよ」と、彼はいった。「FBIの規則がキング・コングの採用を認めているとしたらの話だが」

「いいかい」カルヴァートはマークの電報を熟読しながら答えた。「きみはいつかそのうちキング・コングを必要とするかもしれないぜ、アンドリューズ君」

　信号は青に変ったが、マークとバリーの前の車が内側の車線から一番ストリートへ左折しようとした。一瞬、しびれを切らした二人のFBIマンは車の列にはさまれて動きがとれなくなった。

「この男はわれわれにどんな話をすると思う？」

「例のダウンタウンの銀行強盗事件に関係したやつだといいんだがな」と、バリーが答えた。「ぼくはまだあの事件を担当してるんだが、三週間たったのになんの手がかりもつかめない。ステームズがそのことでカリカリしはじめているんだよ」

「いや、そいつはないね。脚に弾丸が入ってるそうだからな。たぶんき印箱の新しい候補者ってところだろう。帰りが遅くなった亭主に女房が一発ぶっぱなしたのかもしれないぜ」

「ボスが司祭をさしむけるのは仲間のギリシャ人のところだけだろう。彼から見たら、われわれなんか地獄に堕ちようと知ったことかというわけだ」

　二人は声を揃えて笑った。二人のうちのどちらがトラブルに巻きこまれたとしても、ニック・ステームズはその必要があると考えたときは、ワシントン記念塔さえ動かしてくれるだろうということを、二人ともよく知っていた。インデペンデンス・アヴェニューを走りつづけてワシントン南東部に入ると、車の数がしだいに減ってきた。数分後に彼らは十九番ストリートとコロンビア特別区造兵廠を通りすぎて、ウッドロー・ウィルソン・メディカル・センターに到着した。外来用駐車場に車を駐めて、カルヴァートがすべてのドアのロックを念入りにチェックした。FBI捜査官が車を盗まれて、首都警察からその車を返してもらうは

ど恥さらしなことはない。き印箱の当番を一か月やりたかったら、それがいちばんの早道だった。

病院の玄関は古ぼけていてむさくるしく、廊下は灰色で寒々としていた。夜勤の受付嬢が、カセフィキスの病室は四階の四三〇八号室だと教えてくれた。二人とも病院の警備がゼロに近いことに驚いた。身分証明書を見せろともいわれず、まるでインターンの二人連れのような顔をして病院内を歩きまわることができた。振りかえって見る人間は一人もいなかった。たぶん、FBI捜査官の彼らが警備に神経質すぎるのだろう。

　エレベーターがのろのろと、しぶしぶ彼らを四階まで運んでいった。松葉杖（まつばづえ）の男と車椅子（くるまいす）の女が一緒に乗りあわせて、エレベーターののろさも気にならないようすで暇つぶしのおしゃべりをしていた。四階に着くと、カルヴァートが看護婦に近づいて当直医を呼んでもらった。

「デクスター先生はもう勤務をおえたと思いますけど、念のために確かめてみます」医局看護婦が答えて、急いで立ち去った。彼女は毎日FBIの訪問を受けるわけではなかったし、きれいな青い目をした背の低いほうの男はたいそうハンサムだった。看護婦と医者が一緒に廊下を戻ってきた。ドクター・デクスターはカルヴァートとアンドリューズを驚かせた。彼らは自己紹介をした。きっと脚のせいだ、とマークは思った。これほどきれいな脚にお目にかかったのは、イェールのシネマ・クラブの自主上映で『卒業』のアン・バンクロフトを見たとき以来だった。女の脚をつくづく眺（なが）めたのはそのときが最初で、以来女と会えばまず脚

を見る癖がついてしまった。

「医学博士エリザベス・デクスター」という名前が、糊のきいた白衣の胸の赤いプラスチックの札に白でスタンプされていた。マークは白衣の下の赤いシルクのシャツと、膝下まであるスマートな黒のクレープのスカートを見てとった。中背で、華奢といってもよいほどほっそりした体つきだった。マークの見たかぎりでは白粉気がまったくなかった。これほど色白で黒目がぱっちりしていれば、たしかに化粧の必要はないだろう。わざわざ病院までできた甲斐がありそうだった。一方バリーのほうは美人ドクターになんの関心も示さず、カセフィキスのファイルを見せてもらえないかと頼んでいた。マークはすばやく会話のきっかけを考えだした。

「デクスター上院議員のご親戚かなにかですか？」と、上院議員のところをやや強調してたずねた。

「ええ、わたしの父ですわ」と、彼女は気のない口調で答えた。明らかにこの質問にはなれっこで、質問にも——そういう質問が重要だと思っている人間にも、うんざりしているらしかった。

「イェール・ロー・スクールの最後の年にお父上の講演を聞きましたよ」と、マークはなおもその話題を引きのばした。イェールを持ち出したのはちょっと厭味だったかなとは思ったが、ぐずぐずしているとカルヴァートが患者のファイルを見終ってしまいそうだった。

「あら、あなたもイェール出身ですの？　卒業は何年？」

「ロー・スクールの卒業は三年前です」
「だったら前にお会いしてるかもしれませんわ。わたしは去年医学部を出たんです」
「お会いしていたら忘れるはずはありませんよ、デクスター先生」
「あんたたちアイヴィ・リーガーの身の上話の交換が終ったら」と、バリー・カルヴァートが口をはさんだ。「こちとら中西部出身者としてはそろそろ仕事にかかりたいんですがね」
やれやれ、とマークは思った。バリーのやつはそのうちきっとFBI長官になれるよ。
「この男についてどんなことがわかっていますか、デクスター先生？」と、カルヴァートが質問した。
「残念ながら、ほとんどなにもわかっていませんわ」と、彼女はカセフィキスのファイルを受け取りながら答えた。「患者は自分から病院へやってきて、弾傷を負ったといっています。傷は化膿していて、一週間ほど放置していたように見えます。もっと早くくればよかったんですけど。わたしが今朝弾丸を取りだしました。ご存じのように弾傷を負った患者がきたときは、すぐに警察に通報することを義務づけられているので、あなた方首都警察に連絡したんですよ、カルヴァートさん」
「首都警察とわれわれは別ですよ」と、マークが訂正した。
「あら、ごめんなさい」と、ドクター・デクスターはいささか形式的に謝った。「でも医者から見れば、警察は警察ですわ」
「そして警察官から見れば、医学博士は医学博士ですが、それぞれ専門に分れているんでし

ょう——整形外科とか、婦人科とか、神経科といったぐあいに。ちがいますか？　まさかこのぼくが首都警察の巡査どもと同じに見えるというんじゃないでしょうね？」

ドクター・デクスターは相手をいい気分にさせるようなお世辞を口にしそうにもなかった。彼女はマニラ紙の紙ばさみを開いた。「わたしたちにわかっているのは、患者がギリシャ人で、アンジェロ・カセフィキスという名前だということだけです。この病院に入院したのは今度がはじめてです。年齢は三十八歳だそうです。残念ながらこれ以上のことはわかりません」

「結構です。いつもだいたいそんな程度ですよ。ありがとう、デクスター先生」と、カルヴァートがいった。「じゃ、患者に会わせてもらえますか？」

「もちろんですわ。一緒にきてください」エリザベス・デクスターはくるりと向きを変えて廊下を歩きだした。

二人の男が彼女のあとに続いた。バリーは四三〇八号室のドアを目で捜し、マークは彼女の脚を眺めていた。病室に辿りついて小窓からなかをのぞくと、二人の患者の姿が見えた。一人はアンジェロ・カセフィキスで、もう一人陽気な顔をした黒人が音のしないテレビの画面に見入っていた。カルヴァートがドクター・デクスターのほうを向いた。

「彼とわれわれだけで会うことはできませんか、先生？」

「なぜですの？」

「彼がどんなことをいいだすかわからないし、本人も話を盗み聞きされたくないだろうと思

うからですよ」
「そのことならどうぞご心配なく」と答えて、ドクター・デクスターは笑った。「わたしの大好きな郵便配達のベンジャミン・レナルズ、相部屋の患者ですけど、彼は郵便ポストみたいに全然耳が聞えなくて、来週この病院で手術を受けるまでは、国家褒否はおろか、最後の審判の日のガブリエルのラッパの音さえ聞えやしませんわ」
カルヴァートははじめて笑顔を見せた。「それじゃりっぱな証人になれますね」
ドクター・デクスターはカルヴァートとアンドリューズを病室に導き入れると、踵をかえして立ち去った。近いうちにまた会いたいもんですね、美人の先生、とマークは心のなかで呼びかけた。カルヴァートはベンジャミン・レナルズに疑いの目を向けたが、黒人の郵便配達はうれしそうににっこり笑って手を振り、また音のしない『二万五千ドルのピラミッド』の画面に視線を戻した。それでもバリー・カルヴァートはベッドの横に立って、読唇術を封じるためにカセフィキスの姿をさえぎった。バリーは用意周到な男だった。
「カセフィキスさん？」
「そうです」
カセフィキスは中肉中背の血色の悪い、病人くさい男で、大きな鼻と濃いゲジゲジ眉毛を持ち、不安そうな表情が顔にへばりついていた。濃い黒髪はくしゃくしゃに乱れていた。真っ白なシーツの上で手だけがばかに大きく見え、静脈がくっきりと浮いて見えた。顔は数日間ほったらかしの不精ひげで黒っぽく見えた。片脚が繃帯でぐるぐる巻きにされて、ベッ

ド・カバーの上に横たわっている。彼はきょろきょろと神経質に二人の男の顔を見くらべた。

「わたしはカルヴァート捜査官、こちらはアンドリューズ捜査官。二人ともＦＢＩの人間だ。われわれに話があるそうだな」

二人の男は上着の右の内ポケットからＦＢＩ手帳を取りだして、左手に持ったままカセフィキスに見せた。この一見何気ない動作も、「利き腕」を遊ばせておいて、いざというときにすばやく拳銃を抜いて発砲できるように、新人捜査官に注意深く教えこまれたものだった。

カセフィキスは顔をしかめ、唇に舌を押しつけながら手帳をのぞきこんだ。どうやらなにをめどに真偽を確かめればよいかわからないらしかった。捜査官の署名は司法省のシールの上に一部かかっていなければ本物ではない。マークの手帳のナンバー、３３０２と、バッジのナンバー、１７２１を見くらべた。どこから話しはじめようか、あるいは気を変えてなにも話さずにすませようかと迷っているらしく、一言も口をきかなかった。やがて、明らかに二人のうちでは思いやりのありそうなマークの顔をしげしげとみつめてから、ようやく話を切りだした。

「わたしこれまで警察の厄介になったことありません」と、彼はいった。「どんな警察にもです」

二人ともにこりともせず、一言もはさまなかった。

「ところがわたしいま、とても厄介な事件に巻きこまれています。どうか助けてください」

カルヴァートが質問した。「なぜ助けてもらいたいんだ？」

「わたしも女房も不法入国者です。二人ともギリシャ国民で、船でポルティモアに上陸して、ここで二年前から働いています。帰る場所どこにもないんです」

言葉は一気にほとばしった。

「強制送還をかんべんしてもらえるなら、わたし情報教えます」

バリーが彼の腕をおさえた。「もしもそれが重要な情報で、われわれが犯罪を解決するのに役に立つようなら、移民局に口をきいてやってもいいぞ。約束できるのはそこまでだ」

「われわれにはそんな約束は――」と、マークがいいかけた。

マークは思った。合衆国には六百万の不法入国者がいる。いまさら一組の夫婦がふえたからといってまさか船が沈むこともないだろう。

カセフィキスは必死の面持だった。「わたし仕事が要る、金も要る、わかりますか？」

二人ともよくわかった。一週間に十回以上も、同じ悩みをかかえた人間に出会っているからである。

「わたしがレストランのウェイターの仕事にありついたとき、女房はとても喜んでくれた。二週間目に、偉い人のためにホテルで昼食の給仕をする特別の仕事いいつかった。困ったことにその偉い人、英語の話せないウェイターをよこせといったんです。わたし英語へただから、主人はわたしに行けといった。余計なことをいわずに、ギリシャ語だけ話してろって。二十ドルくれるというからわたし承知した。わたしヴァンの荷台に乗って、ホテルへ行った――場所はジョージタウンだと思う。ホテルに着くと、調理場へ行って、地下室のスタッフ

に仲間入りした。制服に着替えて、個室の食堂へ料理を運びはじめた。全部で五人か六人人がいて、大物がこのウェイターは英語が話せないと説明していた。それを聞いて彼らは話を続けた。わたし聞かなかった。おしまいのコーヒーのとき、ケイン大統領の話がはじまった。わたし彼女好きだから、耳をすましました。だれかがいった。『彼女をやってしまおう』別の男がいった。『いちばんいい日はやはり三月十日、予定どおりだ』そして、『わたしも上院議員と同意見だ、あの牝犬(めすいぬ)をかたづけよう』という声も聞えた。一人の男がわたしをにらんでいたので、部屋を出た。地下に戻って皿(さら)洗っていると、男が入ってきて声をかけた。『おい、お前、こいつを受けとってくれ』わたし振り向いて両手をさしだした。とたんにその男とびかかってきた。わたしドアのほうへ走って、通りへ逃げだした。男が拳銃でわたしを撃った。脚が少し痛かったが、相手が年寄りで、太っていて、わたしより足が遅かったのでなんとか逃げられた。男はなにかどなっていたが、わたしをつかまえられないことはわかっていた。ひどくこわかった。わたし急いで家に帰って、女房と一緒にその晩のうちに町を出て、郊外のギリシャ出身の友達の家に身を隠した。それで万事うまくゆくと思ったが、四、五日たつと脚の傷が悪化したので、アリアーナがわたしを病院へ行かせて、あんたたちに電話させた。友達がいうには、連中はわたしの家まで追っかけてきて、見つけたら殺すだろうって」彼は言葉を切って、深々と溜息(ためいき)をついた。そして汗まみれのひげ面(づら)で、哀願するように二人を見あげた。

「あんたのフル・ネームは？」と、カルヴァートが交通違反の切符でも切るような落ちつき

はらった口調で質問した。
「アンジェロ・メキシス・カセフィキスです」
カルヴァートは名前の綴りを確かめた。
「住所は？」
「いまはホイートンのエルキン・ストリート一一五〇一番地、ブルー・リッジ・マナー・アパートメンツです。わたしの友達の家で、いい男だから、迷惑かからないように頼みます」
「その事件があったのはいつだね？」
「先週の木曜日です」カセフィキスはすぐに答えた。
カルヴァートは日付を確かめた。「二月二十四日だな？」ギリシャ人は肩をすくめた。「先週の木曜日ですよ」と繰りかえした。
「雇い主の名前は？」
「知りません。わたしも彼も仕事以外に口をきいたことありません」
「あんたが働いていたレストランの場所は？」
「わたしの家から二、三本はなれた通りで、ゴールデン・ダックいう店です」
カルヴァートはメモをとりつづけた。「それから、あんたが連れて行かれたホテルはどこにあった？」
「それがわからないんです、ジョージタウンのどこかということはたしかだが。退院したら案内できるかもしれません」

「さて、カセフィキスさん、よく考えて答えてくださいよ、その昼食会であんたのほかに働いていた人間で、いまの話を耳にはさんだかもしれない者はだれかいるかね？」
「いません。部屋で給仕したのはわたしだけです」
「だれかにその部屋で聞いたことを話したかね？　たとえば奥さんとか、いまかくまってもらっている友達とか？」
「いや。あんただけです。女房にも話してない。とてもこわかったんで、だれにも話していません」
カルヴァートは取調べを続けて、部屋にいた連中の人相を質問し、話に食いちがいがないかどうかを確かめるために、ギリシャ人に一部始終を繰りかえさせた。最初の話と食いちがう点はなかった。マークは無言で成行きを見守った。
「オーケー、カセフィキスさん、今夜はこれでおしまいだ。明朝もう一度会いにきて、供述書にサインしてもらいます」
「しかし、わたしは連中に殺される。きっと殺されますよ」
「心配ないですよ、カセフィキスさん。なるべく早くあんたの部屋に警察の監視をつけることにしましょう。だれにもあんたを殺させやしませんよ」
カセフィキスは納得がいかない表情で目を伏せた。
「じゃ、あすの朝またきます」カルヴァートはメモ帳を閉じた。「ゆっくり休んでください。おやすみ、カセフィキスさん」

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

カルヴァートは上機嫌なベンジャミンにちらと一瞥をくれた。あいかわらず音のしない、金額だけの『二万五千ドルのピラミッド』に熱中していた。彼はまた二人に手を振り、三本しかない歯をむきだして笑った。二本は真っ黒に汚れた歯、一本は金歯だった。カルヴァートとアンドリューズは廊下へ出た。

「ぼくはまるっきり信じないね」と、部屋を出るなりバリーがいった。「あの英語じゃ、話を聞きちがえるということも充分にありうる。おそらくどうってことのない話だろう。大統領の悪口をいうやつはいっぱいいる。ぼくの親父もそうだが、だからといって大統領を殺しやしないよ」

「そうかもしれん、しかし弾傷はどうなる？　あれは本物だぜ」

「わからん。それだけがちょっと気がかりなんだ。なにか全然別なことを隠すための作り話かもしれない。とにかく万一を考えてボスに報告しておこう」

カルヴァートはエレベーター脇の公衆電話に近づいて、二十五セント貨を二枚取りだした。FBI捜査官はだれでもポケットにいっぱいクォーターを持ち歩く。彼らには無料電話の特権が認められていないからである。

「どうでした、あの患者はフォート・ノックス（訳注　ケンタッキー州にある軍用地で、合衆国金塊貯蔵所の所在地）に強盗にでも入るつもりだったの？」エリザベス・デクスターの声がマークを驚かせた。もっとも彼女が戻ってくることをなかば期待していたのだが。彼女は家へ帰るところらしかった。白衣が赤いジャケットに変っていた。

CamScannerでスキャン

「そういうわけでもないんです」と、マークは答えた。「あすの朝もう一度後始末にこなきゃなりません。たぶん供述書にサインさせて指紋をとってから、金塊を回収することになるでしょう」
「どうぞ。ドクター・デルガードがお相手をしてくれるでしょう」彼女は愛らしい微笑をうかべた。「きっと彼女も気に入りますわ」
「この病院のスタッフは美人の女医さんだけなんですか？」と、マークがいった。「ねえ、一晩入院するにはどうしたらいいか教えてもらえませんか？」
「そうね。今月はインフルエンザがはやっていますわ。ケイン大統領さえかかったくらいですもの」
　カルヴァートが大統領という言葉を聞いてさっと振り向いた。エリザベス・デクスターは時計を見た。
「わたし、無報酬の二時間の超過勤務が終ったところなんです。もうご質問がないようなら帰らせてもらいますわ、アンドリューズさん」彼女はにっこり笑い、タイルの床に踵を鳴らしてくるりと回れ右をし、その場を立ち去りかけた。
「もう一つだけ質問があります、デクスター先生」マークは廊下の角を曲って、うるさいバリー・カルヴァートの目と耳の届かないところまで彼女を追っていった。「今夜わたしと一緒に食事でもいかがですか？」
「どうお答えしたらいいかしら」と、彼女は焦らすような口ぶりでいった。「そうね、品位

に欠けるところのないように、あまり物ほしそうにではなくお受けするわ。Gメンの人たちってどんなふうか知りたい気もするし」
「Gメンは噛みつきますよ」二人は声を揃えて笑った。「オーケー、いま七時十五分です。あてにはならないかもしれないが、たぶん八時半には迎えに行けるでしょう」
彼女はマークの手帳にアドレスと電話番号を書いた。
「あなたは左利きなんですね、リズ」
黒い目が一瞬きらりと光って彼の目をとらえた。「わたしをリズと呼ぶのは恋人だけよ」そういい捨てて、彼女は立ち去った。

「こちらカルヴァートです、ボス。この件については考えが決らないんです。この男の頭がおかしいのかまっとうなのかわかりませんが、一応報告しておくほうがいいと思って」
「オーケー、バリー。話してみろ」
「こいつはほんとの話かもしれないし、ガセかもしれません。男はけちなこそ泥で、情報とひきかえに目こぼししてもらおうと思っているのかもしれません。いずれにしろわたしには確信がないんです。でも彼の話したことが全部ほんとだとしたら、すぐあなたに知らせなければならないと思ったんです」バリーは上院議員という言葉を伏せてカセフィキスの話の要点を伝え、電話ではいえない要素があることを強調した。
「やれやれ、きみはわたしを離婚法廷に引っぱりだそうとしてるんだぞ――また支局へ戻ら

なきゃならんようだな」と、ニック・ステームズは妻の不機嫌な表情を避けながらいった。

「わかった、わかったよ。ありがたいことにムウサカを一口食べたところだ。三十分後に会おう、バリー」

「わかりました、ボス」

カルヴァートは受話器のフックを手で押してから、今度は首都警察の番号を回した。またクォーターを二枚使ったので、ポケットにはもう十六枚しか残っていなかった。いつも思うことだが、FBI捜査官かどうかを調べるいちばん手っ取り早い方法は、相手のポケットを裏返しにさせることだ。クォーターが二十枚出てきたら、本物のFBIだと考えていい。

「ブレイク警部補は受付デスクにいます。すぐにおつなぎします」

「ブレイク警部補だ」

「こちらカルヴァート捜査官。あんたのギリシャ人と会ってきたところだが、彼の病室に監視をつけてもらいたい。なにかにひどくおびえている。万一ということもあるからね」

「わたしのギリシャ人とはどういうことだ？」と、ブレイクがけんか腰でいった。「おたくのほうからかっこいいGメンを一人まわせないのか？」

「いま手のすいてる者が一人もいないんだよ、警部補」

「こっちだって人手があり余ってるわけじゃないよ。警察をショアハム・ホテルかなんかとかんちがいしてるんじゃないのかね？　とにかく、できるだけのことはするよ。ただし二時間は待ってもらわなきゃならんだろうな」

CamScannerでスキャン

「いいとも。協力ありがとう、警部補。支局にそう報告しておくよ」バリーは受話器をかけた。

マーク・アンドリューズとバリー・カルヴァートはエレベーターを待った。エレベーターは昇るときと同じように降りるときも遅かった。二人ともダーク・ブルーのフォードに乗りこむまでは一言も口をきかなかった。

「ステームズが報告を聞きに戻ってくる」と、カルヴァートがいった。「彼がこれ以上問題にするとは思えないが、報告だけはしておくほうがいいと思ってね。それが済めばたぶんわれわれはお役ごめんだよ」

マークは時計を見た。きょうもまた一時間四十五分の超過勤務、規則上捜査官に許される一日の残業のぎりぎりの線だった。

「そうだといいんだが」と、マークがいった。「ぼくはデートがあるんだよ」

「ぼくの知ってる相手か？」

「美人のデクスター先生さ」

バリーが眉（まゆ）をつりあげた。「ボスにはいうなよ。勤務中に女をひっかけたことが知れたら、モンタナ州ビュートの岩塩坑（ソールト・マイン）にとばされるぜ」

「モンタナのビュートに岩塩坑があるとは知らなかったな」

「FBI捜査官でビュートに岩塩坑があることを知っているのは、実際にそいつを掘ったことのあるやつだけさ」（訳注　salt mines とは懲罰または隔離のため送りこまれる場所のこと。ビュートは鉱山町として有名）

マークが運転してワシントンのダウンタウンへ帰る車中で、バリーが取調べの報告書を書いた。彼らは七時四十分に旧郵政省ビルに到着した。駐車場はほぼがらあきだった。こんな時間には、気のきいた人間はとっくに家へ帰って、たとえばムウサカを食べるとか、そういう気のきいたことをしているだろう。ステームズの車はすでに到着していた。くそいまいましい男だ。彼らはエレベーターで五階へあがって、ステームズの部屋の受付に入った。そこには秘書のジュリーしかいなかった。カルヴァートがそっと支局長室のドアをノックして、マークと一緒になかへ入った。ステームズが顔をあげた。彼は二人と会うためにわざわざ戻ってきたことを忘れてしまったかのように、戻ってからかたづけなければならない仕事を山ほど見つけていた。

「ようし、バリー。最初から話を聞こう、ゆっくり正確にやってくれ」

カルヴァートはウッドロー・ウィルソンに到着した瞬間から、病室に監視をつけることを首都警察に依頼するまでの一部始終を洩れなく報告した。マークはバリーの記憶力の正確さに感心した。誇張や主観はどこにも見当らなかった。ステームズはしばらく黙って考えていたが、やがてだしぬけにマークに質問した。

「なにか補足することはあるか、マーク？」

「とくにありません。どうもいささかメロドラマじみた話で。やたらに嘘をつくようなタイプには見えなかったが、心底おびえていたことは確かです。支局のファイルに彼の名前は見当りません。夜間主任に無線で名前をチェックしてもらったんですが、カセフィキスという

名前はありませんでした」

ニックは電話を取りあげて、FBI本部へつなぐよう命じた。「全国コンピューター・インフォーメーション・センターを頼むよ、ポリー」電話がつながった。若い女の声が答えた。

「ワシントン支局のステームズだ。これからいう男をいますぐコンピューターでチェックしてくれ——アンジェロ・カセフィキス、白人、男性、ギリシャ系、身長五フィート九インチ、体重約百六十五ポンド、髪はダーク・ブラウン、目はブラウン、年齢三十八歳、特徴、傷痕等は不明、認識番号等も不明だ」彼はカルヴァートから受けとった報告書を前にして読みあげ、無言で答えを待った。

「彼の話がほんとだとしたら」と、マークがいった。「リストには載っていないはずです」

「ほんとだとしたらな」と、カルヴァートがいった。

ステームズは待ちつづけた。

FBIのファイルにだれが載っていてだれが載っていないかを、何日もかかって知った時代はもう遠い昔だった。女子職員が電話に戻ってきた。

「カセフィキス、アンジェロに関するデータはありません。カセフィキス姓のは一つもないんです。コンピューターでわかったそれにいちばん近い名前は、一九〇一年生れのカセジキスという人です。お役に立てなくてすみません、ステームズさん」

「いや、いいんだ。ありがとう」ステームズは電話をおいた。「オーケー、さしあたりこのカセフィキスの言い分を信じることにしよう。彼がほんとのことをいっていて、これは重大

な捜査だと仮定してかかるのだ。ＦＢＩのファイルには彼の名前はないそうだから、嘘だという証拠をつかむまでは彼の話を信じるほうが無難だろう。ひょっとしたらなにかを知ってるのかもしれないし、もしそうだとしたら、上のほうへ報告しなきゃならん。バリー、きみは明朝指紋係を連れて病院へ行ってくれ。万一彼が偽名を使っている場合を考えて指紋をとり、すぐにそれを身許確認コンピューターにかけて、署名入り供述書をとっておくのだ。それから首都警察のファイルをチェックして、二月二十四日に彼が関係した可能性のある発砲事件を残らず調べあげてくれ。彼を病院から連れだせるようになりしだい、救急車に乗せて、問題の昼食会がおこなわれた場所まで案内させたい。できたらあすの朝その点について病院の了解をとっておいてくれ。これまでのところ、われわれにわかっているかぎりでは逮捕歴も犯罪容疑もないから、あんまり無茶はするなよ。べつに人権がどうのこうのとうるさいことをいいそうな人間には思えないがね。

「マーク」ステームズは向きを変えていった。「きみはいますぐ病院へ戻って、首都警察が監視をつけたかどうかを確認してくれ。もしまだだったら、連中がくるまできみがカセフィキスのそばにいろ。それから明朝ゴールデン・ダックへ行って裏付けをとってくれ。わたしは明朝長官に会うための暫定のアポイントメントをとっておく。そうだな、十時ならきみたちからその前に報告が聞けるだろう。もしも、身許確認コンピューターで指紋をチェックしてもなにも出てこなかったら、そしてホテルとレストランが実在したら、これはとてつもなく厄介なことになるかもしれない。そうなったら長官に知らせないでは一時間たりともほう

ってておきたくない。目下のところはいっさい文書にするな。公式メモはあすの朝提出すればいい。とくに、上院議員がからんでいるかもしれないということは絶対に口外するな――いいか、グラント・ナーナにもしゃべるなよ。あす長官と会ったあと、われわれはくわしい報告書を書いてこの件をシークレット・サーヴィスにゆだね、あとは手を引くということもありうる。おたがいの守備範囲を忘れるな――大統領を護るのはシークレット・サーヴィスの役目で、われわれがカバーするのは連邦犯罪だ。上院議員がからんでいるとしたらわれわれの仕事だが、大統領のほうは彼らの仕事だ。細かい点は長官に決めてもらう――わたしは議事堂には手をつけたくない、そいつは長官の役目だし、あと七日間しかないとすれば、ここでのんびり微妙な問題を論じあっている暇はない」

ステームズはFBI長官室と直通の赤い電話を取りあげた。

「ワシントン支局のニック・ステームズです」

「こんばんは」と、低い、落ちついた声。FBI長官の献身的な奉仕者ミセス・マグレガーが、まだ勤務についていた。あのフーヴァーでさえ彼女には一目おいていたと伝えられる。

「ミセス・マグレガー、時間の都合がついたら十五分だけ長官に会ってもらえるように、仮のアポイントメントをとっておきたいんですが。お会いするのはわたしとカルヴァート、アンドリューズ両捜査官、明朝九時から十一時の間ならいつでも結構です。ただし、このあと今夜とあす早朝の捜査しだいでは、長官をわずらわさなくてすむかもしれません」

ミセス・マグレガーは長官の卓上日記を調べた。「長官は十一時に警察長官会議に出る予

定ですが、八時半には出勤の予定で、十一時までは予定がありません。あなたのお名前は十時三十分に書きいれておきますわ、ステームズさん。用件の概略をわたしから長官に伝えておきますか？」
「いや、結構です」
ミセス・マグレガーはそれ以上なにも詮索しなかった。ステームズから電話があったからには重要な用件にちがいなかった。彼は年に十回ほど懇親の目的で長官と会っているが、仕事で会うのは年間せいぜい三、四回というところだった。大して重要でもない用件で長官に時間をつぶさせるような男ではない。「では、ステームズさん。前もって取り消しがない場合は明朝十時三十分にどうぞ」
ニックは電話を切って二人の部下の顔を見た。
「これでよしと、十時三十分に長官と会うことに決った。バリー、わたしを家まで送ってくれんか？　きみはそれから家へ帰り、あすの朝いちばんにわたしを迎えにきてくれ。そうすれば車のなかでもう一度くわしい話ができる」バリーがうなずいた。「マーク、きみはもう一度病院へ直行だ」
マークはウッドロー・ウィルソンの廊下を自分のほうへ歩いてくるエリザベス・デクスターの姿を思いうかべていた。白衣の上に赤いシルクの襟がのぞき、黒いスカートが揺れている。目をぱっちりあけながら夢想にふけり、すっかりうれしくなってにやにや笑いをうかべた。

「アンドリューズ、大統領の生命が脅やかされているという報告のどこがそんなにおかしいんだ？」と、ステームズが詰問した。
「すみません。たったいまぼくの社交生活が支局長に撃墜されて炎上したところですよ。自分の車を使っていいですか？　病院からまっすぐ夕食に行きたいんです」
「よかろう。われわれは支局の車を使うことにする。あすの朝いちばんに会おう。居場所だけははっきりさせておけよ、マーク。首都警察が早く病院に到着してくれるといいんだが」
彼は時計を見た。「やれやれ、もう八時じゃないか」
　マークは少しむしゃくしゃしながら支局を出た。かりに首都警察が先に病院へ到着していたとしても、エリザベス・デクスターとの約束に遅れることは確実だった。とにかく、病院から彼女に電話を入れておこう。
「温めなおしたムウサカとレチーナ（訳注　松やにで風味をつけたギリシャ特有のワイン）を一本というのはどうかね、バリー？」
「願ったり叶ったりですよ、ボス」
　二人は部屋を出た。ステームズは頭のなかで毎晩の決りきった手順をチェックした。
「バリー、出がけにアスピリンが当直勤務についているか確かめてみてくれないか？　それから今夜はもう戻らないと彼に伝えてくれ」
　カルヴァートは刑事部へ回り道をして、アスピリンに支局長の伝言を伝えた。アスピリンは《ワシントン・スター》のクロスワード・パズルを解いていた。まだ三つの鍵しか解けて

いなかった。長い夜になりそうだった。カルヴァートはブルーのフォードに乗りこむニック・ステームズに追いついた。
「せっせと働いてましたよ、ボス」
二人は顔を見合せた。頭の痛い一晩になりそうだった。バリーが運転席に乗りこんで、シートをいっぱいにうしろへずらし、シート・ベルトをしめた。車はゆっくり走りだしてコンスティチューション・アヴェニューを進み、ホワイト・ハウスをすぎてEストリート・エクスプレスウェイへ入ると、メモリアル・ブリッジのほうへ向った。
「もしもカセフィキスがなにか知っているとしたら、これから一週間は忙しくなるぞ」と、ニック・ステームズがいった。「彼のいう暗殺計画の日どりは間違いなさそうだったかね？」
「細かいことを繰りかえして質問したときも、はっきり三月十日、ワシントンでと答えましたよ」
「ふうむ、それまで七日間か、あまり時間はないな。長官はどうするだろう？」
「思慮分別が少しでもあれば、シークレット・サーヴィスにバトン・タッチするんじゃないですか？」
「さしあたりそのことは忘れよう。考えるのは温めなおしたムウサカのこと、あしたはあしただよ」
車はホワイト・ハウスをすぎて間もない赤信号で止った。そこではひげをはやした長髪の汚ない若者が、「心せよ、終末は近い」と世界に向って警鐘を鳴らす大きなポスターを持っ

て立っていた。大統領官邸にピケを張っている連中の一人だった。ステームズはポスターにちらと目をやって、バリーにうなずいた。

「今夜われわれに必要なのはあの文句だけだな」

高速道路を走ってヴァージニア・アヴェニューの下をくぐり、メモリアル・ブリッジを渡った。一台の黒塗りの三・五リンカーンが時速約七十マイルで彼らを追い越した。

「きっと首都警察につかまるぞ」と、ステームズがいった。

「たぶんダレス空港発の飛行機に乗り遅れそうなんでしょう」と、バリーが答えた。

車の数は少なかった。ラッシュ・アワーはとっくにすぎていたので、ジョージ・ワシントン・パークウェイに入ると、ギアをトップにしたままで走ることができた。ポトマック川に沿ってヴァージニア側の森のなかを走るパークウェイは、暗く曲りくねっていた。バリーは支局中のだれにも劣らない反射神経の持主だったし、ステームズも彼よりは年上だが、そのときなにが起ったかをバリーと同時に正確に見てとった。大きな黒塗りのビュイックが、左側から彼らを追い越そうとした。カルヴァートがその車のほうをちらと見てから、一瞬後にまた前方に視線を戻したとき、別の車、黒塗りのリンカーンが、反対側から彼らの前に回りこんできた。銃声を聞いたような気がした。バリーは大急ぎでハンドルを切ってセンターに向けようとしたが、ハンドルがきかなかった。二台の車が同時に彼の車にぶつかった。うち一台が彼の車と一緒に岩肌（いわはだ）の斜面を滑り落ちた。二台の車は加速をつけて川面（かわも）に落下した。

ニックは窓をあけようとしてもがきながら、車がグロテスクなほどゆっくりと、しかし確実

CamScannerでスキャン

に沈みはじめるのを感じた。黒のビュイックは何事もなかったようにハイウェイを走り去り、急ブレーキをかけて停車した一台の車とすれちがった。事故を目撃した若い男女は、茫然として車からとびおり、斜面の縁まで走って行った。二人はなす術もなく、ブルーのフォード・セダンとリンカーンが水中に没するまで数秒間見守った。

「たいへんだ、今のを見たかい？」と、若い男がいった。

「さあ、なにがあったのかしら。ただ二台の車が崖から落ちて行くのが見えただけよ。どうする、ジム？」

「早く警察を呼ぼう」

若い夫婦は車のほうへ駆け戻った。

三月三日　木曜日夜

午後八時十五分

「ハロー、リズ」
電話の相手は、一瞬、間を置いた。
「ハロー、Gメン。少し馴れなれしすぎやしないかしら？」
「ただの希望的観測だよ。いいかい、エリザベス、ぼくはまた病院へ戻らなきゃならなかった。警察が到着するまできみのミスター・カセフィキスを見張るためだ。彼がある種の危険にさらされているということも考えられるので、監視をつけることになった。つまりぼくは約束の時間に遅れそうだっていうわけだ。待っててくれるかい？」
「いいわよ、べつに飢え死にするわけじゃないから。木曜日はいつも父と一緒にお昼を食べるのよ。父はすごい大食漢なの」
「よかった。きみはもっとたくさん食べなきゃいけないよ。暗闇で会ったらわからないぐらいだ。そうそう、ぼくはまだインフルエンザにかかる努力をしているよ」
彼女は温かく笑った。「じゃ、あとでね」
マークは電話を切ってエレベーターのほうへ歩いて行き、UPボタンの矢印を押した。

CamScannerでスキャン

すでに首都警察が到着して病室を見張っていることを、心のなかでひたすら祈った。ちょっ。エレベーターのやついやに遅いな。この調子じゃエレベーターを待っているうちに死んでしまった患者がたくさんいるだろう。ようやくドアがあいて、大柄(おおがら)なギリシャ正教の司祭が急ぎ足で彼のそばをすり抜けた。ギリシャ正教の司祭と判断した根拠は、高い黒の帽子と、垂れさがった長いヴェールと、首にかけたギリシャ正教の十字架だった。マークはどことなく奇異な感じを受けたが、どこがおかしいのかわからなかった。一瞬その場に佇(たたず)んで、うしろ姿を見送りながら首をかしげていたが、エレベーターのドアがしまりかけたのであわててなかにとびこんだ。四階のボタンを数回押した。さあ、急いでくれ。さっさと動け。しかしエレベーターは聞く耳を持たず、前にきたときと同じ悠々(ゆうゆう)たるペースで上昇した。残念ながらエレベーターは彼とエリザベス・デクスターのデートを知らなかった。ゆっくりとドアがあき、彼は拡(ひろ)がる隙間(すきま)から体をはすにして外へ出ると、四三〇八号室めざして廊下を走った。

警官はまだらしく、廊下に人影はなかった。しばらくはここに足どめを食いそうな形勢だった。ドアの小窓から病室をのぞきこんだ。二人の患者はベッドで眠っており、音なしのテレビがつけっぱなしになって四角い光を放っていた。マークは医局看護婦を捜しに行き、婦長室でコーヒーを飲んでいる彼女をやっと見つけだした。戻ってきたのがハンサムなほうのＦＢＩ捜査官なので、相手はうれしそうな顔をした。

「首都警察から四三〇八号室の見張りの警官はきたかい？」

「いいえ、今夜はあの部屋にはだれも近づいていません。墓場みたいに静かですわ。だれか

人がくる予定なんですか?」
「そうなんだよ、まったく。この分じゃ待たされそうだな。椅子を一つ貸してもらえないかね? 首都警察から人がくるまで帰るわけにいかないんだ。仕事の邪魔にならないといいんだが」
「邪魔じゃありませんわ。どうぞごゆっくり。坐り心地のよさそうな椅子を捜してあげましょう」彼女はコーヒー・カップをおいた。「コーヒー、召しあがる?」
「そいつはありがたいね」マークはあらためて注意深く彼女を観察した。もしかすると医者よりも看護婦のほうと一緒に夜をすごすことになるかもしれない。マークはもう一度病室に引きかえして、カセフィキスがまだ起きていたら、彼を安心させてから、首都警察に電話して警官を催促することに決めた。テレビの画面以外は真っ暗で、すぐには目が闇に慣れなかった。静かにドアをあけた。ゆっくり病室のほうへ歩いて行った。もう急ぐ必要はなかった。ベッドの二人にちらと目を向けた。二人ともぴくりとも動かない。その水洩れのような音が聞えなかったら、もっと注意して見る気にはならなかっただろう。
ポトッ、ポトッ、ポトッ。
蛇口から水が洩れるような音だが、蛇口を見た記憶はなかった。
ポトッ、ポトッ。
彼はアンジェロ・カセフィキスのベッドにそっと近づいて、上から見おろした。
ポトッ。

生暖かい血が口から糸を引いてシーツの上に流れおちていた。黒い目が眼窩からぎょろりととびだし、ふくれあがった舌がだらりと口から垂れさがっている。顎の線のすぐ下で、喉が耳から耳まですぱっと切られていた。血は床に滴り落ちて血溜りを作りはじめていた。マークはその血溜りに立っていた。急に脚がふにゃふにゃになり、やっとの思いでベッドの縁につかまった。よろめきながら耳の聞えない男のほうに近づいた。ようやく目が慣れてきた。彼は激しく吐いた。郵便配達の頭は胴体からだらりと垂れさがって、その二つがかつてはつながっていたことを示すのは皮膚の色だけだった。マークはドアの外へよろめきでて、いまにも破れそうな心臓の鼓動を聞きながら公衆電話のほうへ歩きだした。ワイシャツが体にへばりつくのを感じた。両手は血だらけだった。クォーターを二枚取りだすのに手間どった。殺人課に電話して、事件の概略を伝えた。今度こそ彼らも人をよこすのに手間取ったりはしないだろう。当直看護婦がコーヒーを持って戻ってきた。

「だいじょうぶですか？　少し顔色が悪いようですけど」といいかけて、彼の手を見るなり悲鳴をあげた。

「四三〇八号室へは絶対に行っちゃいけない。ぼくがいいというまではだれも入れるな。大至急医者をよこしてくれ」

看護婦はコーヒー・カップを彼に押しつけて、無理に受けとらせると、廊下を駆けだして行った。マークは場ちがいな存在であることを承知のうえでまた四三〇八号室へ戻った。いまの彼にはただ待つ以外になにもできることはなかった。電気をつけてバスルームに入り、

体と衣類についた血と吐瀉物をざっと洗い流そうとした。そのときドアのあく音が聞えたので、急いで病室にとってかえした。白衣を着た新顔の若い女医……プラスチックの名札には「医学博士アリシア・デルガード」とあった。

「どこにも手を触れるな」と、マークはいった。

ドクター・デルガードは茫然として彼をみつめ、それから死体に視線を移して呻き声を発した。

「どこにも手を触れるな」と、マークは繰りかえした。「間もなく殺人課の連中がやってくる」

「あなたはどなた?」

「FBIのマーク・アンドリューズ捜査官です」彼は本能的に紙入れを取りだして身分証明書を提示した。

「ただじっとここに立ってにらみあっているつもりですか? それともこの惨状をなんとかしていいのかしら?」

「殺人課が捜査を完了して、許可を出すまではなにもしないでください。ここから出ましょう」彼は女医のかたわらをすり抜けて、どこにもさわらないように肩でドアを押した。

二人は廊下へ戻った。

マークはドクター・デルガードに、ドアの前で待つこと、自分が首都警察へ電話をかけてくる間だれも病室へ入れないことを指示した。

彼女はしぶしぶうなずいた。

彼は電話のところへ行って、クォーターを二枚取りだした。首都警察をダイアルして、ブレイク警部補を呼んでくれと頼んだ。

「ブレイク警部補は一時間前に帰りました。なんの用でしょう？」

「ウッドロー・ウィルソン・メディカル・センターの四三〇八号室へ、いつになったら人をよこしてくれるんだ？」

「そちらはどなた？」

「ＦＢＩワシントン支局のアンドリューズだ」マークは二重殺人の詳細を説明した。

「そうか、もうそっちへ着いているころなんだがな。三十分以上前にこっちを出ている。殺人課へすぐに報告するよ」

「報告はもうすんだよ」マークはぴしゃりときめつけた。電話を切って、近くの椅子に倒れこんだ。すでに廊下は白衣でいっぱいだった。二台のキャスターつきベッドが四三〇八号室へ運ばれてゆくところだった。みんなが彼の指示を待っていた。どうしたらいいのだろう？

またクォーターを二枚取りだして、ニック・ステームズの自宅へかけた。ずいぶん長い間ベルが鳴りつづけたような気がした。どうして彼は電話に出ないのだろう？　ようやく女の声が答えた。

あわてていることを気取(けど)られてはいけない、と電話ボックスにしがみつきながら思った。

「こんばんは、ミセス・ステームズ。マーク・アンドリューズです。ご主人と話したいんで

すが」平静な声、緊張の気配もなかった。
「ニックはまだなのよ、マーク。二時間ほど前に支局へ戻ったきりなの。おかしいわね、あなたとバリー・カルヴァートに会うんだっていってたけど」
「ええ、もう会ったんですよ。四十分ほど前に支局を出てお宅へ向ったんですが」
「それがまだ帰ってないのよ。お夕食を食べはじめたばかりだったので、じきに戻るといってたわ。でもそれっきり連絡がないの。もしかするとまた支局へ戻ったのかもしれません。支局へかけてみたらいいかが？」
「ええ、そうします。お騒がせしてすみません」マークは受話器をかけて、四三〇八号室にだれも入っていないことを確かめた。またクォーターを二枚入れて、支局の番号を回した。
ポリーが出た。
「マーク・アンドリューズだ。ミスター・ステームズにつないでくれ。大至急頼む」
「ミスター・ステームズとカルヴァート捜査官はおよそ四十五分前にこちらを出ました――たぶん家へ帰ったんだと思います」
「いや、そんなはずはない」
「ほんとですわ。わたし、二人が出て行くのを見たんです」
「念のために確かめてくれないか」
「わかりました、ミスター・アンドリューズ」
マークは待った。時間がはてしなく長く感じられた。こんなときはどうしたらいいのか？

彼はたった一人だった。ほかの連中はみなどこへ行ってしまったんだろう？　こういう場合にとるべき処置は？　困ったことに訓練ではそこまで教えてくれなかった——ＦＢＩは犯罪の真っ最中でなく、二十四時間後に現場に到着する建前になっている。

「返事がありません、ミスター・アンドリューズ」

マークはインスピレーションが湧くことを期待して、絶望的に天井を見あげた。今夜のこれまでのことはだれにも話すなといわれている。ステームズが長官と会うまでは一言も洩らしてはならないといわれている。とにかくステームズとカルヴァートの行方を捜しあてることが先決だ。だれかこのことを話してもよい相手を捜さなければならない。またクォーターを二枚出して、バリー・カルヴァートにかけてみた。呼出音がいつまでも続いている。独身者アパートの電話にはだれも出ない。同じクォーターをふたたびノーマ・ステームズにかけた。「ミセス・ステームズ、マーク・アンドリューズです。たびたびお騒がせしてすみません。ご主人とミスター・カルヴァートが着きしだい、ウッドロー・ウィルソンへ電話するようにお伝えください」

「ええ、ニックが帰りしだい伝えるわ。たぶん途中で道草を食っているんでしょう」

「そういわれればそうですね、気がつきませんでした。交替が来しだい支局へ戻るのがいちばんいいかもしれません。だから電話は支局のほうへお願いします。どうもお邪魔しました、ミセス・ステームズ」彼は電話を切った。

ちょうどその瞬間に、首都警察の警官が混雑する廊下の中央を気どった足どりでやってき

CamScannerでスキャン

た。小脇にエド・マクベインの小説を抱えていた。マークは遅いじゃないかとどなりつけてやろうと思ったが、そんなことをしても無意味だった。流れた血は元へ戻らない、と不快な気分で考えた。ふたたび吐き気がこみあげてきた。彼は若い警官を横のほうへ連れて行って、殺人事件の説明をした。殺された二人がなぜ重要かということはぼかして、ただ起ったことだけを伝えた。上司に報告するようにいい、殺人課が病院に向っているとつけくわえたが、やはり細かいことは伏せておいた。警官は当直警部補を呼びだして、いま聞いたことを事務的に報告した。ワシントン首都警察は年間六百件以上の殺人事件を扱っている。

病院当局者はしびれを切らしていた。まだ当分待たされそうだった。当初のパニックは職業的な能率のよさにかわったように見えた。マークは依然としてどっちを向けばよいのか、なにをすればよいのかわからなかった。ステームズはどこだ? カルヴァートは? みんなどこへ行ってしまったんだ?

彼はふたたび警官のほうへ近づいて行った。警官はだれも病室に入ってはならない理由を説明していた……病院の人々は納得こそしなかったが、仕方なしに待っていた。マークはこれから支局へ戻ると警官にいった。カセフィキスの重要性についてはまだなにも話していなかった。警官はこの場は自分一人でだいじょうぶだと考えているようだった。それにもうすぐ殺人課が到着するだろう。彼は殺人課の連中があとであんたの話を聞きたがるだろうとマークにいった。マークはうなずいて警官と別れた。

車に戻ると、サイド・コンパートメントから赤い点滅灯を取りだして屋根にとりつけ、専

用のソケットにプラグを差しこんだ。フル・スピードで支局へ戻るつもりだった。そこには彼の知っている人々が、現実が、この悪夢からなんらかの意味を引きだしてくれそうな人間が待っている。

　マークは無線のスイッチを入れた。「こちらワシントン支局一八〇号車。ミスター・ステームズとミスター・カルヴァートの所在を突きとめてくれ。大至急だ。これからすぐに支局へ戻る」

「承知しました、ミスター・アンドリューズ」

「一八〇号車連絡終り」

　十二分後にワシントン支局に到着して、車を駐めた。エレベーターに駆けつけた。エレベーター係が彼を上へ連れて行った。彼はエレベーターからとびだした。

「アスピリン、アスピリン。今夜の当直はいったいだれなんだ？」

「わたしだけだよ、ほかにはだれもいない」アスピリンは眼鏡ごしにやや退屈した顔で彼のほうを見た。「どうかしたのかね？」

「ステームズはどこだ？　それからカルヴァートは？」

「彼らはもう一時間以上前に帰ったよ」

　やれやれ、どうしよう？　アスピリンは事情を打明ける相手として不適当だが、いまは相談する相手がほかに一人もいなかった。それに長官と会うまではだれにも話すなとステームズに注意されていたが、これは非常事態だった。くわしいことはいわずに、FBI捜査官と

してこういう場合にどうするかということだけを聞きだすつもりだった。
「ステームズとカルヴァートをぜがひでも捜しださなきゃならないんだが、なにかいい考えは？」
「そうだな、まず無線ステーションに連絡してみたかね？」と、アスピリンが質問した。
「ポリーに調べてもらったよ。もう一度やってみよう」
マークはいちばん近い電話をとりあげた。「ポリー、ミスター・ステームズとミスター・カルヴァートの居場所が無線でわかったかい？」
「まだ捜している最中です」
待つ時間は無限に続くように思われたが、依然としてなにも起らなかった。「いったいどうなってるんだ、ポリー？」
「一生懸命にやってるんですけど。ナンバー1は雑音しか聞えません」
「2、3、4もやってみてくれ。なにをやってもかまわん。全部のステーションを頼む」
「ええ、でも一度に一つしかできないんです。ステーションは四つあって、一度には無理なんですよ」
マークは自分がうろたえていることに気がついた。腰を落ちつけてじっくり考えなくては。まだ世界の終りがきたわけじゃない――それとも、終りがきたのかな？
「1、2とも出ません。でもこんな夜遅く3、4を使うでしょうか？　仕事じゃなしに、家へ帰る途中だったんですよ」

「どこへ行く途中だろうと知ったこっちゃない。とにかく彼らを見つけたいんだ。もう一度やってくれ」

「わかりました」彼女は3、4と試してみた。5、6のコードを解くには許可を得なければならなかった。マークはアスピリンの顔を見た。許可を出すのは当直の役目だった。

「これは緊急事態なんだ――誓ってそうなんだよ」

アスピリンはポリーに5、6を試してみることを命じた。5、6はFBIにとっての連邦通信委員会のようなもので、KGBのイニシアルで知られている。FBIの人間はKGBを自分たちの通信網の呼出しコードとして持っていることをいつもおもしろがっているが、いまはたいしておかしくもなかった。KGB5には応答がなかった。KGB6が呼びだされたが、これも応答なし。つぎはいったいどうすればいいのか？　どっちを向いたらいいのか？　アスピリンが問いかけるように彼を見た。巻きこまれるのはご免だという表情だった。

「いいかい、若いの、C-Y-Aだよ。そいつがいちばんさ。C-Y-Aがな」

「さわらぬ神に祟りなし（訳注 Covering Your Ass の頭文字をとってC-Y-A）をきめこんでいたんじゃ、ミスター・ステームズは見つからんよ」マークは強いて冷静を装っていった。「いいんだよ、アスピリン、あんたはクロスワード・パズルをやっててくれ」

マークは手洗いに入り、両手で蛇口の下にお椀を作って口をすすいだ。まだ吐瀉物と血の匂いが残っていたので、念入りに洗った。それから刑事部へ戻って、腰をおろし、ゆっくり十までかぞえた。これからどうするかを決めて、それから決めたことを実行しなければなら

ない。ステームズとカルヴァートの身におそらく異変があったのだ。黒人の郵便配達とギリシャ人の身に起ったことははっきりしている。異例ではあるが、たぶん長官と連絡をとるべきだろう。養成期間が終ってわずか二年目の彼のような下っ端は、ふつう長官に直接電話することは考えられない。いずれにせよ明朝十時三十分には、ステームズの約束に従って長官と会うことができる。だが明朝十時三十分といえばまだ半日先だ。十二時間以上もなす術もなく待たなければならない。その間だれにも話すなといわれた秘密を自分一人の胸にしまっておかなければならない。人に話せない情報をじっと抱いていなければならない。

　電話が鳴って、ポリーの声が聞えた。ステームズからであってくれればよいと祈ったが、祈りは聞きとどけられなかった。

「マーク、まだそこにいますか？　殺人課のホーガン警部からあなたに電話です」

「アンドリューズか？」

「そうだ、警部」

「あんた、なにを知ってる？」

　マークはカセフィキスが不法入国した移民であること、脚の怪我が悪化したために入院したことをありのままに話し、合衆国への不法入国をばらすと脅迫していた悪党にピストルで撃たれた傷だと本人はいっていると嘘をついた。そしてあすの午前中に詳細な報告書を送るとつけくわえた。

　警部は疑わしそうな声を出した。

CamScannerでスキャン

「あんた、おれになんか隠してるな？　だいたいＦＢＩがあそこでなにをしてたんだ？　そっちが情報をおさえていることがわかったら厄介なことになるよ。おれはワシントンじゅうのいちばん熱い石炭で、遠慮なくあんたの尻をあぶってやるぜ」

マークはステームズに念を押された秘密厳守の命令を思いだした。

「いや、なにも隠してなんかいないよ」と、彼は声を張りあげた。声が震えて、およそ説得力に欠けることが自分でもわかった。マークは受話器をおいた。受話器が汗でぬるぬるし、シャツが体にへばりついた。またポリーを呼びだして、ステームズにもう一度電話をかけてみたが、支局長はまだ帰宅していなかった。ノーマ・ステームズにもう一度電話をかけてみたが、支局長はまだ帰宅していなかった。

質問してから電話を切った。殺人課の警部はなおもぐずぐずいい、さらに二つ三つ質問してから電話を切った。

マークはエレベーターに乗りこんで車へ急いだ。とにかく自分のホーム・グラウンドに辿りつくことだ。そして長官に電話をかける。ふたたび街を縫ってフル・スピードで車を走らせた。

そこはワシントンの最高級住宅地というわけではなかったが、面目を一新した南西地区は、多くの専門職に従事する若い独身男性たちの住むところだった。アリーナ・ステージ劇場に近い埠頭にあって、地下鉄の駅に近く、足の便にも恵まれていた。快適で、活気があり、家賃も高すぎない――マークにとってはまさに理想的な環境だった。

アパートへ帰り着くと、階段を駆けあがり、勢いよくドアをあけて、電話を取りあげた。数回ベルが鳴ってから、FBI本部が出た。「こちら長官室。わたしは当直だ」
マークは深く息を吸いこんだ。
「わたしはワシントン支局のアンドリューズ捜査官だ」と、ゆっくり切りだした。「大至急長官と話したいんだが」
長官は司法長官の自宅で彼女と食事中らしかった。マークは司法長官邸の電話番号をたずねた。こんな夜遅く長官と話す特別許可はもらっているのか? 許可は得ている、明朝十時三十分に長官と会う約束があるし、とにかくぜがひでも話さなければならないのだ。
相手はアンドリューズの切羽つまった口調から、容易ならぬ事態と察したらしい。
「すぐに折りかえし電話するから、そちらの番号を教えてくれ」
これはマークがFBI捜査官であること、明朝長官と会う予定になっていることをチェックするための手順だということが、彼にはぴんときた。一分後にベルが鳴って、当直が言った。
「長官はまだ司法長官宅におられる。彼女の専用電話は七六一―四三八六番だ」
マークは教わった番号をダイアルした。
「ミセス・エイドルマン宅でございます」と、うやうやしくいう声が聞えた。
「こちらはマーク・アンドリューズ捜査官です。FBI長官とお話ししたいのですが」
彼はその言葉をゆっくりと、明瞭(めいりょう)に発音した。もっとも声はまだ震えていた。

「そのまま少々お待ちください」

彼は待った。ひたすら待った。

別の声が聞えた。「タイスンだ」

マークは水中にもぐる前のように深呼吸をした。

「わたしはマーク・アンドリューズ捜査官です。明朝十時三十分に、ステームズ支局長、カルヴァート捜査官と一緒にお会いする約束になっております。長官がお帰りになってからミセス・マグレガーと取りきめたことなので、まだご存じないと思います。じつは、すぐにお会いしなければならない事態が生じました。折りかえし電話をくださるなら、わたしは自宅におります」

「わかった、アンドリューズ」と、タイスンは答えた。「こちらから電話しよう。きみの番号は？」

マークは番号を教えた。

「きみ、重要な話なんだろうな」

「はい、きわめて重要です」

マークはふたたび待った。一分たち、また一分たった。タイスンは愚かな部下からの電話を無視しようとしているのだろうか？　いったいどうなるのだ？　三分が経過した。また一分、明らかに長官のチェックは当直のそれよりも入念だった。

電話が鳴った。マークはとびあがった。

「やあ、マーク、ロジャーだよ。どうだ、ビールを飲みにこないか？」

「いまはだめなんだ、ロジャー、またにしてくれ」彼は急いで電話を切った。

とたんにまたベルが鳴った。

「よろしい、アンドリューズ、話とはなんだ？　手短かに要領よくやってくれ」

「いますぐお目にかかりたいのです。十五分で結構です、そしてどないしたらいいか（ホワット・ザ・ヘル・トゥ・ドゥ）長官のご指示をいただきたいのです」

彼は「どないしたらいいか」などという口のきき方を、いった尻から後悔した。

「よかろう、よほどの緊急事態と見えるな。司法長官の家を知ってるか？」

「知りません」

「じゃメモしたまえ、アーリントンのエッジウッド・ストリート二九四二だ」

マークは受話器をおいて、生命保険会社の宣伝用の紙マッチの裏に活字体の大文字でそのアドレスを書きとめてから、アスピリンに電話した。ちょうどアスピリンは7の横の鍵（かぎ）で頭を悩ましているところだった。

「なにかあったら無線で連絡してくれ。ずっとチャンネル2に合わせてあけておく。チャンネル1は故障らしい」

アスピリンはふんと鼻を鳴らした。近ごろの若い捜査官ときたら自信家ぞろいだ。J・エドガー・フーヴァー時代はこんなことはなかった、時代が変ったからってこんなことでいいはずはない。しかし、おれもあと一年で定年だからな。彼は7の横の鍵、十文字、に戻った。

略奪行為に味方する人々の集まり、か。アスピリンはまた考えはじめた。

マーク・アンドリューズもまた考えごとをしながらエレベーターへ急ぎ、通りへ出て車に乗りこみ、フル・スピードでアーリントンへ向けて走りだした。イースト・ベイスン・ドライヴからインデペンデンス・アヴェニューに出て、リンカーン記念館を通りすぎ、メモリアル・ブリッジにさしかかった。できるだけスピードをあげながら、この穏かで快適な宵の口に、とりたててどこへ行くあてもなしに路上をぶらつき、車の屋根にとりつけた赤い点滅灯には目もくれない人々を罵り続けた。ステームズはどこへ行ってしまったんだ？　バリーは？　いったいなにがあったんだ？　長官はおれの頭が変だと思うだろうか？

メモリアル・ブリッジを渡って、ジョージ・ワシントン・パークウェイ口を出た。交通渋滞で一インチも先へ進めない。たぶん事故があったのだろう。よりによってこんなときに事故とは。ありがたくて涙が出るよ。彼はセンター・レーンに車を寄せて、思いっきりクラクションを鳴らした。ほとんどの車は警察の事故処理班の車と思ったらしく、道をあけてくれた。ようやく数台のパトカーと救急車のところまで辿りついた。首都警察の若い警官が近づいてきた。「事故処理班かい？」

「いや。FBIだ。アーリントンまで行かなきゃならない。急用なんだ」

彼は身分証明書を振りまわした。警官が彼の車を誘導してくれた。彼はスピードをあげて事故現場から遠ざかった。いまいましい事故め。現場をはなれると、車の数も少なくなった。十五分後にアーリントンのエッジウッド・ストリート二九四二に到着した。念のためにもう

一度ワシントン支局のポリーと無線で連絡をとった。依然としてステームズからもカルヴァートからも連絡は入っていなかった。マークは急いで車からおりた。一歩も踏みださないうちに、シークレット・サーヴィスが彼を呼びとめた。身分証明書を見せて、長官と会う約束だと答えた。シークレット・サーヴィスは車のそばで待っていてくれと、ていねいな口調でいった。彼は玄関で二言三言かわしてから、ホールの右手にある小部屋にマークを案内した。そこは書斎として使われている部屋のようだった。長官が入ってきた。マークはさっと立ちあがった。

「こんばんは、長官」

「こんばんは、アンドリューズ。きみは大切な夕食の邪魔をしているんだぞ。自分のしていることがわかっているんだろうな？」

長官の態度は冷やかでぶっきらぼうだった。明らかに無名の若い捜査官に呼びだされて機嫌をそこねていた。マークはステームズと最初に会ったときから、みんなの頭ごしにいきなり長官と会う決心をするまでの一部始終を報告した。長官は長い独演をずっと無表情で聞いていた。報告が終ってもまだ表情は変らなかった。マークの頭には、おれはヘマをやってしまったらしい、という考えしか浮かばなかった。ここへくる前にステームズとカルヴァートの行方を捜すべきだった。彼らはいまごろ家へ帰っているかもしれない。彼は額にうっすらと汗をにじませて待った。きょうがおれのＦＢＩにおける最後の日になるかもしれない。長官の最初の言葉が彼を驚かせた。

CamScannerでスキャン

「きみの処置は百パーセント正しかったぞ、アンドリューズ。わたしもきみの立場なら同じ判断をくだしていただろう。直接わたしに話を持ちこむのは、相当勇気が要ったにちがいない」彼はマークを鋭く見すえた。「今夜の出来事を知っているのはステームズ、カルヴァート、きみ、それにわたしだけだというが、その点はたしかなのか？　シークレット・サーヴィスも首都警察もこのことは全然知らないのだな？」

「そのとおりです。われわれ四人しか知りません」

「そしてきみたち三人は、明朝十時三十分にわたしと会うアポイントメントをとっているのだな？」

「そうです」

「よろしい。これからいうことをメモしたまえ」

マークは上着の内ポケットからメモ・カードを一枚とりだした。

「司法長官の電話番号はもう知っているな？」

「はい」

「わたしの自宅の番号は七二一―四〇六九だ。両方とも頭に叩きこんだら破り捨ててしまえ。ではこれからきみのやるべきことを指示する。まずワシントン支局へ戻れ。ステームズとカルヴァートの所在をもう一度チェックするのだ。死体収容所、病院、ハイウェイ・ポリスにも電話で当ってみろ。それでも見つからなかったら、明朝十時三十分ではなく八時三十分にわたしの部屋へきてくれ。それがきみの最初の仕事だ。第二に、首都警察と一緒にこの事件

を調べている殺人課の担当刑事たちの名前を知らせてくれた。念のためにきくが、きみがキセフィキスに会いに行った理由を連中には話してないだろうな？」

「一言もいってません」

「よろしい」

ドアの隙間から司法長官が顔をのぞかせた。

「なにも問題はないの、ホールト？」

「ああ、なんでもないよ、マリアン。ありがとう。ワシントン支局のマーク・アンドリューズ捜査官と会うのははじめてだろうね？」

「ええ。はじめまして、ミスター・アンドリューズ」

「こんばんは、司法長官」

「長くかかりそうなの、ホールト？」

「いや、アンドリューズへの指示がすみしだい戻るよ」

「なにかあったの？」

「いや、心配するほどのことじゃないよ」

FBI長官は明らかに問題の核心に触れるまでは、だれにもこの話を聞かせないつもりらしかった。

「どこまで話したかな？」

「ワシントン支局へ戻って、スキ[illegible]

す」

「そうだった」

「そして死体収容所、病院、ハイウェイ・ポリスにも当ってみること、とおっしゃいました」

「そのとおり」

「それから殺人課の担当刑事の名前を調べることです」

「よろしい。いいか、これからいうことをメモしたまえ。病院の職員および見舞客、その他二人の患者が生きていた時点からきみが死体を発見するまでの間に、四三〇八号室の近くにいたと確認されるすべての人間の名前を調べあげること。全国コンピューター・インフォーメーション・センターとＦＢＩのインデックスを通じて、被害者二人に関する情報を集めること。病院の勤務中の職員、見舞客、その他四三〇八号室の近くにいたことが確認できるすべての人間と、あわせて被害者二人の指紋をとること。消去目的と容疑者の身許確認のためにこれらの指紋が必要になるだろう。それからさっきもいったように、万一ステームズとカルヴァートが見つからなかったら、明朝八時三十分にわたしの部屋へきてくれ。もし今夜じゅうになにか起きたら、ここかわたしの自宅へ電話をくれ。遠慮はいらん。十一時三十分以降なら家へ帰っている。電話をかけるときは暗号名を使え――そうだな――ジュリアスがいい――シーザーの身に起ったことを予言するようなことにならなければいいが。そしてきみの番号だけいうのだ。かならず公衆電話を使うこと、折りかえしこちらからその番号に電話

する。よほどの大事件でもないかぎり、午前七時十五分以前にはわたしを起すな。わかったかね？」
「はい、わかりました」
「よろしい。ではわたしは食事に戻る（もど）としよう」
マークは立ちあがって帰りかけた。長官が片手でその肩をおさえた。
「心配せんでいい。こういうことはよくあることだし、きみは正しい判断をくだした。困難な状況にもかかわらず、落ちついてよくやった。では仕事に戻りたまえ」
「はい」
マークはこれから自分のやることを知っている人間がいるという安心感でほっと一息ついた。自分よりはるかに肩幅の広い人間が一人、その重荷を半分背負ってくれるのだ。
支局へ戻る途中、車の無線を取りあげた。「こちらワシントン支局一八〇号車、ミスター・ステームズから連絡は？」
「なにもありません、一八〇号車、でもまだ捜していますす」
支局へ戻ると、アスピリンはマークがたったいまFBI長官と話してきたとも知らずに、まだ刑事部にいた。アスピリンは歴代の五人の長官全部とカクテル・パーティで顔を合わせている。もっとも相手は一人として彼の名前をおぼえていないだろう。
「緊急事態はもう終ったのか？」
「ああ」マークは嘘（うそ）をついた。「ステームズかカルヴァートから連絡はあったかい？」と、

なるべく心配していないような声でたずねた。

「いや、きっとどこかに引っかかったのさ。心配することはないよ。迷える小羊どもは、きみがしっぽをつかまえてやらなくてもいずれ家へ帰るさ」

だが、マークは心配だった。自分の部屋へ行って電話を取りあげた。ポリーのところへはまだなんの連絡も入っていなかった。チャンネル1の雑音が聞えるだけだった。つぎにノーマ・ステームズに電話してみた。あいかわらず連絡なし。ミセス・ステームズがなにか事故でもあったんでしょうかと逆にたずねた。

「なんでもありませんよ」マークはまた嘘をついた。さりげない口調がかえってわざとらしく聞えただろうか？「ご主人がどこのバーに引っかかったかわからないだけです」

彼女は声をたてて笑ったが、ニックがバー通いなどしないことを知っていた。

マークはカルヴァートにも電話してみた。依然として独身者アパートの電話にはだれも出なかった。こうなればなにかあったにちがいない。いったいなにがあったのか？　少なくとも長官がいて、いまはすべてを知っている。彼は時計を見た。十一時十五分。夜はどこへ行ってしまったのか？　これからどこへ行こうとしているのか？　十一時十五分。今夜はなにをする予定だったっけ？　そうだ、美人を食事に誘って承知させたんだった。彼はもう一度電話を取りあげた。少なくとも彼女は家にいて、無事だろう。

「もしもし」

「もしもし、エリザベス、マーク・アンドリューズだ。すまないけど今夜は行けなくなった。

ぼくの手に負えないあることが起ってね」
　彼の声からは緊張がありありと読みとれた。
「気にしないで」と、彼女は気軽に答えた。「あてにならない人間だって、自分でもいってたじゃない」
「できれば雨天順延にしてもらえないかな。あすの午前中にはかたがつくと思う。そのあとならきみに会えるかもしれないんだ」
「午前中ですって？　病院で会うつもりなら、わたしあしたは非番よ」
　マークはためらいながら、どういおうかとすばやく頭を働かせた。「そうか、それならかえって都合がいい。じつは悪いしらせがある。カセフィキスともう一人の患者が今夜殺された。いま首都警察が調べているが、手がかりがまるでないんだ」
「殺された？　二人とも？　どうして？　だれが殺したの？　だれが殺したの？　カセフィキスは理由もなしに殺されたわけじゃないんでしょう？」言葉が奔流のように続いた。「いったいどういうことなの？　いいえ、答えないで。どうせほんとのことをいってくれないでしょうから」
「きみに嘘をついて時間を無駄にするつもりはないよ、エリザベス。きょうはもう遅いし、せっかくの晩をぶちこわしてしまったことで、きみには大きなステーキの借りができたと思っている。近いうち電話をしていいかい？」
「うれしいわ。でも殺人事件はあまり食欲をそそらないわ。早く犯人をつかまえて。ウッドロー・ウィルソンでは暴力事件の結果を見なれているけど、そういう事件はふつう病院内で

は起きないものよ」

「わかってるよ。病院に迷惑をかけてすまないと思っている。おやすみ、べっぴんさん。ぐっすり眠るんだよ」

「あなたもね、マーク。そんな時間があればだけど」

マークは電話を切った。とたんにその日の出来事の重さが心によみがえってきた。これからどうするか？　八時三十分まではなにもすることがない、ただ家へ帰るまで無線のスイッチを入れておくだけだ。ここにじっと坐って窓の外を眺めながら、独りで絶望的な思いをしていても意味がない。彼はアスピリンのところへ戻って、これから家へ帰るが、まだステームズとカルヴァートの行方が気になるので、十五分おきに電話を入れると告げた。アスピリンは顔もあげなかった。

「よかろう」と、彼はクロスワード・パズルに気をとられながら答えた。もう十一の鍵が解けていた。きっと今夜はひまな晩だったのだろう。

マークはペンシルヴェニア・アヴェニューを通ってアパートのほうへ車を走らせた。最初のロータリーで、自分に優先権があることを知らない旅行者が車の流れをせきとめていた。マークは心のなかでその旅行者を呪った。はじめてワシントンを訪れた人間で、右に曲ってロータリーから抜けだすこつを知らない者は、最初に予定した以上に何度も何度もロータリーをぐるぐる回るはめになる。マークはようやくロータリーを回ってペンシルヴェニア・アヴェニューに戻った。それからまたタイバー・アイランド・アパートメンツにある自分の家

に向ってゆっくりと走り続けた。心のなかは重苦しい不安でいっぱいだった。深夜のニュースを聞くためにカー・ラジオのスイッチを入れた。なにか気持をまぎらわすものが必要だった。べつに大したニュースもなく、ニュースキャスターも退屈しているような口調だった。大統領は銃砲所持規制法案に関する記者会見を開き、南アフリカの政情はいよいよ悪化しつつあるようだった。続いてローカル・ニュース。ジョージ・ワシントン・パークウェイで交通事故があって、二台の車が投光照明のなかでクレーンを使って川底から引きあげられているという。一台は黒塗りのリンカーンで、もう一台はブルーのフォード・セダンだったと、休暇でジャクソンヴィルからワシントンへやってきた若い夫婦の目撃者が証言していた。それ以上のくわしいことはまだわからなかった。

ブルーのフォード・セダン。注意して聞いていたわけではなかったが、その言葉がマークの耳のなかでくりかえし鳴っていた――ブルーのフォード・セダン? まさか。彼は九番ストリートから右に急カーヴして、間一髪消火栓をかわしながらメイン・アヴェニューに入り、二時間前に通ったばかりのメモリアル・ブリッジへと急いだ。道路はさっきよりも空いていて、数分で現場に到着した。事故現場にはまだ首都警察が大勢いて、ジョージ・ワシントン・パークウェイの一車線が柵で閉鎖されていた。マークは草でおおわれた道ばたに車を停めて、柵に駆けよった。FBIの身分証明書を提示して、責任者を呼んでもらった。そして事故車の一台にはFBIの捜査官が乗っていたのではないかと思うと事情を説明した。ついてはもう少しくわしく話してもらえないだろうか?

「なにしろまだ二台とも川のなかなんだよ」と、警部が答えた。「事故の目撃者は二人しかいない、ほんとに事故だとしての話だがね。運転の仕方に妙なところがあったようだ。あと三十分もすれば車があがるだろう。それまで待つしかないよ」

マークは路肩に近寄って、巨大なクレーンと、クリーグ灯の下で川のなかを動きまわる豆粒のようなフロッグメンの姿を眺めた。三十分はただの三十分ではなかった。彼は寒さに震えながら待った。三十分が四十分になり、五十分になり、やがて一時間がすぎたとき、黒いリンカーンが水中から現われた。車内から死体が一つ発見された。用心深い男らしく、シート・ベルトをつけていた。警察がすぐに車に駆け寄った。マークは責任者のほうへ戻って、もう一台があがるまでどれぐらいかかるかとたずねた。

「もうすぐだよ。するとリンカーンのほうじゃなかったんだな？」

「うん」と、マークは答えた。

十分、二十分、二台目の車の屋根が見えてきた。ダーク・ブルーの車だ。続いて横っ腹が現われた。窓の一つがほんのわずかあいている。やがて全体が水面に出た。なかに人間が二人いた。彼はナンバー・プレートを見た。とたんに吐き気をおぼえた。その晩二度目だった。泣きたいような心境で警部のところへ駆け戻り、車内の二人の名前を告げてから、路傍の公衆電話まで走った。電話に辿りつくまでがひどく遠かった。番号を回しながら時計を見た。間もなく一時だった。一度ベルが鳴ると、疲れたような声が答えた。

「もしもし」

マークはいった。「ジュリアス」

相手がたずねた。「きみの番号は？」

番号を教えると、三十秒後にベルが鳴った。

「アンドリューズ、もう夜中の一時だぞ」

「わかっています。ステームズとカルヴァートが……死んだんです」

一瞬の間があった。相手の声から睡気が吹っとんでいた。

「ほんとか？」

「はい」

マークは疲労と気持の昂ぶりをなるべく声に出すまいと努めながら、事故の詳細を報告した。

「アンドリューズ、すぐにきみの支局に電話しろ」と、タイスンがいった。「ただし今晩きみがわたしに話したことはいっさい伏せておくのだ。事故の件だけ連絡しろ――ほかのことはなにもいうな。あすの朝警察から事故のことをもっとくわしく聞きだせ。そして八時三十分を七時三十分に繰りあげて長官室へきてくれ。ビルの反対側の広い入口を入ったところに、人を一人待たせておく。その男のほうできみを見つけてくれるから、遅れるなよ。では家へ帰って少し眠っておけ。あすまでだれにも姿を見られるな。心配はいらんよ、アンドリューズ。もうわれわれ二人がこのことを知っているし、さっききみにいいつけた仕事はほかの捜査官を動員してやらせることにする」

電話がぷつんと切れた。マークはアスピリンに電話して——こんな晩に当直に当るとはよくよく運が悪い——ステームズとカルヴァートが死んだことを伝えると、アスピリンが質問する暇も与えずいきなり電話を切った。それから車に戻って、夜のなかを家に向ってゆっくり走りだした。もう路上に車はほとんど見当らず、早朝の霧がすべてに非現実的な感じを与えていた。

アパートのガレージの入口で、若い黒人の駐車場係サイモンと顔を合わせた。サイモンはマークが気に入っていたが、それ以上にマークのメルセデスが気に入っていた。マークは大学を出た直後に、叔母のわずかな遺産をそっくりこの車に注ぎこんでしまったのだが、その贅沢を一度も後悔したことがなかった。サイモンはマークがガレージの契約スペースを持っていないことを知っていて、いつも彼の車の駐車役を買ってでた——すばらしいシルヴァーのメルセデスSLC580を自分で運転するチャンスのためなら、どんなことでもやるというわけだった。ふだんならサイモンと二言三言冗談をいいかわすのだが、今夜は相手の顔も見ずにキイを渡した。

「あすの朝七時に出かけなきゃならないんだ」と、彼は歩きだしながらいった。「まかしとき」という返事がかえってきた。

背後でエレベーターのドアがしまる前に、サイモンがエンジンを再スタートさせる低い音が聞えた。人気のない三室からなる自分の部屋に辿りついた。ドアをロックしてから、念のために閂をかけた。こんなことははじめてだった。それから部屋のなかをゆっくり歩きまわ

り、着ているものを脱いで、汗くさいシャツを洗濯かごに投げこんだ。もう一度手を洗ってから――それで三度目だった――ベッドに入り、白い天井を見あげながら、その夜の一連の出来事の意味を考えた。やがて眠ろうとした。六時間たったが数分間うとうとしただけだった。

その夜やはり数分間しか眠れなかったもう一人の人間が、ホワイト・ハウスのベッドで寝返りをうっていた。

エイブラハム・リンカーン、ジョン・F・ケネディ、マーティン・ルーサー・キング、ジョン・レノン、そしてロバート・ケネディ。下院がこのような自己破壊を違法とする法案を通過させる前に、有名無名を問わず、いかに多くの人間が生命を犠牲にしなければならないことか。

「ほかにだれが死ななくてはならないのかしら？」と彼女は呟いた。「もしもこのわたしだとしたら、今こそ……」

彼女は寝返りをうってエドワードの寝顔を眺めた。その表情からは、彼の心にはそういうおぞましい考えは浮んでいないことが明らかだった。

CamScannerでスキャン

三月四日　金曜日朝

午前六時二十七分

マークはとうとう我慢しきれなくなって、午前六時三十分にベッドを出ると、シャワーを浴びて、新しいワイシャツとスーツに着替えた。アパートの窓からワシントン・チャンネル越しにイースト・ポトマック・パークを眺めながら、きのうの出来事を思いかえしてみた。あと数週間で桜が咲くだろう。あと数週間で……

彼はふたたび行動できることを感謝しながら部屋のドアをしめた。サイモンが車のキイを彼に渡した。メルセデスのために、あいている専用駐車スペースを見つけてくれたのだ。

マークは六番ストリートをゆっくり走って、Gストリートで左折し、七番ストリートで右折した。朝のその時間には、走っている車はトラックだけだった。ハーシュホーン美術館の前を通って、インデペンデンス・アヴェニューに入った。国立公文書館のつぎの七番ストリートとペンシルヴェニア・アヴェニューの交差点で、赤信号にぶつかって止った。前日のことは悪い夢だったとでもいうような、すべてが正常であるような奇妙な感じを受けた。支局に到着すればいつもと同じようにニック・ステームズとバリー・カルヴァートに会えるような気がした。左を見た瞬間に夢想がふっと消えた。人気のない街路の一端に、木立を通して

ホワイト・ハウスの敷地と白亜の建築の一部が見えた。右を向くと、街路の反対側のはずれで議事堂が朝日を受けて輝いていた。そしてこの両者の間に、シーザーとキャシアスの間に、FBIが立っている、とマークは思った。長官と彼自身が二人きりで中間に立って、運命を弄んでいる。

マークはFBI本部の裏側のランプをくだって車を駐めた。ダーク・ブルーのブレザーにグレイ・フランネルのズボン、黒靴にスマートなブルーのネクタイというFBIの制服姿の若い男が彼を待っていた。いま起きたばかりとはとても思えないほどこざっぱりした感じの、一人の名もない男。マークは身分証明書を出して見せた。若い男は一言も口をきかずに彼をエレベーターのほうへ案内した。エレベーターが七階に着くと、男は足音をひそめてとある小部屋へ連れて行き、そこで待つようにいった。

マークは長官室の隣の受付に腰をおろした。おきまりの《タイム》や《ニューズウィーク》のバック・ナンバーがあって、歯医者の待合室と変りなかった。ここよりは歯医者の待合室のほうがいいと思ったのは、きょうがはじめてだった。過去十四時間の出来事をあれこれ思いかえしてみた。彼はなんの責任も負わされずに、FBIにおける波瀾万丈の五年間の二年目を楽しんでいた一人の男から、一転して虎口をのぞく男になってしまった。本部へは面接のときに一度きたことがあるだけで、そのときはこんなことが起きる可能性があるなどとはだれも教えてくれなかった。そのとき話に出たのはサラリーやボーナスや休暇や、国家に奉仕する有益かつやり甲斐のある任務のことだけで、喉を切られるギリシャ移民と黒人の

郵便配達や、ポトマック川で溺死する仲間の話などは全然出なかった。彼は部屋のなかを行ったりきたりしながら考えをまとめようとした。きのうは本来なら非番だったのだが、超過勤務手当をもらうのも悪くないと欲を出した結果がこれだった。ほかの捜査官ならもっと早く病院へ戻って、二重殺人を未然に防いでいたかもしれない。もしもゆうべ彼がフォード・セダンを運転していたら、ステームズとカルヴァートではなく、彼がポトマック川に沈んでいたかもしれない。もしかすると……マークは目を閉じた。思わず戦慄が背筋を走り抜けた。つぎは自分の番かもしれないという恐怖を無理に払いのけようとした。

ふと壁に飾られた額が目にとまった。それにはFBIの約六十年の歴史のなかで、勤務中に死亡せるものわずか三十四名、同一日中に二人の死者が出た日わずか一日、と書いてあった。きのうでその記録はいっぺんに過去のものになってしまった。壁にそって移動した視線は、大きな最高裁判所の写真の隣に飾られた、同じように大きな議事堂の写真の上にとまった。行政と司法が手を携えた図。彼の左には歴代の五人のFBI長官、フーヴァー、グレイ、ラッケルズハウス、ケリー、そして内部の人間にはホールトという頭文字語で呼ばれている、恐るべきH・A・L・タイスンの写真が並んでいた。秘書のミセス・マグレガーを除いて、彼のファースト・ネームを知っている人間は一人もいないようだった。それはFBIで長年続いている冗談の一つだった。新人がFBIに入ると、一ドル払って二十七年間長官に仕えているミセス・マグレガーのところへ行き、長官のファースト・ネームを彼女にいう。推理が当っていれば溜りに溜った賭金を独り占めにできる。現在のところ賭金は三千五百十六ド

ルに達していた。マークはヘクターだろうと推理した。ミセス・マグレガーは黙って笑うだけで、賭金はまた一ドルふえた。もう一度試みたいときはさらに一ドル払えばいいが、二度目も推理がはずれると十ドルの罰金をとられる。かなり多くの者が二度目に挑戦し、新しい犠牲者が出るたびに賭金はどんどんふえていった。

マークの場合は犯罪者指紋ファイルをチェックするという名案を思いついた。FBIの指紋記録は三つのカテゴリーに分れている――すなわち犯罪者、軍人、民間人の三つで、全FBI捜査官の指紋は犯罪者ファイルに含まれている。これはFBI捜査官で犯罪者になった者を追跡するためと、犯罪現場で捜査官の指紋を他から区別するためだ。マークは自分ほど頭のよい人間はいないと思いながら、タイスンのカードを見せてもらった。長官のカードは指紋部のある助手の手から彼に渡された。カードにはつぎのように記入されていた――「身長　六フィート一インチ、体重　一八〇ポンド、髪　褐色、職業　FBI長官、氏名　タイスン、H・A・L」結局ファーストネームはわからずじまいだった。これまたブルーのスーツを着た目立たないアシスタントは、マークに向っていやな笑いをうかべ、カードをファイルに戻しながら聞えよがしに呟いた。「また一人、濡手に粟で三千ドルと思いこんだばかが現われたよ」

過去十年間FBIは政治色を強めていたので、FBI内部の人間の長官任命は議会としても承認しやすかった。法の執行はいわばタイスンの血筋だった。彼の曽祖父はサンフランシスコともう一つのワシントン州のシアトルの間で、ショットガンを持って駅馬車に乗ってい

た、西部開拓時代の郵便・銀行・駅馬車会社ウェルズ・ファーゴー社の社員だった。祖父は珍しいことにボストン市長と警察署長を兼ねた人物だったし、父親は引退前はマサチューセッツの高名な弁護士だった。したがって曽孫が一門の伝統を継いでFBIの長官になったことは、だれにとっても意外ではなかった。彼にまつわる逸話は数知れず、そのうちのいくつかがよくできた作り話であろうかと、マークは思ったものだった。

タイスンが最終学年のハーヴァード＝イェール戦で決勝のタッチダウンをおこなったことは、一九五六年のメルボルン・オリンピックでアメリカ・ボクシング・チームの唯一の白人選手であった事実と同じように、記録に残っていることだから疑問の余地がなかった。しかし彼が故ニクソン大統領に面と向って、あなたの下でFBI長官をつとめるぐらいなら悪魔に仕えるほうがましだといったという話がほんとかどうかを知っている者は一人もいなかったし、いずれにせよケイン陣営はこの噂を打消そうという努力をまったくしなかった。

彼の妻は五年前に多発性硬化症で死んだ。彼は二十年間にわたって献身的な看護を続けてきた。

彼は何人にも弱味を握られていなかったし、高潔廉直な人物であるという評判のゆえに、国民は大部分の政府官僚よりも彼を高く評価していた。フーヴァーの死に続く不振の一時期のあと、ホールト・タイスンは一九三〇年代から四〇年代にかけてのFBIの全盛期の威信を回復した。マークが一生のうちの五年間をFBIで働く気になったのも、タイスンの存在によるところが大きかった。

CamScannerでスキャン

マークは上着の真ん中のボタンをいじりはじめた。それはFBI捜査官全員に共通する癖だった。クォンティコにおける十五週間の養成期間中に、ショルダー・ホルスターではなく、ヒップ・ホルスターの拳銃にすぐに手が届くように、常に上着のボタンをはずしておかねばならないことが、徹底的に叩きこまれる。マークはFBIを扱ったテレビのシリーズものがかならずその点を間違えていることに、腹が立ってならなかった。FBI捜査官が危険を感じたときには、上着の前をあけておくために真ん中のボタンに指をかけるものと相場がきまっている。マークは不安をおぼえた。それは未知のものに対する不安、H・A・L・タイスンに対する不安、手をのばせば届くスミス・アンド・ウェッソンでも抑えることのできない不安だった。

ダーク・ブルーのブレザーを着て、油断のない目つきをした名なしの若い男が戻ってきた。

「長官がお会いになるそうだ」

マークは立ちあがった。妙に頼りない気分だったので、下っ腹に力を入れて、掌の汗をズボンでこすってから、無名の男に従って長官の内なる聖域に入った。長官が顔をあげて、身ぶりで彼に椅子をすすめ、無名の男が部屋から出てドアをしめるのを待った。椅子に坐っていても、長官は小山のような肩の上に大きな頭をどっしりと据えた大男だった。濃い眉毛は、手を加えない、針金のようにこわい褐色の髪と釣合っていた。相手がH・A・L・タイスンでなければ、てっきりかつらかと思うほど縮れた髪だ。大きな両手が、まるで逃げだそうとする机をおさえるかのように、指を拡げてどっかり居すわっている。繊細なクイーン・アン

様式の机は、長官の手でつかまれると、ひどく頼りなさそうに見えた。頬は赤かったが、アルコールやけした赤さではなく、日光と風雨にさらされた赤さだった。長官の椅子から少しさがったところに、筋肉質で、ひげのない、警察官中の警察官といった感じのもの静かな男が一人坐っていた。

長官が口を開いた。「アンドリューズ、こちらは長官補佐のマシュー・ロジャーズだ。カセフィキスが死んだあとの出来事はすでに話しておいた。きみと一緒に捜査にあと数人つけることにする」長官の灰色の目は突き刺すようだった——それはマークを刺し貫いた。「いいかアンドリューズ、わたしはきのう最も優秀な部下を二人失った。どんなことがあってもいいか、どんなことがあってもだぞ——かならず犯人を見つけだしてやる。たとえ大統領が犯人だとしてもだ。わかったか」

「わかりました」と、マークは蚊の鳴くような声で答えた。

「われわれの新聞発表を見ればわかるだろうが、世間はゆうべの事件もありふれた交通事故の一つにすぎないと思いこんでいる。ウッドロー・ウィルソン・メディカル・センターの殺人と、わたしの二人の部下の死を結びつけて考えた新聞記者は一人もいない。二十六分に一件の割で殺人事件が起きているアメリカでは、無理もない話だがね」

「首都警察長官」と書かれた首都警察のファイルが、彼のかたわらにあった。警察でさえ統制下におかれているのだ。

「いいかね、アンドリューズ君、われわれは……」

君づけで呼ばれて、マークはいささか得意な気分だった。

「……彼らの誤解をといてやるつもりはない。わたしはゆうべきみから受けた報告を注意深く検討してみた。わたしなりに状況を要約してみよう。なにか途中でいいたいことがあったら遠慮なくいってくれ」

通常の場合ならマークは笑いだしていたことだろう。

長官はファイルをじっと眺めていた。

「そのギリシャ移民はFBI長官に会いたがった。わたしがそのことを知っていたら、彼の頼みを聞きいれるべきだったかもしれない」彼は書類から顔をあげた。「いずれにせよ、事実はこうだ。カセフィキスはウッドロー・ウィルソンできみに口頭で証言をおこなった。その証言の要旨は、カセフィキスは三月十日に合衆国大統領を暗殺する陰謀が企まれていると信じていた、彼はジョージタウンのあるホテルで秘密昼食会の給仕をしているときにこの情報を耳にした、その昼食会には上院議員が一人出席していたように思う、というものだ。ここまでは間違っていないな、アンドリューズ？」

「はい」

長官はふたたびファイルに目を向けた。

「警察は殺されたカセフィキスの指紋をとったが、FBIのファイルにも首都警察のファイルにも彼の名前はない。したがって目下のところわれわれは、昨夜の四つの殺人のあとでは、ギリシャ移民が話したことは真実であるという仮定にもとづいて行動せざるをえない。彼は

かならずしも話を正確に聞いていないかもしれないが、とにかく一晩に四人の人間が殺されなければならないほど重要な情報をつかんでいたことは確かだ。また、この悪魔的な犯行の陰にいる人間が何者であるにせよ、彼らはもう自分たちの身は安全だ、計画を知っている可能性のある人間は残らず殺してしまった、と考えていると仮定していいだろう。つまりきみは運がよかったんだよ、アンドリューズ」

「まったくです」

「彼らはブルーのフォード・セダンに乗っているのはきみだと思ったんじゃないか、おそらくその考えが一度はきみの心にうかんだろうな？」

マークはうなずいた。一度どころか、過去十時間ほとんどそのことばかり考えていた。ノーマ・ステームズもそう思っているのでなければよいが。

「陰謀を企てた連中にはもう安全だと思わせておきたい。その理由で、少なくともさしあたりは今週の大統領のスケジュールを予定どおりに進めてもらうつもりだ」

マークは思いきって質問した。「しかし、それでは大統領を危険にさらすことになりませんか？」

「アンドリューズ、何者かが、どこかで、そいつは合衆国上院議員かもしれないんだが、大統領暗殺を企んでいるのだ。これまでのところ、そいつはわたしの優秀な部下を二人と、顔を見られたかもしれないギリシャ人と、カセフィキスを殺した犯人の顔を見たかもしれないという以外に、この一件とはなんの関係もない耳の不自由な郵便配達を殺すだけの覚悟をし

ていた。いまわれわれが重砲隊を率いて乗りこめば、彼らはびっくりして逃げてしまう。こっちはまったく手がかりをつかんでいないから、彼らの正体を見破ることはまず不可能だろう。かりに正体がわかったとしても証拠がない。彼らを一網打尽にひっとらえるには、最後の土壇場まで安全だと思わせておくしかない。それなら彼らをつかまえられるかもしれない。すでに危険を感じて逃げてしまったということも考えられるが、わたしはそうは思わない。秘密を守るためにこれほど過激な手段に訴えたからには、どうしても七日以内に大統領を殺さねばならない理由があるのだろう。われわれはその理由を知る必要があるのだ」

「大統領には知らせますか?」

「いやいや、まだだ。この二年間彼女は銃砲所持規制法案では山ほど問題を抱えている、そのうえいちいち振りかえって、どの上院議員がマーク・アントニーでどの上院議員がブルータスだろうかと神経を使わなきゃならないとしたら、大統領もたいへんだろう」

「じゃ、これから六日間われわれはなにをするんですか?」

「きみとわたしでキャシアスを捜しだすのだ。しかもそいつはかならずしも痩せてひもじそうな顔をしているとはかぎらない」

「もしも見つからなかったらどうなりますか?」と、マークがたずねた。

「そのときは、神よアメリカを救いたまえ」

「見つかった場合は?」

「きみが彼を殺さねばならないかもしれん」

マークは一瞬考えこんだ。まだ生れてこのかた人を殺したことは一度もない。それどころか、人間以外の生きものさえ承知のうえで殺したことはなかった。虫けらを踏みつぶすのでさえぞっとしないのだ。しかも生れてはじめて殺す相手が合衆国上院議員かもしれないとなると、これはもう控えめにいっても身震いが出るほどだった。

「そんな心配そうな顔をするな、アンドリューズ。たぶんそんなことにはならんだろう。さて、これからわたしがやろうとすることをきみに話そう。まずシークレット・サーヴィスのスチュアート・ナイトに、わたしの部下二人が、今月中に合衆国大統領が暗殺されると言い張る男を調べていたことを知らせる。ただしこの暗殺計画に一人の上院議員が関係している可能性を彼に話すつもりはない。それからわたしの部下二人がこの仕事で殉職したことも伏せておく、彼には関係のないことだからだ。実際のところは上院議員はからんでいないかもしれない。大勢の人間がいったいどいつが犯罪者なのだと、自分たちの選良を疑いの目で見はじめるのは、望ましいことじゃないからな」

長官補佐が咳ばらいをして、はじめて口を開いた。「いずれにせよ、われわれのうちの何人かはそう考えますよ」

長官はそれには取りあわずに続けた。「アンドリューズ、きみは午前中にカセフィキス情報と彼が殺された状況に関して報告書を書き、それをグラント・ナーナに提出しておいてくれ。その結果起きたステームズとカルヴァートの殺人は報告書に入れるな。この二つの事件を結びつけて考える者がいては困るのだ。大統領の生命の危険についてはは触れてもいいが、

上院議員がからんでいる可能性は伏せておけ。そのほうがよくはないかな、マット？」
「そう思います」と、ロジャーズが答えた。「そのことを知る必要のない人間に向ってわれわれの疑惑を口にしたら、厳重な警備体制がしかれて、暗殺者どもが地下に潜ってしまうおそれがあります。そうなったらわれわれはまた最初からやりなおさなきゃなりません——運よく二度目のチャンスがあったとしての話ですが」
「そのとおりだ」と、長官がいった。「われわれのやり方はこうだ。アンドリューズ、上院議員は百人いる。そのうちの一人が陰謀家どもへの唯一の手がかりだ。その男を突きとめることがきみの仕事になる。長官補佐は若手捜査官二人に、数少ないほかの手がかりを洗わせる。彼らにはくわしいことを話す必要はない。マット、まず手はじめにゴールデン・ダック・レストランから洗わせてくれ」
「それからジョージタウンのホテルを一軒残らず当って、二月二十四日にどこで秘密の昼食会があったかを調べてみます」と、ロジャーズがいった。「それと病院を調べてみましょう。駐車場か廊下で怪しい人間を見かけた者がいるかもしれません。殺し屋どもはカルヴァートときみがカセフィキスの話を聞いている間に、フォードを見たにちがいないよ、アンドリューズ。さしあたりわれわれにできることはそれぐらいだと思います」
「同感だ」と、長官がいった。「よろしい、ありがとう、マット。きみはもういいよ。なにかわかったらすぐに知らせてくれ」
「承知しました」長官補佐はマークにうなずいて長官室から出て行った。

マークは長官が事件の細部を明確に把握していることに感心しながら、無言で坐っていた。きっと長官はファイリング・キャビネットのような頭脳の持主なのだろう。

長官がインターコムのボタンを押した。

「コーヒーを二つ頼む、ミセス・マグレガー」

「承知しました」

「さて、アンドリューズ、きみは毎朝七時に本部へきて、わたしのところに出頭する。緊急の場合はジュリアスのコード・ネームを使ってわたしに電話しろ。わたしもきみに電話するときは同じ名前を使う。『ジュリアス』という言葉を聞いたら、なにをしていてもそれを中断する。わかったな？」

「はい」

「さて、つぎがいちばん肝心な点だ。万一、いかなる場合でもわたしが死亡または行方不明になったときは、きみは司法長官にだけ報告する。あとのことはロジャーズがやってくれるだろう。もしきみが死んだ場合は、あとの判断はわたしにまかせておけばよい」長官はここではじめて笑顔を見せた――が、マークとしては、その言葉を冗談として受けとる心境ではなかった。「ファイルを見ると、きみは二週間の休暇をとる資格がある。きょうの正午からその休暇をとりたまえ。少なくともこれから一週間は、きみに表向きは存在してもらいたくないのだ。すでにグラント・ナーナにはきみをわたしの補佐にまわすよう指示しておいた。きみはこれから六日間昼夜をわかたずわたしに耐えなければならない、これまでその苦労を

CamScannerでスキャン

味わったのは死んだ家内だけだ」
「そして長官もわたしを耐え忍ばなければなりませんよ」と、とっさに不用意な答えがマークの口をついて出た。
いってしまってから、彼は雷が落ちるのを待った。ところが長官はふたたび微笑をうかべただけだった。
ミセス・マグレガーがコーヒーを運んできて、二人の前におくと、また出て行った。長官はコーヒーを一口で飲みほして、檻のなかの獣のように部屋のなかを行きつ戻りつしはじめた。マークは身動きもせずに、目だけで長官の動きを追った。タイスンの大きな体とぶ厚い肩が上下に動き、もじゃもじゃの髪におおわれた巨大な頭が左右に揺れた。そうやって考えごとをしているのだった。
「アンドリューズ、きみの最初の仕事は二月二十四日にワシントンにいた上院議員を洗いだすことだ。週末が近いころだから、あのでくのぼうどもの大部分は国じゅうに散って、演説をぶったり甘やかしほうだいの子供たちと一緒に休暇をすごしたりしていたことだろう」
長官がだれにも好かれるのは、人の陰口をたたくからではなく、面と向ったときのほうがあからさまな悪口をいうからだった。マークは思わずにやりと笑って、リラックスしはじめた。
「そのリストができあがったら、彼らに共通するものがなんであるかを考えることにする。共和党員と民主党員を区別して、党派ごとに公的、私的な利害関係に従って分類する。その

あとわれわれは、過去現在を問わず、友好的と非友好的を問わず、ケイン大統領となんらかの関係のある上院議員を見つけださねばならない。きみの報告書は以上の点をすべてカバーして、しかもあすの朝われわれが会うときまでに完成していなければならない。わかったかね？」

「はい」

「それからほかにも頭に入れておいてもらいたいことがあるのだ、アンドリューズ。きみも知っていると思うが、過去十年間、ＦＢＩは政治的にきわめて微妙な立場におかれてきた。議会の番犬どもはわれわれが合法的な権限を越えて行動するのを待っている。たとえどんな形にせよ、われわれが確たる証拠もなしに議会の一メンバーを疑ったりしようものなら、彼らはえたりとばかりＦＢＩを八つ裂きにするだろう。しかもわたしにいわせればそうするのが当然だ。民主国家における治安機関は、絶対に政治に介入し、それを妨害するようなことがあってはならないからだ。つまりシーザーの妻よりも純潔でなければいかんのだよ。わかったかね？」

「はい」

「われわれにはきょうからかぞえて六日、あすからなら五日の余裕しかない。しかもわたしはその男と彼の一味を現行犯で逮捕したいのだ。だからきみもわたしも法定の超過勤務時間などにこだわってはいられない」

「同感です」

長官は机に戻ってミセス・マグレガーを呼んだ。
「ミセス・マグレガー、こちらはアンドリューズ捜査官、これから六日間わたしと緊密に手を結んで、きわめて微妙なある捜査に従事することになった。彼がわたしに会いにきたら、いつでも無条件に部屋に通してくれ。わたしがミスター・ロジャーズ以外のだれかと一緒だったら、すぐにアンドリューズがきたことを知らせてくれたまえ——お役所風の形式は抜きにして、彼を待たせないように頼む」
「承知しました」
「それから、このことは絶対に口外しないでもらいたい」
「もちろんわかっております」
長官はマークのほうに向きなおった。「では、きみはワシントン支局へ帰って仕事を始めてくれ。明朝七時にこの部屋で会おう」
マークは立ちあがった。まだコーヒーを飲み終っていなかった。たぶん六日後には遠慮なくそういえる気分になっているだろう。彼は長官と握手をかわしてドアのほうへ行きかけた。ちょうどドアの前に達したとき、長官がつけくわえた。「アンドリューズ、くれぐれも用心してくれよ。同時に左右の肩ごしにうしろに目を配るようなつもりでな」
マークは戦慄をおぼえながら部屋を出て、廊下を歩いて行き、エレベーターのなかでは壁にぴったり背中をつけ、一階におりてからは壁ぎわに沿って歩いた。一階で十大指名手配犯人の写真を眺めているツーリストの一団と出会った。来週は上院議員がその一人に加わるの

だろうか？

通りへ出て、車をよけながらペンシルヴェニア・アヴェニューの向い側にあるワシントン支局に辿りついた。けさは支局もわが家のような感じがしないだろう。支局から二人の人間が欠けてしまったが、教練操典ではその穴を埋められそうにもなかった。FBIビルと旧郵政省ビルの屋上には半旗が掲げられていた。FBIの捜査官が二人も死んだのだ。

マークはグラント・ナーナの部屋へ直行した。ナーナは一夜のうちに十歳も老けこんでいた。彼にしてみれば、自分の下で働いていた人間と、上で働いていた人間と、一度に二人も友人を失ったのだから無理もなかった。

「まあ坐れよ、マーク」

「どうも」

「けさ長官から話があったよ。わたしはなにも質問しなかった。きみはきょうの正午から二週間の休暇をとるが、その前にゆうべ病院で起きた事件の報告書をわたしに提出することになっているそうだ。わたしはその報告書を上のほうへ回さなければならないし、ワシントン支局に関するかぎりこの事件はそれでおしまいだ。あとは殺人課が肩がわりしてくれる。連中はニックとバリーが交通事故で死んだとわたしに信じさせようとしている」

「そうですか」

「わたしはそんな嘘っぱちを信じやせんよ」と、ナーナがいった。「きみはなぜかこの事件の[illegible]いる。[illegible]あの二人を殺した犯人を突きとめられるだろう。犯人を捜し当て

たら、そいつらのきんたまを粉々にすりつぶして、それからわたしに電話してくれ。そしたらわたしはきみの手伝いをしに飛んで行く。かりにわたしがこの手でそいつらをつかまえようものなら——」

マークはグラント・ナーナの顔をちらと見てから、如才なく目をそむけて、上司の表情と声が平静に戻るのを待った。

「きみは支局から一歩外へ出たら、もうわたしと接触することは許されない。しかしわたしの助けが必要なときはいつでも電話してくれ。ただし長官には知らせるな、もし長官に知れたら二人とも殺されるだろう。それじゃ、仕事にかかってくれ、マーク」

マークはすばやく外へ出て自分の部屋へ行った。椅子に坐って長官の指示どおり当りさわりのない簡単な報告書を書きあげた。それを持ってナーナのところへ戻ると、ナーナはざっと目を通してから既決の書類受けに投げこんだ。

「うまくごまかしたな、マーク」

マークはなにもいわなかった。休暇届けに署名して、身の安全を感じる唯一の場所であるワシントン支局を出た。これから六日間は自分しか頼るものがない。野心家は数年先まで自分の将来を見通すことを望むが、マークは一週間先まで見通せるなら手を打ってもよい心境だった。

長官はボタンを押した。ダーク・ブルーのブレザーにライト・グレイのズボンをはいた名

CamScannerでスキャン

なしの男が部屋に入ってきた。

「なんでしょうか?」

「アンドリューズに二十四時間の監視をつけてくれ。六人の三交替で、毎朝わたしに報告を頼む。彼の経歴、教育、女友達、交友関係、習慣、趣味、宗教、所属団体、その他もろもろを明朝六時四十五分までに調べあげてくれ。わかったな?」

「はい、わかりました」

上院の職員は、自分たちの雇い主に関する情報を求めてきたFBI捜査官に疑惑の目を向けるだろうと思いながら、マークは国会図書館で調査を始めた。長い階段をのぼりながら、『大統領の陰謀』の一場面を思いだした。ウッドワードとバーンスタインの両記者がこのビルのなかで何時間もかけて数枚の紙きれを捜し、しかも徒労に終る場面である。彼らが捜していたものは、E・ハワード・ハントがエドワード・M・ケネディに関する資料を借りだしたという証拠だった。殺し屋を追うFBI捜査官にとっても、調査報道記者たちの場合と同じように、成功と失敗のわかれ目になるのは、魅力的な任務ではなく、こうした退屈な調査なのだ。

マークは「閲覧者専用」と書かれたドアをあけて、大閲覧室に入りこんだ。そこは金、ベージュ、錆色、青銅色といった控えめな色調で統一された円形、円天井の巨大な部屋だった。閲覧席から優美なアーチを通して見えている二階の部分に、無数の本が並んでいた。マーク

は案内係のデスクに近づいて、図書館にふさわしい低い声で、《国会議事録》の新しい号はどこにあるかと質問した。

「二四四号室、法律書閲覧室です」

「そこへはどう行けばいいんですか？」

「カード目録のところを通りすぎて建物の反対側へ行き、エレベーターで二階へあがってください」

　マークはようやく法律書閲覧室に辿りついた。白一色の長方形の部屋で、左側に三列の書棚が並んでいた。そこでも係員にたずねたあとで、右側の壁に沿った濃褐色の帯出禁止の書棚の《国会議事録》を捜し当てた。彼は二月二十四日分の未製本の議事録を、人気のない長いテーブルまで運んで行って、単調な選別作業を開始した。

　上院審議のダイジェストに三十分かけて目を通したところで、自分の幸運に気がついた。多くの上院議員が週末のためにワシントンを留守にしていたらしく、二月二十四日の登院者は百名中六十名どまりだった。しかも当日投票のおこなわれた法案は比較的重要なものばかりだったので、院内または市内に隠れていた議員は残らず駆りだされたらしかった。それぞれの党の院内幹事が「病気欠席」または「やむをえぬ事情により欠席」と届けでた者を除き、それに「公務のため不在」だった者を加えると、二月二十四日にワシントンにいたことがはっきりしている上院議員は六十二名だけしか残らなかった。マークは残る三十八名の議員について一人ずつダブル・チェックをおこなった。手間のかかる退屈な仕事だった。その日は

全員がなんらかの理由でワシントンにいなかったことが確かめられた。
彼は時計を見た。十二時十五分。この分では昼食をとっている時間はなさそうだった。

三月四日　金曜日午後

午後十二時三十分

三人の男が到着した。三人それぞれにほかの二人には好意を持っていなかった。彼らを一室に呼び寄せたのは、金銭的な報酬という共通の絆(きずな)だけだった。最初の男はトニーという名で呼ばれていた。彼はどれが本名だかだれにもわからないほどたくさんの名前を持っている。たぶん母親だけは本名を知っているだろうが、その母親も息子がシチリアを出て合衆国にいる父親、つまり彼女の夫のもとへ行って以来、二十年間も息子の顔を見ていない。夫がシチリアを出たのはさらにその二十年前だった。因果はめぐる……というわけだ。

ＦＢＩ犯罪者ファイルのトニーの項には、身長五フィート八インチ、体重百四十六ポンド、中肉、髪は黒、まっすぐな鼻、茶色の目、目立った特徴なし、銀行強盗で逮捕および起訴一回、初犯、禁錮(きんこ)二年と記録されている。この記録ではわからないが、トニーは運転の名人だった。彼はきのうそのことを証明していたし、あのばかなドイツ人がうろたえてヘマをしでかさなければ、いまこの部屋には三人ではなく四人の人間がいるはずだった。彼はボスにこう注意していた。「ドイツ人を雇うんなら、車を作らせるのはいいが、まかり間違っても運転させちゃいけないよ」ボスがその言葉に耳をかさなかった結果、ドイツ人はポトマックの

川底から引きあげられるはめになった。このつぎは彼らもトニーのいとこのマリオを使う気になるだろう。そうすれば少なくともチームにもう一人人間らしい人間がふえることになる。警官あがりと、一言も口をきかない小男の日本人なんて、人間の数に入らない。

トニーはサン・トー・フクのほうにちらと視線を向けた。直接質問されないかぎり決して口を開かないこの男は、実際は一九七九年に日本へ脱出したヴェトナム人だった。もしも彼がロサンゼルス・オリンピックに出場していたら、その名前を知らない人間は一人もいなかっただろう。彼がライフル射撃で金メダルを取るのをはばめる者はいなかったはずだからである。しかしサンは自分で選んだ生き方を考えて、できるだけ目立たない存在でいるほうが賢明だと判断し、日本のオリンピック予選出場を辞退した。彼のコーチはそのわけを聞きだそうとして頑張ったが、サンはとうとう真意を明かさなかった。トニーから見れば、サンはただのいまいましいジャップでしかなかった。もっともその彼も八百ヤードの距離から三インチ四方の的に十発命中させられる射撃の名手をほかに知らないことを、残念ながら認めざるをえなかったが。その四角い標的とは、フロレンティナ・ケインの額の広さだった。

日本人は身じろぎもせずに彼を見つめていた。サンの外見は仕事のうえでたいそう役に立った。身長五フィート二インチ、体重百十ポンドの華奢な体つきが、超一流の射撃の名手のそれだとはだれも思うまい。ほとんどの人間がいまだに射撃術は武骨なカウボーイか顎の張った白人の専売特許だと思いこんでいる。この男が冷酷非情な殺し屋だと教えられたら、人は彼が手を使って殺すものと思うだろう。絞首刑具、ヌンチャク、あるいは鶏姦さえ想像す

るかもしれない。三人のなかでサンにだけは個人的な怨恨があった。彼は子供のころ両親がヴェトナムでアメリカ軍に殺されるのを見ていた。両親はアメリカ軍に好意的で、銃弾に引き裂かれるまで彼らを支持していた。サンは命拾いをした。銃の標的にはまだ小さすぎたからである。その瞬間から彼は無言の苦痛のなかで両親の復讐を誓った。彼は日本へ脱出し、サイゴン陥落から二年間、中華料理店で働いたり、アメリカのヴェトナム難民救済プログラムに関係したりしながら、復讐のチャンスを待った。やがてヴェトナムの情報部関係の古い知合いに協力を申し入れたが、アジアにおけるアメリカの存在の影が薄くなり、共産主義者たちが殺し屋よりも法律家を必要としている状態では、残念ながら回せる仕事はないと断わられた。そこでサンは日本でフリーランスの殺し屋稼業を始めた。一九八一年には日本国籍をとり、パスポートを手に入れて新しい仕事に乗りだした。

トニーとちがって、サンは一緒に仕事をしている仲間に腹を立てたりしなかった。要するに彼らの存在を無視していたのである。彼はプロの仕事のために喜んで雇われた。報酬はたっぷりもらえるし、少なくとも両親の非業の死の恨みを一部ははらせる仕事だった。ほかの連中は彼の仕事を補助するという限定された役割を与えられていた。彼らがばかげたミスを最小限におさえてそれぞれの役割を演じたとすれば、サンも自分の役目を完璧に果して、数週間以内に東洋へ舞い戻っているだろう。バンコク、マニラ、あるいはシンガポールにしようか。サンはまだ行先を決めていなかった。この仕事が終ったら、長い休業が必要だし、またそうするだけの金も手に入る。

CamScannerでスキャン

三人目の男、ラルフ・マトスンが、おそらく三人のなかで最も危険な人間だった。六フィート二インチの長身で、がっしりと肩幅が広く、大きな鼻と頑丈な顎を持っている。彼が危険な人間である理由はその頭のよさにあった。FBI捜査官として五年間働いてから、フーヴァーの死後、楽な金儲けの方法を発見してFBIをやめた。長官への忠誠などというごたくは歯牙にもかけなかった。それまで犯罪学についてFBIが教えてくれた知識のすべてを、外で利用できるほどに身につけていた。まずFBIの記録を公にされることを望まない人間に対するささやかな脅迫から始めたが、いまではもっと大きな仕事を手がけるようになっていた。彼は自分以外のだれも信用しなかった——これもFBIが教えてくれたことの一つである。プレッシャーがかかると尻に帆かけて逃げだしかねないとんまなイタリア移民や、人の顔を横目で盗み見る癖のある無口な黄色人種の殺し屋といった手合いが信用できないことはいうまでもない。

依然としてだれ一人口をきかなかった。

ドアが勢いよくあいた。三つの顔がさっと振り向いた。危険に慣れていて、不意討ちへの警戒怠りない三つの顔。入ってきた二人の男を見たとたんに、彼らの緊張がとけた。

若いほうの男は煙草をくわえていた。議長にふさわしく、テーブルの上手に坐った。もう一人の男は議長を右にしてマトスンの隣に腰をおろした。彼らはうなずいて目顔で挨拶したが、一言も口に出さなかった。若いほうの、選挙人登録カードではピーター・ニコルスンだが、出生証明書ではピョートル・ニコラエヴィッチという名前になっている男は、どう

見ても有名化粧品会社の人に知られた社長という感じだった。身につけたスーツは彼がチェスター・バリーの常連であることを物語っていた。靴はロンドンのローブ、ネクタイはテッド・ラピドスだった。彼の犯罪記録は真っ白だった。その理由で今テーブルの上手に坐っているのだった。彼は自分を犯罪者とは考えていなかった。ただ現状を維持することを望んでいるだけだった。

彼は小火器の製造で資産を築いた南部の富豪たちの小グループの一人だった。彼らは巨大企業の経営者だった。合衆国憲法修正第二条によって、すべてのアメリカ人は武器を所持する権利を認められており、アメリカ人男性の四人に一人はこの権利を行使していた。標準的なピストルまたはリヴォルヴァーはわずか百ドルで手に入るが、多くの愛国者たちにとっての社会的地位の象徴である高級なショットガンやライフルとなると、一挺一万ドルもするものさえある。議長と彼の仲間は百万単位のハンドガンと万単位のショットガンを売っていた。彼らはロナルド・レーガンを説得して銃器製造業界に手をつけさせないようにしたが、フロレンティナ・ケインが相手ではそうは事が運ばないことを知っていた。銃砲所持規制法案はすでにきわどいところで下院を通過し、なんらかの強硬手段に訴えないかぎり、上院でも同じ結果になることが火を見るよりも明らかだった。そこで、なんとかして現状を維持するために、議長はこうしてテーブルの上手についたのだった。

彼は、どんな会議の議長でもやるように、まず現場の人間に報告を求めることによって正式に会議の幕をあけた。最初の報告者はマトスンだった。

CamScannerでスキャン

大きな鼻がひくひく動き、がっしりした顎が揺れた。

「おれはFBIのチャンネル1に波長を合わせた」FBIに勤務していた間に、マトスンは将来の犯罪計画にそなえて、FBIの特殊なポータブル・ウォーキー・トーキーを盗みだしていた。仕事のためにそれを持ちだしておいて、なくしてしまったと報告した。もちろん戒告を受けたし、FBIにその代金を弁償しなければならなかったが、FBIの交信を盗聴するという特権の代償としては安いものだった。「おれはあのギリシャ人がワシントンのどこかに隠れているのを知っていたし、脚に怪我をしているから、いずれD・Cの五つの病院のどこかへ駆けこむことになると見当をつけた。金がかかりすぎるから開業医のところへは行かないだろうとにらんだわけさ。やがて、ステームズの野郎がチャンネル1で交信を始めやがった」

「下品な言葉づかいはやめたまえ」と、議長がいった。

ステームズはマトスンのFBI在職中に、通算四回彼に懲戒を与えていた。したがってマトスンは彼の死を悼む気などさらさらなかった。彼はふたたび話を続けた。

「ステームズはウッドロー・ウィルソン・メディカル・センターへ向う途中、チャンネル1を使って、あのギリシャ人のところへグレゴリーという神父を行かせてくれと頼んだ。もちろんこれは当てずっぽうだったが、そういえばステームズもギリシャ人だったことを思いだしたんで、グレゴリー神父を捜しだすのはわけなかった。おれは神父が病院へでかけようとしているところをつかまえた。そしてギリシャ人は退院したから見舞ってやる必要はないと

伝えた。そして彼に礼をいった。ステームズが死んだいまとなっては、その線を調べるやつがいるとは思えないし、かりにいたとしてもなにもわかりっこない。つぎにおれはいちばん近くのギリシャ正教会に忍びこんで、僧服と帽子とヴェール、それに十字架を盗みだし、ウッドロー・ウィルソンへ行った。おれが着いたときは、ステームズとカルヴァートはすでに支局へ帰ったあとだった。顔をおぼえられたくないので、あまりくわしくはきかなかった。彼カセフィキスの病室の番号を聞いて、だれにも気づかれずに造作なく部屋に入りこんだ。彼はぐっすり眠っていた。おれはやつの喉をすっぱり掻き切ってやったよ」

上院議員が顔をしかめた。

「隣のベッドに黒んぼが一人いた。万が一ということもある。そいつは話をすっかり聞いていて、おれの人相を警察に知らせるかもしれない。だからそいつもついでに殺っておいた」

上院議員は気分が悪くなった。もともと二人を殺すことには反対だったのだ。一方、議長はいかなる感情も示さなかった。プロとアマチュアの差というものだろう。

「それから車で待っているトニーに連絡した。トニーはワシントン支局へ行って、ステームズとカルヴァートがビルのなかから出てくるのを見た。それから、ボス、おれはあんたと連絡をとり、トニーがあんたの命令を実行したというわけさ」

議長がマトスンに紙包みを渡した。中身は百枚の百ドル紙幣だった。アメリカでは使用人の報酬はすべて年功と業績によって支払われる。犯罪の世界も例外ではなかった。

「つぎはトニーだ」

「二人が旧郵政省ビルを出たあと、おれたちは指示どおり彼らを尾行した。彼らはメモリアル・ブリッジを渡った。ドイツ人は彼らを追い越して、はるか先へ行った。彼らが予想どおりジョージ・ワシントン・パークウェイに入るのを確認すると同時に、おれはウォーキー・トーキーでゲルバッハにそのことを連絡した。彼は一マイルほど先の中央分離帯の木立のなかで、ライトを消して待っていた。おれの連絡を受けると、ライトをつけて、丘の上から分離された道路の反対側におりてきた。そしてFBIの車がウィンディ・ラン・ブリッジを渡った直後に、そいつの前に回りこんだ。おれはアクセルを踏みこんでFBIの車の左側から追い越した。おれが時速七十マイルで横っ腹にぶちあてたとき、あの間抜けなドイツ人が正面からぶつかった。あとはご存じのとおりだよ、ボス。あいつももう少し冷静にやっていたら」と、トニーは蔑みをこめて報告を結んだ。「きょうここにきて自分の口から報告できたのにな」

「車はどうした？」

「マリオの修理工場へ持っていって、エンジン・ブロックとナンバー・プレートを取りかえ、フェンダーのへこみを修理し、塗装をやりなおして、乗り捨てておいたよ。あれじゃ持主は自分の車だってことがわからないだろう」

「乗り捨てた場所は？」

「ニューヨークのブロンクスだ」

「よろしい。四時間に一件の割合で殺人事件が起きている町だから、警察も盗難車捜しに時

間をかけている暇はないだろう」

議長はテーブルの上に紙包みを投げだした。中身は使い古した五十ドル紙幣で三千ドル。

「はめをはずすなよ、トニー、もう一度きみが必要になる」彼はつぎの仕事がなんであるかを説明しなかった。ただ、「つぎ、サン」とだけいって、煙草をもみ消し、新しく一本抜いて火をつけた。全員の視線が無口なヴェトナム人に向けられた。彼は訛りは目立つがりっぱな英語を話した。教育のある東洋人にはよくあることだが、定冠詞を省略する傾向があって、奇妙なスタッカート効果を感じさせる話し方だった。

「わたしはフォード・セダンの二人の男を殺せというあなたの命令を受けとった晩、ずっとトニーの車に乗っていた。われわれは橋を渡り、フリーウェイに入って彼らを尾行し、ドイツ人の車がフォードの正面に回りこんだとき、トニーが横から車をぶつける直前に、三秒以内で左右の後輪を撃ち抜いた。そのあとは車のコントロールがきかなかったはずだ」

「三秒以内という確信があるのかね？」

「練習では平均二・八秒と出たからだ」

粛として声なし。議長がまた紙包みを渡した。五千ドル、一発あたり二千五百ドルというわけだ。

「なにか質問はあるかね、上院議員？」

上院議員は顔を伏せたまま、わずかに首を振った。

議長が言葉をついだ。「新聞報道とその後の調査から見るかぎり、二つの事件を結びつけ

て考えた人間は一人もいないようだが、FBIもそこまで甘くはないだろう。そこでわれわれは、カセフィキスがなにかをつかんでいたものとしての話だが、彼の話を聞いた可能性のある人間を一人残らず殺したことを願わなければならない。あるいはわれわれが神経質すぎるということもありうるだろう。いずれにしても一つだけ確かなことがある、それはわれわれがあの病院とつながりのある人間を残らず殺したということだ。しかしギリシャ人がなにか重大なことを知っていたかどうかとなると、依然として確かなことはわからない」

「ちょっといいかな、ボス？」

議長は声のしたほうを見た。よほどのことがないかぎり議長の発言をさえぎる者はいない。アメリカの重役会としてはたいそう珍しいことだった。議長はマトスンの発言を認めた。

「一つ気にかかることがあるんだ、ボス。ニック・ステームズはなぜウッドロー・ウィルソンへ行こうとしたんだろうか？」

一同は彼のいわんとするところがのみこめずに、じっと彼の顔をみつめた。

「おれの調査と、おれに情報をくれている人間の話から、カルヴァートが病院にいたことはわかっているが、ステームズが病院にいたかどうかは実際にはわかっちゃいない。わかっているのは二人の捜査官が病院へ行ったことと、ステームズがグレゴリー神父を病院へ呼んだことだけだ。ステームズがカルヴァートと一緒に家へ帰る途中だったことははっきりしているが、おれの経験からいうと、ステームズはこういう場合に自分で病院へでかけて行くとは思えない。かわりにだれかほかの人間を――」

「重大な問題だと考えたとしてもかね？」と、議長がさえぎった。

「彼は重要な問題かどうか知らなかったはずだよ、ボス。病院へ行った捜査官が報告しに戻るまではね」

議長は肩をすくめた。「ステームズがカルヴァートと一緒に病院へ行ったことは事実が示している。彼は病院から帰ったのと同じ車に乗って、カルヴァートの運転でワシントン支局を出ているからだ」

「それはわかってるが、どうも気に入らないんだ。あらゆる角度から検討してみたが、三人かそれ以上の人間がワシントン支局を出て、そのうちの少なくとも一人が実際に起きたことを知っていて、現在走りまわっているということも考えられる」

「その可能性はないだろう」と、上院議員が口をはさんだ。「わたしの報告を聞けばきみも納得がいくだろうが」

マトスンのがっしりした顎で、唇が一直線に結ばれた。

「きみはまだ不満なのかね、マトスン？」

「そうとも」

「よろしい、では気のすむまで調べてみたまえ。そしてなにかわかったらわたしに報告してくれ」

議長はどんなささいな疑問もそのままにしてはおかない男だった。彼はうながすように上院議員のほうを見た。

CamScannerでスキャン

上院議員はこの連中を軽蔑していた。彼らは極度に偏狭で、極度に貪欲だった。彼らに理解できるものは金だけだが、ケインがそれを彼らから取りあげようとしていた。彼らの暴力に、上院議員はどれほどおびえ、不快な思いをしたことだろう。このもっともらしい顔をした、口先の巧みなニコルスンの悪党から、多額の秘密選挙資金をもらったりすべきではなかったのだ。もっともその金がなければ、いまこうして上院議員ではいられなかっただろうが。多額の選挙資金、そして当座はほんのささやかな見返りしか要求されなかった。銃砲所持規制のいかなる提議にも断固反対せよという要求だけだった。もともと彼自身銃砲所持規制には心底から反対だった。だが法案阻止のために大統領を暗殺するとなると、これはもう狂気の沙汰としかいいようがない。しかし彼は議長に弱味を握られてしまっているのだ。「協力すればよし、さもなければ秘密を暴露するよ」と、ニコルスンはいんぎんな口調で脅迫した。上院議員は一生の半分を費やしてやっとの思いで上院入りを果し、しかも上院でりっぱな実績を残していた。いま彼らに秘密を暴露されたら、彼は政治生命を断たれるだろう。公然たるスキャンダル。そんな事態にはとうてい耐えられない。「協力するほうが身のためだよ。われわれに必要なのはある種の内部情報と、三月十日にあんたに議事堂にいてもらうことだけだ。ここは分別の働かせどころだよ、ポーランド女のためにあんたの全生活を破壊してしまうことはないじゃないか」上院議員は咳ばらいをして話しはじめた。

「FBIがわれわれの計画を具体的に知っているとはとうてい考えられない。マトスン君も知っているように、もしもFBIがなにかしら手がかりをつかんでいるとすれば、このたび

の脅迫がこれまでに大統領が受けた無数の脅迫とはちがうと考える理由があるとすれば、彼らはただちにシークレット・サーヴィスに通報しているだろう。しかるにわたしの秘書が確かめたところでは、今週の大統領のスケジュールは変更されていない。人と会う約束はすべて予定どおりに守られる。三月十日の午前中には、上院での特別演説のために議事堂へ行く予定に――」

「問題はまさにそこだよ」と、マトスンがせせら笑いをうかべながらさえぎった。「大統領に対する脅迫は、どんなに根拠の乏しいものでも、かならずシークレット・サーヴィスに報告されるきまりになっている。だからFBIがなにも報告しなかったとすれば、かえって――」

「彼らはなにも知らないのかもしれんよ、マトスン」と、議長がいった。「さっきもいったように、その点はきみが調べてみたまえ。では、上院議員からもっと重要な疑問に答えてもらうとしよう。かりにFBIが計画を知っているとしたら、彼らはそのことを大統領に知らせるだろうか？」

上院議員はしばらくためらってから答えた。「いや、わたしはそうは思わない。何月何日が危ないということがはっきりわかっていれば話は別だが。そうでないかぎり予定が変更されることはないだろう。脅迫や暗殺の噂にいちいち神経をとがらせていたら、大統領はホワイト・ハウスから一歩も外へ出られなくなってしまう。昨年のシークレット・サーヴィスの議会報告によれば、大統領の生命に対する脅迫は全部で千五百七十二件もあったが、厳重な

捜査の結果、具体的な暗殺計画は一つもなかったことが明らかにされている」

議長がうなずいていった。「彼らはすべてを知っているか、あるいはなにも知らないかだな」

マトスンがなおもいいはった。「おれはいまも元ＦＢＩ捜査官会のメンバーで、きのうもその会合に出たが、だれ一人なにも知らなかった。だれかが噂を小耳にはさんでいてもおかしくないところなんだが。そのあと、以前ワシントン支局時代の上司だったグラント・ナーナと一杯やったんだが、彼はほとんど興味がなさそうで、おれにいわせればかえって匂ったよ。たしかステームズは彼の友達だったはずだが、もちろんあまりしつこくたずねるわけにはいかなかった。ステームズとおれとは仲がよくなかったからね。どうもおれは気にかかる。ステームズが病院へ行ったのに、ＦＢＩの人間が彼の死についてはみんな口をつぐんでいるなんて、なんだかすっきりしないんだ」

「わかった、わかった」と、議長がいった。「三月十日に彼女を殺さないのなら、むしろいまのうちに計画を中止するほうがいい。だから危険の徴候がないかぎり、何事もなかったものとして事を進める——危険かどうかを判断するのがきみの役目だよ、マトスン。きみが引きとめないかぎり、当日われわれは現場へ行く。さて、計画に話を進めるとしよう。まず当日のケインのスケジュールを知らせておく。ケインは」——その部屋にいる人間は、上院議員を除いて、全員大統領を呼び捨てにしていた——「午前十時にホワイト・ハウスを出発する。三分後にＦＢＩ本部の前を通過し、五分後に議事堂構内の北西の角にある専用玄関の

前を通過する。そして六分後に議事堂東正面で車からおりる。いつもは専用の入口から入るのだが、上院議員は彼女がこの訪問をとことん利用するだろうと保証している。車からおりて議事堂の階段を昇りきるまでは四十五秒かかる。四十五秒あればサンの仕事には充分すぎるほどだろう。わたしはペンシルヴェニア・アヴェニューの角で、ケインがFBI本部の前を通過するのを見張っている。トニーが万一の場合にそなえて車でその場所にいるし、上院議員はもっと時間が必要ならケインを引きとめるために、議事堂の階段にいる。この作戦の最も重要な部分はサンの担当部分だ。そこのところは秒刻みで計画を練っておいたから、注意して聞いてもらいたい。わたしが手を回して、議事堂西正面の修理をやっている建築作業班にサンを入れておいた。組合があるから、東洋人を作業員として入れるのは容易じゃなかったよ。サン、あとはきみから説明してくれ」

サンが顔をあげた。彼はさきほどの報告以来ただの一言も口をきいていなかった。

「議事堂西正面の工事はほぼ六か月間続いている。この工事にいちばん熱心なのはほかならぬケインだ。二度目の大統領就任に間に合わせようというわけでね」彼はにやりと笑った。全員がこの小男を注視し、一言も聞きもらすまいと耳をそばだてた。「わたしが作業班に入ってからちょうど四週間たったところだ。建築現場に搬入される資材をチェックする仕事を担当している、つまりわたしは現場事務所にいるということだ。そこからは建築工事関係者全員の動きが容易に見てとれる。警備員はFBIやシークレット・サーヴィスの人間ではなく、政府建築物警備サーヴィスからきた連中だ。彼らはおおむねFBIやシークレット・サ

ーヴィスの連中よりもはるかに年をとっていて、そのどちらかの退職者が多い。警備員は全部で十六人いて、四人ずつの四交替で勤務している。わたしは彼らがどこで酒を飲み、煙草(たばこ)を吸い、カードをやるか、なにからなにまで知っている。目下(もっか)のところ現場はどこかを見おろす場所にあるわけでもないし、議事堂のいちばん使われない側なので、とくに現場に神経をとがらせている者は一人もいない。ときどき現場からわずかばかりの資材が盗まれる程度で、彼らが目の色を変えるような事件はなにもないのだ」サンは聞き手を完全にとりこにしていた。「現場のど真ん中に、アメリカン・ホイスト社製の世界最大のクレーンがある。ナンバーは11310、議事堂の新しい部分を吊(つ)りあげるために特別に設計された機械だ。すっかりのばすと三百二十二フィートになるが、これはワシントンのビル高度規制のほぼ二倍に達する高さだ。われわれが議事堂の西側にいるとはだれも思わないだろうし、そんなに遠くまで見えるとは想像もしないだろう。クレーンのてっぺんに滑車の手入れのための小さな屋根つきのデッキがあって、これはクレーンが地面と平行に横倒しになっているときだけ使われるが、実際はこのデッキが小さな箱のような形になる。箱の大きさは縦四フィート、横二フィート三インチ、高さが一フィート五インチだ。わたしは過去三晩そこで眠った。そこからはすべてが見えるが、わたしの姿はだれにも見えない。ホワイト・ハウスのヘリコプターからでさえ見えないのだ」

一同は啞然(あぜん)として声もなかった。

「そこへどうやって登るのかね？」と、上院議員が質問した。

「猫のようによじのぼるんだよ、上院議員。体が小さいからその点は楽だ。わたしは夜の十二時を回った直後に登って、五時におりてくる。そこからはワシントンじゅうが見えるが、わたしの姿はだれにも見えないというわけだ」
「そんな小さなデッキから議事堂の階段がよく見えるのかね？」と、議長が質問した。
「たぶん四秒あれば充分だろう」と、サンは答えた。「あの高さからは、いまだかつてだれも見たことのないホワイト・ハウスの眺めが得られる。先週ケインを殺そうと思えば、おそらく二回は殺せただろう。公式訪問のときなら楽なものだ。万に一つも仕損じることはない――」
「木曜日はほかの作業員たちはどうなのだ？　彼らがクレーンを使うかもしれないじゃないか」と、上院議員がさえぎった。
今度は議長が微笑をうかべた。「来週の木曜日はストライキなんだよ。超過勤務手当が不当に安すぎるという抗議のストライキだ。彼らの要求を示すために、ケインが議事堂を訪問している間は工事がおこなわれない。とにかくこれだけははっきりいえる。数人の年とった警備員のほかはだれも工事現場にいないのだから、たった二フィートを除いてあとは丸見えのクレーンのてっぺんまで、わざわざ登って調べようという気をおこすやつはいないだろう。下から見れば人間はおろか鼠一匹隠れる場所もなさそうに見える。サンはあすウィーンへ飛んで、来週水曜日の最終打合せの席で旅の結果を報告することになっている。ところで、サン、黄色いペンキは手に入れたかね？」

「ああ、現場から一缶盗みだしておいた」

議長はテーブルをぐるりと見まわした——だれもなにもいわなかった。「よろしい、われわれの計画はうまくいっているようだ。ありがとう、サン」

「おれはどうも気に入らんな」と、マトスンがぶつぶついった。「どっかおかしい。あまりにも簡単すぎるし、都合よく運びすぎる」

「FBIはきみに必要以上に疑ってかかることを教えたのだよ、マトスン。われわれのほうが彼らより有利だということがいまにわかるだろう。なにしろこっちはこれからやろうとしていることを知っているが、向うはそれを知らないんだからな。なにも心配はいらん、きみはケインの葬式に立会えるよ」

マトスンの大きな顎が上下に揺れ動いた。「彼女の死を望んでいるのはあんたのほうだ、おれじゃないよ」と、彼は不機嫌そうにいった。

「そしてきみはそれで金を稼ぐ。よろしい、われわれは五日後にもう一度集まって最終プランを打合せる。場所は水曜日の朝連絡する。サンはそれよりずっと前にオーストリアから戻っている予定だ」

議長は笑みをうかべながら新しい煙草に火をつけた。上院議員がすっと部屋から出て行った。五分後に、マトスンが部屋を出た。さらに五分たって、トニーが席を立ち、その五分後にサンが出て行った。四人ともいなくなってから五分後に、議長が昼食を注文した。

CamScannerでスキャン

三月四日　金曜日午後

午後四時〇〇分

　マークは空腹のため仕事の能率があがらなくなったので、閲覧室を出て食物を捜しにでかけた。エレベーターが止ると、開いたドアの前にカード目録が見えた。目の前に「ハリスン－健康（ヘルス）」の項目があった。健康という言葉が意識下で連想の引金を引いたらしく、前の日に病院で会った機知溢（あふ）れる美人の好もしいイメージが心に浮んできた。黒のスカートに赤いシャツを着て、タイルにヒールの音を響かせながら颯爽（さっそう）と廊下を歩いてくる姿。マークの顔に大きな笑みがうかんだ。彼女に電話をかけてまた会うことができると考えただけでも、喜びで胸が震えてくるのが不思議だったし、自分が心からそうすることを望んでいるのに気がついて驚きもした。

　彼はスナック・バーを見つけて、ハンバーガーを食べながら、彼女の言葉の一つ一つと、それを口にしたときの彼女の表情を心のなかに思いうかべた。やがて彼はウッドロー・ウィルソンに電話をかけた。

「お気の毒ですが、デクスター先生はきょうは非番なんです」と、看護婦が答えた。「デルガード先生をお呼びしましょうか？」

「いや、結構。残念ながらデルガード先生では用が足りないんだ」マークは手帳を取りだしてエリザベス・デクスターの自宅の番号を回した。うれしいことに彼女は家にいた。
「やあ、エリザベス。マーク・アンドリューズだ。今夜きみに夕食をおごろうと思うんだが、望みはあるかな？」
「その約束だもの。わたしはいまだにまともな食事にありつける希望のなかで生きているのよ」
「少し元気がないみたいね、マーク。たぶん流感にかかったのよ」
「笑いごとじゃないよ」と、マークはほとんどひとり言のようにいった。
「いや、流感じゃないけど、きみのことを考えると息苦しくなってしまうんだ。顔が青くならないうちに電話を切るほうがいいようだ」
彼女の笑い声が耳に快く響いた。
「八時ごろ迎えにきて」
「オーケー。じゃ、今夜また」
「気をつけてね、マーク」
彼は受話器をかけた。ふと気がつくと、また口が耳まで裂けるほどににやにや笑っていた。
時計を見ると、四時三十分だった。よし。あと三時間図書館ですごしてから、彼女に会いにでかけよう。彼は貸出禁止の本のところへ戻って、六十二名の上院議員に関する伝記風のメモを取り続けた。

いつの間にか大統領のことを考えていた。これはただの大統領とはちがう。初の女性大統領なのだ。しかし最後の大統領暗殺、つまりジョン・F・ケネディの暗殺からなにが学べるだろうか？　ケネディ暗殺にだれか上院議員が関係していただろうか？　それとも狂人の単独犯行だろうか？　これまでの捜査では、あらゆる状況が共同謀議の可能性を示している。リー・ハーヴェイ・オズワルドはとっくに死んでいるが、依然として暗殺事件は充分に解明されていないし、その点ではロバート・ケネディの暗殺も同じである。

ケネディ大統領の死の背後にはCIAがいた、という説をなす者がいる。その根拠は、一九六一年のピッグズ湾事件の失敗のあと、JFKがCIAを吊してさらしものにしてやると脅したからだという。また、カストロが報復のために暗殺を計画したという説を唱える者もいる。オズワルドが暗殺の二週間前にメキシコでキューバ大使と会見したことが知られているし、CIAはそのことを最初から知っていた。あれから三十年たったが、いまだに確かなことはだれにもわからない。

ロー・スクール時代にマークと同室だったロサンゼルス出身の秀才学生、ジェイ・サンドバーグは、陰謀はずっと上のほうまで、FBIの首脳部にまで達している、彼らは真相を知りながら口をつぐんでいるのだ、と主張していた。

もしかするとタイスンとロジャーズも真相を知っているのかもしれない。彼らはマークによけいなことをさせないように、無意味な仕事をいいつけて走りまわらせているのかもしれない。そういえばきのうの事件のことをだれにも話すなといわれている。グラント・ナーナ

にさえもだ。

もしほんとに陰謀があるとすれば、いったい彼はどっちを向けばよいのか？　話を聞いてくれそうな人間が一人だけいる。それはほかならぬ大統領自身だ。しかし大統領に近づく方法はない。あとはかつて大統領暗殺に関する研究論文をものしたことのあるジェイ・サンドバーグに電話するしかない。この事件に関してある見解を持つ人間がいるとすれば、それはサンドバーグをおいてほかにないだろう。マークは公衆電話のほうへ引きかえして、ニューヨークのサンドバーグの自宅の番号を調べてから、十桁の番号を回した。女の声が答えた。

「もしもし」と、とりすました声。その声と一緒に口から吐きだされるコカインの煙が目に浮ぶようだった。

「もしもし、ジェイ・サンドバーグをお願いします」

「あら」またまたコカインの煙。「彼はまだ仕事中なんですけど」

「オフィスの番号を教えてもらえませんか？」

ふたたび煙を吐きだしたあとで、女は彼に番号を教えて電話を切った。

ちぇっ、上流ぶったアッパー・イースト・サイドの女ども、とマークは心のなかで毒づいた。

つぎの電話に出たのは、さっきとはまるでちがう、人間味のあるアイリッシュ・アメリカン風の声だった。

「サリヴァン・アンド・クロムウェルです」

そのニューヨークの権威ある法律事務所の名前は、マークも聞きおぼえがあった。彼の昔の仲間たちはどんどん出世しているようだった。
「ジェイ・サンドバーグをお願いします」
「いまおつなぎします」
「サンドバーグです」
「やあ、ジェイ、マーク・アンドリューズだ。いてくれてほっとしたよ。いまワシントンからかけてるんだ」
「やあ、マーク、久しぶりだな。Gメンの生活はどうだい？　マシン・ガンをバリバリッてとこかい？」
「それもあるさ、たまにはな。ジェイ、じつは政治的暗殺未遂事件についてくわしいことを知りたいんだが、どこへ行ったらいいかな？　とくに一九七九年のマサチューセッツ事件について知りたいんだ。あの事件をおぼえているかい？」
「もちろんおぼえてるさ。三人の容疑者が逮捕された。えーと」サンドバーグはちょっと間をおいて続けた。「そして三人とも無罪釈放になった。一人は一九八〇年に自動車事故で死亡し、もう一人は一九八一年にサンフランシスコで喧嘩の最中にナイフで刺され、のち死亡、残る一人は昨年以来行方不明だ。こいつも間違いなく陰謀だよ」
「黒幕はだれだ？」
「一九七六年に、エドワード・ケネディがサム・ジャンカーナとジョン・ロッセリの死に関

する調査を要求したとき、それを阻止するためにマフィアが彼を消すことを望んだ。ケイン大統領が銃砲所持規制法案を通そうとしている現在、マフィアにとっては彼女が邪魔な存在であることは間違いないね」

「マフィア？　銃砲所持規制法案？　そういう事実を知るにはどうしたらいいかな？」

「ウォレン委員会報告やその後の調査報告を読んだって、なにもわかりゃしないね。いちばんたしかなのは、カール・オーグルズビーの『ヤンキーとカウボーイの戦争』だ——この本に全部書いてあるよ」

マークは書名をメモした。

「ありがとう、ジェイ。その本を読んでわからないことがあったらまた電話するよ。ところでニューヨーク暮しはどうだい？」

「ああ、結構な暮しさ。ぼくは目の玉のとびでるような高い金をとって法律を解釈するおよそ百万人の弁護士の一人というわけでね。近いうち会おうよ、マーク」

「いいとも、このつぎぼくがニューヨークへ行ったらな」

マークは思案に暮れながら閲覧室へ戻った。CIA、マフィア、頭のおかしい人間、その他もろもろの可能性があった。ホールト・タイスンである可能性さえあった。彼は女性の係員にカール・オーグルズビーの本を頼んだ。多くの人に読まれたらしく、ばらばらになりかかった一冊の本が運ばれてきた。シード・アンドリューズ&マクミール社刊、カンザス州ミッション、スカイブ・ロード六七〇〇。おもしろそうな本だったが、いまは目先の仕事であ

る上院議員たちの経歴調べに戻った。それから二時間かけて、疑いのはれた上院議員を消去したり、ケイン大統領を殺す動機を持っていそうな議員を捜したりしたが、仕事はあまりはかどらなかった。

「そろそろお帰りください」と、両腕に本を山のように抱えた若い女性の司書が、自分も家へ帰りたそうな顔でいった。「閉館は七時三十分です」

「あと二分だけ待ってくれませんか？　もうすぐ終るんだけど」

「ええ、どうぞ」彼女は上院議事録一九七一―七三年の重みでよろめきながら答えた。そんなものを扱う人間は彼女のほかに何人もいないだろう。

マークは自分のメモに目を走らせた。六十二名の「容疑者」のなかには、相当有名な名前もいくつかあった。たとえばしばしば上院の「リベラル派院内幹事」と評されるカリフォルニア選出のアラン・クランストン、フロレンティナ・ケインが民主党大会で負かしたマサチューセッツ選出のラルフ・ブルックス、与党院内総務でウェスト・ヴァージニア選出のロバート・C・バード、コネティカット選出のヘンリー・デクスター。エリザベスの父親ではないか、と考えてマークは戦慄した。ジョージア選出の尊敬すべきサム・ナン。議会での駆引に長じているという評判の、洗練された教養人であるサウス・カロライナ選出のロバート・ハリスン、テキサス州選出のマーヴィン・ソーントン、オレゴン選出の敬虔な進歩派共和党員マーク・O・ハットフィールド、南部共和党員の新勢力の一人、アーカンソー選出のヘイドン・ウッドサン、一九八〇年の選挙に無所属で立候補したきわめつきの保守派、ネブラス

CamScannerでスキャン

カ選出のウィリアム・ケイン、一九六七年に墜落機の残骸(ざんがい)からテッド・ケネディを引きだし、おそらくは彼の命を救ったインディアナ選出のバーチ・ベイ等々。容疑者が六十二名もいる、とマークは思った。残された日数はわずか六日。しかも証拠は鉄壁でなければならない。きょうはそれ以上大してやれることがなさそうだった。

官庁はどこもしまりかけていた。長官のほうも調査が進んでいて、六十二の名前を早くほどほどの数まで減らせることを願った。六十二名を六日間でというのは、いくらなんでも無茶だった。

彼は公共駐車場にとめてある車に戻った。休暇中の特典で、駐車料金は一日六ドルだった。係員に金を払って、ペンシルヴェニア・アヴェニューに車を乗りだし、ラッシュ・アワーのピークをあとにして南西ワシントンのNストリートにあるアパートのほうへ九番ストリートを走りだした。サイモンの顔が見えたので、車のキイをひょいと投げてやった。「着替えがすんだらまたすぐに出かけるよ」と、八階の部屋のほうへ行きながら肩ごしに声をかけた。急いでシャワーを浴びてひげを剃(そ)り、長官と会うために着て行ったのよりもくだけたスーツに着替えた。これから先は生活の楽しみな部分が待っている。

エレベーターで下へおりると、彼の車は、サイモンの表現をかりれば、すばやく逃げだせるように、向きを変えて待っていた。ジョージタウンへ車を走らせ、右折して三十番ストリートに入り、エリザベス・デクスターの家の前で止った。こぢんまりした赤れんがのタウン・ハウスで、たいそう瀟洒(しょうしゃ)な感じがした。彼女自身のふところがあったかいか、父親が娘

のために買ってやったのだろう。彼女の父親、マークはそのことを考えずにいられなかった……

戸口に現われた彼女は、マークの空想のなかの美しさにひけをとらなかった。これはうれしいことだった。彼女はきっちりした高い襟のついた赤いロング・ドレスを着ていた。黒い髪と焦茶色の目がいちだんと引き立った。

「家に入るの、それとも配達係みたいにそこに突っ立っているつもり？」

「こうして立ってきみの美しさに見とれているのさ。ぼくは昔から美人で頭のいい女性に惹かれるんだ。これでぼくがどんな人間か多少はわかるんじゃないかな？」

彼女は笑いながら、小ぎれいな家のなかへ彼を案内した。

「どうぞお掛けになって。一杯やりたいって顔してるわ」彼女はマークが注文したビールをグラスに注いだ。やがて真剣な目をして腰をおろした。

「まさかわたしの患者の郵便配達の身に起った恐ろしいことについて話そうと思っているんじゃないでしょうね」

「ああ」と、マークはいった。「その話はしたくないさ。話したくない理由はいくつもある」

彼女の表情が理解を示した。

「彼を殺した悪党をつかまえてもらいたいわ」ふたたび焦茶の目がきらりと輝いて彼の目と出会った。彼女は立ちあがってステレオのレコードを裏返した。「この手の音楽はお好きかしら？」と、冗談めかしてきいた。

CamScannerでスキャン

「ハイドンはあまり好きじゃないんだ」と、マークが答えた。「ぼくはマーラー狂でね。それにベートーヴェン、アズナヴール、きみは？」

彼女はほんのり顔を赤らめた。

「ゆうべあなたがこなかったので、支局へ電話してみたのよ」

マークは驚くと同時にうれしくなった。

「あなたの部の女の人が電話に出たわ。あなたは留守だったし、彼女の話ではとても忙しいということなので、伝言を頼まなかったの」

「そいつはポリーだ。彼女はとても口が堅いんだよ」

「それに美人なんでしょう？」彼女は自分の美しさを知っている女性に特有の、自信に満ちた微笑をうかべた。

「遠目には美人だが、美人にはほど遠い。ポリーの話はやめようよ。それよりもうおなかが空いてるだろう。約束のステーキはまたの機会にしよう。ティオ・ペペのテーブルを九時に予約してあるんだ」

「すてきだわ。車を駐められたんだから、歩いて行かない？」

「そうしよう」

よく晴れた、さわやかな晩だった。マークは新鮮な空気を楽しんだ。悩みは絶えずうしろを振り向きたくなる衝動だった。

「もうほかの女の人を捜しているの？」と、彼女がからかった。

「まさか。女性はもう足りてるさ」彼は冗談めかした口をきいたが、彼女の目はごまかせないことを知っていた。そこでだしぬけに話題を変えた。「きみは自分の仕事が気に入ってる？」

「わたしの仕事？」エリザベスはいままで一度もそんなことを考えたことがないかのように、やや意外そうな顔をした。「つまり、わたしの生活のこと？　仕事がほぼわたしの全生活よ。少なくともいままではそうだったわ」

彼女は暗い表情でマークの顔を見た。「わたしはあの病院が大嫌い。巨大な官僚組織で、建物は古くて汚ないし、小役人タイプの人間がうようよしていて、庶民を助けることなんか全然念頭にない。彼らにとっては病院も生活手段の一つにすぎないのよ。きのうだってわたしはある老人を入院させておくために、病院をやめるといって運営委員会をおどかさなきゃならなかったくらいよ。その老人は病院から追いだされても帰る家がないんですもの」

三十番ストリートを並んで歩きながら、エリザベスは仕事の話を続けた。彼女が熱っぽく話す言葉に、マークは喜んで耳を傾けた。彼女の態度は好感の持てる自信に満ちていた。そのうち彼女が潰瘍を生じた腋窩の診察をする間に、彼女には理解できないスラヴの恋や憧れの歌をうたいだす情熱的なユーゴスラヴィア人の話が出た。その患者はとうとう場違いな情熱に駆られて、彼女の左の耳をべろべろ舐めてしまったのだという。

マークは笑いながら彼女の腕をとってレストランに入りこんだ。「きみは戦闘手当を要求すべきだよ」と、彼はいった。

「べつに文句をいうつもりはないんだけど、ただその患者の歌はいつも調子っぱずれなのよ」

レストランのホステスは階段をあがって、部屋の中央にあるテーブルに彼らを案内した。そこはフロア・ショーがおこなわれる場所の近くだった。しかしマークはそのテーブルを断わって、奥の一角のテーブルを選んだ。エリザベスにどっちの席がいいかとはたずねなかった。壁を背にした席を選んでさっさと腰をおろし、話のできる静かな場所がいいと下手な言い訳をした。もっとも彼女がそんな言い訳を簡単に信じはしないだろうという確信があった。彼女はなにか事情がありそうなことを見抜き、彼の神経過敏に気がついていたが、あえて詮索しなかった。

ラテン系の若いウェイターが、カクテルはどうかとたずねた。エリザベスはマルガリータを、マークはスプリッツァーを注文した。

「スプリッツァーってどんなもの？」と、エリザベスが質問した。

「あまりスペイン的じゃない飲物だ。ホワイト・ワインとソーダを半々に混ぜて、氷をたっぷり入れたやつで、かきまぜるだけでシェイクはしない。いわば貧乏人のジェイムズ・ボンドってところかな」

レストランの快い雰囲気がマークの緊張をある程度やわらげてくれた。二十四時間ぶりにややくつろいだ気分になった。二人は映画、音楽、本、そしてイェール大のことを話題にした。彼女の顔は、あるときは生き生きと輝き、あるときはもの静かな表情を帯びて、ろうそ

くの明りのなかでたいそう美しかった。マークは身も心も彼女のとりこになってしまった。ありあまるほどの知性と自信にもかかわらず、心を揺さぶるようなかよわさと女らしさを感じさせた。

雑炊(パエーリャ)を食べながら、マークはエリザベスに、彼女の父親が上院議員になるまでの経過や、彼の経歴や、コネティカットにおける彼女の少女時代について質問した。こうした話題は彼女に気まずい思いをさせたようだった。彼女の父親が依然として容疑者リストにのっていることを、彼は思いださずにいられなかった。そこで母親に話題を移そうとした。エリザベスは彼の視線を避け、顔色が青ざめた、とさえ彼には思えた。彼女と知りあってからはじめて、疑惑の小波(さざなみ)がエリザベスの好ましいイメージを曇らせ、一瞬彼を不安にした。彼女と知りあったことは久しぶりに訪れた幸運であり、彼女を疑ってかかるのは気が進まなかった。そんなことがありうるだろうか？　まさか彼女が関係しているなんて。いや、もちろんそんなはずはない。彼はその考えを頭のなかから閉めだそうとした。

スペイン風のフロア・ショーが始まり、情熱的に演じられた。マークとエリザベスは騒音のために話すこともならず、黙って音楽を聞き、踊りを眺(なが)めた。マークはそうして彼女と一緒に坐(すわ)っているだけでもしあわせだった。彼女は顔をそむけて踊り子たちを見守っていた。やがてショーが終るころ、二人ともとっくに雑炊(パエーリャ)を平らげていた。食後のデザートとコーヒーを注文した。

「葉巻を吸うかい？」

エリザベスは微笑した。「いいえ、結構よ。わたしたち女性は男性のすぐれた習慣だけでなく、悪習までも猿真似する必要はないのよ」

「その調子じゃ、たぶんきみは女性で最初の軍医総監になるつもりだろう」

「ちがうわ」と、彼女は真面目くさって答えた。「おそらく二番目か三番目よ」

マークは笑いながらいった。「ぼくもそろそろ仕事に戻って手柄を立てるほうがよさそうだな。さもないときみに取り残されてしまいそうだ」

「でもあなたがFBIの長官に出世するのを邪魔するのも女性かもしれなくってよ」と、エリザベスが追討ちをかけた。

「いいや、FBI長官に出世するのを邪魔するのは女性じゃないだろうな」が、マークは理由を説明しなかった。

「コーヒーをどうぞ、セニョリータ、セニョール」

もしもマークが最初のデートで相手と寝ることを望むとしたら、今夜がまさにそのケースだった。しかしそんなことは起りそうもなかった。

彼は勘定を払い、ウェイターに気前よくチップをやって、片隅でコーヒーを飲んでいたフロア・ショーの踊り子に讃辞を呈した。

外は肌寒かった。マークはエリザベスの目につきすぎないように注意しながら、ふたたび神経質にあたりを見まわした。彼女の手をとって通りを横切り、反対側に着いてもその手を

つつあるかに気がついていた。彼は彼女の手をずっと握っていたかった。このところ多くの女と会っているが、ベッドに誘う前もそのあとも、手を握ってやろうという気になった女は一人もいなかった。そのうちまた憂鬱な気分が頭をもたげはじめた。彼は不安のせいでひどくセンチメンタルになっているのかもしれなかった。

うしろから一台の車が近づいてきた。マークは緊張して身構えた。エリザベスは気がついたようすがなかった。車のスピードが落ちた。近づくにつれてますます遅くなった。そして彼らの真横で停車した。マークは真ん中のボタンをはずして体をひねった。自分よりもエリザベスのことが心配だった。とつぜんドアがあいて、男女二組の四人のティーンエイジャーがとびだしてきた。彼らはハンバーガー・スタンドに駆け寄った。マークの額に汗がふきでた。彼はエリザベスの手を振りほどいた。彼女は驚いてマークの顔をみつめた。「なにかわけがあるのね？」

「そうだ。でもそれをきかないでくれ」

彼女はあらためて彼の手を求め、しっかり握って歩きだした。前日の恐ろしい事件が重苦しく心にのしかかって、マークはそれっきり口をきかなかった。彼女の家の玄関まで辿りついたとき、彼は自分と大男のタイスンの二人しか知らない世界にふたたび舞い戻っていた。

「今夜のあなたはとても魅力的だったわ、ときどき上の空でわたしのことなんか眼中になかったようだけど」と、彼女は笑いながらいった。

マークはぶるっと体を震わせた。「ほんとにすまなかった」

CamScannerでスキャン

「ちょっとあがってコーヒーでも飲んでいく？」

「そうしたいのは山々だが、それも雨天順延にしてもらえるかな？　いまのぼくは一緒にいてもおもしろい相手じゃないだろう」

午前七時に長官と会うまでに、まだしなければならない仕事があったし、時間ももう十二時すぎだった。彼はまる一日半まともに眠っていなかった。

「あした電話していいかな？」

「うれしいわ。どんなことがあってもきっと連絡をちょうだいね」

マークはこれから数日間、この言葉をお守りのように肌身はなさず持ち歩くことになるだろう。彼女の口から出た一語一語を、それを発したときの身ぶりを、ありありと思いだすことができた。それらの言葉は単なる気ばらしなのか、本心なのか、それとも彼をからかっているのだろうか？　当節は恋をするのは流行遅れで、結婚する人間はいたって数が少なく、結婚した人間もたいていは離婚してしまう。そんな時代に、彼は狂おしいばかりの恋をすることになるのだろうか？

彼はエリザベスの頰にキスをして、くるりと振り向き、またすばやく通りの左右に目を配った。彼女がその背中に呼びかけた。

「わたしの郵便配達とあなたのギリシャ人を殺した犯人をきっとつかまえてね」

あなたのギリシャ人、あなたのギリシャ人、ギリシャ正教の司祭、グレゴリー神父。そうか、なぜいままでそのことを思いつかなかったんだろう。彼は一瞬エリザベスのことを忘れ

―自分の車のほうへ走りだした。それから振りかえって手を振った。彼女はわたしはなにをいったのかしらといったけげんそうな面持で彼をみつめていた。マークは車にとび乗って、フル・スピードでアパートへ戻った。グレゴリー神父の電話番号を捜す必要があった。ギリシャ正教の司祭、病院のエレベーターから出てきた男はどんなやつだったろうか？　記憶がよみがえってきた。そういえばどこか妙な感じがした。どこがどうだったっけ？　そうだ、あの瞳に妙なところがあった。おれはなんて間抜けなんだ。アパートに帰り着くと、彼はすぐにワシントン支局へ電話した。交換台のポリーが意外そうな声でいった。

「あら。休暇じゃなかったんですか？」

「まあね。グレゴリー神父の番号わかるかな？」

「グレゴリー神父ってだれです？」

「ミスター・ステームズがときどき連絡していたギリシャ正教の司祭だよ。たしか彼の教区の司祭だったと思う」

「そうそう、思いだしたわ」

　マークは待った。

　彼女はステームズの電話帳を調べて、マークに番号を伝えた。マークは番号を書きとって電話を切った。そうだ、きっとそうにちがいない。おれはなんてばかなんだ。そんなことはわかりきっている。十二時をだいぶすぎているが、とにかく電話してみよう。ダイアルを回すと、数回ベルが鳴ってから先方が出た。

「グレゴリー神父ですか？」
「そうです」
「ギリシャ正教の司祭はだれでもひげをはやしているんですか？」
「そうですよ。ところで夜の夜中にこんなばかげた質問をするあなたはいったいどなたです？」
　マークは非礼を詫びた。「わたしはＦＢＩのマーク・アンドリューズ捜査官、ニック・ステームズの下で働いていた者です」
　先方の睡そうな声が急にぱっと目ざめた。「わかりました。なにかわたしでお役に立てることでも？」
「グレゴリー神父、ゆうべミスター・ステームズの部下があなたに電話して、脚を撃たれたギリシャ人に会いにウッドロー・ウィルソンへ行ってくれと頼みましたか？」
「ええ、そのとおりです――おぼえていますよ、ミスター・アンドリューズ。ところがおよそ三十分後に別の人から電話があって、ちょうど病院へでかけようとしていたところでしたが、カセフィキスという患者はもう退院したから病院へは行かなくてもよいというのです」
「カセフィキスがどうしたですって？」マークの声がしだいに上ずってきた。
「退院したというのです」
「電話の主は名を名乗りましたか？」
「いや、くわしいことはなにもいいませんでした。わたしはてっきり支局の人だと思いまし

たよ」
「グレゴリー神父、明朝八時にわたしと会っていただけますか？」
「ええ、ええ、もちろんいいですよ」
「それからこの電話のことは絶対秘密にしていただけますか？」
「そうしろとおっしゃるんなら」
「ありがとう、神父さん」
マークは電話を切って精神集中につとめた。あの男はおれより背が高かった、ということは身長は六フィート以上だ。髪は黒で、いや、あれは僧服のせいでそう見えただけだろうか？　そうじゃない、たしかに髪は黒かった。それに大きな鼻。大きな鼻だったことはおぼえているが、目は、目の色は思いだせない。大きな鼻とがっしりした顎。マークは思いだせるかぎりのことを残らず書きとめた。おれよりも背の高い大男、大きな鼻、がっしりした顎……いつの間にか机に顔を伏せて眠ってしまった。

CamScannerでスキャン

三月五日　土曜日朝

午前六時三十二分

マークは目ざめていた、が頭はまだ眠っていた。さまざまな脈絡のない考えが頭のなかで渦を巻いていた。最初に心に浮んだのはエリザベスの姿だった。彼は微笑をうかべた。つぎはニック・ステームズだった。今度は眉をひそめた。三番目に長官の顔がうかんだ。マークははっとして起きあがり、時計の文字盤に目の焦点を合わせようとした。見えたのは動いている秒針だけだった。六時三十五分。しまった。はじかれたように椅子から立ちあがると、こちこちに凝った首筋と肩が痛んだ。服はきのうから着たままだった。急いで着ているものを脱いで、バスルームに駆けこみ、温度を調節する間もなくシャワーを浴びた。ひどく冷たかったが、おかげでぱっと睡気が吹っとんで、エリザベスのことを忘れた。シャワーからとびだしてタオルを鷲づかみにした。六時四十分。顔に石鹸を塗りたくって、大急ぎで顎の不精ひげを剃った。あわてて三か所ほどかみそり傷をつくってしまい、アフターシェーヴ・ローションがやけにしみた。六時四十三分。新しいワイシャツ、同じカフス・ボタン、新しい靴下、同じ靴、新しいスーツ、同じネクタイ、それらを身につけて、すばやく鏡をのぞいた。二か所のかみそり傷からまだ血が出ているが、かまってはいられない。机の上の書類をブリ

ーフケースに押しこんで、エレベーターのほうへ走った。きょうはじめての幸運、エレベーターは最上階に止っていた。階下におりたのが、六時四十六分。

「おはよう、サイモン」

若い黒人の駐車場係は身動きもしなかった。ガレージの入口の小部屋で眠っていた。

「おはよう、マーク。驚いたな、もう八時かい？」

「いや、七時十三分前だよ」

「いったいどうしたんだい？　夜逃げでもするのか？」サイモンは目をこすりながら質問し、車のキイを渡した。マークは笑顔を見せたが、答えている暇はなかった。サイモンはまた眠ってしまった。

エンジンが一発でかかった。さすがはメルセデスだ、頼りになる。通りに走りだす。六時四十八分。制限スピードを守らなければならない。FBIを困らせるわけにはいかないからだ。六番ストリートで赤信号にぶつかる。六時五十分。Gストリートを左折して、七番ストリートに入る。また赤信号だ。インデペンデンス・アヴェニューを渡る。六時五十五分。ランプをくだって、駐車し、駐車場の警備員にFBIパスを見せて、エレベーターの前に駆けつける。六時五十七分。エレベーターで七階へ。六時五十八分。廊下を進んで右に曲り、七〇七四号室に入りこんで、指示されたとおりミセス・マグレガーの前を通りすぎる。彼女はほとんど顔をあげる気配すらない。長官室のドアをノックする。答えなし。いわれたとおりなかへ入る。長官はいない。六時五十九分。ソファに身を沈める。長官は遅れてくるらしい、

ほっとした微笑。七時まであと三十秒。何時間も待っているような顔で、さりげなく部屋のなかを見まわす。大時計に目がとまる。時計が鳴りはじめる。一、二、三、四、五、六、七つ。

その瞬間にドアがあいて、長官が入ってきた。「おはよう、アンドリューズ」彼はマークには目もくれずに、壁の時計を見た。「少し進む癖がある」沈黙。旧郵政省ビルのタワーの時計が七時を告げた。

長官は椅子に腰をおろした。きょうもまた、大きな両手で机をしっかりとつかんだ。

「まずこっちのニュースから始めるぞ、アンドリューズ。たったいま、ステームズ、カルヴアートと一緒にポトマック川に沈んだリンカーンの運転者の身許がわかった」

長官は「読後処分」と書かれた新しいマニラ封筒の封を切って、中身にちらと目を走らせた。そこにはマークの知らないことで、当然知っていなければならないどんなことが書かれているのだろうか？

「たしかな手がかりはなにもない。ハンス＝ディーター・ゲルバッハ、ドイツ人だ。ボンからの報告では、五年前まではミュンヘンの暗黒街に巣くう下っ端だったが、その後の行方はわからないそうだ。しばらくローデシアにいて、ＣＩＡにさえ関係していたと思われるふしがある。例の『白い稲妻』旅団だ。ＣＩＡはあまり協力的じゃない、木曜日前には連中から多くの情報は望めないだろう。ＣＩＡはいったいどっちの味方なのかと思うことがあるよ。一九八〇年にゲルバッハはニューヨークに現われているが、噂ばかりで、手がかりになるよ

うな記録は一つもない。彼が生きていてくれると助かったんだが」
マークはウッドロー・ウィルソンで喉を切られた二人を思いうかべて、それはどうかなと首をかしげた。
「自動車事故から浮びあがったもう一つの興味深い事実は、ステームズとカルヴァートの車の後輪に左右ともに小さな孔があいていたことだ。川岸を転落したときにあいたものかもしれないが、鑑識の連中は弾孔と考えている。もしそうだとしたら、撃ったやつはワイアット・アープもボーイ・スカウトなみという射撃の名手らしい」
長官はインターコムに話しかけた。「ミセス・マグレガー、ロジャーズ長官補佐を呼んでくれたまえ」
「承知しました」
「彼の部下がカセフィキスの働いていたレストランを突きとめたよ、真偽のほどはともかくとしてね」
長官補佐がドアをノックして入ってきた。長官が椅子をすすめた。ロジャーズはマークに笑顔を見せて腰をおろした。
「さっそく報告を聞こうか、マット」
「それが、ゴールデン・ダックの経営者はあまり協力的じゃないんですよ。わたしが雇用者規則違反を調べているると思ったらしいんです。質問に答えなければ営業停止処分にするとおどかしたところ、やっと二月二十四日にカセフィキスの人相と一致する男を雇ったことを認

めました。彼はウィスコンシン・アヴェニューのジョージタウン・インの一室でおこなわれた小人数の昼食会に、ウェイターとしてカセフィキスを派遣しています。依頼にきたのはロレンゾ・ロッシという男です。ロッシという注文だったそうです。英語の話せないウェイターという注文だったそうです。支払いはキャッシュでした。ロッシという名前をあらゆるコンピューターにかけてみたんですが——なにも出ません。明らかに偽名ですな。ジョージタウン・インでも話は同じです。経営者の話では、その部屋は二月二十四日まる一日ロッシの名義で、食事つきサーヴィス抜きで借りられたもので、料金はキャッシュで前払いされています。ロッシという男は身長およそ五フィート八インチ、色が浅黒く、これといった特徴はなし、髪は黒で、サングラスをかけていたそうです。経営者は『イタリア人のようだった』といっております。その日ホテルの人間は、その部屋でだれが食事をしたか知らないし、気にもしなかったようです。残念ながら大した手がかりにはならんようですな」

「そうだな。街を歩いているイタリア人でその人相に一致するやつを、かたっぱしからしょっぴく手もある」と、長官がいった。「ただし五日ではなく五年の余裕があればの話だ。病院ではなにかわかったかね、マット？」

「あそこはひどく厄介ですよ。なにしろ四六時中人が出入りしてますからね。しかもスタッフは交替勤務ときている。外部の人間はおろか、同僚の顔さえ知らないんですからね。懐中電灯を持って一日じゅうあの病院のなかを歩きまわっても、明りが必要じゃないかぎりだれも呼びとめたりしませんよ」

「もっともだ」と、タイスンはいった。「よろしい、アンドリューズ、きみはこの二十四時間なにをしていた？」

マークは官給のブルー・プラスチックの折り鞄（かばん）を開いた。そして六十二名の上院議員が残っていること、ほかの三十八名は主として二月二十四日にワシントンから遠くはなれていたなどの理由により除外されたことを報告した。彼が名簿を手渡すと、長官はざっと目を通した。

「まだ大きな魚が何匹か、泥（どろ）で濁った池のなかを泳いでいるようだな、アンドリューズ。続けたまえ」

マークはギリシャ正教の司祭にすれちがったことをざっと説明した。すぐにひげのことを思いださなかった失策を、ひどく叱（しか）られることを覚悟した。予想どおり雷が落ちた。彼は首をすくめながら続けた。「けさ八時にグレゴリー神父と会うことになっていますが、そのあとでカセフィキスの未亡人と会ってみようと思います。どちらからも大した話は聞きだせないと思いますが、とにかくこの二つの手がかりを辿（たど）ってみるつもりです。それから国会図書館へ戻って、この六十二名の上院議員がケイン大統領の死を望む理由があるとすれば、それはなにかということを洗います」

「まず手はじめに、彼らをいろんな項目ごとに分類しろ」と、長官はいった。「政党別、所属する委員会別、議会外の利害、大統領に関する個人的知識などだ。このことを忘れるなよ、アンドリューズ、その男が二月二十四日にジョージタウンで昼食をとったことはわかってい

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

る、それだけで容疑者の数はかなりしぼられてくるはずだ」

「しかし、全員が二月二十四日に昼食をとっていると思いますが」

「それはそうだ、しかし全員が人知れず昼食をとったとはかぎらんよ、アンドリューズ。街のレストランで食事をした者や、選挙民、政府役人、ロビイストなどと一緒に食事をした者もたくさんいるだろう。きみの仕事は、目当ての上院議員に疑いをいだかせずに、だれがなにをしたかを探りだすことだ」

「どんなふうにやったらいいでしょうか？」

「簡単だよ。各上院議員の秘書に電話して、たとえば——都市環境問題に関する昼食会に議員に出席してもらえないだろうかとたずねるのだ。そうだ、テーマはそれがいい。日付は、五月五日とでもいっておくんだな。それから」と、カレンダーにちらと目を向けて、「一月十七日と二月二十四日のどちらかの昼食会には出席したかとたずねてみろ、出席を承知しながらすっぽかした議員や、招待されていないのに出席した議員が何人かいたからとでもいいつくろっておけばよい。そしてあとから正式の招待状を送るというのだ。招待状を送らなければ秘書たちはそんな電話があったことを忘れてくれるだろうし、万一、五月五日になって思いだしたとしても、そのときはもうこっちの仕事がとっくに終っているから気にすることはない。ただ一つだけはっきりいえることがある、大統領を殺す計画を立てていることを、秘書に知らせる上院議員はいないということだ」

長官補佐がかすかに眉をひそめた。「それで上院議員がつかまったら、どえらい騒ぎにな

りますよ。FBIのやり口は汚ないということになりかねません」
「いや、マット、もしもわたしが大統領に、彼女のりっぱな同業者の一人が背中をナイフで刺そうとしていることを教えたとしたら、彼女はわれわれのやり口をとくに汚ないとは思うまいよ」
「しかし、確かな証拠はなにもありません」と、マークがいった。
「だったらきみがその証拠を手に入れるのだ、アンドリューズ、さもないとわれわれ全員が新しい職を捜さなければならなくなる。わたしの判断に間違いはないぞ」
わたしの判断に間違いはないぞ、か、とマークは思った。
「われわれには強力な手がかりがひとつだけある」と、長官は続けた。「すなわち上院議員がからんでいる可能性がそれだ。しかし残された日数は五日間しかない。もしもわれわれが木曜日に失敗したら、これからの二十年間に事件の調査を研究する時間はたっぷりあるし、アンドリューズ、きみはその研究を本にまとめて一財産作れるかもしれんぞ。
「あんまり心配するな、アンドリューズ。シークレット・サーヴィス長官にはわたしから連絡しておいた。きのう打合せたとおり、きみの報告にあることしか話してないから、三月十日まではなんの制約もなしに動くことができる。万一それまでキャシアスがだれかわからない場合にそなえて、予備プランを練っているが、その内容まできみに話す必要はないだろう。それから殺人課の連中とも話してみた。彼らはわれわれの助けになるようなことをほとんどなにもつかんでいないようだ。そうそう、殺人課の連中はもうカセフィキスの奥さんに会っ

たそうだ。彼らのほうがきみより少しばかり頭の回転が速いようだな、アンドリューズ」

「連中のほうがアンドリューズより気がかりが少ないんですよ、たぶん」と、長官補佐がいった。

「そうかもしれん。よかろう、役に立つと思うなら未亡人に会ってみろ。殺人課の連中が見落したことがなにかつかめるかもしれん。元気を出せ、きみはなかなかよくやっているよ。だけさの捜査でなにか新しい手がかりがつかめるかもしれん。だいたいこんなところだ。さあ、アンドリューズ、わたしはこれ以上きみの時間を無駄にしたくない」

「わかりました」

マークは腰をあげた。

「すまん、コーヒーを出すのを忘れていたよ、アンドリューズ」

この前だって飲み終るまで待ってくれませんでしたよ、という言葉が喉まで出かかった。彼は長官が自分と長官補佐のコーヒーを注文するのを聞きながら部屋を出た。おれも朝飯でも食いながら考えをまとめよう、と思いながら、FBI本部のカフェテリアを捜した。

長官はコーヒーを飲み終ると、ミセス・マグレガーに長官専属のアシスタントを呼ばせた。例の名なしの男が、間髪を入れずグレイの書類ばさみを抱えて入ってきた。長官がなにを望んでいるかたずねるまでもなかった。男は書類ばさみを長官の前のテーブルに置くと、無言で引きさがった。

「ごくろう」と、長官が閉るドアに向っていった。

彼はグレイのカバーをめくって、二十分ほど書類を拾い読みした。あるところではくすくす笑い、あるところでは唸り声を発し、ときおりマシュー・ロジャーズに話しかけた。そこにはマーク・アンドリューズに関する、おそらくマーク自身も気づいていないようなさまざまの事実が書かれていた。長官は二杯目のコーヒーを飲み終ると、書類を閉じ、クイーン・アン様式の机のひきだしにしまいこんで鍵をかけた。アン女王といえどもその机ほど多くの秘密を胸にしまいこんではいなかっただろう。

マークはワシントン支局では望むべくもない結構な朝食を食べ終った。支局では、おんぼろの老朽ビルと歩調を合わせるように、階下のスナック・バーではろくなものを食わせないので、通りの向い側のランチ・コネクションまで足を運ばなければならなかった。だからといって支局へ戻りたくないというわけではないのだが、いまは地下の駐車場へ車をとりに行かなければならなかった。通りの反対側で彼の出発を見送る男には気がつかなかったが、バックミラーにいつまでも映っているブルーのフォード・セダンは、偶然に同じ方角へ向っているのだろうかと首をかしげた。偶然でないとしたら、だれがだれを見張っているのか、だれがだれを護ろうとしているのか？

八時直前にグレゴリー神父の教会に着いて、司祭館まで一緒に歩いて行った。マークは朝食をすませてきたと答えたが、神父が二人分の卵とベーコンを焼き、トーストにマーマレー

CamScannerでスキャン

ドとコーヒーを用意するのをあえてとめなかった。グレゴリー神父は前の晩電話で話したこと以外に大してつけ加えるべきことを持たず、病院で二人も殺された事件を思いだして深い溜息をついた。

「ええ、《ポスト》でくわしく読みましたよ」ニック・ステームズの話になると、彼の灰色の目に輝きが宿った。グレゴリー神父とニック・ステームズがいくつかの秘密をわかちあっていたことは明らかだった。

「ニックの死と病院の事件の間にはなにか関係でもあるんですか？」と、突然グレゴリー神父が質問した。

マークはふいをつかれた。半縁の眼鏡の奥に抜け目のない頭脳が宿っている。神父に嘘をつくのは、ギリシャ正教であろうとなかろうと、一般大衆からFBIを守るためにつくいつもの嘘よりも気がとがめた。

「なにもありません」と、マークは答えた。「ありふれた恐ろしい自動車事故の一つですよ」

「ありふれた不運な偶然の一つというわけですか？」グレゴリー神父は眼鏡の縁ごしにマークの顔をのぞきながら、冷やかすような口調でいった。「そうなんでしょう？」彼もまた、グラント・ナーナと同じように、内心はまったく信じていない口ぶりだった。「もう一つだけお話ししたいことがあります。わたしに電話をかけてきて、病院へ行く必要はないといった男の言葉を正確にはおぼえていませんが、その男は間違いなく教育のある人間だと感じました。なんというか、その男のやり口からプロらしい感じを受けたのです。それがなにを意

味するかはわかりません、ただ、そんなふうに早手まわしに電話をかけてくるところがプロの手口を感じさせたのです」

グレゴリー神父はその言葉――「プロの手口を感じさせた」――を繰りかえした。マークも、ミセス・カセフィキスの住む家に向う車のなかで、その言葉を何度も嚙みしめた。そこは友人の家、彼女の怪我をした夫をかくまってくれた友人の家だった。

マークはコネティカット・アヴェニューを走ってワシントン・ヒルトンと国立動物園を通りすぎ、メリーランド州に入った。道路ぞいに点々と黄色いレンギョウの花のかたまりが見えはじめた。コネティカット・アヴェニューからユニヴァーシティ・ブールヴァードに入ると、そこが商店、レストラン、ガソリン・スタンド、それに少数のアパート群からなる郊外の衛星都市ホイートンだった。ホイートン・プラザの近くの赤信号で停車したとき、マークは手帳をのぞいて確かめた。エルキン・ストリート一一五〇一番地。めざすはブルー・リッジ・マナーというアパートだった。ブルー・リッジとエルキンの二つの通りに沿った三階建ての色褪せた建物の群れにしては、名前だけがいかにもしゃれていた。一一五〇一番地に近づくと、マークは駐車スペースを捜した。運悪くどこもあいていなかった。彼はちょっとためらったが、やがて消火栓の前に駐める肚を決めた。注意深い駐車料金係か警官には、勤務中の公用車だということがすぐにわかるように、バックミラーの上に無線マイクを引っかけておいた。

アリアーナ・カセフィキスはマークのバッジを見たとたんにわっと泣きだした。ミセス・

カセフィキスは見るからにひよわな印象だった。まだ二十九歳の若さで、みなりは野暮ったく、髪はぼさぼさで、灰色の目には依然として涙が溢れていた。顔の皺は二日間の涙の通り道を示していた。マークとはほぼ同年配だった。彼女には国がなく、いままた夫まで失ってしまった。これから先彼女はどうなるのだろう？　マークが孤独だとしても、この気の毒な女にくらべたらはるかに恵まれていた。彼女の英語は夫のそれよりもかなりましだった。彼女はすでに二度にわたって警官の訪問を受けていた。二度とも答えは同じで、自分はなにも知らないというしかなかった。最初は夫の死を伝えた首都警察の警官で、たいそう同情的だった。それから少し遅れてやってきた殺人課の警部補は、はるかにきびしい態度で、彼女がまるで知らないことについてあれこれ質問した。そして今度はＦＢＩだった。彼女の夫はこれまで一度も騒ぎを起したことがなく、だれが夫を撃ったのか、夫が人に恨まれるような心当りはまったくなかった。あの人はほんとにおとなしい人でしたから。マークは未亡人の言葉を信じた。

彼はさしあたりなにも心配する必要はない、自分が移民局と福祉関係者にかけあって、なにがしかの収入の道を講じてやるからと彼女を慰めた。それを聞くと彼女は少し元気を取りもどし、答え方もいくぶんはかばかしくなったようだった。

「じゃ、よく考えて答えてくださいよ、ミセス・カセフィキス。二月二十三日と二十四日、つまり先週の水曜日と木曜日だが、ご主人がどこで働いたか知っていますか？　それからご主人はその仕事についてなにかいってましたか？」

彼女はなにも知らなかった。アンジェロは仕事のことをわたしに話さなかったし、不法入国者が就労許可なしに一か所で長く働くのは危険なので、仕事の大半は一日かぎりの臨時雇いだったんです。マークはなにも収穫がなかったが、それは彼女の責任ではなかった。

「わたしはこのままアメリカにいられるでしょうか？」

「わたしにできるだけのことはしますよ、奥さん。それだけは約束します。知合いのギリシャ正教の司祭に事情を話して、福祉関係者と会って話をつけるまでなんとかやってゆけるだけの金を都合しましょう」

マークはグレゴリー神父からもアリアーナ・カセフィキスからも具体的な情報が得られなかったことに失望しながら、ドアをあけて帰りかけた。

「神父さまからはもうお金をいただきました」

マークは驚いて立ちどまり、ゆっくり振りかえって彼女と向いあった。特別な関心を顔に出さないようにつとめた。

「どの神父さんからです？」と、さりげなくたずねた。

「わたしの力になってくれるというんです。きのうわたしを訪ねてきた方ですけど、とても親切ないい人で、五十ドルくれたんです」

マークは戦慄をおぼえた。その男はまた彼の先回りをしたのだ。やっぱりグレゴリー神父のいったとおりだ、そいつのやり口はプロを思わせる。

「どんな男でした、奥さん？」

「というと？」

「人相風体ですよ」

「ああ、そうですね、とても大きな人で、色が浅黒かったような気がします」

マークはできるだけさりげない態度を装った。そいつはエレベーターで彼とすれちがった男、グレゴリー神父の病院行きを電話でとめた男、ミセス・カセフィキスが陰謀に関して少しでも知っているようなら、彼女に夫のあとを追わせるために訪ねてきた男にちがいなかった。

「その男はひげをはやしていましたか、奥さん？」

「ええ、もちろん」答えてから、彼女はためらった。「でも、どうだったか覚えていません」

マークは未亡人にどんなことがあっても家から出てはいけないと注意した。これから福祉関係に当り、移民局の役人にかけあってくると言い訳した。嘘のつき方をおぼえつつあった。先生はひげのないギリシャ正教の司祭だった。

彼は車にとび乗って、数百ヤード先のジョージア・アヴェニューにある最寄りの公衆電話まで急いだ。長官の専用ラインの番号を回した。長官が出た。

「ジュリアス」

「そちらの番号は？」長官がたずねた。

三十秒後にベルが鳴った。マークは一部始終を注意深く伝えた。

「すぐに鑑識をそちらへやる。きみは未亡人のところへ戻って、彼女の手をしっかりつかま

えていろ。いいか、アンドリューズ、少しは頭を働かせろ。その五十ドルが必要だ。それは一枚の紙幣か、それとも二枚以上か？ 紙幣に指紋が残っているかもしれん」いきなり電話が切れた。マークは顔をしかめた。贋司祭(にせ)がいつも彼の二歩先を進んでいるとはかぎらないが、長官は疑いもなく二歩先んじていた。

マークはミセス・カセフィキスのところへ戻って、この件は最上層部レベルで扱われることになったと告げた。あすの朝そのことを忘れずに長官に話すとしよう。彼はメモをとった。それからさりげない口調に戻っていった。

「五十ドルに間違いないですか、ミセス・カセフィキス？」

「ええ、五十ドル札なんて毎日お目にかかれるもんじゃないし、とてもありがたかったんですから」

「それをどうしたかおぼえていますか？」

「ええ、閉店直前のスーパーマーケットへ行って食料品を買いました」

「どこのスーパーです？」

「ホイートン・スーパーマーケットです。この通りの」

「いつのことです？」

「きのうの夕方六時ごろでした」

マークは一刻も無駄にできないことに気がついた。まだ手遅れではないとしての話だが。

「奥さん、もうすぐFBIからわたしの同僚がきます。この男もあなたの味方ですよ。彼に

金をくれた親切な神父がどんな男だったか話してやってください。できるだけくわしく思いだしてもらえれば、われわれとしても大助かりです。みんなあなたを助けるためにやっていることだから、なにも心配はいりませんよ」

マークはちょっとためらってから、紙入れを取りだして五十ドル与えた。彼女がはじめて笑顔を見せた。

「さて、奥さん、最後にもう一つだけ頼みがあります。その神父がまた訪ねてきても、きょうのことは彼に内緒にしておいて、この番号に電話してくれませんか？」

マークは彼女に電話番号を書いたカードを渡した。アリアーナ・カセフィキスはうなずいたが、彼女の鈍い灰色の目はマークを追って車のほうに移動した。なにがなんだかわけがわからず、どっちのいうことを信用すればよいのかもわからなかった。両方とも彼女に五十ドル恵んでくれたのだから。

マークはホイートン・スーパーマーケットの前の駐車スペースに車を停めた。窓の大きな貼紙が、冷えたビールをケースで売っていることを宣伝していた。窓の上には青と白のボール紙で作った議事堂のドームが飾られていた。あと五日か、とマークは思った。彼は店内に入った。そこは個人経営の小さな店で、よくあるチェーン店の一つではなかった。一方の壁ぎわにはビール、反対側にはワインが並んでいて、その間が四列の缶詰と冷凍食品で占められていた。奥の壁ぎわは端から端までミート・カウンターになっている。肉屋は商売のことしか念頭にないようだった。マークは肉屋のほうへ急いで、カウンターに辿りつく前から質

問をはじめていた。

「マネージャーに会いたいんだが」

肉屋はうさんくさそうに彼を見た。「なんの用？」

マークは身分証明書を見せた。

肉屋は肩をすくめて奥のほうへ声をかけた。「おい、フラヴィオ。FBIだ。あんたに話があるってさ」

数秒後に、あから顔で大男のイタリア人マネージャーがミート・カウンターの左手の戸口に姿を現わした。「いらっしゃい。どんな話ですか、ミスター……」

「アンドリューズ、FBI」マークはもう一度身分証明書を提示した。

「わかりました。で、ご用件は、ミスター・アンドリューズ？　わたしはフラヴィオ・グイダ、ここはわたしの店です。これでも律儀に商売してるんですよ」

「そうだとも、ミスター・グイダ。実はあんたにちょっと頼みがある。ある現金盗難事件の捜査をしてるんだが、そのなかの五十ドル紙幣一枚がきのうおたくの店でつかわれたらしい。で、その金をなんとか見つける方法はないものかと――」

「売上金は毎晩集計して」と、マネージャーがいった。「金庫にしまい、あくる朝いちばんに銀行へ持って行くんですよ。きのうの売上金は一時間ほど前に銀行に運ばれたところだから、たぶん――」

「しかしきょうは土曜日だよ」

「いやいや。わたしの銀行は土曜日も正午まで営業するんですよ。ほんの二、三軒先です」

マークは少しばかり自分の頭を働かせた。

「どうだ、これからわたしと一緒にその銀行まで行ってもらえないかな、ミスター・グイダ？」

グイダは腕の時計とマーク・アンドリューズの顔を見くらべた。

「いいですよ。三十秒待ってください」

彼は店の奥にいるらしい姿の見えない女に向って、キャッシュ・レジスターから目をはなすなと注意した。それからマークと連れだって、ジョージアとヒッカーズの角まで歩いて行った。グイダは明らかに事情を聞いてひどく興奮していた。

銀行に着くと、マークはすぐに出納主任に面会を求めた。スーパーマーケットの売上金は三十分前に出納係の一人、ミセス・タウンゼンドに渡されていた。彼女は仕分けのためにその金をまだ手元においてあった。つぎがその金の順番で、忙しくてまだ手をつけていないと、弁解めいた口調でいった。おかげでこっちは助かりますよ、とマークは心のなかで礼をいった。スーパーマーケットの前日の売上げは五千ドルを少々超えていた。五十ドル紙幣は全部で二十八枚あった。やれやれ、長官はおれをとことんいじめるつもりらしい。いや、正確にいえば長官ではなく指紋係だが。マークはミセス・タウンゼンドから借りた手袋をはめて五十ドル紙幣をかぞえ、わきのほうにのけた——たしかに全部で二十八枚あった。預り証にサインして出納主任に渡し、できるだけ早いうちにお返しすると約束した。そこへ支店長がや

ってきて、預り証を手にとり、折衝役を買ってでた。
「FBIはふつうペアで仕事をするんじゃないんですか？」
マークは顔を赤くした。「そうです。しかしこの場合は特別任務なんです」
「念のためにチェックさせてください。あなたはご自分の言葉だけで千四百ドルもの大金を預けろとおっしゃっているんですよ」
「もちろんいいですとも、そうしてください」
マークはとっさに方法を考えださなければならなかった。銀行の支店長から、直接FBI長官に電話をかけさせるわけにはいかない。それは自分のガソリン代をヘンリー・フォードに請求させるようなものだ。
「FBIワシントン支局に電話して、刑事部長のミスター・グラント・ナーナに確かめてみたらどうです？」
「そうしましょう」
マークは電話番号を教えたが、支店長はそれを無視して、ワシントンの電話帳で支局の番号を調べた。ナーナに電話が通じた。ありがたいことにナーナは席にいた。
「いまうちの店におたくの若い支局員が見えています。名前はマーク・アンドリューズです。彼は五十ドル紙幣二十八枚を銀行から持ちだす許可を得ているといってるんですが。現金盗難事件の捜査のためだそうです」
ナーナのほうもとっさにつじつまを合わせなければならなかった。藪（やぶ）を突つくと蛇（へび）が出る

――ニック・ステームズのモットーだった。

一方マークはといえば、心のなかで短いお祈りを唱えていた。

「おっしゃるとおりです」と、ナーナは答えた。「その命令はわたしが出しました。迷惑でしょうが一時われわれに預けていただけませんか？　もちろん用がすみしだいお返ししますよ」

「どうもありがとう、ミスター・ナーナ。お手数かけてすみません。一応念には念を入れないと、当節はなにがあるかわかったもんじゃありませんからね」

「まったくですよ、用心するに越したことはありません。世間の人がみんなあなたのように用心深いといいんですがね」おれがはじめて吐いた本音だ、とグラント・ナーナは思った。

支店長は電話を切って、五十ドル紙幣の束を茶色の封筒に入れ、預り証を受けとって、すまなそうにマークと握手をかわした。

「わかってもらえるでしょうね？」

「もちろんですよ。わたしだって同じことをしていたでしょう」

マークはミスター・グイダと支店長に礼を述べ、このことは他言しないでもらいたいと頼みこんだ。二人とも自分の義務をわきまえた人間らしくうなずいた。

マークはただちにFBIビルへ引きかえした。長官室へ直行すると、ミセス・マグレガーが無言でうなずいた。軽くドアをノックして、なかへ入った。

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

「とつぜんお邪魔してすみません」
「かまわんよ、アンドリューズ。かけたまえ。こっちはもうすぐ終る」
マシュー・ロジャーズが腰をあげて、マークの顔をじっとみつめ、微笑をうかべた。
「なるべく正午までに答えを用意しておきますよ、長官」といって、彼は出て行った。
「さて、アンドリューズ、問題の上院議員は下の車のなかかな？」
「いえ、そのかわりこれを持ってきました」
マークは封筒をあけて、五十ドル紙幣の束をテーブルの上においた。
「おいおい、銀行強盗をやらかしたのか？　そいつは連邦法違反だぞ、アンドリューズ」
「ま、それに近いかもしれません。このなかの一枚が、ギリシャ正教の司祭に化けた男からミセス・カセフィキスに渡されたものです」
「うちの指紋係はさぞかし手を焼くことだろう。両面あわせて五十六面、そこに何百何千という指紋がついているわけだからな。暗闇(くらやみ)の手探りも同然で、かなり時間もかかるだろうが、ま、やってみるだけのことはあるだろう」彼は用心して紙幣に手を触れなかった。「サマートンにいってすぐにかからせよう。それからミセス・カセフィキスの指紋も必要だな。その大男がまた現われるかもしれないから、彼女の家に捜査官を一人張込ませておくほうがいいだろう」長官は話すことと書くことを同時にやってのけた。「昔の支局長時代を思いだすよ。こんな重要な仕事でなかったら、結構楽しんでやっているところだな」
「ここにいる間にもう一つ話したいことがあるんですが、いいですか？」

CamScannerでスキャン

「いいとも、なんでもいってみろ、アンドリューズ」タイスンは顔もあげずに書きものを続けた。

「ミセス・カセフィキスはこの国での自分の立場を心配しています。金も仕事もないし、夫までなくしてしまいました。彼女はわれわれに強力な手がかりを与えてくれたといってもよいし、事実たいそう協力的でした。だから彼女を助けてやるべきだと思います」

長官はボタンを押した。

「エリオットをよこしてくれ、それから指紋のサマートンもだ」

ああ、あの名なしの男にもやっぱり名前はあったか、とマークは思った。

「できるだけのことはしよう。きみは月曜日の七時にここへきてくれ、アンドリューズ。週末はずっと家にいるから、必要があったらそっちへ連絡をくれ。仕事を怠けるなよ」

「はい」

マークは長官室を出た。リッグズ・バンクに立ち寄って、十五ドルをクォーターに換えた。出納係が妙な顔をした。

「自宅にピンボール・マシンでもあるんですか？」

マークはにやりと笑った。

それから午前中と午後の大半を費やして、山のようなクォーターをどんどん減らしながら、二月二十四日にワシントンにいた六十二名の上院議員の週末秘書にかたっぱしから電話をか

けた。どの秘書も議員が環境会議に招待されたことを大いに感謝した。やはり長官はばかではなかった。六十二本の電話をかけ終るころ、マークの耳は感覚がなくなっていた。彼は結果を検討した――三十名の上院議員はオフィスで、または選挙民と一緒に食事をしていた。十五名はどこで食事をするか秘書に話していないか、だれかと「約束」があると話しただけで、残る十七名はナショナル・プレス・クラブ、コモン・コーズ（訳注 政府の納税者に対する義務を監視する市民運動）、NAACP（訳注 有色人種向上のための全国連合）といったさまざまな団体主催の昼食会に出席していた。ある議員の秘書にいたっては、うちの議員は二月二十四日はたしかその環境会議に出席したはずだと答えた。マークはあいた口がふさがらなかった。

長官の助けをかりて、上院議員の数は十五名までしぼられた。

彼は国会図書館に舞い戻って、ふたたび静かな館外帯出禁止閲覧室に足を向けた。司書は上院議員や委員会や上院運営規則に関する質問に、全然疑問をいだいたようすがなかった。彼に劣らず詮索的で、はるかに礼儀知らずな大学院学生たちにしょっちゅう悩まされているのだろう。

マークは《国会議事録》の棚に戻った。二月二十四日の分は簡単に見つかった。未製本の比較的新しい号のなかで、その号だけ指でページをめくったあとがついていた。彼は残った十五の名前をチェックした。当日は外交委員会だけが開かれ、十五名のリストのうち三名がその委員会のメンバーで、《国会議事録》によれば午前中に三人とも委員会で発言していた。上院の本会議ではその日二つの議題が審議されていた。エネルギー省における太陽エネルギ

ー研究のための資金配分と、銃砲所持規制法案である。残りの十二名中の数人が、一方または両方の議題について議場で発言していた。残念ながら十五名中のだれ一人として、リストから消去するたしかな証拠はなかった。彼は十五枚の紙に十五の名前を書いて、二月二十四日から三月三日までの《国会議事録》にくまなく目を通した。そしてそれぞれの名前の下に一日ごとの出欠を書きこんだ。苦心さんたんしながら各議員の行動を再構成していったが、多くの空白ができた。明らかに議員たちはすべての時間を上院内ですごしてはいなかった。

　若い司書が彼のそばに立った。マークは時計を見た。七時三十分。閉館の時間だ。上院議員たちのことを頭から追いだして、エリザベスと会う時間だった。彼女の自宅に電話した。

「やあ、べっぴんさん。そろそろ食事の時間だと思うんだが。朝飯のあとなにも食ってないんだよ。この衰弱しきった状態を憐れんで、一緒に食事をしていただけないでしょうか、先生？」

「一緒になにをしてくれといったの、マーク？　わたし、たったいま髪を洗ったところなの。耳に水が入ったらしくてよく聞えなかったわ」

「食事をしようといったんだよ。いまはそれだけでいい。食べ終ったらほかのことをしたくなるかもしれないが」

「食後のことはお断わりするかもしれなくってよ。呼吸のほうはどんなぐあい？」

「おかげでだんだん楽になってきたよ。しかしいま考えていることをいつまでも考え続けたら、顔じゅうにきびだらけになるおそれがある」

「わたしにどうしてほしいの？　電話に冷たい水でもかける？」

「いや、一緒に食事してくれるだけでいいよ。三十分後に迎えに行く、髪が濡れていようが乾いていようがおかまいなしだ」

彼らはジョージタウンのミスター・スミスというこぢんまりしたレストランに入った。マークは裏の庭にテーブルを並べる夏の季節のほうが、この店になじみが深かった。店内は二十代の若い人たちで混んでいた。何時間も粘っておしゃべりするのに格好の場所だ。

「まあ、まるで学生時代に戻ったみたい。わたしたちもうとっくに卒業したと思っていたのに」

「きみが気に入ってくれてうれしいよ」マークは笑いながらいった。

「なにもかも見当がつくわ。素朴な板ばりの床、肉切台みたいなテーブル、植物、バッハのフルート・ソナタ。このつぎはマクドナルドにしましょうよ」

マークは答えに窮したが、メニューの到着で救われた。

「まさかと思うでしょうけど、イェールで四年間も勉強したのに、まだラタトゥーユってなんのことか知らないのよ」

「どんなものかは知ってるけど、どう発音するのか知らなかったよ」

二人ともチキンと、ベークト・ポテトとサラダを注文した。

「あそこを見てよ、マーク。あのいやらしいソーントン上院議員が自分の娘みたいな若い女

の子と一緒にいるわ」
「たぶん自分の娘なんだろう」
「まともな人間ならこんなところに娘を連れてこないわ」彼女はマークに笑いかけた。
「彼はきみのお父さんの友達なんだろう？」
「ええ、どうして知ってるの？」
「そんなの常識だよ」マークは自分で持ちだした話題を後悔した。
「そうね、友達というよりは仕事仲間というところかしら。彼は銃の製造で儲けた人よ。あまり魅力的な職業とはいえないわね」
「しかしきみのお父さんだってある銃器製造会社の経営に参加しているんだろう？」
「パパが？　ええ、わたしはそれにも反対なんだけど、パパは会社を創立した祖父のせいにしているわ。わたし、学生時代にそのことでよくパパと議論したものよ。会社の株を売ってもっと社会的に意義のある事業に投資したらどうかって、つまりバーバラ少佐気どりだったのね（訳注　バーナード・ショウの戯曲の主人公。救世軍の少佐で武器製造業者の父親と対立する）」
「料理はいかがですか？」と、見回りにきたウェイターが話しかけた。
「ええ、とってもおいしいわ、ありがとう」と、エリザベスが顔をあげて答えた。「あのね、マーク、わたしは父のことを戦争犯罪者とまできめつけたことがあるのよ」
「しかし彼は戦争に反対だった、と思うけど」
「父のことをなんでもよく知ってるようね」と、エリザベスが疑わしそうに彼を見ながらい

った。

　これでもまだ充分じゃないんだ、とマークは心のなかで呟いた、きみがぼくの知らないことをどこまで教えてくれるかな？　エリザベスは彼の気がかりにうすうす気がついたとしても、そのことを気にもとめず話し続けた。

「父はMXミサイルに賛成票を投じたので、わたしは一か月近くも父と一緒のテーブルに坐らなかったわ。父は気がついていないようだったけど」

「お母さんはどうなの？」

「母はわたしが十四歳のときに亡くなったわ、わたしが父にとても愛着を感じるのはたぶんそのせいね」彼女は膝においた両手に視線を落とした。明らかにその話題を打切りにしたいらしかった。額に垂れかかる黒い髪が光に輝いた。

「きみの髪はとても美しい」と、マークは囁くようにいった。「はじめて会ったときにその髪にさわりたかったんだ。いまでもそうだけど」

　彼女はにっこり笑った。「わたしは巻毛のほうが好きよ」それから両手で頬杖ついて、いたずらっぽく彼をみつめた。「あなたは四十歳ぐらいになってこめかみのあたりに白いものが混りはじめると、きっとすてきよ。もちろん白くなる前に髪が抜けてしまったらなんにもならないけど。ねえ、これ知ってる？　頭のてっぺんが禿げる人はセクシーで、こめかみが禿げる人は思索型で、つんつるてんに禿げる人は自分をセクシーだとうぬぼれている人なんだって」

CamScannerでスキャン

「じゃ、もしぼくの頭のてっぺんが禿げたら、一種の意思表示だと思ってくれるかい？」

「喜んで待つわ、もっとも大して待たなくてよさそうだけど」

彼女を家まで送る途中で、マークは立ちどまって背中に腕を回し、はじめは遠慮がちにキスをした。彼女がどう反応するか自信がなかったからである。

「ねえ、ぼくは膝ががくがくだよ、エリザベス」と、彼女のやわらかく、あたたかい髪に向って囁いた。「きみの一番新しい犠牲者をどうしてくれる？」

彼女は歩きだしてからしばらくはなにもいわなかった。

「膝用のサポーターをあげるわ」と、彼女は答えた。

彼らは手を取りあって、黙々と、しあわせな気分で、ゆっくり歩き続けた。あまりロマンティックとはいえない三人の男が二人を尾行していた。

快い居間の、クリーム・カラーのソファの上で、彼はもう一度彼女にキスをした。

三人の不粋な男たちは外の暗闇で待っていた。

彼女は大統領執務室に独りで坐って、法案の条文を一項ずつ検討し、明日の投票でつまずきの原因となるような個所に目を光らせていた。

ふと顔をあげると、驚いたことに夫が湯気のたつココアのカップを持って目の前に立っていた。

「今夜は辛抱をしても、あそこでのきみの影響力が低下することはないだろう」と、彼は議

事堂のほうを指さしながらいった。
彼女はほほえんだ。「ありがとう、エドワード、あなたの良識の助けがなかったら、わたしはどうなっていたかしらね」

三月六日　日曜日朝

午前九時〇〇分

マークは日曜の午前中に長官への報告書の仕上げをした。まず机の上をかたづけることから始めた。あらゆるものがきちんとかたづいていないと考えがまとまらないたちなのだ。書きためたメモを全部集めて、論理の筋道が通るように並べてみた。この作業が終ったときは二時になっていて、昼食をとりそこなったことにも気がつかなかった。十五名の上院議員の名前を、六名は外交委員会の、九名は銃砲所持規制法案――司法委員会の見出しの下に、ゆっくり書きとめた。そのリストを眺めながらインスピレーションが湧いてくるのを期待したが、なにも浮んでこなかった。そのうちの一人が殺人者であり、だれがそうであるかを突きとめるまで、残された時間はわずか四日しかなかった。書類をブリーフケースにしまい、机のひきだしに入れて鍵をかけた。

それからキッチンへ行ってサンドイッチを作った。時計を見た。きょうはこれからどんな有意義なすごし方があるだろう？　エリザベスは当直で病院にいる。受話器を取りあげて病院の番号を回した。三時に手術室に入らなければならないので、長話はできないといわれた。

「わかったよ、先生、話はすぐにすむし、べつに痛くもなんともない。きみは美人で、頭が

よくて、きみのことを考えると気が狂いそうになるということを伝えるために、毎日電話をかけちゃいられないんだ。だからよく聞いてくれよ」
「聞いてるわよ、マーク」
「オーケー。きみは美人で頭がいい、ぼくはきみに首ったけだ……どうした、答えなしかい？」
「あら、まだ先があるのかと思ったの。お返しにわたしもすてきなことをいってあげるわ。ただしあなたから三マイルもはなれているときじゃなしに、三インチの近さにいるときにね」
「早いほうがいいな、さもないとぼくはだめになってしまいそうだ。もういいよ、行ってぼく以外のだれかの心臓を切り刻むんだね」
彼女はふきだした。「手術は足の逆さ爪なのよ……」
彼女は電話を切った。マークは部屋のなかをうろつきまわった。十五名の上院議員からエリザベスへ、それから一人の上院議員へ、思いは駆けめぐった。エリザベスとの仲が少しうまくいきすぎるのではないだろうか？　彼が一人の上院議員を捜しているのではなくて、逆に一人の上院議員のほうが彼を捜しているのではないだろうか？　彼は舌打ちしながらビールを注いだ。ふとバリー・カルヴァートのことが心に浮んだ。日曜日の午後はたいてい彼とスクォッシュ・テニスをやったものだった。それからニック・ステームズ……それとは知らずにマークの身替りになって死んだ。いま彼が生きていたらなにをするだろうか？……昨年

のクリスマスに支局のパーティでステームズのいった言葉が心に浮んできた。「わたしを抜きにすれば、この国でいちばん犯罪にくわしい男は、《ニューヨーク・タイムズ》のジョージ・スタムプージスだ」——もちろん彼もギリシャ人だった。「この男は法の内外どちら側にいる人間よりもマフィアとCIAのことをよく知っている」

マークはニューヨークの電話番号案内を呼びだして、自分でもなにをしようとしているのかわからないままに番号をたずねた。交換手がそれを教えた。

「どうもありがとう」

「どういたしまして」

つぎにその番号を回した。

「犯罪担当デスク、ジョージ・スタムプージスを頼みます」電話がつながった。

「スタムプージス」と、相手がいった。《ニューヨーク・タイムズ》の人間は無駄な言葉を使わないと見える。

「こんにちは。わたしはマーク・アンドリューズというものです。いまワシントンからかけています。ニック・ステームズとは友達でした。いや、実は彼はわたしのボスだったんです」

声の調子ががらりと変った。「ああ、恐ろしい事故の話を聞きましたよ、あれが事故だとしたらの話だが。で、ご用件は？」

「実はある種の内部情報がほしいんです。これから飛行機でそちらへ飛んだら会ってもらえ

ますか?」
「ニックに関係のあることですか?」
「そうです」
「いいですとも、八時に三十一番ストリートとパーク・アヴェニュー・サウスの北東の角にこられますか?」
「うかがいます」マークは時計を見ながら答えた。
「では、待ってますよ」

イースタン・エアラインズのシャトル便は七時数分すぎに到着した。マークは荷物受取りで混雑する人波を抜けて、タクシー乗場に向った。太鼓腹を突きだした中年のひげ面のニューヨーカーが、口にくわえた葉巻を上下させながら、彼を乗せてマンハッタンに向った。運転手はひっきりなしにしゃべり続けたが、ほとんど独り言に近いのでいちいち返事をすることもなかった。マークはその時間を利用して考えをまとめた。
「この国はどうしようもないひどい国だよ」と、揺れ動く葉巻がいった。
「ああ」
「それにこの町ときたらごみ溜以外の何物でもない」
「ああ」
「それもこれもあのケインのせいだ。あんな女は吊しちまわなきゃだめだな」

マークははっとした。おそらくその言葉は日に千回もいわれているが、ワシントンにはだれか同じことを本気でいっているやつがいるのだ。

タクシーが歩道に寄って停った。

「十八ドルきっかり」と、揺れる葉巻がいった。

マークは運転手と乗客をへだてる仕切り壁のプラスチックのひきだしに十ドルと五ドル二枚を入れて、タクシーをおりた。五十代なかばの、がっしりした体つきの男が、ツイードのオーバーを着て彼のほうに近寄ってきた。マークは思わず身震いした。三月のニューヨークの寒さをつい忘れていたのだ。

「マーク・アンドリューズさん？」

「そうです。よくわかりましたね」

「一生の間犯罪者の研究ばかりしていると、犯罪者みたいな考え方をするようになるもんですよ」彼はマークのスーツをじろじろ見ていた。「Gメンも昔にくらべると服装がよくなりましたな」

マークは困ったような表情をうかべた。FBI捜査官はニューヨークの警官の二倍近い給料をもらっていることを、スタムプージスは知っているにちがいない。

「イタリア料理は好きですか？」そうきいたくせに、彼はマークの返事を待たなかった。

「ニックが気に入っていた店の一軒に案内しましょう」というなり、早くも歩きだしていた。

彼らは無言でその長いブロックを歩いて行った。レストランの入口にさしかかるたびに、マ

CamScannerでスキャン
CamScannerでスキャン

ークの足がためらいがちになった。とつぜん、スタムプージスの姿がある戸口にふっと吸いこまれて消えた。マークがあとを追って入りこんだところは、うらぶれたバーで、満員の客がカウンターにもたれてさかんに飲んでいた。家へ帰っても女房のいない男たち、あるいは女房がいても家へ帰りたくない男たちなのだろう。

　バーを通り抜けると、感じのよいれんが壁のダイニング・ルームがあった。痩せた背の高いイタリア人が彼らを隅のテーブルに案内した。明らかにスタムプージスは上顧客だった。彼はメニューに目もくれなかった。

「シュリンプのマリナラ・ソースがいけますよ。あとはお好きなのをどうぞ」

　マークは彼の意見をいれて、あとはピカタのレモン添えと水差し半分のキャンティを追加した。スタムプージスはコルト45を飲んだ。食事中はとりとめのない話をした。マークはニック・ステームズとの二年間のつきあいで、地中海人特有の信条——おいしい食事の喜びを仕事の話でぶちこわすな——となじみになっていた。いずれにしろスタムプージスはまだ彼を値踏みしている最中で、マークとしても相手の信頼を得る必要があった。スタムプージスは特大のプディングを平らげて、サンブーカ（訳注 ウイキョウ入りリキュール）を添えたダブルのエスプレッソ・コーヒーを飲みはじめると、マークの顔を見ながらそれまでとは打って変った口調で話しはじめた。

「きみは偉大な男の下で、一人のまれに見る法の番人の下で働いてきた。FBIの人間のせめて十分の一でも、ニック・ステームズと同じくらい良心的で物わかりがよかったら、あの

れんが造りのコロセウムのような建物のなかの生活もまんざら捨てたものじゃないだろう」

マークは彼の顔を見て口を開きかけた。

「いや、ニックについてこれ以上なにかをつけ加えるのはよしたまえ。きみがここにいるのはそのためだ、それからFBIに関するわたしの意見はいまさら変らんよ。わたしは三十年以上も犯罪担当記者をやってきたが、FBIとマフィアの唯一の変化は、どちらもますます巨大化し、強力になったことだけだ」彼はコーヒーにサンブーカを注いで、音をたてて啜った。「オーケー、わたしの口からなにを聞きたいのかね？」

「すべてオフレコでお願いします」

「よかろう。おたがいのためになることだ」

「ぼくのほしい情報は二つです。第一に、組織犯罪と密接なつながりを持つ上院議員がいるかどうか、第二に、銃砲所持規制法案へのギャングどもの反応はどんなふうかということです」

「ばかに遠慮深いんだな」と、ギリシャ人は皮肉をいった。「どこから始めようか？　第一の質問のほうが答えやすい。なぜなら上院議員の半数は、いかに時代遅れであろうとわたしがマフィアという名で呼んでいる組織犯罪と、漠然としたつながりを持っているからだ。なかには自分でそのことに気づいてない者もいるが、犯罪と直接または間接につながりのある実業家や大企業からの政治献金まで含めるとしたら、どの大統領もみな犯罪者になってしまう。しかしマフィアが上院議員を必要とするときは、第三者を通じてそれをおこなっている。

しかもそれさえごくまれなのだ」
「どうしてです？」
「マフィアに必要なのは州レベルのぼろ隠し——法廷や取引や地方条例における——なのだ。彼らは国際条約や最高裁判事の承認などには関心を持たない。より一般的にいえば、マフィアとのつながりのおかげで成功した上院議員が何人かいる。それは民事裁判所判事や州議会議員としてスタートし、マフィアから直接の財政的援助を受けた連中だ。彼ら自身はそのことに気づいていない可能性もある。選挙で当選しようとして夢中のときは、あまりこまかくチェックしない者もいるからね。それに加えてアリゾナやネヴァダのように、マフィアが合法的なビジネスを手がけているケースがある。これらの州では外部の人間が仲間入りしようとしたら大変なことになる。最後に、民主党の場合は、組織労働者、とくにトラック輸送組合の問題がある。三十年間の経験を十分間で要約すればざっとこんなぐあいだよ、マーク」
「背景の知識としては申し分ありません。ではいくつかの具体的な質問に移ります。これから十五名の上院議員の名前をいいますから、いま話してくれたカテゴリーのどれかにあてはまる者がいたら教えてくれませんか？」
「まあやってみたまえ。できるだけきみの期待にそうようにするが、強制はお断わりだよ」
「ブラッドリー」
「白だね」
「ソーントン」

スタムプージスは眉一つ動かさなかった。
「ベイ」
「聞いたことはないね」
「ハリスン」
「さあね。サウス・カロライナの政治のことはあまりよく知らないんだよ」
「ナン」
「あの日曜学校のサムが？　ボーイ・スカウトの誉れのナンが？　からかっちゃいかんよ、きみ」
「ブルックス」
「大統領を謀っていることは確かだが、そこまではどうかな」
マークはリストの名前をつぎつぎに読みあげた。スティーヴンソン、バイドン、モイニハン、ウッドサン、クラーク、マサイアス。スタムプージスは無言で首を振った。
「デクスター」
彼はためらった。マークは緊張の色を隠そうとした。
「問題はある」と、スタムプージスは答えた。「しかし、マフィアは無関係だね」
マークの溜息が彼にも聞えたにちがいない。マークはその問題というのがなんであるかを知りたかった。続きを待ったがスタムプージスはなにもつけ加えなかった。
「ペパードン」

「与党院内総務か。柄じゃないね」
「ピアスン」
「冗談だろう」
「どうも」マークは一息入れてから続けた。「さて、つぎは銃砲所持規制法案に対するマフィアの反応ですが」
「目下のところわたしにもよくわからない。マフィアはもはや一枚岩じゃないんだ。あまりにも巨大化しすぎたし、最近では内部抗争が続いている。古顔たちは将来合法的に武器を入手することが難かしくなるとわかりきっているので、この法案には絶対反対だが、それ以上に未登録の銃砲所持に対する強制判決といった追加条項のほうを恐れている。FBIとしては大歓迎だろう。これと目をつけた犯罪者の身体検査をして、かりにそいつが未登録の銃を持っていれば――まず九割がた持っているにちがいないが――うむをいわさず法廷に引っぱりだせるんだからな。一方若手のマフィアのなかにはこの法案の成立を待ち望む者もいる、いわば彼らにとっては現代の禁酒法というわけだ。組織に属さないギャングや狂信的な過激派で銃のほしいやつに、未登録の銃を売りつけるチャンスだからな。つまり新しい収入源というわけだよ。また彼らは警察がこの法律を完全に実施できるまで十年はかかると見ている。こんなところできみの質問の答えになっているかな？」
「ええ、とても参考になりますよ」
「そうか、じゃ今度はわたしが質問する番だよ、マーク」

「ルールは同じですね？」

「そう、同じルールだ。きみの質問はニックの死と直接つながりがあるのかね？」

「あります」

「だったらこれ以上はなにもきくまい。どうせわたしの知りたいことに答えるためには、きみが嘘をつかなきゃならないからだ。そのかわり一つ約束してくれ。もしもこれがなにかでっかい事件に発展するようなら、わたしに情報を独占させてくれ。いまいましい《ワシントン・ポスト》の連中を、今度こそ出し抜いてやりたい」

「いいでしょう」

スタムプージスはにっこり笑いながら伝票にサインした。最後の一言でマーク・アンドリューズを接待するりっぱな口実ができたのだ。

マークは時計を見た。運がよければラ・ガーディア空港からの最終シャトル便に間に合いそうだった。スタムプージスは立ちあがってドアのほうへ歩きだした。バーは依然として飲んだくれの男たち、同じ女房を持った同じ男たちで満員だった。マークは通りに出てタクシーを呼びとめた。今度は若い黒人の運転手だった。

「いい残したことがある」と、スタムプージスがいった。マークはけげんそうな顔をした。

「なにかきみの役に立ちそうなことがわかったら、電話するよ」

マークは礼をいってタクシーに乗りこんだ。

「ラ・ガーディアへ頼む」

CamScannerでスキャン

マークが窓をおろすと、スタムプージスがちらとなかをのぞきこんだ。

「きみのためじゃない、ニックのためなんだ」そういって彼は立ち去った。

空港への帰り旅は沈黙のうちに終始した。

やっとアパートに帰りつくと、マークは翌朝の長官との会見にそなえてばらばらの考えをまとめにかかった。時計を見ると、いつの間にかその翌朝になっていた。

三月七日　月曜日朝

午前七時〇〇分

長官はマークの調査結果に無言でじっと耳を傾けてから、彼自身の思いがけない情報をつけ加えた。

「アンドリューズ、きみの十五名の上院議員リストをもっとしぼれるかもしれん。先週の木曜日に、二人の捜査官がわれわれのKGBチャンネルの一つで無許可の交信がおこなわれているのをキャッチした。どこかの商業放送局からの一時的混信が原因で、ちがう周波数に波長が合ってしまったか、あるいはだれかが違法の無線機を持っていて、われわれの周波数に合わせたかだ。うちの連中が聞いたのはこれだけだ。『聞えるか、トニー。おれはたったいま委員会に出席する上院議員を車で送ったところで、これから……』それっきり送信の声がぷっつり切れて、二度と聞えなかった。たぶん暗殺計画の一味はわれわれの交信を盗聴していて、そのうちの一人がついうっかりわれわれの周波数で交信を始めてしまったんだろう。よくあることだからな。それをキャッチした捜査官は、われわれの周波数の不正使用に関する報告書を提出しただけで、そのきわめて重要な意味に気がつかなかった」

マークは椅子の上で身を乗りだしていた。

「そうだ、アンドリューズ」と、長官はいった。「きみがなにを考えているかわたしにはわかる。午前十時三十分だ。その連絡をキャッチしたのは午前十時三十分なのだ」

「三月三日午前十時三十分ですね」マークは色めきたった。「ちょっと待ってくださいよ……その時間に始まっていた委員会は……」彼はファイルを拡げた。「ダークセン・ビルディング……その時間……たしかどっかにあったはずです」彼はファイルをめくりながら続けた。「可能性は三つあります。その日の午前中は外交委員会と政府活動委員会が開かれています。上院の議場では銃砲所持規制法案が審議されています。このところこの法案審議に多くの時間がさかれているんですよ」

「どうにか手がかりがつかめそうだな」と、長官がいった。「きみのノートで、十五名中の何名が当日上院にいたか、そしてなにをしていたかわかるかな？」

マークは十五枚の紙をめくって、それをゆっくり二つのグループに分けた。「断定はできませんが、この八名については」――と、一組のほうに片手をおいて――「その朝上院にいたという記録がありません。残る七名はたしかにいました。政府活動委には一人も出席していません。外交委には二名――ピアスンとナンが出席しています。残る五名はブルックス、バード、デクスター、ハリスン、ソーントンで、全員議場にいました。それから全員が銃砲所持規制法案関係の司法委員会にも出席しています」

長官は顔をしかめた。「きみもいうようにまだ断定はできん。しかしわれわれにわかっていることはこれで全部なんだから、とりあえずこの七名に集中することだ。残された日は四

日しかないのだから、一か八か賭けてみるしかないだろう。運よく突破口が開けたからといってあまり有頂天にならず、残りの八名がその朝ダークセン・ビルディングにいた可能性がないことをダブル・チェックするのだ。さて、この七名の上院議員に監視をつけるような危険は冒せない。キャピトル・ヒルの連中はそうでなくてもＦＢＩを疑いの目で見ている。だからほかの手を使わなきゃならんだろう。政治的には、大規模な捜査活動は問題外だ。確かな手がかり——問題の議員が二月二十四日木曜日の昼食時と、先週十時三十分の司法委員会のときにどこにいたか——だけを頼りにそいつを捜しだすしかないだろう。だから暗殺の動機など考えんでいい——どうせ当て推量の域を出ないんだから時間の無駄だよ、アンドリューズ。ただリストの人数を減らすことだけを考えるのだ、そしてきょうは外交委員会と上院の議場ですごしたまえ。各委員会の事務局長たちと話してみるがいい。上院議員のことなら——公のことであれ私事であれ——彼らはなんでも知っている」

「わかりました」

「それからもう一つ、実は今夜大統領と食事をすることになっているのだ。容疑者の人数を減らすのに役立つような情報を大統領から仕入れられるかもしれんよ」

「大統領に知らせるつもりですか？」

ＦＢＩ長官はちょっと間をおいて答えた。「いや、そうはしないつもりだ。この問題は今のところまだわれわれの手に余るところまではいっていないと思う。この段階で大統領を心配させるのは無意味だよ。少なくともわれわれの捜査が失敗に終りそうだと思えるまでは黙

っているつもりだ」

最後に長官は贋ギリシャ正教司祭のモンタージュ写真を彼に渡した。「ミセス・カセフィキスの証言によって作製したものだ」と、彼はいった。「きみはどう思う？」

「悪くないですね。実物のほうがもう少し顎に肉がついているかもしれません。しかし、さすがは専門家ですね」

「ちょっと気にかかるんだが、前にこの顔を見たことがある。かぞえきれないほど多くの犯罪者と顔を合わしているもんで、そのうちの一人を思いだそうとしてもほとんど不可能だ。だがそのうち思いだすかもしれんよ」

「木曜日前に思いだしてくださるといいんですが」と、マークがよく考えもせずにいった。

「わたしもそう願っている」と、タイスンがこわい顔をして答えた。

「それにしてもわたしは彼より二十四時間遅かったんです。まったく腹が立ちますよ」

「むしろ運がよかったと考えるんだな。きみのほうが彼より早かったら、おそらくミセス・カセフィキスはいまごろ生きていなかったろうし、きみだってそうだ。万一その男がまた現われた場合にそなえて、彼女にはまだ部下を一人つけてあるが、ま、相手もプロの悪党だからそんな危険は冒すまいな」

マークはうなずいた。プロの悪党か。

インターフォンの赤ランプが点滅した。

「なんだね、ミセス・マグレガー？」

CamScannerでスキャン

「ハート上院議員との約束に遅れそうですわ」

「ありがとう、ミセス・マグレガー」彼は受話器をおいた。「あすの朝同じ時間にまた会おう、マーク」長官にマークと呼ばれたのははじめてだった。「いいか、徹底的に調べるんだぞ。あと四日しかないからな」

マークはエレベーターで下へおりて、いつものルートで建物を出た。通りの反対側から尾行されていることには気がつかなかった。その足で上院事務局ビルへ行って、外交、司法両委員会の事務局長と会う約束をした。どちらも早くてあすの朝でなければ会えないという返事だった。それから国会図書館へ行って、リストに残った七名の上院議員の経歴を徹底的に調べなおした。彼らは全国各地から集まった多様な顔ぶれで、共通するところはほとんどなかった。一人だけほかの六名とまったく共通点を持たないやつがいる、だがいったいそいつはだれなのだ？　ナン——およそ意味をなさない。ソーントン——スタムプージスは明らかに彼に好意を持っていたが、だからといってなんの証明にもならない。バード——まさか与党院内総務が？　ハリスン——スタムプージスは彼が銃砲所持規制法案に反対だといっていたが、上院議員のほぼ半数はこの法案に反対している。デクスター——スタムプージスが説明してくれなかった問題というのはいったいなんだろうか？　たぶん今夜エリザベスから聞きだせるだろう。ラルフ・ブルックス、情熱的な行動の人で、ケインに愛情を感じていないことはたしかだ。ピアスン——彼が悪党であることがわかったとしても、だれも信じないだろう。上院議員歴三十三年、その間公的にも私的にも常に廉直なキャスカ（訳注　シーザー暗殺の共謀者の一人）

の役割を演じてきた。

マークは溜息をついた。袋小路に入りこんだ人間の長い、疲れきった溜息だった。ちらと時計を見た。十時四十五分。すぐにでかけなければ遅れてしまう。各種定期刊行物、《国会議事録》、ラルフ・ネイダー報告書などを司書に返して、急いで通りを渡り、駐車場へ車をとりに行った。コンスティチューション・アヴェニューをすっとばして、メモリアル・ブリッジを渡った——この一週間に何度この橋を渡ったことだろうか？　バックミラーに自分を尾行する一台の車を認めたような気がしたが、それも先週の木曜日の記憶にすぎないのか？

マークは道ばたに車を駐めた。二人のシークレット・サーヴィスが彼を呼びとめた。彼は身分証明書を見せて、小径をゆっくり歩いて行った。ちょうど間に合った。百五十人の会葬者が、一週間前は埋葬に立会う人間のだれよりも元気だった二人のために、新しく掘り返された墓穴のまわりに立っていた。元上院議員のビル・ブラッドリー副大統領が、大統領の名代で参列していた。副大統領はノーマ・ステームズの隣に立っていた。二人の息子に支えられた喪服の未亡人の姿が痛々しかった。長男のハンクの隣に立つ大男は、バリー・カルヴァートの父親にちがいなかった。その隣がFBI長官で、彼は周囲を見まわしてマークに気がついたが、目配せひとつしなかった。ゲームは墓地でさえも続いているのだ。

グレゴリー神父の祭服が寒風のなかでわずかに揺れた。夜通し雨が降ったために、祭服の裾が泥で汚れていた。黒の法衣の上に短い白衣をまとった若い礼拝堂つき司祭が無言でかたわらに控えていた。

CamScannerでスキャン

「われは罪の傷を負う、されどわれは汝の不可知なる栄光の象徴なり」と、グレゴリー神父は祈った。

未亡人が泣きながらニック・ステームズの青白い頬にキスをすると、柩の蓋が閉じられた。グレゴリー神父の祈りが続く間に、ステームズとカルヴァートの柩がゆっくりと穴のなかにおろされた。マークは悲しみのうちにそれを見守った。埋められるのは自分だったかもしれない、いや、きっとそうにちがいないのだ。

「神よ、聖人らとともに汝の僕の魂に安息を与えたまえ、病いも悲しみもなく、悩みもなく、ただ永遠の生のみ存在する安息を」

最後の祝福が与えられ、十字が切られると、やがて会葬者の群れが散りはじめた。

礼拝のあと、グレゴリー神父は追悼の意をこめてニック・ステームズについて語り、彼と部下のバリー・カルヴァートの死を犬死に終らせないことを希望した。神父はマークのほうを見ながらその言葉を口にしたように思えた。

マークはナーナ、アスピリン、ジュリー、それに例の名なしの男などを見かけたが、話しかけてはいけないことに気がついて、そっとその場をはなれた。死者を悼むのはほかの連中にまかせておけばよい、彼のつとめは生きている殺人犯人どもを捜すことだった。

マークは上院へ戻った。この痛切な合同告別式に参列すべき上院議員はだれだったか、なんとしても突きとめずにはおかないという決意を新たにしていた。もう少しあとまで墓地に残っていれば、マトスンがさりげなくグラント・ナーナに話しかけ、ステームズはいい男だ

った、彼の死はＦＢＩにとって大きな損失だと語る光景を見られたはずだった。

午後は外交委員会でピアスンとナンの演説を聞いてすごした。もしも二人のうちのどちらかだとすれば、二人とも厚顔そのもので、不安の色は毛ほども見せずにおのれの役割を果していた。マークは二人の名前をリストから消してしまいたかったが、それにはもう一つの事実を確認しておかなければならなかった。ようやくピアスンが腰をおろしたとき、マークはぐったり疲れきっていた。残された三日間を生き抜くためには、今夜あたり一息入れる必要がありそうだった。彼は委員会室を出て、夕食の約束を確認するためにエリザベスに電話をかけた。それからミセス・マグレガーに電話して、今夜の連絡先——レストラン、自宅、エリザベスの家——の番号を知らせた。ミセス・マグレガーはなにもいわずに番号を書きとめた。

上院からの帰り道、ブルーのフォード・セダンと黒のビュイックの二台が彼を尾行した。アパートに帰り着くと、彼は車のキイをサイモンに投げてやり、絶えず見張られているという、息苦しいけれどもいまではなんとなく身になじんでしまった感覚を振りはらって、もっと楽しいこと、エリザベスとすごす夜のことを考えはじめた。

午後六時三十分

マークはこれから始まる夜のことを考えながら通りを歩いて行った。おれはすでにあの娘

に首ったけだ。いま確信をもっていえることはそれしかない。ただ彼女の父親に関する疑惑――エリザベス自身についてもそうだが――が頭にこびりついてはなれない、その疑惑をなんとか振りきれるといいのだが。

彼はブラッキストーンに入ってバラを一ダース注文した。赤いバラ十一本に白いバラ一本。女店員がカードと封筒を彼に渡した。彼は手早く封筒にエリザベスの名前とアドレスを書き、白いカードを前にして知恵をしぼった。しゃれた文句や詩の断片が心に浮かんでは消えた。ようやく、微笑しながら慎重にペンを走らせた。

　はからずもわれはそなたを思う、そのときわが心は、
　夜明けのひばりのごとく
　不機嫌な大地より飛び立って、天国の門の前で喜びの歌をうたう。

　追伸。現代版。これがついに見つけた恋なのか？

「これをすぐに届けてくれ」

「承知しました」

これでよし。家へ帰ろう。なにを着たらいいか？　ダーク・スーツ？　堅苦しすぎる。ライト・ブルーのスーツ？　まるでホモだ、だいたいあんなスーツは買うんじゃなかった。ダブルのスーツ――流行の先端だ。シャツは白、くつろいでノー・タイといこう。それともブ

CamScannerでスキャン

ルーのフォーマルなシャツにタイをしめるか。白の勝ち。ちょっとうぶに見えすぎるかな？　ブルーの逆転勝ち。靴、黒のスリッポンにするか紐つきにするか？　スリッポンの勝ち。ソックス、これは簡単、ダーク・ブルーだ。まとめ、デニム・スーツ、ブルーのシャツ、ダーク・ブルーのタイ、ダーク・ブルーのソックス、黒のスリッポン・シューズ。着替えをきちんとベッドの上に揃えて、シャワーを浴び、髪を洗う――どちらかというとカーリー・ヘアのほうが好きだ。ちくしょう、石鹸が目に入った。タオルを手探りして、目を拭き、タオルをおいてシャワー・ルームを出る。腰にタオルを巻く。ひげを剃る、ひげ剃りは一日に二回だ。細心の注意をしながら剃る。血は出ない。アフターシェーヴ・ローションをつける。タオルで濡れた髪を激しくこする。いたるところにカールができる。寝室に戻って入念に着替えをする。タイをしっかりと結ぶ――これじゃだめだ、もう一度やりなおし。今度はいい。ズボンのジッパーを引きあげる――ウエストを一インチ減らさなくては。鏡でチェックする。悪くない。謙遜は無用だ、なかなかいかす。金とクレジット・カードをチェックする。拳銃は必要なし。準備完了。ドアをロックして、エレベーターのボタンを押す。

「キイをくれないか、サイモン」

「へえ、驚いた」サイモンは目を丸くした。「さては新しい美人を見つけたかな！」

「ぼくを待たないほうがいいよ、サイモン。今夜ふられたらきみを襲うかもしれないからな」

「警告ありがとよ、マーク。まあしっかりやってくれ」

美しい晩だ。車に乗りこんで時計を見る。七時三十四分。

長官はもう一度ディナー・ジャケットを点検した。

ルースが生きていてくれたらなあ。家政婦はよくやってくれるが、やはり女房とはちがう。スコッチを注いで、服装を点検する。プレスしたばかりのタキシード――やや流行遅れの代物だ。クリーニング屋から戻ってきたワイシャツを着る。ブラック・タイ、黒靴、黒い靴下、白いハンカチ――みんな揃っている。シャワーをひねる。大統領から有益な情報を引きだすにはどうすればよいか? くそっ、石鹸はどこだ? シャワーの下から石鹸を取りに行かなければならない。おかげでバスマットとタオルがぐしょ濡れだ。タオルは一本しかない。石鹸を手にとる、いやな匂いだ。このごろの石鹸メーカーときた日には、ホモ向きの石鹸しか作らない。軍隊の放出石鹸がなつかしい。シャワー・ルームから出る。体重が多すぎる、十五ポンドは減らさなきゃならんだろう。おまけに肌が生っ白い。早くおおい隠して忘れてしまうことだ。ひげを剃る。古いが頼りになる剃刀。大統領と会食する日以外は一日に二度もひげを剃るまいと決心する。よろしい。剃刀傷はつくらずにすんだ。着替えをする。ズボンの前立てはボタン式、ジッパーは大嫌いだ。つぎはブラック・タイをしめる。ルースは一回できちんと結べた。だめだ、やりなおし。やっとうまく結べた。紙入れをのぞく。金も、クレジット・カードも大して必要はない。大統領が貧乏暮しをしているのなら話は別だが。家政婦に十一時ごろ帰るといっておくこと。オーバーを着る。いつものように、捜査官の運転

する車が待っている。

「こんばんは、サム、気持のいい晩だな」

ＦＢＩでただ一人の専属運転手がフォード・セダンのドアをあけた。

車に乗りこんで時計を見る。七時四十五分。

ゆっくりやれ――時間はたっぷりある――早く着きすぎても困る――時間があるときにかぎって道路が空いているようだ――バラが届いているといいが――ジョージタウンへ行くのにわざわざ回り道をしてリンカーン記念館を通りすぎ、ロック・クリークとポトマック・パークウェイをさかのぼる――そのほうが景色がいい――少なくとも景色がいいから回り道をするのだと自分を騙すことができる。黄信号では停車しろ――たとえうしろの車が急いでいるらしく、身ぶりで突っ切れと催促しているとしてもだ。法律を守れ――またしても口実ができた――彼女との約束の時間に遅れているときなら、おれだって黄信号を突っ走るだろうに。ＦＢＩを困らせちゃいけない。ジョージタウンの市電の線路は要注意だ、やたらにスリップする。通りのはずれで右折して、駐車スペースを捜す。ロータリーをゆっくり回りながら文句なしの場所を見つけろ――が、そんな場所はない。仕方なしにダブル・パーキングして、交通警官に見つからないことを祈る。冷静を装って彼女の家のほうへ歩いて行く――きっと彼女はまだ風呂のなかだ。時計を見る。八時四分。完璧だ。呼鈴を押す。

「ちょっと遅れ気味だぞ、サム」それはいわないほうがよかったかもしれない。スピード違反でＦＢＩを困らせることになるかもしれないからだ。どうして急いでいるときにかぎってこう車が多いんだろう？　前のメルセデスはいったいどうしたんだ、ロータリーで信号が赤に変る前から停車したりして。時速三十マイルで走るのもいやだというのなら、百二十マイルも出せる車なんか持たなきゃいいのに。やれやれ、メルセデスはジョージタウン方向へ曲った。おそらく優雅な暮しをしている人種の一人なんだろう。ペンシルヴェニア・アヴェニューに入る。ようやくホワイト・ハウスが見えてきた。ウェスト・エグゼクティヴ・アヴェニューに入る。ゲートの守衛が手を振って通してくれる。西柱廊玄関（ウェスト・ポーティコ）に車をつける。ディナー・ジャケットを着たシークレット・サーヴィスに迎えられる。こいつのタイはわたしのよりうまく結べている。きっとクリップ・オン式だろう。いや、待てよ、ホワイト・ハウスでは正式にタイを結ぶ規則になっている。とすると、この男は女房持ちにちがいない。どうせ自分で結んだわけじゃあるまい。その男の案内でロビーを通って西館（ウェスト・ウイング）レセプション・ルームに入る。途中レミントンの彫刻の前を通りすぎる。やはりディナー・ジャケットを着た別のシークレット・サーヴィスが迎えに出る。こいつのタイもうまく結べている。どうやらわたしの負けだ。エレベーターへ案内される。時計を見る。八時六分。まあまあ悪くない。

西館居室に入る。

「こんばんは、大統領閣下」

「やあ、べっぴんさん」

彼女は例のブルーのドレスを着て、目をみはるほどきれいだった。すばらしい女だ。彼女を疑うなんて、いったいおれはどうしてしまったんだろう？

「いらっしゃい、マーク」

「そのドレス、すてきだよ」

「ありがとう。ちょっとなかへ入らない？」

「いや、すぐでかけよう。ダブル・パーキングしてきたんだ」

「じゃいいわ、コートをとってくる」

彼女のために車のドアをあけてやる。なぜ彼女の手をとってベッドルームに連れこみ、情熱的に愛してしまわなかったのか？　夕食はサンドイッチで充分だったのに。そうすれば両方とも欲していることが実現したうえに、時間と手間も大幅に省けるというものだ。

「きょうはいい日だったかい？」

「とても忙しかったわ。あなたは、マーク？」

仕事をしながら数時間きみのことを考えたが、容易じゃなかったよ。

「猛烈に忙しかったよ。約束の時間に間に合わないんじゃないかと心配したくらいだ」

車をスタートさせる。Mストリートからウィスコンシン・アヴェニューへ。駐車スペースがない。ロイ・ロジャーズ・ファミリー・レストランの前を通りすぎる。チキンのももでも仕入れて家へ帰ろう。

「ほら、あすこが運よくあいてるわ」

ちくしょう、あのフォルクスワーゲンめ、いったいどこから現われやがったんだ？

「今夜はついてないのね、マーク。でもまた見つかるわ」

「そうとも、レストランから四百ヤードもはなれた場所がね」

「歩くのは体にいいわ」

バラは届いたのだろうか？　あの花屋の女店員め、もし送るのを忘れていたらあしたの朝刑務所にぶちこんでやる。

「あら、マーク、ごめんなさい。すてきなバラのお礼を忘れていたわ。あなたがあの白いバラなの？　それにシェイクスピアも？」

「べつに意味はないんだよ」

この嘘(うそ)つきめ。するとシェイクスピアが気に入ってくれたわけだ、しかしコール・ポーターへの答えはどうなんだ？　超一流のフレンチ・レストランに入る。店名はセーヌ左岸(リヴ・ゴーシュ)。こちこち(ゴーシュ)とはよくぞいった。FBIがこんな店に入っていいのか？　きっと片手片足ぐらいはとられるぞ。生意気なウェイターどもがぞろぞろ手をさしだすだろう。なあに、金ですむことじゃないか。

「知ってるかい、この店がワシントンをフレンチ・レストランの首都にした張本人なんだよ」

ちょっとばかり知ったかぶりをして、彼女を感心させてやろうとしている。

「知らないわ、どうしてなの？」
「経営者はシェフをつぎつぎにフランスから連れてくる。その連中が一人ずつやめていって自分の店を開くからさ」
「あなたたちGメンて、役にも立たない情報をよく知ってるのね」
給仕長（メートル・ド）を目で捜す。
「アンドリューズの名前で予約してあるんだが」
「いらっしゃいませ、アンドリューズ様。お目にかかれて光栄です」
こいつと会ったのははじめてだし、たぶんもう二度と会うことはないだろう。どのテーブルに案内するつもりかな？　うん、これなら悪くない。彼女はまさかおれがこの店にはじめてきたとは思わないだろう。給仕長に五ドル紙幣を一枚握らせる。
「ありがとうございます。ではごゆっくり」
彼らは深紅のレザー・チェアに腰をおろした。店は混（こ）んでいた。
「いらっしゃいませ。アペリティフは召しあがりますか？」
「きみはなんにする、エリザベス？」
「カンパリ・ソーダにするわ」
「カンパリ・ソーダを一つと、ぼくはスプリッツァーだ」
メニューを見る。シェフの名前はミシェル・ローディエ。店のモットーは、《漂えど沈まず》（訳注　船を紋章とするパリのモットー）冗談じゃない、こっちは沈没だ。カバー・チャージにサーヴィス・

チャージとくる。こいつは痛い。しかも彼女にはわかりっこない。ここは値段の入ったメニューは男の客にしか見せないという、男女差別レストランの一つなんだから。
「わたしはファースト・コースにするわ、あなたもそれでよければだけど」
「もちろんそれでいいよ」
「それじゃ、まずアヴォカード……」
「クルマエビ抜きで？」
「クルマエビつき、それから……」
「……シーザーズ・サラダ？」
「フィレ・ミニョン・アンリ四世風——レアでね」
しめて二十ドル五十セント。かまうもんか、彼女はそれだけの値打ちがある。おれも同じものにしよう。
「おきまりですか？」
「ああ、アヴォカードのクルマエビつきにフィレ・ミニョン・アンリ四世風のレア、二人とも同じものだ」
「ワイン・リストをごらんになりますか？」
いや結構、おれはビールでたくさんだ。
「ワインをもらうかい、エリザベス？」
「すてきだわ、マーク！」

「オスピス・ド・ボーヌの七八年を一本頼む」

きっとこの男には、おれが学校でおぼえたフランス語は数字だけだということが見通しだろう。

「かしこまりました」

ファースト・コースが運ばれ、それと一緒にワインを持ったソムリエがやってきた。

この蛙野郎め、ボトルを二本も売りつけようという魂胆なら考えなおしたほうがいいぞ。

「ワインをお注ぎしてよろしいでしょうか？」

「いや、まだだ。栓を抜いておいて、メイン・コースのときに注いでくれたまえ」

「かしこまりました」

「アヴォカードでございます、マドモアゼル」

クルマエビは久しからず（プローンズ・ゴー・ビフォア・ア・フォール）（訳注　Pride goes before a fall「驕れる者は久しからず」にかけたしゃれ）。

「こんばんは、ホールルト。FBI暮しはどうですか？」

「なんとか生きのびております」

権力者同士というやつはなんと月並な台詞を口にするものだろう。

長官は感じのよいブルーとゴールドの部屋をちらと見まわした。シークレット・サーヴィス長官のH・スチュアート・ナイトが一人ぽつんとはなれて、部屋のはずれに立っていた。西館と行政府ビルを見おろす窓のそばのソファには、司法長官のマリアン・エイドルマンが

坐って、司法委員長としてテッド・ケネディのあとを襲ったバーチ・ベイ上院議員に話しかけていた。一九七六年の民主党大統領予備選挙の選挙運動期間中に、ベイを評してひんぱんに使われた言葉、「子供っぽい美貌」という使い古された形容が、いまだに彼にはぴったりだった。テキサス選出の痩せた上院議員マーヴィン・ソーントンが、同僚議員とマリアン・エイドルマンのそばでうろうろしていた。

いいか、おれのそばには太った男だけをおいてくれ……（訳注『ジュリアス・シーザー』のなかのシーザーの台詞）。

「ごらんのとおりソーントンを招待しましたよ」

「ええ」

「銃砲所持規制法案を彼に支持してもらわなくてはなりませんからね」

西館居室はホワイト・ハウスの居住階にある居心地のよい部屋で、大統領の夫の化粧室と隣りあっていた。ホワイト・ハウスのこの部屋で接待を受けるのは、たいそう名誉なことだった。しかも階下の大統領食事室ではなく、家族食事室で食事をするというのは、並々ならぬ特別待遇だった。そこは通常家族の食事にしか使われない部屋だからである。大統領の夫君の不在は、この顔合せがきわめてプライヴェートなものであることを裏付けていた。

「なにを飲みますか、ホールト？」

「スコッチ・オン・ザ・ロックスをいただきます」

「長官にスコッチ・オン・ザ・ロックス、わたしはオレンジ・ジュースよ。いま太りすぎを警戒しているところなの」

減量中ならオレンジ・ジュースがいちばんいけないことを、大統領は知らないのだろうか？

「最新の票読みはどんなぐあいですか、大統領閣下？」

「目下のところ賛成が四十八、反対が四十七というところです。三月十日にはどうしても通過させないと、つぎの会期までおあずけだわ。目下わたしの最大の気がかりはそれなんです。おまけにわたしのヨーロッパ訪問とニュー・ハンプシャーの予備選挙があと一年足らず先に迫っていますからね。おそらく再選されるまではこの法案を持ちだすわけにいかないでしょうし、選挙の主要な争点にこれを持ってくるのは危険だわ。選挙前になんとしても立法化して、実施したいのよ」

「十日に成立するよう祈りましょう。そうすればわたしの仕事はうんと楽になります」

「マリアンの仕事もね。もう一杯どうですか、ホールト？」

「いや結構です」

「では、食事を始めましょうか？」

大統領は五人の客を食堂へ案内した。部屋の壁紙にはアメリカ独立戦争のさまざまな場面が描かれていた。家具調度は十九世紀初頭のフェデラル様式だった。

わたしはいつホワイト・ハウスにきても、その美しさを見あきたためしがない。

長官は一八一五年にフィラデルフィアのロバート・ウェルフォードによって設計された漆喰のマントルピースを眺めた。それには一八一二年の戦争のとき、オリヴァー・ハザード・

ペリー海軍准将がエリー湖の戦いのあとで送った有名な報告、「われ敵に遭遇す、敵はわがものなり」が刻まれていた。

「きょうだけで五千人の人間がこの建物を訪れました」と、H・スチュアート・ナイトが話していた。「ところが警備の問題を真に理解している者は一人もいません。この建物はなるほど大統領の住居にはちがいないが、同時に国民のものでもある、そこが民主主義につきものの頭痛の種なんですよ」

もしもH・スチュアート・ナイトがすべてを知ったとしたら……

大統領がテーブルの上座につき、その正面に司法長官が坐った。片側はベイとソーントン、その反対側がFBI長官とナイトの席だった。最初に運ばれた料理はクルマエビつきのアヴォカードだった。

わたしはクルマエビを食べるときまって胸が悪くなる。

「きょうはみなさんにお会いできてうれしいです」と、大統領がいった。「この機会に、三月十日になんとしても議会を通過させるつもりの銃砲所持規制法案について話しあいたいと思います。マーヴィンとバーチを今夜ここに招いたのはそのためです、なにしろお二人の支持いかんがこの法案の運命を左右することになるのですからね」

またしても三月十日だ。たぶんキャシアスは締切りを守らなければならないだろう。ソーントンはこの法案に断固反対だったような気がするし、彼の名前はアンドリューズのリストにも載っている。

「問題は田舎の州ですわ、大統領閣下」と、マリアン・エイドルマンが話していた。「彼らはそう簡単には銃を手放さないでしょうから」

「長い猶予期間、たとえば六か月程度の、がそれを解決するでしょう」と、FBI長官はいった。「そうすればその期間法律は影響を受けずにすみます。これは戦争のあとにはいつも起ることです。その間に広報関係者が、各地の警察署にぞくぞく銃が引きわたされていると発表するのです」

「いい考えだわ、ホールト」と、大統領がいった。

「たいへんな仕事になりそうですわ」と、司法長官。「なにしろナショナル・ライフル・アソシエーションのメンバーだけでも七百万人からいるし、アメリカじゅうではおそらく銃砲の数が五千万挺にものぼるでしょうから」

だれ一人その結論に異を唱えなかった。

セカンド・コースが運ばれた。

ドーヴァー産シタビラメ。どうやら大統領は本気で減量に取り組んでいるらしい。

「コーヒーかブランディはいかがですか？」

「もういいわ」と、エリザベスがマークの手にそっと触れながらいった。「家へ帰って飲みましょう」

「そいつはいい考えだ」

CamScannerでスキャン

彼は彼女の目にほほえみかけて、相手がなにを考えているかを探ろうとした……
「どちらも結構。勘定を頼む」
ウェイターはおとなしく引きさがった。
ウェイターというやつは勘定を頼むといえばきまっておとなしく引きさがる。彼女はまだおれの手をはなしていない。
「とてもおいしかったわ、マーク。ごちそうさま」
「うん、そのうちまたこの店で食事をしよう」
勘定書がきた。それを見てマークはいたましいほど狼狽した。
八十七ドル二十セント、プラス税金。レストランの勘定がはじきだされる秘密を理解できたら、財務長官にだってなれるだろう。アメリカン・エクスプレスのカードを渡す。小さな青い紙きれにサインしろという。思いきって百ドルまで金額をふやし、アメリカン・エクスプレスの名入りの封筒が配達されるまで忘れることにする。
「おやすみなさい、アンドリューズ様」ぺこぺこ頭をさげる。「マドモアゼルとご一緒に、またどうぞ」
「やあ、そうしよう」
このつぎまでおれの顔をおぼえていられるかな？　エリザベスに車のドアをあけてやる。結婚してもこうするだろうか？　なんてこった、もうおれは結婚のことを考えている。
「少し食べすぎたみたい。なんだか眠くなっちゃったわ」

それはいったいどういう意味だ？　解釈の仕方が二十通りは考えられるぞ。
「そうかい、ぼくはどんなことでも覚悟ができてるよ」
ちょっと気のきかない台詞だったかな。ふたたび駐車スペースを捜す。よかった。家の前に一か所あきがあって、今度は割りこんでくるフォルクスワーゲンもいない。エリザベスにドアをあけてやる。彼女が玄関のドアの鍵を捜す。キッチンへ入りこむ。湯わかしを火にかける。
「すてきなキッチンだ」
なんて間の抜けた台詞だ。
「そう、気に入ってもらえてうれしいわ」
これもばかげている。
居間へ移る。
よかった、バラがある。
「ただいま、サマンサ。こっちへきてマークに挨拶しなさい」
なんてこった、これだけ苦労したのにルームメートがいたのか。
サマンサがマークの脚に体をこすりつけて喉を鳴らした。
やれやれ、サマンサはアメリカ女性じゃなしにシャム猫だった。
「どこに坐ったらいい？」
「お好きなところへどうぞ」

なんて薄情な女だ。
「ブラック、それともクリーム入り？　ダーリン」
ダーリンか。見込みは五分五分ってところだな。
「ブラックがいい、砂糖は一個だ」
「お湯がわくまでゆっくりしてて。すぐに戻ってくるわ」
「コーヒーのおかわりは、ホールト？」
「もう充分です。よろしかったら失礼させていただきたいのですが」
「ドアまで送るわ。まだ二、三あなたと話したいことがあるの」
「うかがいましょう、大統領閣下」
西口の海兵隊員が気をつけの姿勢をとった。ディナー・ジャケットを着た男が一人、柱の陰の暗がりをうろついていた。
「この銃砲所持規制法案には、あなたの全面的協力が必要なのです、ホールト。委員会はあなたの意見を求めるに決っています。それに下院の情勢はわたしたちに有利だけど、土壇場でのうっちゃりだけはどうしても避けたい。わたしにはもう時間がないんです」
「わたしはあなたの味方です。ジョン・F・ケネディの死以来ずっとこの法案の成立を望んできました」
「なにか特別心配なことでもあるの、ホールト？」

「べつにありません。あなたは政治に専念して法案に署名をする、それを執行するのがわたしの役目です」
「なにかわたしにいいたいことがあったら……」
「いや、とくにありません」
三月十五日を警戒せよ（訳注－暗殺の日）。
「……ただ、いつも不思議でならないんですが、なぜこの法案をいままで放置しておいたんですか？　もしも三月十日になにか支障が生じて、しかもあなたが来年の選挙で負けることにでもなれば、われわれはまた振出しに戻ってしまいます」
「わかってるわ、ホールト、だけどわたしは医療保障法案――これまた政権の発足に当って手をつけるには難かしい問題だった――と銃砲所持規制法案のいずれかを選ばなければならなかったの。下手をするとあぶはち取らずになりかねなかった。実をいうと、わたしはこの法案を一年早く委員会に持ちだすつもりでいたのだけど、ナイジェリアが予告なしに南アフリカを攻撃するとは、ましてアメリカがアフリカ大陸における立場を決定しなければならなくなるとは、だれにも予測できなかったのよ」
「たしかにあの問題では危ない橋を渡りましたね。正直いって、あのときはあなたのやり方が間違っていると思いましたよ」
「わかっているわ、ホールト。わたし自身いく晩も眠れなかったほどです。しかし、また銃砲所持規制法案に戻るけど、デクスターとソーントンが上院の歴史上最も効果的な議事進行

妨害の長演説を、二人で連携してやってきたことを忘れないでね。バード上院議員の与党院内総務としての無言の支持にもかかわらず、三月十日でこの法案の審議はまる二年かかったことになるわ。でもわたしは心配していないわ。三月十日にはたぶんうまくゆくと思うの。失敗する要素がなにも見当らない、そうじゃないかしら、ホールト？」

長官は一瞬答えをためらった。

「そうですとも」

わたしはきょうはじめて大統領に嘘をついた。万一大統領が三日後に暗殺された場合、調査委員会は嘘をついた理由を信じるだろうか？

「ではおやすみなさい、ホールト」

「おやすみなさい、大統領閣下、すばらしい夕食にお招きいただいたことを感謝します」

長官は外へ出て車に乗りこんだ。運転席の捜査官が彼のほうを振り向いた。

「たったいま重要な連絡が入りました。すぐに本部へお帰りになれますか？」

またか。

「そうしよう、しかし税金でただの家に住んでいると文句をいうやつさえいなければ、本部にベッドでもおいておくほうが面倒がないな」

運転手は声をたてて笑った。きっと楽しい食事だったのだろうと彼は思った。ところが、実際には食事どころではなかったのだ。

エリザベスがコーヒーを運んできて、彼の隣に腰をおろした。

美女に値するのは勇者のみ。さりげなく腕を持ちあげて、ソファの背にまわし、彼女の髪にそっと触れる。

エリザベスが立ちあがった。「あら、うっかりしてたわ。ブランディを召しあがる？」

いや、ブランディなんかほしくない。きみに戻ってもらいたいだけだ。

「いや、結構」

彼女はふたたびマークの肩にもたれた。

彼女がコーヒー・カップを手に持っているうちはキスできない。よし、カップをおいたぞ。ちくしょう、また立ちあがった。

「音楽を聞きましょうよ」

音楽なんか聞きたくもない。

「そいつはいい」

「『イン・メモリー・オヴ・シナトラ』はどうかしら？」

「すてきだよ」

……「今度はあと一息でぴったりだった……そうだろう……ギャル？」

この歌詞は絶対にまちがっている。ああ、彼女が戻ってきたぞ。もう一度キスを狙ってみろ。くそっ、またコーヒーだ。やっとカップをおいたぞ。そっと、やさしく。そうだ、いいぞ。彼女は美しい。長いキス——彼女は目をあけているかな？——いや、閉じている。キス

を楽しんでいるんだ――よし――もっと長く、ますますいいぞ。

「コーヒーのおかわりは、マーク？」

ノー、ノー、ノー、ノー、ノー！

「いや、もういい」

もう一度長いキス。背中にまわした手を動かしはじめる――この前もここまではいった――まさかいやとはいうまい――脚のほうへ手を移動させる――一休み――なんてすばらしい脚だ、しかも二本もある。脚から手をはなして、キスに専念する。

「マーク、あなたに話したいことがあるの」

ああ、神さま！　たぶん彼女はメンスなんだ。おれはなんて運の悪い男だろう！

「なんだい？」

「あなたが好きよ」

「ぼくも大好きだよ、ダーリン」

彼女のジッパーをおろして、やさしく愛撫しはじめた。彼女も彼の脚に手を這わせはじめた。

落ちつけよ、これから先は天国だ。

リン、リン、リン、リン。

くそったれ！

「あなたによ、マーク」

「アンドリューズか？」
「そうです」
「ジュリアスだ」
くそっ。
「すぐにかけなおします」

三月八日　火曜日朝

午前一時〇〇分

教会墓地の隅に立つ男は、自分の背中をとんとんと叩いて、三月の深夜の寒さを追い払おうとしていた。映画のなかでジーン・ハックマンがそうするのを見たことがあるが、そのときはりっぱに効果があった。だが、この男の場合は全然体が暖まらない。たぶんミスター・ハックマンが恩恵をこうむったワーナー・ブラザーズの巨大なアーク・ライトが自分にも必要なのだろう。そう思いながら、背中を叩きつづけた。

実際には、見張りの男は二人いた。ケヴィン・オマリー捜査官と、ピアース・トンプスン支局副班長で、二人ともその能力と慎重さを買われて、タイスンによってこの任務に抜擢されたのだった。二人とも同僚の捜査官を尾行して、エリオットに報告せよと長官から指示を受けたとき、べつに意外には思わなかった。マークはエリザベスの家へ入ったきりなかなか出てこなかったが、オマリーは無理もないと思った。ピアースが墓地を出て、オマリーのそばにやってきた。

「おい、ケヴィン、ほかにもアンドリューズを尾行しているやつがいることに気がついたかい？」

「ああ、あれはマトスンだよ。なぜだい？」
「彼はFBIをやめたはずだがな」
「そうだよ。おれはホールトのおやじが念を入れたんだろうと思っていたよ」
「たぶんそういうことだろう。しかしタイスンはなぜおれたちに話さなかったのかな？」
「この仕事は異例ずくめだからさ。だれもなにも話してくれない。エリオットに訊いてみるか」
「エリオットに訊くぐらいなら、リンカーン記念館に訊くほうがましなぐらいさ」
「それとも長官にじかに訊くかい？」
「ごめんだね」
数分間経過した。
「マトスンに話しかけてみるかい？」
「特別命令を知ってるだろう。だれとも接触しちゃいかんといわれている。たぶんマトスンも同じ命令を受けていて、われわれが話しかけたことを報告するかもしれんぜ。あいつはそういう男だからな」
オマリーが家を出るマークに最初に気づいた。マークはたしかに片方の靴を手にぶらさげているようだった。よく見るとそのとおりで、大あわてで走って行く。そこでオマリーは彼を追いかけた。焦っちゃいかん、とオマリーは思った。マークは公衆電話の前で立ちどまった。尾行者は新しい暗がりにひそんで、またウォーミング・アップを続けた。走ったおかげ

でいくらか体が暖まっていた。

マークはクォーターを二枚しか持っていなかった。あとはみなエリザベスのソファのそばの床に散らばっていた。長官はどこから電話してきたのだろう？　FBI本部からだろうか？　そんなはずはない、こんな時間に本部でなにをしているというんだ？　大統領と食事をしているはずじゃなかったのか？　マークは時計を見た。もう一時十五分だ。だったら自宅からにちがいない。自宅じゃないとしたら、クォーターが足りなくなってしまう。マークは手にぶらさげた片方の靴をはいた。スリッポンだから簡単にはける。舌打ちしながら、クォーターを一枚ほうりあげた。ジョージ・ワシントンが出たら、本部に電話。「衆をもって一を成す（訳注　アメリカ合衆国の国是）」が出たら、自宅だ。コインを受けとめる――ジョージ・ワシントンだ。マークは本部の長官専用電話の番号を回した。

「もしもし」

ジョージ・ワシントンに神の祝福あれ。

「ジュリアスですが」

「すぐにここへこい」

不機嫌そうな声だった。たぶんなにか重大な新情報を仕入れてホワイト・ハウスから戻ってきたばかりか、さもなきゃ食べたもので消化不良でも起したんだろう。

マークは急いで車のほうに戻りながら、シャツのボタンとタイを点検した。片方のソックスの踵が土踏まずのあたりにきているらしくて、いやに気持が悪かった。暗がりにひそんで

いる男のそばを通りすぎた。男は車のそばに戻ってためらうマークをじっと見守った。エリザベスのところへ戻って話すべきだろうか？　話すったって、なにを？　彼は明りのともった窓を見あげて、深い溜息をつき、もう一度舌打ちした。それからメルセデスのバケット・シートに身を沈めた。冷たいシャワーを浴びている暇さえなかった。

本部まではわずか数分の距離だった。道路はがらがらに空いていて、コンピューター操作の信号をノン・ストップで通過することができた。

マークはFBIの地下駐車場に車を入れた。すぐに彼を待っていたにちがいない例の名なしの男が現われた。この男は全然寝ないのだろうか？　なにかの不吉な前兆かもしれない、がいつものように相手は一言も口をきかないので、うかがい知る由もなかった。たぶんこいつは宦官なんだ、とマークは思った。運のいいやつだ。彼らは一緒にエレベーターに乗りこんだ。名なしの男は音もたてずに彼を長官室へ案内した。こいつはいったいどんな趣味を持っているのだろうか、とマークは思った。聾唖者のための国立劇場のプロンプターというところかな。

「ミスター・アンドリューズです」

長官はやあともいわなかった。いまだに正装したままで、雷のようにこわい顔をしていた。

「かけろ、アンドリューズ」

アンドリューズに逆戻りだ、とマークは思った。

「きさまを駐車場へ連れて行って、壁を背にして立たせ、撃ち殺せるものなら撃ち殺してや

りたい」

マークはなんのことかわからないふりをした。ニック・ステームズにはその手が効果的だった。が、長官にはさっぱり通じないようだった。

「この間抜けの、うすのろの、無責任で、無分別な大ばか野郎め」

マークは自分を殺そうとしているかもしれない連中よりも、長官のほうが手強い相手だと判断した。

「きさまはおれとＦＢＩと大統領を危地に陥れた」と、長官は続けた。マークは自分の心臓の鼓動を聞いた。数をかぞえたら、おそらく百二十にはなっていただろう。タイスンは依然として荒れ狂っていた。「きさまを停職かくびにできたら事は簡単なんだが。上院議員は何人残っている、アンドリューズ？」

「七人です」

「名前をいってみろ」

「ブルックス、ハリスン、ソーントン、バード、ナン、デクスター……デクスター、それから……」マークの顔が青ざめた。

「イェールを最優等で卒業したくせに、きさまの無邪気さときたらボーイ・スカウトなみだ。きさまがはじめてドクター・エリザベス・デクスターと会ったとき、われわれは愚かにも、彼女が三月三日にウッドロー・ウィルソンの当直医だったことを知って、愚かにも」――彼はその言葉をいちだんと語気を荒らげて繰りかえした――「きさまがなにか手がかりをつか

んだものと思いこんだ。ところがどうだ、彼女はわれわれが大統領暗殺計画の犯人ではないかと疑っている七人の上院議員の一人の娘であるばかりか、それでもまだ足りないかのように、きさまがその娘との情事にうつつを抜かしていることまでわかったというわけだ」

マークは抗議しかけたが、舌がいうことをきかなかった。

「どうだ、彼女と寝たことを否定できるのか、アンドリューズ？」

「できますよ」と、マークはたいそう落ちついて答えた。

長官は一瞬呆れてものがいえないという表情をうかべた。「おい若造、われわれはあの家を盗聴したのだ。あそこでなにがあったかは手にとるようにわかっている」

マークははじかれたように椅子から立ちあがった。狼狽が激しい怒りに場所をゆずった。

「あんたの電話が邪魔しなかったら」と、彼は叫んだ。「いまの質問を否定できなくなるはずだったんだ。だれかを愛するってことがどんな気分なのか、あんたはもう忘れたのか？　それとも人を愛したことがないのか？　ＦＢＩなんかくそくらえ、こんな言葉はめったに使わないが、ついでにあんたもくそくらえだ。ぼくは一日十六時間働かされて、夜だって全然眠っていないんだ。だれかがぼくを殺そうとしているかもしれないっていうのに、いちばん信頼していたあんたが、部下の名なしのポン引きどもに命じてぼくのやることを覗き見させていたとはね。みんな地獄の火で焼かれてしまうがいい。これじゃむしろマフィアに仲間入りするほうがましだよ。マフィアなら部下にたまには息抜きさせてくれるだろう」

マークがこれほど腹を立てたのは生れてはじめてだった。彼は椅子に倒れこんで判決を待

った。彼の唯一の強味は、もうどうなってもいいという開きなおりだった。長官はなにもいわなかった。窓ぎわに歩み寄って外を眺めた。それからゆっくり戻ってきて、どっしりした肩と大きな顔をマークのほうに向けた。いよいよだ、とマークは観念した。

長官は彼から一ヤードはなれたところで立ちどまって、最初の顔合せのときと同じように真正面から彼の目を見すえた。

「許してくれ」と、長官はいった。「わたしの考えが足りなかった、なにしろこの事件が気がかりで偏執狂になりかけているんでな。たったいま、健康で、ぴんぴんしていて、この国の将来に関するもろもろの計画で頭がいっぱいな大統領と別れてきたとたんに、彼女がそれらの夢を実現させる唯一の希望が、こともあろうにいまこの瞬間彼女の暗殺計画をめぐらしているかもしれない七人のうちの一人の娘と寝ているという話を聞かされた。そう聞いただけでかっとなってしまって、ほかのことまで気が回らなかったのだ」

大した人物だ、とマークは思った。

長官は彼から目をはなさなかった。

「とにかくデクスターではないことを祈ろう。というのは、もし彼だとしたら、きみもかなりの危険にさらされていることになるかもしれないからだ、マーク」彼はまた一息入れて続けた。「ところで、きみのいう名なしのボン引きどもも一日十六時間休みなしで夜昼きみを護衛している。そのなかには女房子供のあるやつもいるのだ。ま、わかってしまった以上は仕方がない。仕事に戻るとしよう、おたがいにあと三日間は正気を失わないようにすること

だ。わかったことは一つ残らず忘れずに報告してくれ」

マークは勝った。いや、彼の負けだった。

「七人の上院議員がまだ残っている」その口調はゆっくりで、疲労の色が濃く、長官はまだ神経が苛立っているようだった。マークはこんな長官を見るのははじめてだったし、おそらくそれはFBIの人間の大半が見たことのない彼の一面だろうと思った。

「大統領と話してみた結果、三月十日と問題の上院議員を結びつけるのは銃砲所持規制法案かもしれないという考えが裏付けられた。法案の計画段階を扱った司法委員会の委員長も同席していた――ベイ上院議員だ。彼は依然としてリストに残っている。きみは彼と司法委員会に名をつらねているほかの容疑者が、同法案に関してどんな発言をしたか調べてみろ――が、外交委員会のピアスンとナンからも目をはなさないことだ。残された時間はあと三日しかない。わたしはあくまで最初の計画を固守して、さしあたりは成行きにまかせるつもりだ。ただしまだ最後の土壇場で三月十日の大統領の日程を変更させることはできる。なにかつけ加えることはあるかな、マーク？」

「いいえ」

「きみのプランは？」

「あす外交、司法両委員会の事務局長と会う予定になっています。そうすればこの問題にどうアプローチして、なにを捜せばよいかということがもっとはっきりしてくると思います」

「よかろう。万一わたしがなにかを見逃しているといかんから、その二人から徹底的に聞き

だしてくれ」
「はい」
「指紋係が例の二十八枚の紙幣を、残業して調べている。目下のところ、ミセス・カセフィキスの指紋を捜しているだけだ。それがわかれば、少なくともどの紙幣に男の指紋が残されているかがわかる。これまで指紋は千以上検出されているが、ミセス・カセフィキスの指紋はまだ見つかっていない。なにかわかったらすぐきみに知らせるとしよう。では、おたがいにくたくただから、きょうはこのへんにしよう。あすの朝は七時にこなくていい」――長官は時計を見て訂正した――「いや、今朝はだ。つぎは水曜日の朝七時だ、それから先はまる一日しかないから、遅れずにきてくれよ」
マークはもう帰ってよいといわれていることがわかったが、どうしてもいっておかなければならないことがあった。長官は顔をあげると、たちまち彼の気持を読みとった。
「いまはなにもいうな、マーク。帰って少し休め。わたしはくたびれきった老人だが、それでも木曜日の晩はやつらを一人残らず鉄格子のなかにぶちこんでやりたい。きみのために、デクスターが無関係であることを祈るよ。しかし、どんなことにも目をつぶるなよ、マーク。恋は盲目というが、せめて耳と口は使いものになることを祈ろうじゃないか」
まったく大した人物だ、とマークは思った。
「ありがとうございます。では、水曜日の朝うかがいます」

マークはFBIの駐車場からゆっくり車を出した。くたくたに疲れていた。名なしの男の姿は見当らなかった。バックミラーをのぞくと、ブルーのフォード・セダンが尾けていたが、今度はさっきまでとちがって大っぴらだった。彼らが敵か味方かをどうやって区別したらいいのか？　あと三日たてばわかるだろう。来週のいまごろ、おれはすべてを知っているか、なにも知らないかだ。そのころ大統領は生きているだろうか、死んでいるだろうか？

アパートの入口でまだ起きて働いているサイモンが、上機嫌でマークにほほえみかけた。

「うまくいったかい？」

「それがどうもね」

「淋しかったらいつでもおれの妹を呼んでやるぜ」

マークは無理に笑おうとした。

「親切はありがたいが、今夜は遠慮しとくよ、サイモン」彼は車のキイを投げてやって、エレベーターのほうへ向った。部屋に入ってドアをロックすると、寝室へ行ってシャツとタイを脱ぎ、受話器をとりあげて七桁の数字をゆっくり回した。やさしい声が耳に響いた。

「まだ起きていたのかい？」

「ええ、お目々ぱっちりよ」

「愛してる」彼は受話器をおいて、眠った。

三月八日　火曜日朝

午前八時〇四分

電話が鳴っていたが、マークはまだ深い眠りのなかをさまよっていた。電話はなおも鳴り続けた。ようやく眠りからさめて、時計の文字盤に目の焦点を合わせた。八時五分。しまった、たぶん長官にどこをうろついていたとどなりつけられるだろう。いや待てよ、今朝は長官と会う約束じゃなかった、そう決めたんじゃなかったっけ？　彼はあわてて受話器をとった。

「もう起きてる？」

「ああ」

「わたしも愛してるわ」

かちっと電話が切れた。こいつは朝から縁起がいいぞ、だが待てよ、きょうは彼女の父親のことを一日がかりで調べる予定だと知ったら、彼女はどういうだろう……そして長官はほぼ間違いなく彼女を調べているだろう。

マークは完全に目がさめるまで冷たいシャワーを浴びつづけた。急に目をさましたときは、いつでもまたベッドにもぐりこみたくなる癖があった。来週こそは、と彼は自分に約束した。

来週はやりたいことが山ほどあった。時計を見る。八時二十五分。今朝は朝飯抜きだ。世の中でなにか事件が起きていやしないかと、テレビのスイッチを入れた。バーバラ・ウォルターズがCBSの椅子から転げ落ちるようなニュースが持ちあがっていた。えっ、なんだって？

「……さて、つぎは人類がなしとげた最大の業績の一つ、アメリカの宇宙船が木星から撮った最初の写真です。いままさに歴史が作られつつあります、しかしその前に特別なお子様たちのための特別なお菓子、ジェローからのコマーシャルをどうぞ」

マークは笑いながらテレビを消した。木星もジェローも来週まわしだ。

遅くなりそうだったので、アパートのすぐ隣のウォーターフロント駅から地下鉄に乗ることにした。朝早くて道路がまだ空いているうちは話が別だが、八時三十分ともなると、バンパーとバンパーがくっつくようなひどい混みようになってしまう。

地下鉄の入口はイルミネーションのMの字をあしらったブロンズの塔門が目印になっている。マークは路上から地下鉄駅まで運んでくれるエスカレーターに乗った。トンネルのような駅は、蜂の巣状の彎曲した天井の下で灰色にくすんで暗く、ローマの浴場を連想させた。料金は一ドル。ラッシュ・アワー料金だ。途中で乗換えなければならない。また一ドル。マークはポケットを探ってきっかり一ドル取りだした。都心へ着いたら忘れずにクォーターをたくさん用意すること。つぎのエスカレーターに乗ってプラットフォームへおりたとき、自分にそういいきかせた。午前六時三十分から九時までのラッシュ・アワーには、電車は五分

間隔で到着する。プラットフォームの丸いランプが点滅して、電車が入ってきつつあることを告げた。自動ドアがあいた。マークはカラフルな、照明の明るい車輌（しゃりょう）のなかの満員の乗客に仲間入りし、五分後には自分の下車駅を知らせる車内放送を聞いた。ギャラリー・プレース駅。プラットフォームに出て、レッド・ラインの電車を待つ。ワシントン支局に出勤するときはグリーン・ラインの電車でいいのだが、キャピトル・ヒルへ行くには途中で乗換えなければならない。四分後に、ユニオン・ステーション・ヴィジターズ・センターの陽光（ひざし）のなかへ出た。そこはワシントン発着のバス、列車、地下鉄交通の根拠地としてにぎわっている。一九七七年にそれに批判的だった人々が予言したよりもはるかによく機能していた。ダークセン上院オフィス・ビルディングはそこから三ブロックはなれた一番ストリートとコンスティチューション・アヴェニューの角にあった。このほうがずっと早いし、精神衛生上も望ましい、と彼はコンスティチューション・アヴェニュー側の入口からなかに入りながら思った。なんだって不便な車なんか乗りまわすんだろう？

入口でブリーフケースや荷物を検査している議事堂警察の二人の警官の前を通りすぎて、一般用エレベーターのUPボタンを押した。

「四階を頼む」と、エレベーター係にいった。

外交委員会の公聴会が間もなく始まろうとしていた。マークは《ワシントン・ポスト》から切り抜いてきた「本日の両院議事日程」のリストを、コートのポケットから取りだした。

「外交委員会、午前九時三十分。公開。合衆国の対欧州共同市場政策に関する公聴会、政府

代表者。ダークセン上院オフィス・ビルディング、四二二九号室」マークが廊下を歩いて行くと、マサチューセッツのラルフ・ブルックス上院議員が四二二九号室に入りこんだので、マークもあとに続いて公聴会場に入った。

精力的で、映画スター並みの美貌の持主である長身のブルックス上院議員は、パーキン大統領の死去に伴ってフロレンティナ・ケインが大統領に就任すると同時に、国務長官の彼を更迭するまで、彼女の政治歴のあらゆる段階につきまとってきた。

彼はただちに上院で彼女が占めていた議席をとりかえし、民主党の大統領選候補としてフロレンティナ・ケインに対抗して名乗りをあげ、五回に及んだ投票で惜敗した。

その彼がみずから大統領の地位につくために彼女を殺そうとするだろうか？　それは理屈に合わない。ケイン大統領が暗殺されれば、彼よりも年若いビル・ブラッドリー副大統領が後継者となって、ブルックスにはチャンスがなくなってしまうからだ。従ってブルックス上院議員は重大な脅威とは考えられなかったが、それでもマークが彼をリストから除くためには確たる証拠が必要だった。

公聴会場は明るい色のウッド・パネルをはりめぐらし、壁の低い部分とドアのまわりにグリーンの大理石でアクセントをつけた部屋だった。部屋の一端に壁と同じ明るい色の半円形の木のテーブルがあって、そこだけほかより一段高くなっていた。焦茶色の椅子が十五あって、そのうち十だけに人が坐っていた。ブルックス議員はすでに着席していたが、事務職員、補佐官、新聞記者、政府役人といった連中はまだうろうろ歩きまわっていた。議員席のうし

うの壁には大きな地図が二枚、世界地図とヨーロッパ地図が貼ってあった。議員席のすぐ前の一段低くなった机に、速記タイピストが坐って、議事内容を一字一句もらさずに記録すべく待機していた。正面には証人用の机があった。

部屋の半分以上が傍聴者用の椅子にさかれ、傍聴席はすでにほぼ満員だった。ジョージ・ワシントンの肖像画が部屋全体を見おろしている。ワシントンは生涯の最後の十年間を、肖像画のためにポーズをとることですごしたにちがいない、とマークは思った。

ブルックス上院議員が補佐官に何事か耳打ちしてから、木槌を鳴らして静粛を求めた。

「開会の前に」と、彼はいった。「上院事務職員ならびに新聞記者諸君に議事日程の変更をお知らせしておきます。今日と明日、当委員会は国務省関係者から欧州共同市場に関する証言を聴取します。そのあとこの証言聴取の続行を来週まで延期して、アフリカへの兵器売渡しという緊急かつ論議の多い問題に取組む予定です」

すでに室内の大部分の人間が着席し、政府証言者たちは手元のメモに目を通していた。マークは大学時代のある夏にキャピトル・ヒルで勉強したことがあったが、いまなおこうした公聴会に出席する議員の数が少ないことに苛立ちを禁じえなかった。各議員が三つかそれ以上の委員会と無数の小委員会および特別委員会の委員を兼任しているために、そのうちのどれかを専門にして、専門外の委員会では同僚議員や事務職員の能力に頼らざるをえない。そのため委員会の公聴会に出席する議員の数が三人ないし二人、ときにはたった一人ということも決してまれではないのだ。

いま論議されている問題は、NATO（北大西洋条約機構）を解散する法案だった。この十年間に、ポルトガルとスペインが行儀のよい二個のドミノのように、ともに共産化して欧州共同市場から脱退してしまった。それに続いてスペイン国内の軍事基地が消滅し、ファン・カルロス国王はイギリスで亡命生活を送っていた。NATOはポルトガルにおける共産政権の成立には万全の備えをしていたが、ついにイタリアに人民戦線政府が出現するに及んで、事態の収拾がつかなくなってしまった。教皇庁はすでに実証ずみの方法に頼って堅くその門を閉ざしてしまい、合衆国はアメリカのカトリック勢力の意見に押し切られて、イタリア新政府への経済援助を打ち切った。イタリアはNATO基地の閉鎖という手段でそれに報復した。

イタリア崩壊による経済的波紋はフランスの総選挙に影響を与えたと考えられている。この選挙ではシラクとドゴール派が勝利をえた。最近、社会主義のより過激な形がオランダとスカンジナヴィアのいくつかの国で拒絶されている。ドイツは彼らの社会民主主義に満足している。しかしながら西欧が二十世紀最後の十年間に入った現在、NATOにおけるアメリカの真の同盟国は、最近二月の総選挙で保守党が逆転勝利をえたイギリスだけである、とピアスン上院議員が力説していた。

イギリス外相ケネス・クラークは、NATOの正式解散に強く反対していた。このような動きはイギリスとアメリカ合衆国の同盟関係を断ち切ると同時に、いまでは十五の加盟国のうち七か国まで共産主義国かまたはそれに近い状態にある欧州共同体にイギリスを売り渡す

ものであると。ピアスン上院議員はテーブルをどんと叩いた。「われわれはイギリスの意見を真剣に考慮すべきであり、決して目先の戦略的利益にのみとらわれてはならないと考えます」

ブルックスとピアスンが国務省の証言者たちにスペインの政治情勢について質問するのを一時間ほど聞いたのち、マークは目立たないように部屋から抜けだして、廊下の同じ側にある外交委員会事務局に入りこんだ。秘書が委員会事務局長のレスター・ケネックは不在だと告げた。マークは前の日に学位論文のための研究をしている学生を装って、ケネックと電話で話していた。

「だれかほかに外交委員会について話をしてくれそうな人はいませんか？」

「事務職員のポール・ラウにきいてみましょう」秘書は電話を取りあげた。間もなく眼鏡をかけた痩せ型の男が奥の部屋から現われた。

「どんなご用件でしょう？」

マークは委員会のほかのメンバー、とくにナン議員の活動ぶりを見たいのだと答えた。ラウは辛抱強く微笑しながらいった。「それならわけありません。あすの午後か木曜日に、アフリカへの兵器売渡し問題の審議を傍聴しにいらっしゃい。ナン議員は間違いなく出席しますよ。それに欧州共同市場問題よりはこっちのほうがはるかにおもしろいこと請合いです。実はこの審議は非公開なんですが、ミスター・ケネックに頼めばきっと傍聴できるように手

配してくれるでしょう」

「どうもありがとう。ところでナン議員とピアスン議員は二月二十四日、または先週の木曜日の公聴会に出席したかどうか、おぼえていますか？」

ラウは眉(まゆ)をひそめた。「さあ、わたしは知りません。たぶんケネックなら知ってるでしょう」

マークは重ねて礼を述べた。「それからもう一つ頼みがあるんですが、上院傍聴席のパスをいただけませんか？」秘書がカードにスタンプを捺(お)して、彼の名前を記入した。マークはエレベーターのほうへ歩きだした。アフリカへの兵器売渡しか、とマークは思った。木曜日では遅すぎる。ちくしょう。あの連中の一人がなぜケイン大統領を殺そうとするのか、おれにわかるはずがないじゃないか。狂信的なミリタリズムか、それとも過激な人種差別主義がからんでいるのか？　さっぱりわからない。なぜじゃない、だれがが問題なんだ、と彼は自分にいいきかせた。そんなことを考えながら歩いて行くうちに、荷物を抱えて廊下を走ってきた上院のページ・ボーイをあやうく突き倒しそうになった。議会には全国各地から少年少女を集めたページ・スクールがあって、生徒たちはそこで勉強しながら議事堂内の「使い走り(ゴーファーズ)」として働いている。彼らはダーク・ブルーと白の制服を着て、いつも急いでいるような印象を与える。マークは衝突する一歩手前で立ちどまり、少年は足並みに少しの乱れも見せずに彼をよけて通りすぎた。

マークはエレベーターで一階へおりて、ダークセン・ビルディングからコンスティチュー

ション・アヴェニューへ出た。議事堂構内を横切って、上院側から議事堂内に入り、一般用のエレベーターを待った。

「きょうは忙しい」と、守衛が話しかけた。「大勢の観光客が銃砲所持規制の傍聴につめかけているもんでね」

マークはうなずいた。「上でもだいぶ待たされるのかな？」

「そうだと思うよ、たぶん」

エレベーターが到着し、傍聴席の入口で守衛がマークをもの珍しそうな顔をした観光客の列に並ばせた。マークは苛立っていた。彼は守衛の一人を手招きした。

「ねえ、ぼくは一般傍聴者用のパスを持っているけど、実は勉強をしにきたイェールの学生なんだ。特別に入れてもらう方法はないものかな？」

守衛は同情するようにうなずいた。

数分後に、マークは議場に入りこんでいた。傍聴席からは議場の一部しか見えなかった。議員たちは議長席と向いあった半円形の議員席についていた。だれかの発言中も事務職員や議員たちがあちこち歩きまわって、真に重要な駆引は、ドラマティックな論争ではなく、ひそひそ声の話合いのなかでおこなわれているような印象を与えた。

司法委員会は長期間にわたる公聴会と討論をおえて、二週間前に法案を提出していた。下院はすでに同法案を通過させており、もしそれが承認されるとすれば、より厳密な上院のそれと一致しなければならなかった。

デクスター上院議員が発言していた。おれの将来の義父？　とマークは思った。どう見ても人殺しには見えないが、それじゃほかの議員は人殺しに見えるか？　彼は娘にすばらしい黒髪を与えた、もっとも彼のこめかみには白いものが混っているが。年のわりには白髪が少なすぎる、とマークは思った――政治家の見栄というやつだろうか？　それから彼女の黒い瞳も父親ゆずりだった。彼は周囲の人間の大部分を見くだしているような態度で、論点を強調するためにその長い指で机をこつこつと叩き続けていた。

「この法案の審議に当って、われわれは重要な、そしておそらくは決定的な問題を避けて通ってきました。それはなにかといえば、連邦制度の原則であります。過去五十年間にわたって、連邦政府はかつて各州が持っていた権力を奪い続けてきた。今日われわれは、あらゆる問題の解決を大統領に、連邦議会に期待しています。建国の父たちは決して中央政府にこれほどの権力を与えることを意図しなかったし、わが国のように広大で多様性に富む国を、そのような中央集権制によっては、民主的かつ能率的に統治することは不可能であります。さよう、われわれはだれしも犯罪を減少させることを願ってやみません。しかし犯罪にも地域差があります。わが国の憲法制度は、賢明なことに、真に国家的な問題を扱う連邦刑法の場合を除いて、犯罪規制の仕事を各州にゆだねております。しかし銃砲による犯罪は地方的性格を有するものであり、これらを防止するための立法および法の執行は地方レベルでおこなわれるべきものであります。民衆の考え方と犯罪問題の特徴を理解し、公僕がそれに対処することは、州および地方レベルにおいてのみ可能であります。

「同僚議員のなかには、自動車と運転者の登録を要求している以上、銃砲もまた登録制にすべきであると主張される方もあるでしょう。しかし、みなさん、われわれはいかなる全国的な自動車および運転者登録法も持っていません。これらの問題は各州に決定がゆだねられております。なにが妥当であり必要であるかの決定は、州民の利益を考慮に入れたうえで、各州当局によっておこなわれるべきであると、わたしは考えるものであります」

デクスター上院議員は発言権を二十分間にわたって独占してから、議長にゆずった。きょうの議長はケンプ上院議員で、彼はブルックス上院議員の発言を認めた。ブルックスは前置きをおえて、用意したスピーチに入った。

「……中東、アフリカ、北アイルランド、チリにおける殺戮に終始一貫非難の声をあげてきました。われわれはヴェトナムの流血に終止符をうちました。しかし、われわれ自身の社会で、この国の路上で、毎日のように繰りかえされている殺しあいには、いったいいつになったら目を向けるのでしょうか？」ブルックスは一呼吸おいて、同法案反対の急先鋒であるサウス・カロライナ選出のハリスン上院議員に視線を向けた。「われわれはまた新たな国家的悲劇に見舞われないかぎり、ついにその重い腰をあげないのでしょうか？　ジョン・ケネディの暗殺ののち、ようやくにしてトーマス・ドッド上院議員の拳銃所持規制法案が上院の委員会で真剣に取りあげられました。しかしその立法化はついに成らなかった。奪われた銃のみならず店頭で買われた銃までも使用された一九六五年のワッツ暴動のあと、上院は拳銃の規制に関する公聴会を開きました。このときも具体的な措置はとられていない。司法委員

会が犯罪規制一括法案の追加条項として拳銃の州間売買を規制する法案を通過させるまでには、実にマーティン・ルーサー・キングの暗殺が必要だったのであります。ロバート・ケネディ暗殺のあと、はじめて下院の意見が一致を見ました。一九六八年の暴力に呼応して、われわれは拳銃所持規制法を成立させた。しかし、この法律には巨大な抜け穴がある――拳銃の国内生産はその規制の対象外におかれているのです。なぜかといえば、当時はアメリカで入手できる拳銃の八〇パーセントが国外で生産されていたからです。一九七二年に、ジョージ・ウォレスが安物の護身用拳銃（サタディ・ナイト・スペシャル）で撃たれたあと、上院はようやくその抜け穴をふさぐために立ちあがりました。しかしこの法案は下院委員会で息絶えてしまったのです。

「それから約二十年経過した現在、一九八一年にレーガン大統領がピストルを持った男に襲われて重傷を負った事実、さらにアメリカでは二分間に一人の割合で銃による殺人がおこなわれているという事実を無視して、われわれはいまだに効果的な銃砲所持規制法を持たないまま暮しているのです。いったいわれわれはなにを待っているのか？　だれかが大統領を暗殺するのを待っているのか？」彼はその言葉の効果をあげるために一呼吸いれた。「アメリカ国民は銃砲所持規制の立法化を支持しております。どの世論調査でも答えはそう出ているし、しかもその傾向は十年前からはっきりしております。なにゆえわれわれはナショナル・ライフル・アソシエーションに巧みに操られ、もっともらしく聞えて実は内容空疎（くうそ）な彼らの意見に耳をかさなければならないのか？　二つのものを秤（はかり）にかけてよりよいほうを選びとるわれわれの能力と、われわれの社会の暴力に対する怒りは、いったいどうなってしまったの

か？」

マークも、ほかの多くの傍聴者と同じように、この激した口調を意外に思った。事情通の政治記者たちから受けた印象では、ブルックスは、個人的な敵意は別としても、多くの憲法上の問題と、ケインによって任命された二人の最高裁判事、ヘインズワースとカーズウェルへの反対論の中心人物だったから、大統領を支持するはずはないと思われたからである。

サウス・カロライナ選出の、洗練された、控えめながらもおのずと人目を惹くハリスン上院議員が、議長に発言を求めた。「マサチューセッツ選出の議員は発言をゆずりますか？」

ブルックスが議長席に向ってうなずいた。

ハリスンはソフトだが力強い声で同僚議員たちに向って話しはじめた。

「この法案は自己防衛という概念を完全に否定するものであります。拳銃、散弾銃、ライフル等を所持する唯一の合法的理由は、スポーツおよび狩猟の目的だけであると、この法案は断定しております。しかしわたしは都市部の州から選出された同僚議員諸君に、たとえばアイオワの農場に、あるいはアラスカの一軒家に住む、自己を護るための銃がなんとしても必要な家族の現状についても、ぜひともご一考願いたいのです。わたしにいわせれば、彼らはスポーツのためではなく、自己防衛のために銃を必要としているのです。彼らにも自己防衛の手段を講じる権利はあります。なぜならば今日われわれは、この国で、都市部においても地方においても、日増しに悪化する無法状態に直面しているからであります。問題の本質は、まさにこの無法状態にあるのであって、世に出まわっている銃の数量にあるのではないので

す。悪化する一方の無法状態は、疑いもなく銃のからんだ犯罪の増加を意味するでありましょう。しかし犯罪をおかすのは人間であって、銃そのものではないのです。われわれは犯罪と戦おうとするならば、その根本原因を調査すべきであって、銃を合法的に使用する人々からそれを取りあげるべきではありません。この偉大な国の多くの車のバンパーに貼られたステッカーもいうごとく、『銃が非合法化されれば、銃を持つのは無法者だけ』なのです」

マークがミスター・スミス・レストランで見かけたことがある、黒い髪をてかてかに光らせた、痩身の、テキサスのソーントン上院議員が、デクスター、ハリスン両議員の意見に賛意を表しはじめたとたんに、マークのいる側の時計の数字のまわりについている六つのランプがともった。同時にブザーが六回鳴り響いて、午前中の審議が終了したことを告げた。正午から遅くとも午後二時までの、上院議場のいわゆる「モーニング・アワー」は、請願書や陳情書の提出、常設および特別委員会の報告、法案や決議案の提出などにあてられる。

ケンプ上院議員が時計を見た。「途中ですが、ソーントン議員、ただいまちょうど十二時で、午前中の審議が終了しました。多数の議員が本日午後の議事日程に組まれている大気汚染防止法案を審議するために、委員会に出席する予定になっております。そこで二時三十分に再度ここに集まってはいかがでしょうか？　われわれの大部分はその時間に委員会を退席して、この法案を審議するためにまたここへ戻ることができます。われわれは依然として本会期中にこの法案を採決する望みを捨てていないので、そのためにはできるだけ速やかに行動することが大切なのです」

上院議場は一分後にはだれもいなくなった。役者たちは台詞を述べ終って舞台からおり、あとには午後の上演のために劇場の準備をする役目の人たちだけが残された。マークは守衛をつかまえて、会わなければならないもう一人の事務局長、ヘンリー・ライカムはどの人かとたずねた。上院保安スタッフのブルーの制服を着たドアマンが、細い口ひげをはやして、気さくで陽気な顔をした、背の低い太った男を指さして教えてくれた。男は傍聴席のはずれの大きな椅子にどっかり腰をおろして、メモをとったり書類をチェックしたりしていた。マークはサングラスの奥の二つの目が自分の一挙一動を見守っていることにも気づかず、ゆっくりライカムのほうへ近づいて行った。

「失礼、ぼくはマーク・アンドリューズです」

「ああ、そうそう、大学院の学生さんだったね。もうすぐ手が空くからちょっと待っててくれたまえ、アンドリューズ君」

マークは腰をおろして待った。サングラスの男は横手のドアを通って議場から出て行った。

「どうもお待たせ、アンドリューズ君、昼飯を一緒にどうかね?」

「それはどうも」マークは一階のG―二一一号室、議員食堂へ案内された。彼らは部屋の端のテーブルに坐った。マークは委員会事務局長の仕事がどんなに大変か、それにひきかえ賞讃と名声はほかの連中に独占されてしまう損な役割にちがいないというようなことを、もっともらしく口にした。ヘンリー・ライカムはそのとおりだというようにうなずいた。二人とも定食のメニューから選んで注文した。三つはなれたテーブルから二人を注意深く見守って

いた男も、彼らを見ならった。マークは委員会事務局長に、銃砲所持規制法案が立法化されたらそれについて論文を書くつもりなので、一般大衆が新聞からは得られないような興味深い内部情報がほしいのだと語った。「そんなわけで、ミスター・ライカム、ぜひあなたのお話をうかがうようにと教えられたんです」

太った男はにっこり笑った。マークの予想どおり、すっかりいい気分になって話しはじめた。

「この法案、またはそれにかかわりのある議員たちのことなら、わたしはどんなことだってきみに教えられる」

マークはにやりとした。イェール在学中にウォーターゲート事件の公聴会記録を研究したことがあって、そのなかの元ニューヨーク警察の刑事アンソニー・ウラセヴィッチがおこなった証言を思いだしたのだ。「なんだって手間暇かけて盗聴なんかするんですかね？　政治家や役人はどんなことだって電話で教えてくれるし、こっちがだれであろうとおかまいなしに、郵便で送ろうとまでするんですからね」

委員長のノース・カロライナ選出上院議員サム・アーヴィンは、委員会を軽んじて問題を冗談にしてしまったという理由で、証人を叱責した。冗談どころか──これはほんとのことです、というのがウラセヴィッチの答えだった。

マークは委員会に名をつらねる十一名の上院議員のうち、だれとだれが法案に賛成なのかと質問した。午前中の審議にはそのうち四名しか出席していなかった。それまでの調査で、

マークは大部分の委員の意見を知っているつもりだったが、自分の判断の裏付けがほしかったのだ。

「民主党議員では、ブルックス、バーディック、スティーヴンソン、それにグレンが賛成票を投じるだろう。アブゥレズク、バード、モイニハンの三人は旗幟を鮮明にしていないが、おそらくは政府の立場を支持するものと思われる。彼らは委員会では賛成票を投じている。民主党議員で反対するのはソーントン一人だけだろう。彼がデクスターの州権擁護論の肩を持っていることは、さっきちょっと話しかけたのを聞いてもわかったはずだ。しかし、ソーントンにとっては、これは政治理念の問題じゃないんだ。本音は賛否どちらにも一票を投じたいというところだろう。テキサスには強力な銃砲所持規制条例がある、したがって彼としては、各州が州民を護るために必要だと考えるどのような処置をとってもかまわない、というのが自分の立場だと主張することができるわけだ。ところがその一方でテキサスには、スミス・アンド・ウェッソン、GKNパウダーメット、ハリントン・アンド・リチャードスンといった多くの銃器製造会社があって、これらは連邦銃砲所持規制法によって深刻な影響を受けることになる。ふたたび失業の亡霊が現われる、というわけだ。これらの会社がテキサス州外で製品を売れるうちは、なにも問題はない。そこでソーントンは選挙民を欺いて、銃砲所持を規制する一方で銃器の製造は続けられると信じこませようとする。あの男は奇妙なゲームを弄んでいるというわけだ。共和党議員についていえば、メリーランドのマサイアスは法案に賛成するだろう。彼はたいそうリベラルな人物だ——なぜいつまでも共和党にと

どまっているのかわたしにはわからん。ネブラスカのマカリスターは、アーカンソーのウッドサンとともに反対の口だ。ハリスンとデクスターはきみもさっき聞いたろう。彼らの立場は明白だ。

「ハリスンは自分の選挙民が銃砲所持規制を許さず、彼がそれに賛成すればつぎの選挙では落選の憂目を見ることを知っている。彼の自己防衛論には真実味がこもっているから、ナショナル・ライフル・アソシエーションに洗脳されたかどうかはわからないがね。あれは不思議な人物だよ。ここの人間はみな彼を根っからの保守とみなしているが、ほんとのところはどういう人間かだれにもわかっちゃいない。上院議員歴も長くはないしね。彼は引退したスパークマンの後釜で——まだ未知数というところだよ」

マークは黙って聞いていた。ライカムはなに一つ知らないものないその道のエキスパートの役割を楽しんでいた。ふだんは何時間も公聴会場に坐って、一言も口をきかずに、発言に耳を傾け、メモをとり、ときおり委員長に助言を耳打ちするだけの役まわりなのだ。彼の意見に耳を傾けてくれるのは妻だけだが、彼女にはその意味するところがまるでわかっていないのだ。ライカムは事実を求めて自分のところにやってきた学究の徒を発見して大喜びだった。

「デクスターは演説がうまい——あれは利口な男だ。彼はエイブ・リビコフが大統領によって移動大使に引き抜かれたとき、その任期を埋めた男に勝って当選した。これは意外な勝利だった。コネティカットから二人の共和党議員が出てくるとは夢にも思わなかったよ。ニュ

ーヨークの金持がそっくりスタムフォードへ移動すると、こういう結果になるんだろうな。とにかく、これはここだけの話だがね、マーク、わたしは彼の政治理念の純粋さを疑っているんだよ。コネティカットにどれだけの銃器製造会社があるか知っているかね？　レミントン、コルト、オーリン、ウィンチェスター、マーリン、シュトゥルム＝ルーガー。それでもリビコフ上院議員は銃砲所持規制に賛成だったが、デクスターの場合は……なにしろ彼はそのうちの一社の大株主だ、これは秘密でもなんでもない。このところ彼はなにか気にかかることがあるらしくて、ひどく機嫌が悪いし、議会にはずっと皆勤している」

マークは胃のあたりにむかつきをおぼえた。なんてこった、エリザベスの父親が？　そうは信じたくなかった。

「するとあなたは、この法案は通過すると思いますか？」と、マークはさりげなく質問した。

「確実に通過するね、民主党が上下両院を支配しているかぎりは。少数派の反対は猛烈だが、三月十日には賛成が過半数を占めるだろう。下院を通過したあとではほとんど疑問の余地がない。木曜日になれば、何者もこの法案を阻止することはできないだろう。与党院内総務は、大統領がこの法案をどれほど重視しているかを、知りすぎるほどよく知っているからね」

バード院内総務か、とマークは思った。彼もリストに載っている。「院内総務について少し話してもらえませんか？　たしか彼も司法委員会のメンバーでしたね？　彼の立場はどうなんでしょう？」

「それはなかなか興味深い質問だよ、アンドリューズ。バード上院議員はおもしろみのない、

馬車馬のような野心家だ。彼は潰瘍を持っている。貧乏人の子に生れて、なにかといえば自分の生れを強調するもんだから、同僚議員のなかには彼をユライア・ヒープ（訳注　ディケンズの『ディヴィッド・コパフィールド』の登場人物。いつも自分の生れの卑しさを売り物にする偽悪的な人物）と呼ぶ者もいるくらいだ。一九四〇年代には、まだ十九歳の若さでキュー・クラックス・クランに入っていた。だがそのハンディキャップを克服して、リベラル派が優勢を占める政党にありながら、上院で最も有力な地位までのぼりつめることに成功した。彼の今日あるはチーム・プレーの人であるおかげだ。彼はほかの議員になにか頼まれたら決していやとはいわない、しかも現在だけでなく、昔からずっとそうだ。常に労をいとわず、誠実そのものの態度で同僚議員の希望にそおうとする。こまかいことに目を向けることで充分元をとってきた。彼は常に民主党的立場——それもきわめつきの——を支持してきた。それに院内総務としてもきわめて有能だ。

「両者の関係には愛情のかけらもないはずなんだが、院内総務になってからというもの、バードは党の方針に協力的だ。彼の経歴を考えれば、銃砲所持規制に本心から賛成するということはまずありえないのだが、反対の旗幟を鮮明にしているわけでもない。ま、大統領のために上院でこの法案を通過させようという立場なのだから、当然といえば当然だがね。とにかく彼は実にうまくやってのけたよ。早くから法案を議事日程に組みこんで、休会を回避し——」

「お話の途中ですが、ミスター・ライカム、休会を回避するとはどういう意味ですか？　まさか委員会は二十四時間ぶっ通しで審議を続けるわけじゃないんでしょう？」

「そりゃそうさ。わたしは延期と休会の技術上、手続き上の区別をいってるんだよ。いいかね。上院はふつうある一日から翌日まで休会に入る。休会の翌日は、前日の未完の審議が継続される。その場合通常の午前中の活動はやらなくてもよいことになっているのだ。与党院内総務が延期ではなく休会を選択した場合、彼はその措置によって『立法府の勤務時間』を延長することになる。そして委員会から提出される法案は、それを考慮すべきであるという動議が採択されないかぎり、立法活動の一日が終るまで延期されなければならないから、休会を利用してある特定議案の議事を遅らすことも可能なのだ。このいわゆる立法活動の一日は、数日、数週間、あるいは数か月にわたって延長されることもありうる。この銃砲所持規制法案は可能なかぎり最小限の時間で上程された。万一大統領がきたる三月十日にこの法案への支持を得られなかったとしたら、つぎの大統領選挙に立候補する前にそれを再提出する時間がなくなってしまうことになる。つまり法案反対派が勝つことになるわけだ。しかも世論調査の結果を信用するならば、大統領の再選はおそらくありえないだろう。このごろのアメリカ人は自分で選んだ大統領に飽きっぽくなっているからね。だから三月十日がだめなら、あとは望みなしというわけだ」

「十日に法案成立を阻止するものがあるとしたら、それはいったいなんですか?」

「すぐには思いつかないね。ただし大統領が死にでもしたら話は別だ。その場合上院は七日間の休会に入る。しかし大統領はとても元気そうだし、少し疲れ気味かもしれないが。これはおかしいことかもしれんが暴走じゃないかね」

マークがブルックスに関してライカムに質問しかけたとき、事務局長は時計に視線を走らせた。
「もうこんな時間か。わたしは戻らなきゃならない。だれよりも先に戻って、用意万端ととのえておかなくちゃならないんだ。われわれがあの部屋から一歩も出なかったと議員たちに思わせるくらいにね」
マークは礼をいった。ライカムが伝票を取りあげてサインした。
「まだなにか知りたいことがあったら、いつでも遠慮なく連絡したまえ」
「そうします」と、マークは答えた。
太った事務局長は、彼にとっては精いっぱいのスピードで、よたよたと遠ざかって行った。マークはコーヒーを飲みながら考えこんだ。三つのテーブルをへだてた男も食事をおえて、マークのつぎの動きを待っていた。ふたたびベルが鳴りだした。今度は一度だけで、上院議場で賛否の投票がおこなわれることを告げていた。投票がすみしだい、議員たちはそれぞれの委員会へ戻って行くのだ。マークはベルの音ではっとわれに返った。
彼はもう一度ダークセン・ビルディングの外交委員会事務局に戻って、ミスター・ケネックに面会を申しこんだ。
「どなたですか?」と、受付嬢がきいた。
「アンドリューズ、イェールの学生です」
受付嬢は受話器を取りあげて二つの数字を押し、マークのいったとおりをそのまま伝えた。

「四四九一号室へどうぞ」

マークは彼女に礼をいって、同じ並びの数室先にある四四九一号室へ向った。

「さて、アンドリューズ君、用件は？」と、相手はマークがドアをしめないうちに声をかけてきた。

マークはいきなりそう切りだされてうろたえたが、どうにか立ちなおった。

「ぼくは上院議員の活動に関して論文を書くために調べごとをしているんですが、ミスター・ライカムがあなたを紹介してくれました。ナン、ピアスンの両議員は、三月三日木曜日の十時半に、外交委員会のために登院していたでしょうか？」

ケネックは赤い革装の本をのぞきこんだ。「ナン――ノー」それからちょっと間をおいて、「ピアスン――同じくノー。ほかになにか知りたいことは、アンドリューズ君？」明らかに無駄にする時間は一分もないらしい。

「いや、それで結構です」

マークは国会図書館に足を向けた。FBIがキャッチした違法の無線交信の内容、めざす男が三月三日の午前十時三十分に上院にいたという仮定が正しいとすれば、突如として彼のリストの上院議員は五人に減ったことになる。マークはノートをチェックした。残った五人の容疑者――ブルックス、バード、デクスター、ハリスン、ソーントン――は、全員が銃砲所持規制法案に関する司法委員会に出席しており、上院の審議にも参加していた。容疑者は五人、動機は一つ？

事務局を出てエレベーターに乗り、一階へおりた。その間例の男がずっと彼を尾行していた。彼はエレベーター・ホールの反対側の、コンスティチューション・アヴェニューロに近い公衆電話から、長官に電話をかけた。

長官の専用電話の番号を回した。

「ジュリアス」

「きみの番号は？」

マークは番号を教えた。

数秒後に長官から電話がかかってきた。

「ナンとピアスンは消えました。残ったのは五人で、全員に共通するのは銃砲所持規制法案の委員会に出席したということです」

「よろしい。だいたい予想したとおりだ。だいぶ仕事ぶりがましになってきたが、もう時間が残り少ないぞ、マーク。あとわずか四十八時間ほどだ」

「わかってます」

電話が切れた。

マークは一呼吸おいてからウッドロー・ウィルソンの番号を回した。例によってエリザベスが見つかるまでたいそう待たされた。ゆうべのことをどう言い訳したらいいだろうか？もしも長官のいうことが正しくて、彼女の父親が――

「ドクター・デクスターです」

「今夜は何時に仕事が終るんだい、リズ？」

「五時よ」と、彼女はからかい口調で答えた。

「迎えに行ってもいいかな？」

「お望みならどうぞ、あなたに妙な下心がないことはゆうべでわかったし」

「ねえ、そのことについては、きょうはだめだが、そのうちきっと説明できると思う」

「じゃ、五時にね、マーク」

「じゃ、五時にね、リズ」

マークは意識的にエリザベスのことを頭から追いだし、通りを横切って議事堂構内のほうへ歩いて行った。そして最高裁判所と議事堂の間の芝生の木陰に腰をおろした。ここなら司法および立法に護られ、憲法および独立と隣りあって安心していられる、とマークは思った。議事堂正面の、上院スタッフや最高裁職員や議事堂警察が好んで訪れるこの場所で、いったいだれが彼を襲おうなどと考えるだろうか？　青と白の観光バスが一番ストリートを通りかかって、最高裁前の噴水の眺めをさえぎった。観光客はワシントンの白大理石の偉観に目をみはっていた。「右手に見えますのは、合衆国国会議事堂でございます。最初の建物は一七九三年に着工されました。その後一八一四年に、議事堂はイギリス軍によって焼かれ……」

そして一人の狂った上院議員が三月十日に議事堂を冒瀆しようとしています、とマークは観光バスを見送りながら心のなかでつけ加えた。不吉な予感が重く心にのしかかった。不祥

事はきっと起る、われわれにはそれを防ぐ術がないのだ。シーザーが議事堂に到着する……石段が鮮血に染まる。

彼は夢想を断ち切ってノートに目を向けた。ブルックス、バード、デクスター、ハリスン、ソーントン。五人を一人にしぼるまで、残された時間はあと二日しかない。彼の捜し求める陰謀家はキャシアスであって、ブルータスではなかった。ブルックス、バード、デクスター、ハリスン、ソーントン。彼らは二月二十四日の昼食時にどこにいたのか？　それがわかれば、どの四人が潔白で、どの一人が大統領暗殺を計画するほど追いつめられた状態にあるかがわかるのだが。かりにこの陰謀の首謀者がだれだかわかったとしても、どうやって暗殺を食いとめるのだ、とマークは立ちあがってズボンについた草を払いながら考えた。明らかに上院議員がみずから殺人に手をくだすことはありえない。われわれは大統領を議事堂に近づけてはならないのだ。長官はきっと彼なりのプランを持っている。まさかそこまで危険は冒すまい。マークはノートを閉じて地下鉄のほうへ歩きだした。

アパートへ帰ると、今度は車でゆっくりとウッドロー・ウィルソンに向った。きょうはいつもとちがう黒いビュイックが尾行していた。またたれかがおれを護衛してくれている、と彼は思った。四時四十五分に病院に着いたが、エリザベスの仕事がまだ終っていなかったので、車に戻って夕方のニュースを聞いた。フィリピンで大地震が起きて、百十二名の死者が出たというのがトップ・ニュースだった。ケイン大統領は銃法所持規制法案の可決に自信を持っていた。ダウ・ジョーンズ指数は三ポイントあがって一二一一ポイントを指していた。

春のオープン戦でヤンキースがドジャースに勝ったというが、それがなんでニュースになるのか？

エリザベスがぐったりした顔で病院から出てきて、彼の隣にとび乗った。

「ゆうべのことをなんて詫びようかな？」と、マークがいった。

「なにも」と、エリザベスが答えた。「まるで最後の章を切りとった本を読まされたようなぐあいだったわ。切りとったのはだれなの、マーク？」

「切りとられた章をここに持っているつもりなんだけどな」と、マークは質問をはぐらかした。

「どうもありがとう、でもベッド・タイムに本を読むのはしばらく願いさげって心境だわ。この前の本のおかげで悪い夢を見ちゃった」

エリザベスはひどく冷静で、マークが話しかけてもさっぱり反応がなかった。彼はインデペンデンスから右へ折れて、モールの横道の一つの、ジェファーソン・メモリアルと日暮れの空に面した場所に車をとめた。

「それはゆうべのことかい？」

「それもあるわ。あんなふうに帰ってしまうなんて、人をばかにしてるわ。どうせ理由をきいたって答えてくれないでしょうけど」

「答えるわけにいかないんだ。でも信じてくれ、きみとは関係のないことなんだ。少なくとも、ほぼ――」彼はただしぬけに言葉を切った。

FBIを困らせるわけにはいかない。

「少なくとも、ほぼどうなの？　ほぼ真相に近いっていいたいの？　なぜあの電話がそんなに重要だったの？」

「その話はもうやめて、食事をしに行こう」

エリザベスは黙って答えなかった。

彼はふたたび車をスタートさせた。同時にほかの二台の車が動きだした。ブルーのフォード・セダンと黒のビュイック。きょうはたいそうご念が入っているな、とマークは思った。それとも一台は駐車スペースを捜していただけのことだろうか。エリザベスもそれに気がついただろうかと、表情をちらとうかがってみた。気がつかなくて当然、バックミラーは彼にしか見えないのだから。ウィスコンシン・アヴェニューにあるこぢんまりした暖かい日本レストランへ車を走らせた。FBIが盗聴している間は彼女を家へ連れて行くわけにいかなかった。東洋人のウェイターは器用な手つきで太ったエビを薄く切って、テーブルの真ん中にある鉄板で焼いた。焼きあがったエビを二人の前の皿に取り分けて、つけ汁の入った小さな美しい小鉢をおいた、エリザベスはお燗した酒の酔いで元気を取り戻した。

「さっきはひどいことをいってごめんなさい。いろいろ気にかかることがあったの」

「話してごらんよ、よかったら」

「だめよ、話せないわ。個人的なことだし、父にまだだれとも話しちゃいけないといわれてるの」

マークははっとした。「ぼくにも話せないのかい？」

「ええ、たぶんわたしたち、もう少しの辛抱が必要だと思うの」

彼らはドライヴ・イン・シアターへ行って、ほの暗い車のなかでくつろぎながら仲よく腕を組んだ。マークは彼女が愛撫を望んでいないことを感じとったし、自分としてもそんな気分ではなかった。彼らはともに一人の人間のことを気にかけていた——その理由は別々なのか、それとも同じなのだろうか？ それに二人がはじめて会った翌日から彼が彼女の父親について調べていることを知ったら、彼女はどんな反応を示すだろうか？ ひょっとすると彼女はそのことを知っているんかもしれない。くそっ、なんだって素直に彼女を信じられないんだ？ 彼女のほうは絶対におれを騙してなんかいやしない。彼はどんな映画だったかほとんどおぼえていなかった。映画が終わると、彼女を家まで送って行ってすぐに別れた。二台の車は依然として尾行を続けていた。

「やあ、伯爵！」暗がりから一個の人影が躍りでた。マークはさっと振りかえって、神経質にホルスターをチェックした。

「なんだ。サイモンか」

「なあおい、まだやけっぱちになっているんなら、ポルノ写真集でも見せてやろうか。あんたそんなしけた顔してるよ。おれなんかゆうべは男を抱いたが、今夜は自由だぜ」

「自信満々だな」

「前もって調べるのよ。この肉体美を無駄にする時間はないからな」サイモンは大声で笑った。「今夜独りぼっちでベッドに入るときに、おれのことを思いだすといいよ、マーク。こっちはきっとあんたのことを忘れているからな。そうして頭を冷やせよ」

マークは車のキイを投げてやって、腰を振り振り笑いながらメルセデスのほうへ歩いて行くサイモンを見送った。

「あんたじゃどうせ見込みはないいな」

「この大ぼら吹きめ」と、マークは笑いながらいった。

「とんでもない、あんたは焼きもちを焼いてるか、さもなきゃおれを見くびってるのさ」サイモンはエンジンをかけて、駐車スペースのほうへ動きだした。マークの前を通りすぎるときに、彼は叫んだ。「どっちにしろ、おれの勝ちだよ」

マークはおれもこのアパートの駐車場係の仕事に応募すべきだろうか、と思った。それはそれなりに悪くない仕事のように思えた。彼は周囲を見まわした。なにかが動いたような気がしたのだ。いやちがう、神経が苛立っているか、さもなきゃ気のせいだ。部屋に戻ると、長官への朝の報告をまとめてからベッドに倒れこんだ。

あと二日しかない。

三月九日　水曜日朝

午前一時〇〇分

電話が鳴った。マークはちょうどとうとしかけたところで、まだ眠りと覚醒のあわいにあった。なおもベルが鳴っている。受話器をとれ、ジュリアスかもしれないぞ。
「もしもし」彼はあくびまじりにいった。
「マーク・アンドリューズ？」
「そうだ」彼は疲れた声で答えながら、ベッドの上でもっと楽な姿勢をとった。いまはっきり目ざめると、もう二度と眠れそうもなかった。
「ジョージ・スタムプージスだ。起しちゃってすまん、しかしきみがすぐにも知りたがりそうなことがわかったんでね」
スタムプージスの言葉には冷水を浴びせるような効果があった。マークはたちまちぱっちりと目ざめた。
「わかった、あとはなにもいわないでくれ、折りかえし公衆電話からかける。そちらの番号は？」マークはクリーネックスの箱の裏側に番号をメモした。さしあたり手の届くところにはそれしかなかったからだ。それからバスローブを羽織り、テニス・シューズに足を突っこ

んで、ドアのほうへ歩いて行った。ドアをあけて、左右を見まわした。やれやれ、どうやらおれも神経をやられかけているらしい。廊下ではなんの物音も聞えなかった。だれかが待ち伏せているとしたら音などたてるはずがない。エレベーターで公衆電話のある一階へおりた。サイモンが椅子の上で眠っていた――どうしてこんな芸当ができるんだろう？　おれはベッドでさえよく眠れないというのに。

彼は局番212を回した。

「もしもし、スタムプージス？　マーク・アンドリューズだ」

「きみたちGメンは夜中の一時にもあいかわらずこんなゲームをやってるのかね？　近ごろはもっとましな方法を考えだしているかと思ったよ」

マークは声をたてて笑った。笑い声が駐車場にこだまして、サイモンが身動きした。

「で、用件は？」

「きょうちょっとした情報を仕入れたんだ、これできみに特種二つ分の貸しができたことになる」スタムプージスはちょっと間をおいて続けた。「マフィアとニックの死は無関係だ。それからマフィアは銃砲所持規制法案に基本的には反対だが、極端な動きは控えるらしい。だからマフィアは除外していい。ニックのためじゃなかったらわたしもここまではやらなかったよ。あとはうまくやってくれ」

「全力を尽してやっているよ」と、マークは答えた。「協力ありがとう」

彼は電話を切って、くしゃくしゃのベッドにまだぬくもりが残っていることを願いながら、

エレベーターのほうに戻った。サイモンはあいかわらずぐっすり眠っていた。

三月九日　水曜日朝

午前五時五十分

「お電話ですよ」
「なに？」長官は寝ぼけ声で問いかえした。
「あなたにお電話です」家政婦がバスローブを羽織って戸口に立っていた。
「ああ、そうか。いま何時だ？」
「六時十分前ですわ」
「だれからだ？」
「エリオット様からです」
「わかった、切りかえてくれ」
「かしこまりました」
　エリオットがこんな時間にわたしを起したからには緊急の事態なのだろう。
「おはよう、エリオット。いやいいんだ、なにがあったのかね？」彼は相手の報告に聞き入った。「たしかなのか？　それじゃ状況ががらりと変る。彼は何時にくる予定だ？　そうか、七時だったたな。では六時三十分までにそっちへ行く」

長官は受話器をおき、ベッドの端に腰をおろして、ひどく大きな声で「くそっ」と叫んだ。ふだんはめったにそういう言葉を口にしない男だった。彼は大きな足で床をしっかりと踏みしめ、大きな両手を同じように大きな太腿の上にのせて、じっと何事か考えこんだ。やがて立ちあがり、ローブを羽織ってバスルームに消えた。例の罵り言葉がまた数回繰りかえされた。

マークのもとへも電話がかかってきた。名なしの男からではなく、エリザベスからである。至急彼に会いたいという。メイフラワー・ホテルのロビーで八時に会うことにした。そこなら彼が知っている人間と会う気づかいはなかったが、それにしてもエリザベスはなぜそんな場所を指定したのだろうか？

マークはローブを脱いでバスルームへ戻った。

上院議員もまた早朝の電話を受けとった。名なしの男からでもエリザベスからでもなく、シルヴァー・スプリングのシェラトン・ホテルでの最終打合せのために、正午の顔合せの連絡をしてきた議長からの電話だった。上院議員は出席すると答え、受話器を戻して、ローブを着たまま、考え事をしながら部屋のなかを歩きまわった。

「コーヒーを三人前頼む、ミセス・マグレガー。二人ともきているかね？」と、長官は彼女

の前を通りながらたずねた。
「はい」
ミセス・マグレガーは新調のトルコ・ブルーのツーピースを着てたいそうシックに見えたが、長官はそれには目もくれず、奥の長官室に消えた。
「おはよう、マット。それにマーク」いつ爆弾を落すべきか？ その前にまずアンドリューズの話を聞くことにした。「さて、きみの調査の結果を聞かせてくれ」
「きのう報告したように、上院議員のリストは五人までしぼられましたね――その五人とは、マサチューセッツのブルックス、ウェスト・ヴァージニアのバード、コネティカットのデクスター、サウス・カロライナのハリスン、それにテキサスのソーントンです。全員に共通するのは銃砲所持規制法案への関心で、この法案はわれわれも知っているように三月十日に成立しそうです。法案成立を阻止するには大統領を暗殺するしかないでしょう」
「わたしの考えでは、それこそ法案の上下院通過を確実にする行為だと思いますね」と、マシュー・ロジャーズが口をはさんだ。
「二人のケネディと、マーティン・ルーサー・キングと、ジョージ・ウォレスと、ロナルド・レーガンにそういって、彼らがどう答えるかきいてみたまえ」と、長官が応酬した。
「続けてくれ、マーク」
マークはライカムとスタムプージスが各議員について語ったことを要約し、七人中の二人――ナンとピアスン――をリストから除いた理由を説明した。「もちろんこれは、われわれ

が見当違いをして袋小路に入りこんでいないものと仮定しての話です。だがぼくに関するかぎり、それは大いにありうることなのです。なにしろぼくは影を相手にボクシングをやっているようなもんですから」

長官はうなずいて続きを待った。

マークは続けた。「きょうは彼らの上院における発言を聞いてみようと思います。なんとかして彼らが二月二十四日の昼食事にどこにいたかを探りだす方法を見つけたいんです、もちろん彼らに面と向ってたずねる以外の方法ですが」

「それだけは絶対にやっちゃいかん。直接質問したら、間違いなく計画は中止されるだろう。ところで、マーク、わたしのほうのニュースは吉報とはいいがたい。だから落ちついてショックにそなえるのだ。われわれは犯人はデクスターらしいと思いはじめている」

マークはぎょっとした。「どうしてですか？」と、かろうじていった。

長官補佐が身を乗りだして説明した。「わたしは部下に命じてひそかにジョージタウン・インを調べさせていた。収穫があるとは期待していなかった。昼間の従業員を一人残らず調べたが、なにも出てこなかった。今朝早く、念には念を入れて、夜間従業員にも当ってみたのだ。そしたら昼間は働いていないナイト・ポーターの一人が、二月二十四日の午後二時半ごろ、デクスター上院議員が急ぎ足でホテルの前の通りを遠ざかって行くのをたしかに見たと答えたんだ」

マークは茫然自失した。「どうしてデクスター上院議員だとわかったんですか？」

る。それからまだほかにもある、彼には若い女の連れがいたそうだが、そのおおよその人相が彼の娘と一致するんだよ」

「しかし、それは状況証拠にすぎません。法廷では通用しませんよ」

「そのとおりだろう」と、長官がいった。「しかしこれはデクスター上院議員にとって不運な偶然の一致だ。彼が銃器製造会社の経営にかかわっていることを思いだしたまえ。銃砲所持規制法案が通過すれば、彼は財政的に痛手をこうむるだろう。実際のところわれわれの調査では、彼は個人的財産を失うことになる、つまり彼にはりっぱな動機もあるわけだ」

「しかしですよ」マークはエリザベスを信じたいためにわれを忘れて反論した。「上院議員ともあろうものが、自分の会社をつぶしたくないというそれだけの理由で、大統領を殺すことまで計画するものでしょうか？　法案阻止のためなら、そんな非常手段に訴えなくてもほかにいくらでも方法があるはずです。たとえば委員会の審議を遅らせるとか、時間無制限演説（フィリバスタ）で議事を妨害するとか――」

「彼はすでにそれを試みて――失敗したんだよ、マーク」と、マシュー・ロジャーズが口をはさんだ。

「ほかの四人はもっと強力な動機を持っているが、われわれが知らないだけのことかもしれません。かならずしもデクスターにかぎったことじゃないと思います」と、マークは続けたが、その口調には自信がうかがえなかった。

「マーク、きみのいわんとするところはよくわかるし、たしかに一理はある。ふつうの場合ならわたしもきみに賛成するが、なにしろいまはいかに薄弱な状況証拠であれ、それを手がかりに進むほかはないのだ。それからまだある。カセフィキスと郵便配達が殺された三月三日の夜、ドクター・デクスターの名前は当直勤務表にのっていなかった。彼女は五時に勤務をおえているはずだったのに、いかなる理由があったのか、二時間居残って、自分の患者でもないあのギリシャ人の傷の手当をしてから帰宅した。彼女が良心的な医者で自発的に超過勤務をしたか、あるいは一時的に同僚の代理をつとめただけということも考えられるが、それにしてはあまりにも偶然の一致が多すぎるんだよ、マーク。冷静に考えるならば、やはりデクスター上院議員と――彼の娘があやしいといわねばならん」

マークはなにもいわなかった。

「いいか、よく聞いてくれ」と、長官は続けた。「きみがそれらはみな偶然の一致で、本命はほかの四人のうちの一人だと思いたがっていることはわかっている――しかし大統領がホワイト・ハウスを出るまであと二十六時間しかないし、わたしはあるがままの事実を受け入れるより仕方がないのだ。わたしは犯人がだれであれそいつをつかまえたいと思うだけだ、そのために大統領の生命を危険にさらすつもりはない。ところで、きみは今度いつ彼女と会う予定かね？」

マークが顔をあげた。「八時にメイフラワーで会う約束です」

「なぜだ？」

「わかりません。ただ彼女が大切な話があるというもんで」
「ふむ。やはり行くべきだろうな。だが終ったらすぐわたしに報告してくれ」
「はい」
「なぜメイフラワーを指定したのかわたしにはわからん。気をつけろ、アンドリューズ」
「はい」
「八時二十分前だ、もうでかけるほうがいい。そうそう、例の五十ドル紙幣のほうはまだ収穫がない。あと八枚残すだけだが、ミセス・カセフィキスの指紋はまだ見つかっていないのだ。しかしドイツ人のゲルバッハのほうはわかったよ。ローデシア滞在中も死んだときもCIAとは無関係だったことがはっきりした、だからこれで少なくとも一つは問題が減ったわけだ」
マークにとっては、五十ドル紙幣も、ドイツ人も、マフィアも、CIAも、みんなどうでもよかった。これだけ苦労して調べた結果がみなストレートにデクスターと結びついているのだ。彼は入ってきたときよりもさらに気落ちしてFBI本部を出た。
通りへ出たところで、頭のなかを整理するためにメイフラワーまで歩いて行くことにした。二人の男がホワイト・ハウスの前を通って、ペンシルヴェニア・アヴェニューをホテルのほうへ尾けてきたことに、彼はまったく気がつかなかった。
ボタンを押すと、間髪を入れずエリオットが長官室に入ってきた。

「エリオット、メイフラワーの件はきみのいうとおりだったよ。どんな手を打ったかね？」
「すでに向うに二人いて、一人がアンドリューズを尾行しています」
「三十六年のＦＢＩ生活ではじめて自分の仕事がいやになったよ」と、長官はいった。「きみはたいそうよくやってくれた、エリオット、もうすぐきみになにもかも事情を話せるようになるだろう」
「はい」
「この五つの名前を徹底的に調べてくれ、どんな小さなことでも見落すなよ」
「はい」
「もういい」
エリオットは音もなく部屋から出て行った。
あの男には心がない。心を持たない人間を腹心に持つのはやりきれんことだ。とはいうものの、こういう奇妙な状況ではああいう男のほうがたいそう役に立つ。この仕事がかたづいたら、あいつはアイダホへ転勤させて——
「なにかおっしゃいましたか？」
「いや、なにもいわんよ、ミセス・マグレガー。わたしは少しずつ発狂しかかっているらしい。だが気にせんでいい。白衣の男どもがわたしを迎えにきたら、あんたは三通複写の書類にサインして、あとはほっとした顔をしていればいいんだ」
ミセス・マグレガーは微笑をうかべた。

「あんたの新調のスーツ、なかなかいいよ」と、長官はいった。
「ありがとうございます」彼女は顔をあからめながら答えた。

マークはメイフラワー・ホテルの回転ドアを通り抜けながら、エリザベスの姿を求めてロビーを見まわした。一刻も早く彼女と会って、あれこれ迷うのをやめ、真相を打明けたかった。どれもこれもみな状況証拠だけだ、と自分にいいきかせた。彼女の姿が見当らなかったので、ロビーがよく見える坐り心地のよい椅子を選んで腰をおろした。
ロビーの反対側のはずれで、一人の男が新聞スタンドで《ワシントン・ポスト》を買っていた。男は買った新聞を読むようすもなかったが、マークはそのことに気がつかなかった。とつぜんエリザベスがデクスター上院議員と並んで彼のほうに近づいてくるのに気がついた。さあ困った、上院議員が一緒とは。
「おはよう、マーク」エリザベスは彼の頬にやさしくキスをした。
パリサイ人に、どの男を殺すべきかを教えるユダというところか？　なんたる無情の仕打ち。
「マーク、父を紹介するわ」
「おはようございます」
「おはよう、マーク、きみに会えてうれしいよ。エリザベスはきみのことばかり話しているんだよ」

そのあなたはぼくになにを話してくれるんですか？　二月二十四日はどこにいました？　あすはどこにいる予定ですか？

「マークったら、ぐあいでも悪いの？」

「いや、なんでもない。失礼しました、上院議員、お目にかかれて光栄です」

上院議員は不思議そうに彼の顔を眺めていた。

「さて、わたしはもう行かなきゃならん——予定がぎっしりたてこんでいてね。あすのいつもの昼食を楽しみにしているよ」

「じゃ、あしたまたね、お父さま。朝食とお話をありがとう」

「では失礼するよ、マーク。近いうちにまたぜひ会いたいもんだ」デクスター上院議員はなおも不思議そうに彼を見た。

「そうですね」と、マークは静かな声で答えた。

二人は上院議員を見送った。彼を見送る人間はほかに三人いた。そのうちの一人が電話をかけに行った。

「マーク、いったいどうしたの？　なぜあんなに父に無愛想だったの？　父と会ってもらいたくてわざわざあなたにきてもらったのに」

「すまん、ぼくは疲れているんだよ」

「それともなにかわたしに隠していることでもあるの？」

「こっちもきみに同じことを訊きたいね」

「いったいなんのこと？」
「自分でもよくわからないんだ。いいからもうよそう。どうしてこんなに急にぼくに会いたくなったんだい？」
「父と会ってもらいたかったからよ。それがそんなに不思議なことなの？　だったらあなたなんか呼ぶんじゃなかったわ」
彼女は廊下を歩きだし、ホテルの入口の回転ドアを急いで通り抜けた。三人の男がそれを見ていた。一人が彼女のあとを追い、二人がマークのそばに残った。彼はゆっくりドアのほうへ歩きだした。ドアマンが四角ばってお辞儀をした。
「タクシーをお呼びしますか？」
「いや結構、歩いて行くよ」

マークが戻ってきたとき、長官は電話中で、大きなレザー・チェアを身ぶりでマークにすすめた。彼は混乱した頭をかかえて椅子に身を沈めた。長官は受話器をおいて彼のほうを見た。
「さて、きみはこれでデクスター上院議員とも会った。彼の娘はなにも知らないか、メイフラワーでの演技はアカデミー賞ものかだな」
「なにもかも見ていたんですね」
「もちろんだ、しかもまだある。彼女は二分前に交通事故に遭ったよ。いま電話で報告を聞

いたところだ」
マークは椅子からとびあがった。
「心配はない。彼女の小さなフィアットのフロントが二百ドル相当の被害にあっただけで、彼女がぶつけたバスはかすり傷もつかなかった。用心深い娘だ。いまタクシーで勤務先に向っているところだよ、少なくとも彼女はタクシーだと思いこんでいる」
マークはほっと溜息をついて、つぎはなにが起きてもいいように覚悟をきめた。「デクスター上院議員はどこにいるんですか？」
「議事堂へ行ったよ。着いてから電話を一本かけたが、べつに重要な電話じゃなかった」
マークは自分が糸で操られている人形のような気がしてきた。「ぼくはこれからなにをすればいいでしょうか？」
ドアをノックする音が聞えて、名なしの男が入ってきた。長官は手渡されたメモにちらと目を走らせた。
「ごくろう」
名なしの男が出て行った。マークは最悪の事態におびえた。長官はメモを机の上において彼のほうを見た。
「ソーントン上院議員が十時三十分に上院委員会二二二八号室で記者会見を開くそうだ。すぐに行ってみるほうがいいな。彼の声明が終りしだい電話をくれ。記者団の質問はどうせいつものように見当ちがいなことばかりだろう」

マークはふたたび頭がすっきりすることを期待しながら上院まで歩いて行った。エリザベスに電話して、事故のあとなんでもないかどうかとたずねたかった。彼女に質問したいことは山ほどあったが、ほしい答えはただ一つだった。三人の男もまた上院に向って歩いていた。二人はFBI本部と上院の間を半分ずつ、三人目は全行程を一人で歩いた。そして全員が結局は二二二八号室に到着したが、三人ともソーントン上院議員の声明には無関心だった。

部屋のなかはすでにテレビ・カメラ用に特別に用意された大きなライトで煌々(こうこう)と照らされ、記者団が集まっておしゃべりをしていた。ソーントン上院議員がまだ到着していないにもかかわらず、会場は満員だった。いったい彼はなにをいおうとするのだろうか、声明の内容はおれの抱えている問題になんらかの照明を当てるものだろうか、とマークは思った。ひょっとするとそれはソーントンを犯人と名指しするような内容かもしれない。長官に報告できるような彼の動機が明らかになるかもしれない。まわりの古参記者たちの顔を見ながら、彼らはソーントンの記者会見の意図を見抜いているかもしれない、あるいは彼のスタッフから声明の内容を前もって知らされているかもしれないと思ったが、そんなことを質問してだれかに顔をおぼえられる危険は避けなければならなかった。シーザーでさえ拍手を送るのではないかというほどの堂々とした態度で、三人の顧問と一人の秘書のあとから、ソーントン議員が満面に笑みをうかべて登場した。彼は疑いもなくこの機会を最大限に利用していた。黒い髪をポマードで撫(な)でつけ、明らかに自分ではそれが最高だと考えているらしい、グリーンに

ブルーのピン・ストライプの入ったスーツを着ていた。カラー・テレビにはなにを着れば見ばえがするかを——できるだけプレーンなダーク・スーツがいい——だれも教えてくれなかったか、あるいは教わったとしても耳をかさなかったらしい。

彼は会場の奥にある大きな椅子に腰をおろした。玉座を思わせる堂々たる椅子で、足がかろうじて床に届いた。とつぜん、テレビ・ライトが彼を取りかこみ、録音班が彼のまわりと正面にマイクをさしだした。さらに三つの大型ライトが点灯された。ソーントンは早くも汗をかいていたが、依然として笑顔を絶やさなかった。三つのテレビ局の準備が整った。ソーントンは咳ばらいをした。

「報道界の紳士淑女のみなさん……」

「ばかにもったいぶったいい方をするもんだな」と、マークの前に坐っている記者が、速記で一字一句書きとめながら独り言をいった。よく見ると、どこかで見た顔だった。《ワシントン・ポスト》のバーンスタイン記者だ。部屋じゅうがしんと静まりかえって、ソーントン上院議員の声明を待った。

「わたしはたったいま合衆国大統領との個人的な会談をおえてホワイト・ハウスから出てきたところですが、その会談の結果にもとづいて、新聞およびテレビに声明を発表したいと思います」そこで一息入れてまた続けた。「わたしの銃砲所持規制法案に対する批判と委員会における反対投票の動機は、選挙民の気持を代弁したいというわたしの希望と、彼らの失業に対する深い不安にもとづくものでありました……」

「……まだある、あんた自身が失業するかもしれないという不安だ」と、バーンスタインが小声で呟いた。「大統領は月曜の晩餐会であんたにどんな賄賂を提供したのかね？」

上院議員はふたたび咳ばらいをした。「大統領はこの法律が議会を通過して、国内の銃器製造が禁止されたあかつきには、ただちに銃器製造業者とその従業員に経済援助を与え、銃器製造業界の設備を、別の、破壊的武器の生産よりも危険の少ない用途に転用するための立法措置を提案することを約束してくれました。このような大統領の配慮のおかげで、わたしはこの法案に賛成票を投じることが可能になったのであります。実をいうとわたしはかなり前からこの法案に関して賛成と反対の間で揺れ動いており……」

「そうだろうとも」と、バーンスタインがいった。

「……なぜなら犯罪者たちがあまりにも容易に銃を入手できる現状を心から憂えたからであります」

「きのうまでは全然憂えてなどいなかったじゃないか。大統領はどんな餌をあんたに約束したのか」と、記者は呟いた。「ひょっとすると来年あんたが再選されるのを応援するとでもいったのかね？」

「わたしにとってこれは以前からどちらとも決めかねていた問題であり……」

「……ささやかな賄賂がそれをどちらかに決めたというわけだ」

バーンスタインはいまや彼自身の聴衆を獲得しており、その連中はテキサス選出の上院議員の話よりも彼の合の手のほうを楽しんでいた。

「大統領がこのような理解を示してくれたいま、わたしは一点の曇りなき良心をもって、ここに……」

「……あまりにも曇りがなさすぎてあんたの魂胆が丸見えだよ」

「……銃砲所持規制法案に関するわが党の立場を支持することを宣言いたします。わたしは明日上院議場において大統領に反対しないことに決めました」

会場のあちこちから熱烈な拍手が湧き起ったが、これはどう見ても戦略地点に配置されたさくらの演技としか思えなかった。

「わたしは、紳士淑女のみなさん」と、ソーントン上院議員は続けた。「今夜心安らかに眠れるでしょう」

「……それに再選は確実だ」と、バーンスタインがつけ加えた。

「最後にわたしはみなさんのご出席を感謝し……」

「仕方なしに出席したのさ、ワシントンではほかにショーがかかってなかったからね」

《ポスト》の記者のまわりで笑い声が聞えたが、ソーントンの耳には届かなかった。

「ご質問があればそれに答えたいと思います。ご清聴を感謝します」

「おれの質問にはまるっきり答えなかったじゃないか」

大部分の記者たちは、すでに全国各地で印刷にかかっている午後の早版に間に合せるべく、記者会見が終ると同時に部屋から出て行った。マークもその群れに加わったが、有名なジャーナリストの肩ごしにちらと手もとをのぞいた。彼は速記を使わずにふつうの文字でつぎの

ように書いていた。

「友よ、ローマ市民よ、田吾作どもよ、わたしに諸君の嘲笑を貸していただきたい。わたしがここにいるのはケインを葬るためであって、彼女を讃えるためではない（訳注『ジュリアス・シーザー』第三幕第二場、アントニーの演説をもじったもの）」一面トップにふさわしい書きだしとはいえなかった。

会場にいたほかの三人の男も、マークを追って部屋を出た。彼は廊下を半分ほど行ったところにあるいちばん近い公衆電話まで走った。だが電話は急いで記事を送ろうとする記者たちに残らず占領され、そのうしろに長い列ができていた。廊下のはずれにある二つの電話の前にも列ができていた。マークはエレベーターで一階へおりた。そこも同じで、望みは通りの向うのラッセル・ビルディングにある公衆電話だけだった。彼が走りだすと、三人の男も走りだした。ようやく電話に辿りつくと、中年の婦人が一足先にボックスに入って、クォーターを入れた。

「もしもし……わたしよ。仕事が見つかったの……ええ、よかったわ。……午前中だけの仕事で……明日から働きはじめるの……でも文句はいえないわ、お給料も悪くないし……」

追いついた三人の男が呼吸を整えている間に、マークはボックスの前を行ったりきたりしていた。ようやく婦人が電話をかけ終り、満面に笑みをうかべながら、マークの存在も、国家の一大事もどこ吹く風で歩み去った。少なくとも明日を信じている人間がここに一人いる、とマークは思った。彼は周囲を見まわして近くにだれもいないことを確かめた。もっとも医療保障制度のポスターのそばに立っている男にどことなく見おぼえがあるような気はしたが、

ひょっとするとFBIの同僚の一人かもしれなかった。そういえばどこかでサングラスをかけたその男の顔を見たことがあった。そうしてみるとおれのほうが大統領よりも厳重に護衛されているらしい。彼は長官の専用番号をまわして、公衆電話の番号を告げた。すぐに電話が鳴った。

「ソーントンをリストから除いてください。彼は——」

「わかってる」と、長官がさえぎった。「たったいま電話でソーントンがなにをしゃべったか聞いたところだ。彼が陰謀に関係しているとしたら、きっとそんなことをいいだすだろうとわたしはにらんでいた。だから彼をリストから除くどころか、疑いはますます深まったというところだ。午後から五人に関する調べを続けて、なにかわかったらすぐに連絡しろ。わざわざ出向いてくることはない」

電話が切れた。マークはがっかりした。いったん受話器をかけて、ダイアル・トーンを聞いてから、クォーターを入れてウッドロー・ウィルソンの番号を回した。看護婦がエリザベスを捜しに行ったが、戻ってきて、きょうはだれも彼女を見かけていないと答えた。マークはありがとうもさよならもいわずに電話を切った。それからエレベーターで地下のカフェテリアへ食事をしにおりた。おかげでカフェテリアはさらに二人の客に恵まれた。三人目の男はすでに昼食の約束があり、その時間に遅れそうだった。

三月九日　水曜日午後

午後一時〇〇分

シルヴァー・スプリングのシェラトン・ホテルでの会合に定刻までに到着したのは、トニーとサンだけだった。彼らは多くの時間を一緒にすごしてきた仲だが、ほとんど口をきかなかった。この日本人はいつもなにを考えているのだろう、とトニーは思った。トニーは最後の日にそなえてルートをチェックし、ビュイックを完璧（かんぺき）に整備し、議長とマトスンの運転手役をつとめて、忙しく働いてきた。腹立たしいことにほかの連中はみな彼をタクシーの運転手なみにしか扱わなかった。おれの腕前はやつらのだれにもひけをとらないし、だいいちおれがいなかったらやつらはどうなってると思う？　おれがいなかったらやつらはいまだにFBIにつきまとわれていたはずだ。しかし、あすの晩にはこの仕事もかたづくし、おれもさっさと高飛びして、苦労して稼（かせ）いだ金で少々羽をのばすことができるってもんだ。彼はマイアミとラスヴェガスのどっちにしようか決めかねていた。金を握る前にいつもその費（つか）い道を考えるのがトニーという男だった。議長がいつものように煙草（たばこ）をくわえながら入ってきて、二人の顔を見くらべてから、マトスンはどこかとたずねた。二人は同時に首を振った。マトスンはいつも単独行動をとっていた。彼はいっさい他人を信用しなかった。議長は苛立（いらだ）って

いて、しかも苛立ちを隠そうともしなかった。数分後に同じように苛立った表情の上院議員が到着したが、彼はマトスンの顔が見えないことに気づきもしなかった。

「なぜ始めないのかね？」と、上院議員がいった。「きょうは法案の最終審議の日で、ここへ出てくるだけでさえわたしには不都合なんだよ」

議長は軽蔑をこめて彼を見た。「まだマトスンがきていない、彼の報告が重要なんだ」

「いつまで待つつもりかね？」

「二分間だけ待つ」

彼らは無言で待った。たがいに話すことはなにもなかった。各人がなんのためにここにきたのかを知っていた。きっかり二分後に、議長が新しい煙草に火をつけて、トニーに報告を求めた。

「おれはルートをチェックしたよ、ボス。時速二十二マイルで走る車がホワイト・ハウスの南口からEストリートに出て、ペンシルヴェニア・アヴェニューをFBI本部へ行くまでに要する時間は三分、そこから議事堂に着くまでさらに三分かかる。階段をのぼって射程外に消えるまでが四十五秒。平均で合計六分四十五秒ってところかな。五分三十秒以下じゃ無理だし、七分以上ってこともないだろう。これは夜中の十二時、一時、二時にテストしてみた結果だ。当日のケインの通り道はその時間よりもまだ空いているはずだがね」

「作戦終了のあとはどうなんだ？」と、議長が質問した。

「クレーンから地下道を通ってレイバーン・ビルディングへ行き、そこから地下鉄の議事堂

南駅まで、早ければ二分、遅くても三分十五秒だ――これはエレベーターと混み方しだいだ。ヴェトコンが――」トニーはちょっと言葉を切っていいなおした。「サンが地下鉄に乗ってしまえば、絶対に見つかりっこない。数分後にはワシントンの反対側に出られる」

「彼は三分十五秒以内につかまらないと保証できるのかね？」と、上院議員が質問した。サンに対して個人的に関心があるからではなく、この小男は万一つかまったらおそらく口を割るだろうと思っているのだ。

「連中がなにも知らないと仮定すれば、少なくとも最初の五分間はどっちに目を向ければよいか見当もつかないだろう」と、議長が答えた。

トニーが報告を続けた。「すべて計画どおりに運べば、おれたちには車さえ必要ないから、おれは車を乗り捨てて姿をくらますつもりだ」

「よかろう」と、議長がいった。「しかし車は完全に整備されているんだろうな？」

「もちろん、デイトナ500マイルにだって出られるよ」

上院議員は額の汗を拭（ぬぐ）った。三月初旬の寒い日にしては驚くべきことだった。

「サン、きみの番だ」と、議長がうながした。

サンは自分のプランを詳細に説明した。二日間かかって完璧なリハーサルをおこなったプランである。彼は前の晩とその前の晩クレーンのてっぺんで夜を明かしたし、銃はすでに予定の場所に隠されていた。工事現場の二十四時間ストライキも今晩から開始されることになっている。「あすの午後六時には、わたしはアメリカの西海岸にいるし、ケインはもう死ん

でいるはずだ」

「よろしい」議長は煙草をもみ消して、新しいのに火をつけた。「わたしは九番ストリートとペンシルヴェニア・アヴェニューの交差点にいて、九時三十分にそこに着いたときと、ケインが通過したときの二度、時計のバンドに仕込んだ無線できみに連絡する。きみの時計が信号音を発したときが、ケイン到着の三分前だから、残りの時間は三分と四十五秒だ。予告から発砲まではどれくらい必要かね？」

「二分三十秒もあれば充分だろう」と、サンが答えた。

「それじゃ少し短かすぎるんじゃないかね？」と、上院議員がいった。あいかわらず暑くもないのに汗をかいている。

「かもしれん、その場合はあんたに彼女を議事堂の階段の上で引きとめてもらわねばならん。サンを必要以上に人目にさらすのは危険だからだ。彼の姿が見えている時間が長引けば長引くだけ、シークレット・サーヴィスのヘリコプターに見つかる危険も増す」

上院議員がサンのほうを向いた。「きみは毎日リハーサルをやっていたといったな？」

「そうだ」と、サンが答えた。彼は合衆国上院議員に答えるときでさえ、あいかわらず必要以上の言葉を使わなかった。

「それじゃどうしてライフルかケースを持ち歩いていても人に気づかれなかったのだ？」

「銃はわたしがウィーンから帰って以来、ずっと人目につかない三百二十フィートの高さのプラットフォームにテープで貼りつけてあるからだ」

「もしクレーンが下におりてきたらどうなる？　たちまち見つかってしまうだろう」

「わたしは黄色い作業服を着ているし、ライフルは八つのパーツに分解して黄色いペンキを塗り、プラットフォームの裏側にテープでとめてある。どんな高倍率の双眼鏡で見ても、クレーンの一部としか見えない。わたしがヘルムート、ヘルムート・アンド・シュミット商会のドクター・シュミットから最新型の狙撃用ライフルを買ったとき、彼でさえ黄色のペンキ缶には目を丸くして驚いていたものだ」

上院議員を除く全員が笑った。

「ライフルの組立てに要する時間は？」と、上院議員は続けた。なんとかしてあらを捜しだそうという、上院委員会でいわゆる専門家たちに質問するときにいつもやっている手口である。

「ライフルの組立てに二分、完璧な狙撃姿勢をとるのに三十秒、それから銃を分解してふたたびテープでとめるのに二分あればいい。銃は5.6×6.1ミリメーター・フォムホーエ・スーパー・エクスプレス・ライフルで、銃口速度が秒速三千四百八十フィートの77グレインの弾丸を使うから、銃口エネルギーは二千フット・ポンド、つまり平たくいえば、無風状態で、二百ヤードの距離からケインの額の一・五インチ上を狙うことになる」

「どうだ、満足したかね？」と、議長が上院議員にいった。

「まあね」と上院議員は答えて、あいかわらず汗を拭いながら沈黙して考えこんだ。やがてなにか思いついたことがあるらしく、ふたたび口を開いて質問しようとしたとき、さっとド

アがあいて、マトスンが駆けこんできた。
「遅くなってすまん、ボス、ちょっと調べることがあったもんで」
「よい知らせだといいが」
「それが、悪い知らせかもしれないんだ」と、マトスンが息を切らしながらいった。
全員が心配そうに彼を見た。
「よし、話してくれ」
「そいつの名前はマーク・アンドリューズだ」と、マトスンが空いている椅子に腰をおろしながらいった。
「いったい何者なんだ？」と、議長。
「カルヴァートと一緒に病院へ行ったFBIだ」
「最初から話してくれんかね？」と、議長が冷静にいった。
マトスンは深々と息を吸いこんだ。「おれはステームズがカルヴァートと一緒に病院へ行ったことがずっと気になっていた――支局長がじきじきお出ましになるなんて、ふつうはありえないことなんだよ」
「それはそうだ」と、議長が待ちきれずにいった。
「やはりステームズは行かなかった。奥さんがそういってたよ。おれは彼女のところへおくやみに行ったんだが、彼女はあの晩ステームズがやったことを、ムウサカを半分食べたことまで含めてすっかり話してくれたよ。FBIは彼女に、だれがきてもなにもいっちゃいかん

と口止めしているらしいが、彼女はおれがまだＦＢＩにいるものと思いこんでいた。ステームズとおれの仲がよくなかったことを忘れてしまったか、さもなきゃ最初から知らなかったんだ。おれはこの四十八時間ずっとアンドリューズのことを調べて、彼を尾けていた。彼はワシントン支局に籍があって、いまは二週間の休暇中だが、休暇中にしてはやることが妙なんだ。ＦＢＩ本部に出没したり、ウッドロー・ウィルソンの女医とデートしたり、議事堂であちこち嗅ぎまわったりしている」

　上院議員がたじろいだ。

「その女医さんは、おれがギリシャ人と黒んぼをかたづけた晩の当直医なんだ」

「ＦＢＩがすべてを知っているとしたら」と、議長が急いで口をはさんだ。「われわれはどうしてここに集まっていられるんだ？」

「実は、それがどうもわからないんだよ。おれはシークレット・サーヴィスにいる昔なじみと一杯やったんだが、彼はあしたケインを護衛する予定になっていて、予定は全然変更されていないそうだ。つまりシークレット・サーヴィスはあしたのことをなにも嗅ぎつけちゃいない、これはたしかだ。となるとＦＢＩはなにもかも知っていてシークレット・サーヴィスには隠しているか、彼らもなにも知らないかのどっちかだろう」

「きみのＦＢＩの知合いからはなにを聞きだしたのかね？」と、議長が質問した。

「なにも。だれもなに一つ知っちゃいないんだよ、べろべろに酔っぱらっているときでもね」

「アンドリューズはどこまで知っていると思うかね？」

「おれの考えでは、彼はあの女医さんに惚れただけで、ほとんどなにも知っちゃいないと思う。ただ暗闇のなかを走りまわっているだけだよ」と、マトスンは答えた。「彼があのギリシャ人のウェイターからなにか聞きだしたということは考えられる。だとしたら、彼は自分の独断であちこち嗅ぎまわっているんで、ＦＢＩの方針じゃないだろう」

「どうもよくわからんが」

「ＦＢＩは二人組または三人組で捜査をするのが原則だ。だから当然十人やそこらは調べまわっていなければならない。かりに六、七人しか捜査に従事していないとしても、当然おれの耳には入ってくるはずだし、少なくともＦＢＩにいるおれの知合いのだれかはそのことを耳にしているはずだ。たぶんＦＢＩは大統領に対してなんらかの陰謀が企まれていることを知っている、だがいつ——どこで、という手がかりが彼らにはないんだろう」

「あのギリシャ人の前でだれか日付のことを口にしたかね？」と、上院議員が神経質にたずねた。

「はっきりおぼえてはいないが、ＦＢＩがなにか知っているかどうかを確かめる方法が一つだけある」と、議長がいった。

「それはどんな方法かね、ボス？」と、マトスンがたずねた。

議長は一休みして、新しい煙草に火をつけてから冷静に答えた。「アンドリューズを消すことだよ」

「どうして？」

「簡単な理屈だよ。もしも彼がＦＢＩの捜査と関係があるとしたら、アンドリューズが殺されれば彼らはただちにあすのスケジュールを変更するだろう。そういう危険が存在することを知ったら、大統領の乗った車をホワイト・ハウスの門から出さないだろう。結果の重大さを考えてみろ。もしも彼らが大統領暗殺計画を知っていながら、当日まで犯人を逮捕できず、しかもシークレット・サーヴィスにも知らせていなかったとなったら……」

「そのとおりだ」と、マトスンがいった。「彼らはなんらかの口実を見つけて、最後の土壇場で予定を変更するだろう」

「だから、ケインがあすホワイト・ハウスの門の外に出てくるようなら、彼女はなにも知らされていないことになるから、われわれは予定どおりに計画を実行する。もしも彼女が出てこなかったら、われわれは長い休暇をとる。ＦＢＩがわれわれにとって危険なほど多くを知りすぎていることになるからだ」

議長は上院議員のほうを向いた。彼はますますひどく汗をかいていた。

「あんたは間違いなく議事堂の階段にいるようにして、必要があったら彼女を階段の上で引きとめてくれ。その先は万事われわれが引き受ける。あす彼女を殺すことに失敗したら、多くの時間と金が無駄になってしまうし、これほどのチャンスはもう二度とやってこないだろう」

上院議員はうめいた。「きみの頭は狂っているとしか思えないが、ここでその議論をして

時間を無駄にはすまい。だれかがわたしの不在に気づく前に、上院へ戻らねばならんからな」

「まあ落ちつきたまえ、上院議員。すべて思いどおりにいっている。いずれにせよ失敗はありえないのだ」

「きみはそうかもしれん、しかしあすが終れば、わたしは貧乏くじを引かされているかもしれないのだ」

上院議員はそういい捨てて出て行った。議長は無言でドアがしまるのを待った。

「さて、あの腰抜けがいなくなったところで仕事にかかろう。まずマーク・アンドリューズのことと、彼がなにをしていたかを話してくれ」

マトスンは過去四十八時間のマークの動きをくわしく説明した。議長はメモひとつとらずにそれをすっかり頭に入れてからいった。

「よろしい、ミスター・アンドリューズを消すときがきた、それからFBIがどんな反応を示すかを見てみよう。いいか、よく聞いてくれよ、マトスン。これがわれわれのやり方だ。きみはこれからすぐに上院へ戻って……」

マトスンはメモをとり、ときおりうなずきながらじっと耳を傾けた。

「なにか質問は？」議長は話しおわって質問した。

「ないよ、ボス」

「それでも連中が大統領をホワイト・ハウスから出すようなら、彼らはなにも知らないとい

うことだ。最後にもう一つだけいっておく。あすの計画がうまくいかない場合、われわれは自分で自分の面倒を見る。わかったな？　他言は無用だ。報酬は後日いつもの方法で渡される」

全員がうなずいた。

「それからもう一言、万一計画が狂った場合、絶対にわれわれの面倒を見てくれない人間が一人いる、だからそいつの面倒はわれわれが見てやらなきゃならない。その方法はこうだ。サン、もしもケインが……」

彼らは無言で聞き入った。だれも異を唱えなかった。

「ではそろそろ食事にしよう。ホワイト・ハウスの牝犬（めすいぬ）のために昼食の習慣をとりやめにする必要はない。きみには気の毒だがね、マトスン。きょうがアンドリューズの最後の昼食になるように、よろしく頼むよ」

マトスンはにやりと笑った。「それを考えただけで食欲が出るよ」といい残して、彼は出て行った。

議長は電話を取りあげた。「もう昼食を運んでいいぞ」そしてまた新しい煙草に火をつけた。

三月九日　水曜日午後

午後二時十五分

マークは昼食をおえた。ほかの二人の男もサンドイッチを食べ終って立ちあがった。マークは急いで上院へ引きかえした。審議が始まる前にヘンリー・ライカムをつかまえたかったからである。あれから一夜明けたいま、ライカムがまたなにか新しいことを教えてくれるのではないかと期待した。それに、司法委員会の銃砲所持規制に関する公聴記録もほしかった。それでブルックス、バード、デクスター、ハリスン、ソーントンの各議員がどんな質問をしているかを検討したかったのである。もしかするとそれでジグソー・パズルの行方不明のピースがまた一つ見つかるかもしれない。しかしマークはそれほど期待していなかった。いまでは、政治家というやつはめったに本音を吐かない人種だと確信するようになっていた。上院に着いたのは審議開始予定の数分前だった。彼は控え室でページ・ボーイをつかまえて、ライカムを捜してくれと頼んだ。

間もなくライカムが急ぎ足で議場から出てきた。明らかに彼は審議開始の十分前に邪魔されることを望んでいなかった。そんなわけで、ライカムがなにか思いついていたとしても、話をしている暇がなかった。しかしマークは委員会の公聴記録と審議記録のコピーはどこへ

行けば手に入るかを聞きだした。

「それなら廊下のはずれの委員会事務局でもらえるよ」

マークは礼を述べて、階上の傍聴席へ歩いて行った。そこでは新しく友達になった守衛が、彼のために席を確保しておいてくれた。傍聴席は満員だった。議員たちが議場に入って席につきはじめていたので、委員会記録のコピーはあとまわしにすることにした。

副大統領のビル・ブラッドリーが静粛を求め、デクスター上院議員がゆっくりと、芝居がかったしぐさで議場を見まわして、全員が自分に注目していることを目で確かめた。彼の視線がマークの上にとまったとき、議員はいささか意外そうな表情をうかべたが、すぐに気をとりなおして、法案に対する最後の反対演説を始めた。

マークは当惑し、デクスターの刺すような視線の届かない後列に坐（すわ）ればよかったと後悔した。審議は長時間続いた。ブルックス、バード、デクスター、ハリスン、ソーントン。各議員があすの投票を前にして最後の発言の機会を求めた。あすの死を前にして。

マークは五人の演説をすべて聞いたが、新しい収穫はなにもなかった。どうやら袋小路に入りこんでしまったらしかった。きょうはこのあと公聴記録のコピーをもらいに行く以外になにもすることがなかった。今夜一晩かかってそれを読むつもりだったが、すでに五人の議員の演説を二回ずつ聞いていることを考えると、記録から得られるものはなにもなさそうだった。しかしほかにどんな手がかりがあるというのか？　ほかのことはすべて長官の手でカバーされている。彼は廊下をエレベーターの前まで歩いて行き、一階の出口から議事堂を出

て、議事堂構内を横切り、ダークセン・ビルディングへ足を向けた。
「銃砲所持規制の公聴記録をください」
「全部ですか？」と、秘書が目を丸くしてたずねた。
「そうです」
「委員会はのべ六日にわたっているんですよ」
やれやれ、それじゃ一晩ではとても読みきれない。だが、ブルックス、バード、デクスター、ハリスン、ソーントンの質問と演説だけ拾い読みすればなんとかなるだろう。
「サインですか、現金払いですか？」
「できるものならサインにしたいね」と、彼は冗談をいった。
「あなたは公務員ですか？」
そうとも、とマークは心のなかで答えた。しかしそれを口に出すわけにはいかなかった。
「いや」と答えて、紙入れを取りだした。
「あなたの州の上院議員を通じて申込めば、たぶん無料で入手できるでしょう。そうでない場合は十ドルいただきます」
「急いでるんだ。仕方ない、自分で払うよ」
彼は料金を払った。スティーヴンソン上院議員が公聴会場と事務局をつなぐ戸口に姿を現わした。
「こんにちは、上院議員」と、秘書がマークに背を向けて彼に声をかけた。

「やあ、デビー。大気浄化法案のコピーはあるかな？　委員会で修正される前の、小委員会から提出された原案がほしいんだが」

「はい、ございます。ちょっとお待ちください」彼女は奥の部屋に姿を消した。「いま手もとにはこの一通しかないんです。かならず返していただけますかしら、上院議員？」彼女は笑いながらいった。「それともサインしていただいたほうがいいかしら？」

上院議員でもサインするんだな、とマークは思った。上院議員はなんでもサインですます。ヘンリー・ライカムもなんでもサインですます、昼飯までも。おれの税金が高いのもこれじゃ当然だ。しかし食事代ぐらいはあとで請求書がまわってくるんだろう。そうだ、食事がある。なんだっていままで気がつかなかったんだ？　マークはさっと駆けだした。

「ちょっと、あなた、コピーを忘れましたよ」しかしもう間に合わなかった。

「頭がどうかしてるんですわ」と、秘書はスティーヴンソン上院議員にいった。

「これだけの量の記録を読もうというやつは最初から頭がおかしいのさ」と、スティーヴンソン議員はマークが忘れていったコピーの山を眺めながらいった。

マークは前の日ライカムと一緒に昼食をとったG―二一一号室へ直行した。ドアには「議員食堂」と書いてあり、従業員の姿は二、三人しか見えなかった。

「ちょっと失礼、議員たちはここで食事をするんですか？」

「さあ、わかりません。わたしたちは掃除をしているだけなんです」

「ホステスはどこですか？」

「ここにはいませんわ。きょうはもう帰りました。あしたもう一度出なおしてごらんなさい、たぶん会えるでしょうから」

「オーケー」マークは溜息をついた。「どうもありがとう。それからもう一つ——ほかにも議員食堂はあるんですか？」

「ええ。議事堂に大きなのがありますよ。S―一〇九号室。でも一般の人は入れませんよ」

マークはエレベーターの前まで走って、じりじりしながら待った。地下に達すると、もどかしげにエレベーターからとびおりて、キャピトル・ヒルのすべての官庁をつないでいる迷路のような地下道の入口を通り抜けた。「タバコ・ショップ」と書かれたドアの前を通りすぎて、「議事堂行きサブウェイ・カー」という大きな看板のほうへ急いだ。実際はコンパートメントに分れたオープン車輛を指すだけのサブウェイ・カーが、ちょうど発車寸前だった。マークは最後尾のコンパートメントにとび乗って、いかにも「部内者」らしい態度で法案かなにかについておしゃべりをしている上院職員の二人連れと向いあわせに腰かけた。

間もなく到着を知らせるベルが鳴り響いて、車輛は議事堂の上院側で停車した。のうのうとした楽な生活だ、とマークは思った。この連中は寒くて苛酷な外の世界を歩きまわる必要もないのだ。ただ投票と公聴会の間を行き来するだけでいい。地下は議事堂の反対側もこちら側も同じで、くすんだ黄色の壁に鉛管が露出している。それにお定まりのペプシの自動販

手数。ペプシが上院の観光客を得たことは、コカ・コーラを狼狽させたにちがいない。

マークは小さなエスカレーターをぴょんぴょん駆けあがって、一般用のエレベーターを待った。その間に重要人物らしい二人の男が「議員専用」と書かれたエレベーターに案内された。

マークは一階でおりて、途方に暮れながら周囲を見まわした。大理石のアーチと廊下しか見当らない。上院食堂はどこにあるのか？　彼は議事堂警官をつかまえてたずねた。

「ここをまっすぐ行って、最初の廊下を左に曲ったところだ。最初の狭い廊下だよ」と、警官は指さして教えた。

マークは言われたとおりに行き、やがてその狭い廊下を見つけた。調理場と、「報道関係者専用」のドアの前を通り過ぎた。真正面に、「議員専用」と大きな文字で書かれた木の看板が見えた。右手の開かれたドアから入ったところが控え室で、シャンデリアと、ローズ・カラーの模様入りカーペットと、グリーンのレザー・ファーニチュアで飾られ、それらを天井の色あざやかな、ごちゃごちゃした絵が見おろしていた。もう一つのドアを通して、真っ白なテーブルクロースや花といった優雅な食堂風景が見えた。堂々たる貫禄の婦人が戸口に姿を現わした。

「なんのご用でしょうか？」と、彼女は咎めるように眉を吊りあげてたずねた。

「ぼくは博士論文のテーマとして、上院議員の議会における生活をとりあげたんです」マークは紙入れを取りだして、イェールの学生証を見せた。もちろん有効期間のところは親指で隠してた。

婦人は感銘を受けたようすがなかった。
「ちょっとだけこの部屋を見せていただけませんか？　雰囲気をつかみたいんですが」
「いまのところ議員は一人もいないんですよ。水曜日のこの時間はたいていいつもそうなんです。みなさん木曜日には長い週末をすごしに出身州へ帰ってしまいますからね。今週議員たちをここに縛りつけているのは銃砲所持規制法案だけですよ」
マークは少しずつ部屋の中央まで入りこんでいた。一人のウェイトレスがテーブルを掃除していた。彼女はマークにほほえみかけた。
「議員たちは食事のあとサインをしますか、それとも現金で払うんですか？」
「ほとんどの方がサインをして、月末に清算しますわ」
「だれがどれだけ食べたか、どうしてわかるんです？」
「そんなの簡単です。毎日記録をとってますから」彼女は会計と書かれた大きな帳簿を指さした。マークはあの日二十三人の上院議員が昼食をとったことを、彼らの秘書から聞いて知っていた。ほかにも秘書に知らせずにそうした議員がいただろうか？　その答えはつい目と鼻のところにあるのだ。
「ある典型的な一日の記録を見せてもらえませんか。ちょっと興味があるんだけど」と、彼は無邪気な微笑をうかべながらたずねた。
「でも、見せていいかどうか」
「ちらっとのぞくだけでいいですよ。論文を執筆するとき、ちゃんとわかって書いている、

自分の目で見て確かめたのだと、読む人に思わせたいんです。みんなとても親切でしたよ」
マークは哀願するような目で彼女を見た。
「いいわ」と、彼女はしぶしぶ承知した。「そのかわり急いでくださいね」
「どの一日でもいいですよ、たとえば二月二十四日なんてどうかな」
彼女は帳簿をめくって二月二十四日のページを繰った。「木曜日ね」と、彼女はいった。
スティーヴンソン、ナン、モイニハン、ハインツ、つぎつぎに名前が読みあげられた。ドール、ハットフィールド、バード。するとバードはあの日上院で食事をしたわけだ。彼はその先を読み進んだ。テンプルトン、ブルックス――ブルックスもここで食事をしている。バーンズ、レナルズ、ソーントン。すると彼の今朝の声明は嘘じゃなかったんだ。ウェイトレスは帳簿を閉じた。ハリンスも、デクスターも、帳簿にのっていない。
「とくにおもしろいことはないでしょう?」と、彼女はいった。
「そうですね」マークは彼女に礼をいって、早々に部屋を出た。
通りに出てタクシーを呼びとめた。三人の尾行者の一人もあとを追い、ほかの二人は自分の車をとりに行った。
マークは数分後にFBI本部に着いて、タクシー料金を払い、入口で身分証明書を見せて、エレベーターで七階にあがった。ミセス・マグレガーが笑顔で迎えた。長官は一人でいるにちがいない、とマークは思った。ドアをノックして長官室に入った。
「どうした、マーク?」

「ブルックス、バード、ソーントンの三人は無関係です」

「ブルックスとバードは予想どおりだ」と、長官はいった。「彼らが関係しているというのは筋が通らんからな。しかしソーントンは本命につぐ対抗馬だと思っていたよ。それはとにかく、三人をリストから除いたのはどういうわけだ？」

マークは急に上院食堂のことを思いついた経過を説明し、ほかになにか見逃していることはないかと考えてみた。

「きみは三日前にそのことに気づくべきだった、そう思わんかね、マーク？」

「思います」

「わたしも当然そこに気づくべきだったよ。ともあれデクスターとハリスンの二人が残ったわけだ。ところでこの二人は、ほかの大部分の上院議員と一緒に、あすワシントンにいて、二人とも上院の儀式に出席する予定になっている、と聞けばきみも興味が湧くだろう。おもしろいことに」と、長官は感慨にふけった。「あれだけのレヴェルに達しても、人間というやつは自分の犯罪が実行されるのを見たがる心理が働くものと見える。

「いいかアンドリューズ、もう一度おさらいしてみよう。大統領はわたしが止めないかぎりあす午前十時にホワイト・ハウスの南口を出発する。だからわれわれに残されたのは十七時間と最後の一つの希望だけだ。指紋係はミセス・カセフィキスの指紋のついた紙幣を発見した。二十二枚目のやつに見つかったのは幸運だったといわなければなるまい——あと半ダース残っているやつを全部調べなければならないとしたら、あす十時まではとうてい間に合わ

なかっただろう。ほかにもいくつか指紋が検出されているので、今夜じゅうかかってそれを調べることになるだろう。わたしは今夜十二時までに家へ帰っている。なにかあったら電話をくれ。それから明朝は八時十五分にここにきてもらう。ここまできたらもうやれることはいくらもない。だがあまり心配はしなくていい、いま二十人の捜査官をこの事件の捜査に当らせている。くわしい事情はだれにも話していないがね。そしてこの悪党どもの正体がわからないかぎり、大統領を危険区域に近づかせないつもりだ」

「では、明朝八時十五分にここにきます」と、マークがいった。

「それからマーク、ドクター・デクスターには会わんほうがいいぞ。きみの色恋沙汰のために土壇場でこの作戦をぶちこわされるのはかなわんからな。悪く思わんでくれ」

「はい」

マークはいささか余計者めいた心境で長官室を出た。いまは二十人の捜査官がこの事件の捜査に当っているという。長官は彼に内緒でいつからその二十人を動かしてきたのだろうか？　二十人の捜査官が理由もわからずにデクスターとハリスンのどっちが犯人かを突きとめようとしている。依然として事件の全貌を知っているのは彼と長官だけで、しかも長官は彼の知らないことまで知っているのではないかと思われるふしがある。おそらくあすの晩まではエリザベスを避けるほうが賢明というものだろう。しかしそれはとうてい不可能だということを彼は知っていた。彼はエリザベスに電話することの意味あいを考えてみた。車に乗ってダークセン・ビルディングまで引きかえしたとき、委員会事務局に公聴会記録のコピー

をたれてきたことを思いだした。ダークセン・ビルディングに入ると、足がひとりでに電話のほうに向っていた。彼女に電話して、事故のあとどんなぐあいかとたずねずにはいられない気分だった。彼はウッドロー・ウィルソンの番号を回した。

「あら、ドクター・デクスターはお帰りになりました——しばらく前ですけど」

「ありがとう」マークはつぎに自分の心臓の鼓動を感じながら、ジョージタウンの彼女の自宅の番号を回した。

「エリザベス？」

「そうよ、マーク」彼女の声は——冷たい？ おびえている？ 疲れている？ 無数の疑問が心のなかを駆けめぐった。

「これから行ったら会ってくれるかい？」

「ええ」電話が切れた。

マークは掌ににじんだ汗を意識しながら電話ボックスから出た。エリザベスに会う前にもう一つだけすましておかなければならないことがある、上院の銃砲所持規制法案に関する公聴会記録のコピーをとってくることだ。

エレベーターのほうに歩きながら、背後に足音を聞いたような気がした。もちろん、足音が聞えるのは当然だ、うしろには数人の人がいた。エレベーターの前に達して、UPボタンを押し、足音のするほうを振りかえった。上院事務職員や、下院議員や、見学者の群れに混って、二人の男が彼を見張っていた——それとも護衛しているのだろうか？ サングラスを

かけた三人目の男が医療保険制度のポスターのそばからじっとマークをみつめていたが、マークの鋭い目には、この男のほうがほかの二人よりもいかにもＦＢＩ捜査官らしく見えた。長官は二十人の捜査官をこの事件に投入したといっていたが、どうやらそのうちの三人はマークの行動を見張っているらしかった。くそいまいましい。間もなくエリザベスの家まで尾行してきて、すぐにそのことを長官に報告するに決っている。マークはエリザベスの家へ行く途中で三人ともかならずまいてやろうと決心した。エリザベスと会うのは彼らの知ったことじゃない。かならず途中でまいてやる。彼女と会うときだけは、彼らの詮索的な目と意地の悪い口をなんとしても避けたかった。エレベーターを待つ間に、二台のうちのどちらが先に到着するかをすばやく目で確かめた。二人連れは彼のほうに近づいてきたが、三人目の男はポスターのそばから一歩も動いていなかった。ひょっとするとこの男はＦＢＩではないのかもしれない、がそれにしてもどこかで見た顔だった。どことなくＦＢＩくさい感じがあって、同じ仲間には目をつぶっていてもその感じがぴんとくるのだ。

　マークはエレベーターに気持を集中した。右手の矢印が明るくなって、ドアがゆっくりあいた。マークはさっとなかにとびこんで、ボタンの前に立ち、廊下のほうを見た。二人の男が続いて乗りこみ、彼のうしろに立った。ポスターのそばの男がエレベーターのほうに歩いてきた。ドアがしまりはじめた。マークがＯＰＥＮボタンを押したので、またドアがあいた。三人目の男が乗りこむまでなんとかもたせて、三人とも一つの箱に閉じこめてしまわなければならない。だが三人目の男はその手には乗らず、つぎのエレベーターを待つようなふりを

して立っているだけだ。彼は下へおりたいのかもしれない、結局ＦＢＩじゃなかったのかもしれない。きっとそうなんだ……ドアがふたたびしまりはじめた。いまがチャンスだ、マークは隙間からさっととびおりた。だがその計算が違った。オマリーがあとに続いて間一髪外にとびだし、彼の相棒だけがゆっくりと、うむをいわさず、八階まで運ばれて行った。ともかくこれで尾行者は二人に減った。別のエレベーターが到着した。三人目の男がすぐに乗りこんだ。すごく機転がきくかなにも知らないかだ、と思いながらマークは外で待った。オマリーは彼のすぐうしろに立っていた――つぎはどっちだ？

マークはエレベーターに乗りこんでＤＯＷＮボタンを押した、がオマリーも難なくあとに続いた。マークはＯＰＥＮボタンを押してさっととびだした。オマリーが顔色一つ変えずにとびおりた。三人目の男はエレベーターのなかで一歩も動かなかった。この二人はチームで仕事をしているのにちがいない。マークはひょいとなかへ戻ってＣＬＯＳＥボタンを強く押した。ドアはひどくゆっくりしまりはじめたが、オマリーはエレベーターから二歩ばかり歩きだしていたので間に合いそうもなかった。ドアがぴったりしまったとき、マークはにやりと笑った。これで二人かたづいた。一人は一階に置き去りにされ、一人は屋上に向って上昇中で、彼と一緒に地下に向いつつあるのは残る一人だけだった。

オマリーは五階でピアース・トンプスンに追いついた。二人ともはあはあ息を切らしていた。

「彼はどこだ？」と、オマリーが叫んだ。
「どこだとはどういう意味だ？　あんたと一緒だと思っていたのに」
「いや、おれは一階でまかれてしまった」
「くそっ、あの野郎、いったいおれたちをどっちの味方だと思っていやがるんだ？　長官にはだれが報告する？」
「おれはやだよ」と、オマリーがいった。「あんたのほうが先輩だ、頼むよ」
「おれだってやだよ」と、トンプスン。「おまけにあのマトスンのやつが手柄を独りじめときた——あいつのことだからきっとぴったり食いついてるだろう。いいから彼を捜すことにしよう。お前は一階から四階まで、おれは五階から八階までだ。見つけしだいブザーを鳴らせ」

エレベーターが地下に達しても、マークは外へ出なかった。男はおりて行ったが、一瞬ためらっているように見えた。マークの親指がふたたびＣＬＯＳＥボタンを強く押した。ドアがしまり、彼は独りになった。一階を通過しようとしたがそうはいかなかった。一階から乗りこもうとしている人間がいた。それが三人のうちの一人でないことを祈った。避ける方法はなかった。ドアがあくと同時にさっと外へ出た。三人の姿は見えなかった。ポスターのそばにもだれもいない。廊下のはずれの回転ドアめがけて走りだした。守衛が疑いの目で彼を見ながら、拳銃のホルスターに手をのばした。回転ドアを通り抜けて、全速力で外へ走り出

た。あたりを見まわした。人々は悠々と歩いている、だれも走ってはいない。もう安全だ。

ペンシルヴェニア・アヴェニュー――急ブレーキの音と激しい罵声を縫って通りを渡った。駐車場に辿りついて、自分の車にとび乗り、ポケットの小銭をさぐった。なんだって坐るとポケットに手が入らないようなズボンを作るんだろう？　急いで駐車料金を払い、ジョージタウンへ――エリザベスのもとへ走りだした。バックミラーをのぞいてみると、フォード・セダンは見えなかった。成功だ。もうだれにも尾けられていない。会心の笑みがうかんだ。とうとう長官の鼻をあかしてやった。ペンシルヴェニアと十四番ストリートの交差点で、信号が変りかけたところを突っ切った。ようやく緊張がゆるみはじめた。

一台の黒いビュイックが赤信号を突破した。さいわい近くに交通警官の姿はなかった。

ジョージタウンに到着すると、新たな緊張が、長官と彼の世界ではなく、エリザベスと彼女の世界と結びついた緊張がよみがえってきた。玄関の呼鈴を押すときに、依然として自分の心臓の鼓動が聞えていた。

エリザベスが現われた。ひどく疲れたような顔をしていて、一言も口をきかなかった。彼女について居間に入りこんだ。

「事故のあとはもうすっかりいいのかい？」

「ええ、ありがとう。でもどうして事故にあったことを知ってるの？」

マークはすばやく言い訳を考えた。「病院に電話して聞いたんだよ」

「嘘だわ、マーク。わたし、病院では事故のことを話していないし、父から電話があったので早くにあそこを出たのよ」

マークは彼女の目をまともに見られなかった。椅子に腰をおろして床の絨毯に目を落とした。

「ぼくは……きみに嘘などつきたくないんだ、エリザベス。わかってくれ」

「どうしてわたしの父をつけまわすの？」と、彼女が詰問した。「父はメイフラワーであなたと会ったとき、どこかで見た顔だと思ったそうよ。父の出る委員会につきまとったり、上院の審議を傍聴したりしてたんでしょう」

マークは答えなかった。

「いいわ、説明してくれなくたって。わたしの目は節穴じゃないのよ。自分なりに結論を出すわ。わたしにつきまとうのもFBIの仕事のうちなのね。それにしてはずいぶん遅くまで働かされるのね、マーク・アンドリューズ。選ばれて上院議員の娘たちを担当している男にしては、あなたは無能もいいところよ。今週は何人の娘たちを誘惑したの？　なにか不正を嗅ぎつけた？　いっそ来週は上院議員の夫人たちに鞍替えしたらどう？　あなたの子供っぽい魅力は娘たちより奥さんたちのほうに向いていると思うけど。もっとも、正直なところ、わたしはあなたの嘘にころりとだまされていたわ」

水のように冷たい自制心を働かせて相手を攻撃しようという努力もむなしく、エリザベスはあまりの口惜しさに唇を噛みしめていた。彼女の声がとぎれた。マークはいまだに彼女の膝を正視できなかった。彼女の声は怒りに震え、涙声になっていた。やがて、ふたたび激情

が凍りつくような霜におおわれた。

「出て行って、マーク。もういいたいことはいったし、二度とあなたの顔を見たくないわ。そうすればわたしの自尊心もいくらかは癒されると思うの。さあ、出て行って。そしてまた泥のなかを這いまわるといいわ」

「きみは誤解してるよ、エリザベス」

「わかってるわ、誤解された気の毒な捜査官さん、わたしを愛してる、ほかに女はいないといいたいんでしょう。少なくともつぎの任務をいいつかるまでは、でしょう。とにかくこの仕事はもうおしまいよ。どこかでほかの上院議員の娘を見つけて、心にもない愛の言葉で彼女を誘惑なさったら？」

彼女の態度を非難する資格は、彼にはなかった。彼は言葉もなく部屋を出た。

茫然自失の状態で家まで車を走らせた。尾行する車のなかの二人の男は、目を皿のようにして彼の行動を見張っていた。アパートに着くと、マークはキイをサイモンにあずけて、エレベーターで自分の部屋へあがった。

黒いビュイックはアパートから百ヤードのところに駐車した。二人の男はマークの部屋に明りがつくのを確認した。マークはエリザベスの七桁の番号を六つ目まで回したが、思いなおして受話器をおき、明りを消した。ビュイックのなかの一人が新しい煙草をつけ、一服吸ってから時計を見た。

何か月もかけて根気よく取引し、圧力をかけ、甘言を弄し、脅迫した末、ついに銃砲所持規制法案は議会の最終的な承認を得るべく提出される運びになった。

フロレンティナはアメリカの歴史に消すことのできない足跡をしるすことになる。任期中にほかにはなにもしなかったとしても、この一事だけで誇るに足るだろう。

今それを妨げるものはなにか？　彼女は千回目の自問を試みた。そして千回目の同じ恐ろしい考えが心に浮んだ。

彼女はふたたびその考えを打消した。

三月十日　木曜日朝

午前五時〇〇分

長官はとつぜん目がさめた。いらいらした気分でベッドに横たわっていた。こんな時間には天井を見ながら考えごとでもすることがなかったが、考えたところでどうなるものでもなかった。過去六日間の出来事を何度も繰りかえして反芻し、そのたびに作戦を中止することは最後の最後まで考えないようにした。作戦の中止はとりもなおさず上院議員とその一味を無傷のまま取り逃がすことを意味するだろう。あるいは彼らはすでにこちらの手の内を知って姿をくらまし、傷口を舐めながらまたの機会にそなえているのかもしれなかった。いずれにせよ、それが長官にとっての問題であることに変りはなかった。

上院議員は五時三十分に汗びっしょりになって目をさました——目をさましたとはいっても、一晩じゅう通して眠りは数分と続かなかったのだが。雷鳴と稲妻とサイレンの音に彩られた不吉な一夜だった。彼に汗をかかせたのはサイレンの音だった。彼は予想以上に神経質になっていた。午前三時が鳴るのを聞いた直後には、もう少しで議長を電話で叩き起して、これ以上計画に加担することはできないと通告するところだった。裏切った結果がどうなる

かつて[illegible]議長のほかはみな[illegible]
[illegible]ていたにもかかわらずである。ナイン大統領が[illegible]自分のかたわらに置いた
[illegible]を前にするかたちで、上院議員は、[illegible]されたときに自分がどこにいたかを
[illegible]という事実を思いださずにいられなかった。おそらく
[illegible]したときに自分がどこにいたかということを、永久に
[illegible]突然とさせられるのは、自分の名前が新聞の見出
[illegible]ジが取り返しのつかないほどそこなわれ、政治家
[illegible]を考えたときだった。それでもなお、なによりも安心
[illegible]ことにいるあすの朝まではいっさい挙動しないという
[illegible]議長に電話をかけるところだった。
[illegible]そのことはほとんど世間の話題にもならなかった。し
[illegible]大統領の死は全世界を震撼させるだろう。
上院議員は[illegible]な目で窓の外を眺めていたが、やがて窓から目をそむけた。時計を見ながら、できれば時の流れを止めてしまいたいと思った。秒針は運命の時に向って容赦なく進んでいた。食事をとり、朝刊に目を通した。《ワシントン・ポスト》が[illegible]の歴史上最悪の嵐によって、夜の間に多くの建物が火事になったことと、ヴァージニア[illegible]ンが氾濫して甚大な被害が出たことを報じていた。ナイン大統領に関する記事はまったく見当らなかった。上院議員はあすの新聞をきょう読みたいものだと思った。

かということを、真綿でじわじわ首をしめるように、何度も繰りかえして議長の口からほのめかされていたにもかかわらずである。ケイン大統領が死体となって自分のかたわらに横たわる光景を想像するだけで、上院議員は、JFKが暗殺されたときに自分がどこにいたかを国民のだれもが正確におぼえている、という事実を思いださずにいられなかった。おそらく彼自身もフロレンティナ・ケインが死んだときに自分がどこにいたかということを、永久に忘れることができないだろう。それ以上に慄然とさせられるのは、自分の名前が新聞の見出しになり、国民の目に映った自分のイメージが取り返しのつかないほどそこなわれ、政治家としての経歴に終止符が打たれることを考えたときだった。それでもなお、なによりも安心感を得たいがために、彼は議長がマイアミにいるあすの朝まではいっさい接触しないという約束にそむいて、あやうく議長に電話をかけるところだった。

すでに五人の人間が死んでいるが、そのことはほとんど世間の話題にもならなかった。しかしケイン大統領の死は全世界を震撼させるだろう。

上院議員はしばらくうつろな目で窓の外を眺めていたが、やがて窓から目をそむけた。時計を見ながら、できれば時の流れを止めてしまいたいと思った。秒針は運命の時に向って容赦なく進んでいた。彼は急いで朝食をとり、朝刊に目を通した。《ワシントン・ポスト》がワシントンの歴史上最悪の嵐によって、夜の間に多くの建物が火事になったことと、ヴァージニアのラパー・ランが氾濫して甚大な被害が出たことを報じていた。ケイン大統領に関する記事はほとんど見当らなかった。上院議員はあすの新聞をきょう読みたいものだと思った。

この日長官が最初に受けた電話はエリオットからのもので、デクスター、ハリスン両上院議員の最近の活動は、現在の状況に関して――といってもエリオットが現在の状況とはなにかを正確に知っていたわけではないが――なにも明らかにしていない、という報告だった。長官はぶつぶつ独り言をいいながら、朝食の目玉焼きを平らげ、夜の間にワシントンを襲った大嵐に関する《ポスト》の記事を読んだ。窓外に目をやると、一夜明けた空はからりと晴れあがっていた。暗殺にはお誂え向きの天候だ、と彼は思った。うららかに晴れた日は、蝮を誘いだす（訳注『ジュリアス・シーザー』第二幕第一場より）。すべての人間にすべての事情を知らせるのを、いつまで引きのばせるだろうか？　大統領は午前十時にホワイト・ハウスを出発する予定だ。長官はシークレット・サーヴィス長官のH・スチュアート・ナイトにそれよりずっと前に、そして必要とあれば大統領に少なくとも一時間前に事情を話さなければならない。だがかまうものか、ぎりぎりまで話さずにおいて、釈明はあとまわしにしよう。この腹黒い上院議員を犯行現場でつかまえるために、彼は喜んで自分の首を賭けるつもりだった。それにしても大統領の生命を危険にさらすとなると……

彼は六時ちょっとすぎにFBI本部に向って家を出た。アンドリューズよりまるまる二時間は先に到着して、前の晩に命じておいた報告のすべてに目を通しておきたかった。幹部級の部下たちは、理由はわからないまでも、昨夜はほとんど眠れなかっただろう。だが間もなく彼らもすべてを知ることになる。捜査担当副長官、企画・監察担当長官補佐、その部門の

列車セクションの責任者などが、強行すべきか中止すべきかの最終決定を下してくれるだろう。彼のフォード・セダンは地下駐車場のランプをくだって、長官専用の駐車スペースに入りこんだ。

エリオットがエレベーターまで彼を出迎えた——彼はただの一度も出迎えを欠かしたことがなく、ただの一度も時間に遅れたためしがなかった。この男は人間じゃない、こいつにはやめてもらおう、と長官は思った。もっともその前に自分がやめなければならないかもしれないが。ふと、今夜大統領に辞表を渡すことになるかもしれないことに思い当った。どの大統領に？　彼は急いでその考えを頭から追いだした——そのときはまたそのときだ、いまはつぎの五時間のことだけ考えていればいい。

エリオットは役に立つ情報をなにも持っていなかった。デクスターもハリスンも夜から朝にかけて何本か電話をかけていたが、疑わしい点はなにもなかった。エリオットの手もとに入っている情報はそれだけだった。長官は両議員はいまどこにいるかと質問した。

「二人とも自宅で朝食をとっています。デクスターはケンジントン、ハリスンはアレクサンドリアです。六人の捜査官が今朝五時から彼らを尾行していて、きょう一日ずっとその任務を続けることになっています」

「よろしい。なにか変ったことがあったらすぐ報告してくれ」

「承知しました」

つぎは指紋係だった。指紋係が長官室に到着すると、長官はまず徹夜で働かせたことを詫

びたが、今朝ひげを剃るときに鏡で見た長官の顔よりは、指紋係の顔のほうが生気に溢れていた。

身長五フィート四インチ、痩せ型で青白い顔をしたダニエル・サマートンが、報告を始めた。彼はおもちゃを手にした子供のようなものだった。指紋を相手にすることは、彼にとって仕事であると同時に情熱の対象でもあるのだ。サマートンが立ったまま報告する間、長官はずっと腰をおろしていた。もしも長官が立ちあがったとすれば、肩から上などというものではなく、胸から上がサマートンの上に突きでてしまうのだ。

「われわれは親指の指紋を三種類と、それ以外の指の指紋を十七種類発見しました、長官」と、彼は楽しそうに報告した。「専門的な説明は省略しますが、技術上の理由で一度に一つずつ検査することが不可能なので、ヨード蒸気法ではなくニンヒドリン試薬でテストしているところです」

彼は長官に対して科学的説明を試みても無駄だというように、片手を振った。おそらくそれが時間の浪費だということは、だれよりも長官自身がいちばんよく知っているだろう。

「あと二つほど確認可能な指紋があると思います」と、サマートンは続けた。「とにかくいまから二時間、遅くとも三時間以内に二十二個全部の検査結果を報告するつもりです」

長官は時計を見た――すでに六時四十五分だった。

「ごくろう。早ければ早いほどありがたい。できるだけ早く結果を――たとえ否定的であっても――知らせてくれ。それからきみのスタッフに徹夜作業の礼をいっておいてくれたま

指紋の専門家は一刻も早く三つの親指の指紋、十七のその他の指の指紋、未確認の二つの指紋のもとへ戻るべく、長官室から出て行った。長官はボタンを押して、企画・監察担当長官補佐を呼ぶように命じた。

二分後に、ウォルター・ウィリアムズが彼の前に立っていた。

身長五フィート十一インチ、金髪、痩せた青白い顔、禿げあがった広い額、苦しみではなく喜びがそのなかに詰っている。ウィリアムズはFBI内では「頭脳」またはW・Wと呼ばれている。彼の本来の任務はFBIの、彼よりは劣るがそれでも水準をはるかにぬきんでた六つの頭脳からなるシンク・タンクを率いることである。長官はしばしば彼に仮定にもとづく質問を呈する。それに対して彼が提出する答えは、あとになって振りかえってみれば、だいたいにおいて正しかったことがわかる。長官は彼の判断に絶大の信頼をおいているが、きょうだけはいかなるリスクも避けなければならなかった。W・Wが昨夜の長官の質問に対して納得のゆく答えを用意していないとすれば、長官はつぎに大統領に電話しなければならない。

「おはようございます、長官」

「おはよう、W・W。わたしのささやかな問題に関するきみの結論を聞かせてもらおうか」

「たいそう興味深い結論が出ましたよ、長官……はっきりいって、答えは簡単だと思います、この状況をあらゆる角度から検討してみた結果ですがね」

この朝はじめて長官の面上にかすかな笑みがうかんだ。

「ただしわたしが資料の読みちがえをしなかったものとしての話です」

長官の笑みがわずかに拡がった。W・Wがなにかを見落したり読みちがえたりする気づかいはまずなかったし、二人っきりのときでも決して長官をホールトと呼んだりはしないほど礼儀正しい男だった。W・Wは選挙の年のダウ・ジョーンズ指数のように眉を上下させながら、報告を続けた。

「長官の指示に従って、大統領がX時〇〇分にホワイト・ハウスを出発して車で議事堂に向うものと仮定します。この間の所要時間は六分です。大統領の車は防弾になっていて、シークレット・サーヴィスによって厳重に護衛されるものとします。この状況で大統領を暗殺することは可能かどうか？　答えは、可能ではあるがほとんど不可能と出ましたよ、長官。しかしながら、この仮定をその論理的帰結まで追求した場合、暗殺チームがとる方法は三つ考えられます。それはa)爆発物、b)至近距離からの拳銃使用、c)ライフルです」

W・Wは常に教科書のような話し方をした。「爆弾はこのルートのどの地点でも投げられますが、プロの殺し屋は爆弾を使いません。なぜならプロは襲撃行為ではなく、結果で報酬をもらうからです。大統領暗殺の手段としての爆弾を検討するならば、在職中に暗殺された大統領が過去に四人いるという事実にもかかわらず、それはかつて成功したためしがないということがわかるでしょう。爆弾は必然的に罪のない人々を巻添えにするばかりでなく、しばしば加害者をも巻添えにします。長官のお話では犯人一味はプロだろうとのことでしたか

ら、この理由で、彼らは拳銃かライフルを使用するにちがいないとわたしは考えます。さて、射程距離の短い銃を大統領の通り道で使うことはまずありえないでしょう。プロの殺し屋が大統領に接近して至近距離から発砲し、自分の命も危険にさらすとは考えられないからです。大統領のリムジンを貫通するには象撃ち銃か対戦車砲が必要ですが、そんなものを許可証なしでワシントンのど真ん中を持ち歩くわけにはいきません」

W・Wが相手では、冗談のつもりなのかそれとも単なる事実を述べているだけなのか、長官にも見当がつかなかった。眉毛は依然として上下に揺れ動いていた。これは愚かな質問で話の邪魔をするなという注意信号である。

「大統領が議事堂の階段に到着するときは、群衆との距離が遠すぎて拳銃では(a)狙いが不正確になるし、(b)殺し屋が無事に逃げおおせる可能性もありません。したがって国家元首暗殺の手段としては最も安全で成功率の高い方法――射程距離の長い望遠ライフルと断定してよいでしょう。殺し屋の唯一のチャンスは議事堂前です。ホワイト・ハウスの内部は外から見えないし、万一見えたにせよ窓ガラスの厚さは四インチもありますから、殺し屋は大統領が議事堂の階段の下でリムジンからおりる瞬間まで待たなければならないでしょう。今朝議事堂の階段をのぼって時間をはかってみたところ、約五十秒かかりました。狙撃に好都合な高い場所はほとんどありませんが、あの一帯を虱つぶしに調べて、疑わしい場所は残らず報告書に書いておきました。また犯人どもにはわれわれが暗殺計画についてなにも知らないという確信がなければなりません、さもないとわれわれが考えられるかぎりの狙撃場所をカバー

してしまうからです。結論として、ワシントンの中心部での暗殺はまず起りえないが、大胆かつ熟練した殺し屋または暗殺チームの手にかかれば絶対に不可能ではない、とわれわれは考えます」
「ありがとう、W・W。きみの判断にまず間違いはないだろう」
「恐縮です。これが単なる仮定であればいいんですが」
「まったくだよ、W・W」
W・Wはクラスでただ一人、教師の質問に答えられる生徒のような微笑をうかべた。それからほかの問題に対処するために長官室を出て行った。長官は一息入れてから別の長官補佐を呼んだ。
マシュー・ロジャーズはノックをして部屋に入り、椅子をすすめられるのを待った。彼は権威というものを理解していた。W・Wと同じように、彼もFBI長官にはなれないだろうが、長官の地位についた人間にとっては不可欠の存在だった。
「どうだ、マット?」長官はレザー・チェアを指さしながらいった。
「ゆうべアンドリューズの最新の報告を読みましたが、そろそろシークレット・サーヴィスに知らせるほうがよくはないでしょうか、長官」
「あと一時間ほどしたら知らせるつもりだ」と、長官は答えた。「心配はいらん。ところで部下の配備計画はできたかね?」
「それは最大の危険がどこにあるか、ということしだいで変ってきます」

ようということにしよう——それならばどうだ？」

「よろしい、マット、最も危険な場所は議事堂の階段の上、時間は十時六分ということにしよう——それならばどうだ？」

「まずその地域を約四分の一マイルにわたってぐるりと包囲します。地下鉄を閉鎖し、公私を問わずすべての交通を止め、恐喝の前科のある者、保安のインデックスに載っている者を残らず取り調べます。周辺の警備には首都警察から応援をあおぎます。その地域にはできるだけ多くの目と耳がほしい。アンドリューズ空軍基地に要請して二機から四機のヘリコプターを出動させ、空中からの査察に当らせます。大統領の身辺は、シークレット・サーヴィスの大統領警護班を総動員して、厳重に警備させるつもりです」

「結構だ、マット。それだけの作戦に要する人員は？　それからいますぐわたしが緊急指令を発したとして、警備態勢が完全に整うまでどれくらいかかるかな？」

長官補佐は時計を見た——ちょうど七時をまわったところだった。彼はしばらく考えてから答えた。「三百人の捜査官に指示を与えて、警備態勢を整えるまで、二時間はかかるでしょう」

「よろしい、すぐにかかってくれ」長官はきびきびした口調でいった。「準備ができしだい報告してくれ。ただし最終の指示はできるだけ先へのばせ。それから、マット、ヘリコプターは十時一分すぎまで飛ばすな。機密漏洩はどんなことがあっても防がなければならない、暗殺者を逮捕するチャンスはそれしかないのだ」

「それより大統領の議事堂行きを中止させたらどうなんですか？　われわれは深みにはまっ

ていますし、そもそもこれはあなただけの仕事じゃないんですよ」
「いま中止したら、つぎはまた最初からやりなおさなければならん」と、長官は答えた。
「おそらくこんなチャンスは二度とないだろう」
「わかりました」
「わたしを失望させるなよ、マット、地上作戦の指揮はきみに一任するつもりだからな」
「ありがとうございます」
ロジャーズが部屋から出て行った。長官はロジャーズがこの仕事をアメリカじゅうのいかなる警察官よりもりっぱにやってのけることを信じて疑わなかった。
「ミセス・マグレガー」
「はい、なんでしょうか？」
「ホワイト・ハウスに電話してシークレット・サーヴィス長官を呼びだしてくれ」
「かしこまりました」
長官は時計を見た。七時十分。アンドリューズは八時十五分に現われることになっている。
電話が鳴った。
「ミスター・ナイトがお出になっています」
「スチュアート、わたしの専用番号にすぐかけなおしてもらえないか？　それから、盗聴されないように用心してくれ」
H・スチュアート・ナイトはホールトの人柄（ひとがら）をよく知っているので、よほど重大な用件な

のだろうと考えた。そこで特殊な周波数帯変換器を使って折りかえし電話した。
「スチュアート、いますぐきみに会いたい。場所はいつものところだ、およそ三十分で話はすむ。それ以上手間はとらせない。最優先事項なのだ」
間の悪いときに呼びだされたもんだ、とナイトは思った。大統領の議事堂行きが三時間後に迫っているというのに。しかしホールトがこういう電話をかけてくることは年に二度か三度しかないから、ほかの仕事を中断しても会わなければならないほどの重要な話があるのだろう。ホールトに優先するのは大統領と司法長官だけだった。

ＦＢＩ長官とシークレット・サーヴィス長官は、十分後にユニオン・ステーションの前のタクシー乗場で落ちあった。彼らは列の先頭のタクシーではなく、七台目に乗りこんだ。二人とも口をきかず、そしらぬ顔でシートに腰をおろした。エリオットがマックス・イエロー・キャブを運転して議事堂を回りはじめた。ＦＢＩ長官が一方的に話し、シークレット・サーヴィス長官は黙って耳を傾けた。

マークは六時四十五分に目ざましの音で眠りからさめた。シャワーを浴び、ひげを剃りながら、上院に忘れてきた公聴会記録のコピーのことを考え、あんなものを読んでもおそらくデクスターかハリスンかの決め手にはならなかったと、自分を納得させた。そして間接的にではあるがバード、ブルックス、ソーントンの三人をリストから除く手がかりを与えてくれ

たスティーヴンソン上院議員に心のなかで感謝した。彼はいつの間にか長官の推理に同調しはじめていた――あらゆる事実がデクスターを指していた。彼の動機はとくに強力だった。しかし……マークは時計を見た。まだ少し余裕がある。ベッドの端に腰をおろして、脚をぽりぽり掻いた。夜中に虫にでも刺されたらしく、痒くて仕方がなかった。なにか見落していることはないかと、必死で考え続けた。

議長は七時二十分にベッドから出て、最初の煙草をつけた。いつ目をさましたのかはっきりはおぼえていなかった。六時十分にトニーに電話をかけた。トニーはそのときすでに起きだして、彼の電話を待っていた。彼らはこの日議長が急に車を必要としないかぎり会う予定がなかった。つぎに彼らが話をするのは、全員が配置についたことを確認するための九時三十分のチェックのときである。

電話をかけ終ると、議長はルーム・サーヴィスに豪勢な朝食を注文した。きょうの午前中に彼がやろうとしている仕事は、空きっ腹で取組めるような仕事ではなかった。マトスンが七時三十分以降に電話してくることになっていた。おそらく彼はまだ眠っているだろう。ゆうべのあの仕事のあとだから、少々休息が必要だろう。議長は独り笑いをうかべた。それからバスルームへ行ってシャワーの栓をひねった。冷たい水がちょろちょろ流れでた。なんというホテルだ。一泊百ドルもふんだくっておきながらお湯も出ないとは。不器用に水をはねかえしながら、つぎの五時間について考え、計画を注意深くおさらいして、どんな些細な見

落しもないことを確かめた。ケインは死に、今夜チューリヒにあるユニオン・バンク・オブ・スイッァーランドの彼の口座、AZL―376921―Bには、二百万ドルが振りこまれているだろう。これは銃器製造業にたずさわる彼の友人たちからの、ささやかな感謝のしるしである。しかもそれは合衆国政府の税金の対象外の金なのだ。

電話が鳴った。ちぇっ。彼は床に水をたらしながら電話をとった。心臓の鼓動が速くなった。マトスンからだった。

マトスンと議長は、今朝二時三十五分に仕事を完了してマークのアパートから引きあげた。マトスンは三十分寝すごした。ホテルの交換台は彼が頼んだモーニング・コールを忘れていたのだ。まったく近ごろはどいつもこいつも信用できないときている。彼は目をさますと同時に議長に電話を入れた。

サンは無事にクレーンのてっぺんに身をひそめ、すべての準備をおえていた――一味のなかでまだ眠っているのはおそらく彼だけだった。

議長は、水がぽたぽたたれるのは不愉快だったが、ほかの点では満足だった。彼は電話を切ってシャワールームへ戻った。くそっ、まだお湯が出ない。

マトスンはマスターベーションにとりかかった。神経がたかぶったとき、そして暇があるときは、いつもそうするのだった。

フロレンティナ・ケインは七時三十五分まで目をさまさなかった。寝返りをうって、たっ

たいま見た夢を思いだそうとしたが、どうしても思いだせないのでぼんやりほかのことを考えた。きょうは議事堂へ行って、上院の特別会議で銃砲所持規制法案のための演説をおこない、そのあと同法案の主な支持者および反対者たちと一緒に昼食をとる予定になっている。この法案は彼女の予想どおり委員会では承認されていたので、もっぱら議場における戦いの最終日にそなえて戦術をしぼってきた。少なくとも形勢はいまや彼女に有利に傾いていた。

彼女はエドワードにほほえみかけた。もっとも彼は妻に背を向けて眠っていた。この会期は目がまわるほどの忙しさだった。彼女はキャンプ・デーヴィッドへでかけて、家族と一緒にもっと多くの時間をすごすのを楽しみにしていた。そろそろ起きるとしよう。アメリカじゅうの人間の半数以上がもう起きているというのに、わたしはまだベッドに横たわっている……もっとも、すでに起きているアメリカ人は、昨夜体重四百ポンドのトンガ国王と夕食をともにする必要のなかった人たちだ。なにしろこの巨漢の王様は事実上ホワイト・ハウスから追いだされるまで、自分から帰ろうとするそぶりも見せなかった。大統領はそのトンガ王国なるものがどこにあるか、地図の上で正確に捜し当てる自信がなかった。一口に太平洋といっても広い。国王との歓談はもっぱら国務長官のエイブ・チェイズにまかせておいた。少なくとも国務長官はトンガ王国の正確な所在を知っていた。

彼女はトンガ国王のことを頭から追いはらって、床に両足をおろした――より正確にいえば、大統領の紋章の上に足をおろした。このいまいましい紋章はトイレット・ペーパー以外のあらゆるものについている。廊下の向うの食事室へ朝食をとりに行くと、《ニューヨー

ク・タイムズ》の第三版、《ワシントン・ポスト》の第三版、《ロサンゼルス・タイムズ》と《ボストン・グローブ》の第一版が彼女を待っているはずだった。彼女に言及した記事のすべてが赤線で囲まれて。それからきのうのニュースのダイジェストも揃っているだろう。自分がまだ着替えもすませないうちに、そういったものがきちんと揃っているのが不思議でならなかった。彼女はバスルームへ行ってシャワーの栓をひねった。水圧はほどよい加減だった。銃砲所持規制法案を成立させるために、いまだに態度を決定しかねている議員たちをどのような言葉で説得すべきかと考えはじめた。この一連の思考は、背中の真ん中まで石鹸を持った手を届かせようとする努力で断ち切られた。これだけは大統領といえどもまだ自分の手でやるしかないようだ、と彼女は思った。

マークは二十分後に長官室へ出頭しなければならなかった。でかける前に郵便物をチェックした――アメリカン・エクスプレスからの封書が一通あるだけで、これは封も切らずに台所のテーブルに放置した。

オマリーが百ヤードはなれたフォード・セダンのなかであくびをしていた。マークがアパートを出て黒人の駐車場係と話をしていることを長官に報告できるので、ほっと一安心しているところだった。オマリーもトンプスンも、前の晩数時間マークを見失ったことをだれにも話していなかった。

マークは建物の横手をまわって、ブルーのフォードのなかにいる男の視界から消えた。だ

がオマリーは心配しなかった。一時間前にメルセデスのある場所を調べていたからである。出口は一つしかなかった。

マークは建物の角を曲ったところで赤いフィアットに気がついた。エリザベスの車に似ているな、と思った。バンパーがこわれていることを除けばそっくりだ。もっとよく見ると、驚いたことにやはりエリザベスの車で、しかも本人がなかに坐っていた。彼はフィアットのドアをあけた。もう彼女がスパイだろうがなんだろうがかまってはいられない心境だった。彼女の隣に乗りこんだ。最初は二人とも無言だったが、やがて同時になにかいいかけて神経質に笑った。彼女があらためて口を開いた。マークは無言で坐っていた。

「ゆうべあんなに腹を立てたことを謝りにきたの。少なくともあなたに弁明のチャンスを与えるべきだったわ。それに、やっぱりあなたがほかの上院議員の娘と寝るのはいやだし」そういって彼女は無理に笑おうとした。

「謝らなきゃならないのはぼくのほうだよ、リズ。ハリウッド映画の台詞じゃないが、ぼくを信じてくれ。何事があろうと今夜ぜひ会ってくれ。そのときなにもかも説明するよ。それまではなにも訊かずに、とにかく今夜ぼくと会うと約束してくれ。それでもまだぼくと縁を切りたいと望むんなら、ぼくはおとなしくきみの前から消えるよ」

エリザベスはうなずいて同意した。「でもこの前みたいにいきなり消えてしまうのはいやよ」

マークは彼女の肩に腕をまわして、すばやくキスをした。「あの晩のことでいじめるのは

もうやめてくれよ。あれから毎晩二度目のチャンスを待っていたんだ」

彼らは声を揃えて笑った。やがてマークが車からおりかけた。

「わたしに送らせて、マーク。どうせ病院へ行く途中だし、今夜車が一台だけのほうが世話がないでしょう？」

マークはちょっとためらってから答えた。「いいとも」

ひょっとするとこれは最後の罠なのだろうか、という疑いがマークの心をよぎった。

角を曲るときに、サイモンが手を振って叫んだ。「七号室の車が昼近くまで戻らないんだよ、マーク。とりあえずメルセデスを路上に駐めなきゃならないが、心配するな、ちゃんと見張っててやるから」サイモンはエリザベスの顔を見てにやりと笑った。「そうか、おれの妹に用はなさそうだな」

エリザベスは六番ストリートの車の群れに合流した。百ヤード先でオマリーがガムを嚙んでいた。

「今夜はどこでお食事するの？」

「例のフレンチ・レストランへ行って、最初からやりなおそうよ。今夜こそ終幕までやりとおすんだ」

「これこそ最も高潔なローマ人だった。暗殺者どもは、ただ一人彼をのぞいて……（訳注「ジュリアス・シーザー」の終幕、ブルータスを讃える言葉）」最後の幕がこの台詞とともに始まることをマークは願った。

「今度はわたしにおごらせて」と、エリザベスがいった。

マークはまだ封を切っていないアメリカン・エクスプレスの請求書を思いだして、快く申し出を受けた。Gストリートの角で信号が赤になった。彼らは停って待った。マークがまた脚をぽりぽり掻きはじめた。どうしようもないほどの痒さだった。

タクシーは依然として議事堂の周囲を回り続けていたが、ホールトのH・スチュアート・ナイトへの報告も終り近かった。

「襲撃がおこなわれるのは大統領が議事堂で車からおりるときにちがいない。あんたが大統領を無事に議事堂内へ連れこんでくれれば、議事堂のほうはわれわれのほうで引き受ける。周辺の建物とその屋上、そのほか狙撃可能な高い場所はすべてわたしの部下にカバーさせる予定だ」

「大統領が歩いて階段をのぼることに固執しなければ、われわれの仕事もずいぶん楽になるんだがね。七七年にカーターがペンシルヴェニア・アヴェニューを歩いてからというもの……」H・スチュアート・ナイトの声は腹立たしげに途中でとぎれた。「ところで、ホールト、なぜこのことをもっと早く知らせてくれなかったんだ？」

「それには深いわけがあるんだよ、スチュアート。まだくわしく話すわけにはいかないが、心配は無用だ、大統領護衛の任務には差しさわりのないことだよ」

「よかろう。これ以上は訊くまい。ほんとにわたしの部下の応援はいらないんだね？」

「ああ、きみたちは大統領を厳重に見張ってくれるだけでいい。そのほうが悪党どもを現行

犯で逮捕するのに都合がいいんだ。やつらに疑われちゃ困るからね。わたしは凶器を手にした犯人を現場で逮捕したいんだよ」
「大統領に知らせておくかね？」と、ナイトがたずねた。
「いや、ただこれからときおり実施する新しい警備対策だとだけ説明しておいてくれ」
「新しい警備対策なるものがかぞえきれないほどあるから、大統領はきっと信用するよ」
「道順と時間割さえ予定どおりなら、こまかい点はあんたにまかせる。要は犯人側にこっちの動きが洩れなければいいんだ。大統領主催の昼食会のあとでまた会おう。そのときになにもかもくわしく話すよ。ところで、きょうの大統領のコード・ネームは？」
「ジュリアスだよ」
「おいおい、まさかそんな」
「知っておく必要のあることはすべて話してくれてるんだろうな、ホールト？」
「むろんそうはいかんさ、スチュアート。わたしをだれだと思ってるんだ、マキアヴェリの弟だよ」
長官がエリオットの肩を叩いて合図すると、タクシーは列の七番目に戻った。二人の乗客は車からおりて反対方向へ歩きだした。ナイトは地下鉄でホワイト・ハウスへ、長官はタクシーでFBI本部へ戻るために。どちらもあとを振り向かなかった。
スチュアート・ナイトは運のいいやつだ、と長官は思った、この七日間わたしの持っている情報を知らずにすごしてきたんだからな。会談が終ったいま、長官は自分の戦略に対する

自信をいよいよ深め、事件の全貌は自分とアンドリューズの胸のなかだけにしまっておこうと決心した――ただし上院議員の有罪を立証する決定的な証拠が手に入った場合は別である。彼は共犯者たちを生きたまま逮捕して、その連中に上院議員の有罪を証言させる必要があった。長官は自分の時計とワシントン支局の上の旧郵政省タワーの大時計を見くらべた。八時〇〇分。アンドリューズはあと十五分すればやってくる。FBI本部の回転ドアを通り抜けるとき、守衛が敬礼をした。ミセス・マグレガーが興奮したようすで長官室の前に立っていた。

「チャンネル4で緊急連絡が入っております」

「つないでくれ」長官は急いで自分の部屋に入って、受話器を取りあげた。

「こちらオマリー捜査官、パトロール・カーからです」

「なんだ、オマリー」

「アンドリューズが死にました、車のなかにはほかにもう一人いるようです」

長官は一瞬声をのんだ。

「聞いてますか、長官？」オマリーはちょっと間をおいて繰りかえした。「聞いてますか、長官？」

ようやく長官が答えた。「すぐに戻ってこい」それから受話器をおいて、殺したい相手の首でも絞めるように、大きな手でクイーン・アン・デスクをぎゅっとつかんだ。五本の指がゆっくり内側に曲って巨大な握り拳を作り、掌に爪がぎゅっと食いこんだ。机のレザーの部

分にゆっくりと血が滴って、黒っぽいしみを残した。ホールト・タイスンはそのままの状態で数分間坐っていた。やがてミセス・マグレガーにホワイト・ハウスの大統領を呼びだすように命じた。きょうの予定はすべて中止だ。おれはあまりにも深入りしすぎたのだ。じっと坐って無言のうちに待った。おれは悪党どもに負けたのだ。やつらはなにもかも知っているにちがいない。

オマリー捜査官は十分かかってＦＢＩ本部に到着し、すぐに長官室へ通された。なんてこった、長官は八十歳の老人に見える、とオマリーは思った。

長官はオマリーの顔を凝視した。「どうして死んだのだ？」と、彼は静かな声でたずねた。

「車が爆破されたんです。彼のほかにもう一人乗っていたようです」

「なぜだ？　どうやって？」

「イグニッションに爆弾が接続してあったにちがいありません。われわれの目の前で爆発しました。めちゃめちゃに吹っとびましたよ」

「そんなことはどうでもいい」と、長官が徐々にたかぶってゆく声でいいかけたとき、部屋のドアがあいた。

マーク・アンドリューズが入ってきた。「おはようございます。お邪魔じゃないでしょうか？　たしか八時十五分とおっしゃったはずですが」

長官もオマリーも茫然として彼を凝視した。

「きみは死んだはずだぞ」

「なんとおっしゃいました？」

「すると、いったい」と、オマリー捜査官がいった。「あんたのメルセデスを運転していたのはだれなんだ？」

マークはわけがわからずに相手の顔をみつめた。

「ぼくのメルセデス？」と、彼はあわてていった。「いったいなんの話です？」

「あんたのメルセデスはいましがた粉々に吹っとんだ。わたしはこの目で見たんだ。わたしの同僚がいま現場でかけらを拾い集めている。さっき黒人の片手を発見したと報告してきたよ」

マークは壁によりかかって体を支えた。「やつらはサイモンを殺したんだ」と、怒りにみちた声で叫んだ。「やつらのきんたまをつぶしてやるのにグラント・ナーナを呼ぶ必要はない。ぼくの手でつぶしてやる」

「わけを話してくれ」と、長官がいった。

マークはふたたび壁によりかかり、それからくるりと二人のほうに向きなおった。「ぼくは今朝エリザベス・デクスターの車に乗せてもらったんです。彼女はぼくに会いにきたんです。それで、彼女の車に乗せてもらいました」と、彼はしどろもどろで同じことを繰りかえした。

「サイモンは昼間の予約駐車スペースを占領していたぼくの車を移動させたんです。あいつらが彼を殺したんです」

「まあかけたまえ、アンドリューズ。きみもだ、オマリー」

電話が鳴った。「大統領の官房長がお出になっています。大統領は二分後に出られるそうです」

「もういい、電話を取り消してお詫びしといてくれ。それからジャネット・ブラウンに大した用件じゃない、大統領にきょうの銃砲所持規制法案の成功を祈りたかっただけだと伝えてくれ」

「承知しました」

「すると連中はきみが死んだものと思いこんでいるわけだ、アンドリューズ。つまり連中は最後の切札を使ってしまった。だからわれわれは切札を引っこめる。きみには死んでいてもらうことにする——もう少しの間だけだ」

マークとオマリーは狐につままれたような表情で顔を見合せた。

「オマリー、きみは自分の車に戻れ。きみのパートナーにもなにもいっちゃいかん。きみは生きているアンドリューズと会わなかった、わかったな？」

「わかりました」

「よし、行っていいぞ。ミセス・マグレガー、広報部長を呼んでくれ」

「はい」

長官はマークの顔を見ながらいった。「きみが死んだと聞いて残念に思いはじめていたところだったよ」

「それはどうも」
「礼はいわんでいい、わたしはもう一度きみを殺そうとしているのだ」
ドアをノックする音が聞えて、ビル・ガンが入ってきた。彼は広報マンを絵に描いたような男で、ＦＢＩのだれよりも身だしなみがよく、一日おきに洗っている金髪の下にいつもこぼれんばかりの笑みをうかべていた。ところがいまはいつになくきびしい表情だった。
「うちの若い捜査官が一人殺されたことをご存じですか？」
「ああ、知ってるよ、ビル。その件について、詳細な発表を十一時におこなうと、いますぐ各新聞に伝えてくれ」
「記者連中はそれまで待っていられなくて、わたしにつきまといますよ」
「勝手につきまとわせておけ」と、長官がうむをいわさぬ口調でいった。
「わかりました」
「十一時になったらもう一度声明を出す、その捜査官は生きていて……」
ビル・ガンが驚きの表情をうかべた。
「……先の発表は誤りで、死んだのはＦＢＩとはなんの関係もない若い駐車場係だったと発表するのだ」
「しかし、死んだ捜査官は？」
「きみも死んだはずの捜査官に会ってみたいだろう。ビル・ガン——こちらがアンドリューズ捜査官だ。いまはなにもいうな、ビル。この男にはこれから三時間死んでもらう。もしも

この秘密が外に洩れたら、きみは新しい勤め先を捜すことになるだろう」
ビル・ガンはひどく心配そうな顔をした。「わかりました」
「新聞発表の原稿を書きあげたら、電話で読んで聞かせてくれ」
「はい」
ビル・ガンは茫然として部屋を出た。彼はのんびりした気のいい男だった。事情はさっぱりわからなかったが、ほかの多くの同僚たちと同じように長官を信頼していた。
長官は自分が多くの人間に信頼されていることと、重い責任が自分一人の肩にのしかかっていることを認識しつつあった。マークに視線を向けると、サイモンが自分の身がわりになって死んだことを知ったショックから、まだ完全には立ちなおっていないようだった——八日間に身がわりの死者が二人も出たのだから無理もなかった。
「さて、マーク、残された時間はあと二時間足らずだ。死者を悼んでいる暇はない。きのうの報告になにかつけ加えることはあるかね？」
「あります。生きていることはすばらしいことです」
「十一時をすぎれば、たぶんきみは健康に長生きできるだろう。しかし、デクスターなのかハリスンなのかまだわれわれにはわかっていない。わたしはデクスターのほうだと考えているがね」長官はふたたび時計を見た。八時二十九分——残るは九十七分だ。「なにかいいたいことはあるかね？」
「ええ、エリザベス・デクスターは無関係だと思います。今朝ぼくを車で送って命を救って

くれたんですから。彼女がぼくの死を望んでいたとしたら、話のつじつまが合いませんし」
「それはそうだ。しかし、だからといって父親の容疑までは晴れんよ」
「まさか自分の娘と結婚するかもしれない男を殺そうとはしないでしょう」
「きみの考えはセンチメンタルだよ、アンドリューズ。大統領の暗殺を企むほどの人間が娘のボーイフレンドのことなどいちいち気に病むものか」
電話が鳴った。広報担当のビル・ガンからだった。
「よし、読みあげてくれ」長官はじっと耳を傾けた。「よろしい、すぐにラジオ、テレビ、新聞に発表しろ。二番目の声明は十一時だ、それ以前には発表するなよ。ごくろうだったな、ビル」長官は受話器をおいた。
「おめでとう、マーク、これできみは世にも珍しい生きている死人だ。マーク・トウェインのように自分の死亡記事を読むことができるぞ。さて、ここらで手短かに状況を説明しておくとしよう。三百名の捜査官を動員して、すでに議事堂とその周辺をカバーさせてある。その地域は大統領の車が到着すると同時に交通が遮断されることになっている」
「大統領を議事堂へ行かせるんですか？」マークは驚いてきいた。
「よく聞けよ、マーク。わたしは九時以降の二人の上院議員の所在に関して一分刻みの報告を受けることになっているし、六人の捜査官が二人を尾行している。それから九時十五分に、われわれ自身も街へ出る。いよいよというときにはわれわれも現場に居合せるのだ。どっちみち責任をとらなきゃならないのなら、直接出かけて行って責任をとるほうがましというも

のだ」
「そうですね」
インターコムのブザーが鳴った。
「ミスター・サマートンがお見えです。ぜひお会いしたいといっています」長官は時計を見た。八時四十五分、約束の時間にぴったりだ。
ダニエル・サマートンがうれしそうな顔をしてせかせかと入ってきた。そして前置きなしで切りだした。「指紋の一つが犯罪者ファイルと一致しました。親指の指紋で、名前はマトスン——ラルフ・マトスンです」
サマートンはマトスンの写真と、モンタージュ写真と、指紋の拡大写真を取りだした。
「しかも長官はお気に召さないかもしれませんが、彼は元ＦＢＩ捜査官です」彼はマトスンのカードを長官にさしだした。マークは写真を眺めた。大きな鼻、がっしりした顎、あのギリシャ正教の司祭の顔だ。
「プロの手口。か」と、長官とマークが口を揃えていった。
「よくやった。サマートン。すぐに写真のコピーを三百枚作って、捜査担当長官補佐に渡してくれ——いいか。大至急だぞ」
「わかりました」指紋のエキスパートは満足そうな顔をして急いで出て行った。
「ミセス・マグレガー。ミスター・ロジャーズを呼びだしてくれ」
長官補佐が電話に出た。長官は彼に指示を与えた。

「見つけしだい逮捕しますか？」

「いや、彼を発見したら厳重に見張ってくれ。きみの部下が見破られないように注意しろ。やつはちょっとでもあやしいと思ったら計画を中止するかもしれん。それから連絡を絶やすな。彼を逮捕するのは十時六分すぎだ。予定が変ったらまた知らせる」

「わかりました。シークレット・サーヴィスにはもう知らせましたか？」

「ああ、知らせた」長官は乱暴に受話器をおいた。

それから時計を見た。九時五分。ボタンを押すと、エリオットが入ってきた。「二人の上院議員はどこにいる？」

「ハリスンは依然としてアレクサンドリアの自宅で、デクスターはケンジントンを出て議事堂に向っています」

「きみはこの部屋に残って、わたしと長官補佐への無線連絡を続けてくれ、エリオット。この部屋から一歩も出るなよ。わかったな？」

「わかりました」

「わたしはウォーキー・トーキーでチャンネル4を使う。でかけるぞ、アンドリューズ」彼らは名なしの男を残して部屋を出た。

「ミセス・マグレガー、わたしへの連絡はすべて長官室のエリオット捜査官につないでくれ。彼がわたしの連絡先を知っている」

「承知しました」

それから間もなく、長官とマークはペンシルヴェニア・アヴェニューを議事堂に向って歩いていた。マークはサングラスをかけてコートの襟を立てていた。途中で数人の捜査官とすれちがったが、長官に気がついた者は一人もいなかった。ペンシルヴェニア・アヴェニューと九番ストリートの交差点で、煙草に火をつけながら時計をにらんでいる議長とすれちがった。ちょうど九時三十分だった。議長は歩道の端へ寄った。立ち去ったあとには吸殻の山が残された。長官は吸殻をちらと見て思った。路上にごみを捨てた罪で百ドルの罰金だ、と。

彼らは急ぎ足で歩き続けた。

「トニー、応答せよ。トニー、応答せよ」

「こちらトニー。ビュイックは準備完了。たったいまカー・ラジオで、アンドリューズが死んだというニュースを聞いたところだ」

議長はにんまりほくそえんだ。

「サン、応答せよ」

「準備完了、合図を待っている」

「マトスン、応答せよ」

「万事オーケーだ、ボス。まわりはデカでいっぱいだよ」

「気にするな、大統領が外出するときはいつだってそこらじゅうシークレット・サーヴィスだらけだ。なにか問題が起きないかぎりもう連絡はするな。三人とも無線のスイッチを入れ

ておけ。つぎの連絡は時計の横についたヴァイブレーターを作動させるだけだ。それはケインがわたしの前を通過したという合図だから、決行はそれから三分四十五秒後だ。わかったか？」

「了解」

「了解」

「了解」

議長はスイッチを切って新しい煙草をつけた。九時四十分だった。

長官は特殊無線車に乗っているマシュー・ロジャーズを見つけて、急ぎ足で近づいて行った。「万事順調にいってるかね、マット？」

「ええ。だれかがなにかを企んでいるとしても、半マイルにわたって動きがとれません」

「よろしい。いま何時だ？」

「九時四十五分です」

「よし、きみはここから指揮をとれ。わたしは議事堂へ行く」

ホールトとマークは長官補佐と別れて先へ進んだ。

「エリオットから長官へ」

「どうぞ、エリオット」

「メリーランド・アヴェニューと一番ストリートの合流点、ガーフィールド大統領の銅像の

の外側、議事堂構内の南西の角、西正面改築工事現場の近くでマトスンを発見しました」

「よし。彼を見張ると同時にその一画の周囲に五十名の捜査官を配置しろ。まだ行動を起しちゃいかん。ミスター・ロジャーズに連絡して、部下をマトスンの目の届かないところに隠しておくように伝えろ」

「はい」

「いったい議事堂のそっちの側でなにをしているんですかね？」と、マークが小声でいった。

「ヘリコプターでも使わないかぎり、北西の側から議事堂の階段にいる人間は撃てませんよ」

「そのとおりだ。どうもおかしいな」と、長官が答えた。

彼らは議事堂を囲む警察の立入禁止線に達した。長官が身分証明書を提示して、アンドリューズと一緒にそこを通過した。議事堂警察の若い警官は証明書を念入りにチェックした。まさかと思ったのだ。しかし彼の目の前に立っているのは実物だった。FBI長官H・A・L・タイスンその人だった。

「失礼しました。どうぞお通りください」

「エリオットから長官へ」

「どうぞ、エリオット」

「シークレット・サーヴィス長官からです」

「スチュアートか」

「いま先導車が正門を出るところだ。ジュリアスは五分後に出発する」

「ありがとう、スチュアート。うまくやってわたしを驚かせてくれ」
「心配はいらんよ、ホールト。まかせておけ」

五分後に大統領の車がホワイト・ハウスの南口を出てEストリートへ左折した。先導車はペンシルヴェニア・アヴェニューと九番ストリートの交差点で議長の前を通過した。議長は微笑をうかべ、新しい煙草に火をつけて待った。五分後に、左右のフェンダーの上に旗をなびかせ、ドアに大統領の紋章をつけた大型のリンカーンが、議長の目の前を通過した。灰色の曇りガラスを通して、バックシートの三人の人影が見えた。シークレット・サーヴィスと大統領の侍医を乗せた「ガン・カー」と呼ばれるリムジンが、大統領車に続いた。議長は時計のボタンを押した。ヴァイブレーターの震動が手首をくすぐりはじめた。十秒後に震動を止めて、北へワン・ブロック歩いてからタクシーを呼びとめた。
「ナショナル空港」と運転手に命じて、内ポケットの航空切符を指先で確かめた。

マトスンの時計のヴァイブレーターが皮膚をくすぐりはじめた。十秒後に震動が止った。マトスンは工事現場のそばまで歩いて行き、しゃがみこんで靴の紐を結んだ。
サンがテープを剝がしはじめた。体を動かせることを感謝していた。一晩じゅう体を折りまげていたのだから無理もなかった。まず銃身に望遠装置をとりつけた。
「長官補佐から長官へ。マトスンが工事現場へ接近しつつあります。いま立ちどまって靴紐

を結んでいます。工事現場にはだれもいませんが、念のためにヘリコプターにチェックさせます。ここにはクレーンが一基ありますが、人はいないようです」
「よろしい。最後の最後まで待つんだ。大統領の車が到着した瞬間に合図する。やつらを現行犯で逮捕しろ。それから議事堂屋上の捜査官全員に警報を出しておけ」
長官はややほっとしたようすでマークのほうを向いた。「どうやらうまくいっているぞ」
マークの視線は議事堂の階段に注がれていた。「気がつきましたか、デクスター議員もハリスン議員も大統領出迎えの一行に入っております」
「そうだ。車はあと二分で到着する。二人のうちのどっちが犯人かわからなくても、とにかくほかの連中を逮捕するのだ。あとでその連中に口を割らせる。ちょっと待てよ――おかしいぞ」
長官はぎっしりタイプされた二枚の紙を指でたどった。
「やっぱり思ったとおりだ。大統領の日程表によれば、デクスターは特別演説をする予定になっているが、大統領との昼食会には出席しない。こいつは妙だな。野党幹部議員はみな昼食会に招かれているはずだ。なぜデクスターは出席しないのかな？」
「ちっとも妙じゃありませんよ。デクスター議員は毎週木曜日に娘と一緒に昼食をとることになっているんです。しまった！　『木曜日はいつも父と一緒にお昼を食べるのよ』」
「そうか、マーク、わたしははじめて聞いたぞ」
「ちがうんです。『木曜日はいつも父と一緒にお昼を食べるのよ』ですよ」

「マーク、車があと一分で到着するぞ」
「ハリスンですよ。犯人はハリスンです。ぼくは間抜けだった——二月二十四日、木曜日、ジョージタウン。二月二十四日だけ頭にあって、木曜日のほうを忘れていた。デクスターはエリザベスと一緒に食事をしてたんです。『木曜日はいつも父と一緒にお昼を食べるのよ』だから彼はあの日ジョージタウンにいたんです。そうにちがいありません。あの親子は木曜日の昼食を欠かしたことがないんです」
「それはほんとか？　間違いないんだな？　万一間違っていたらえらいことになるぞ」
「ハリスンですよ。デクスターじゃない。ぼくは最初の日に気づくべきだった。ああ、なんて間抜けなんだ」
「よしわかった、マーク。急いで階段へ行くんだ。ハリスンの動きを見張って、彼を逮捕する用意をしておけ。結果は考えなくていい」
「わかりました」
「ロジャーズ」
長官補佐が応答した。
「大統領の車が見えてきた。すぐにマトスンを逮捕しろ。議事堂の屋根を調べろ」長官は空を見あげた。「しまった、ヘリコプターじゃない、クレーンだ。あのクレーンにちがいない！」

サンは黄色いライフルの床尾を肩に当てて、大統領の車を見守った。銃身の先端に一本の糸で羽毛を結わえつけていた。これはオリンピックの練習中におぼえた手だった——まったくの無風である。長い待機の時間もいよいよ終りに近づいていた。ハリスン上院議員は議事堂の階段に立っている。三十倍のレッドフィールド望遠レンズを通して、ハリスンの額ににじむ汗を見ることができた。

大統領の車が議事堂の北側にさしかかった。万事予定どおりに進んでいる。サンは望遠照準を車のドアに合わせてケインを待った。二人のシークレット・サーヴィスが車からおりて、群衆に目を配り、三人目がおりてくるのを待った。だがなにも起らない。サンは不安顔の上院議員に照準を合わせた。ふたたび車のほうを見る、が依然としてケインは現われない。いったい彼女はどこにいるのだ、なにがあったのだ？　羽毛をチェックする、依然として風はない。大統領の車に照準を戻す。しまった、クレーンが動きだしている、ケインは車に乗っていない。結局マトスンのいったとおりだ、彼らはなにもかも知っていたのだ。サンはこのような場合にどうすべきかを正確に知っていた。仲間を見捨てられる立場にいる人間はただ一人だけだし、その男はきっと躊躇なく彼らを見捨てるだろう。彼は議事堂の階段へと照準を移動させた。額の上一インチ半。一瞬の躊躇ののちに引金を引いた……続いてもう一度、だが二度目は標的が何者かにさえぎられ、つづいて階段そのものが視界から消えた。動きだしたクレーンのてっぺんから下を見おろした。彼はダーク・スーツを着た五十人の男たちに囲まれ、五十の拳銃が彼を狙っていた。

ハリスン上院議員が叫び声を発して倒れたとき、マークは彼から一ヤードはなれた場所にいた。とっさに上院議員の体の上におおいかぶさると同時に、二発目の弾丸が彼の肩をかすめた。最上段にいる議員たちや役人たちの間でパニックが起きた。大統領出迎えの一行はあわてて議事堂内に逃げこんだ。三十名のＦＢＩ捜査官がすばやく駆けつけた。長官だけはただ一人議事堂の階段に立って、微動だにせずクレーンを見上げていた。停止(ホールト)というニックネームはだてではなかった。

「この車はどこへ向っているの、スチュアート？」

「はい、大統領閣下。議事堂へ向っております」

「でも、いつもと道順がちがうわ」

「そうです。コンスティチューション・アヴェニューを通ってラッセル・ビルディングへ向っています。議事堂でちょっとした騒ぎがあったという連絡が入っております。なにかのデモらしいです。おそらくナショナル・ライフル・アソシエーションでしょう」

「わたしはデモを避けるの？　それでは臆病者(おくびょうもの)みたいじゃないの、スチュアート」

「いや、地下を通って議事堂へお連れします。万が一ということもありますし、そのほうが閣下にも好都合かと思います」

「つまりあの地下鉄に乗らなきゃならないということね。わたしは上院議員時代でさえ外を歩くほうが好きだったのに」

「ほかに地下鉄の利用者はおりません。まだ充分に間に合います」
大統領はぶつぶつ独り言をいいながら、窓の外を反対方向へ走り去る救急車を眺めた。
ハリスン上院議員は病院へ到着する前に死亡し、マークは傷の手当をおえた。彼は時計を見て笑いだした。十一時四分——死人の役目は終った。
「電話ですよ、ミスター・アンドリューズ。ＦＢＩ長官からです」
「もしもし」
「マークか？　無事だそうだな。残念ながら上院はハリスン上院議員の死を悼んで休会に入った。大統領はショックを受けたが、いまこそ銃砲所持規制問題を論議する絶好の機会だと感じておられる。これから早目の昼食会が始まるところだ。きみが昼食会に出られなくて残念だよ。それからわれわれは一味を三人逮捕した——マトスンと、ヴェトナム人の射撃の名手と、トニー・ロライドという小悪党だ。まだ仲間がいるかもしれんが、それはあとで知らせるよ。ありがとう、マーク」
マークがなにも意見をいわないうちに電話が切れた。

三月十日 木曜日夜

午後七時〇〇分

マークはその晩七時にジョージタウンに着いた。午後はサイモンの通夜に顔を出して、悲嘆に暮れる両親にお悔みを述べた。彼らは五人の子持ちだったが、だからといって悲しみが薄らぐというものでもなかった。両親の悲しみようを眺めて、マークは生きとし生けるものの温もりへの渇望をかきたてられた。

エリザベスは病院ではじめて会ったときと同じ赤いシルクのシャツに黒のスカートをはいていた。彼女は奔流のような言葉で彼を迎えた。

「わたしにはなにがあったのかわからないことだらけよ。さっき父から電話があって、あなたがハリスン上院議員の命を救おうとしたことを聞いたわ。でもあんなところでいったいなにをしていたの？　父はハリスン議員が射殺されたことでひどく動転していたわ。どうして父をつけまわしたりしたの？　父の身が危険にさらされていたの？」

マークは正面から彼女を見すえた。「いや、お父さんはまったく無関係だった。そんなことはいいから最初からやりなおそうよ」

それでも彼女は依然として納得しなかった。

リヴ・ゴーシュに到着すると、給仕長が両手を拡げて二人を歓迎した。
「いらっしゃいませ、アンドリューズ様、またお目にかかれて光栄です。ところで、ご予約をいただいた記憶がございませんが」
「いいえ、わたしの名前で予約してあるわ。ドクター・デクスターよ」と、エリザベスがいった。
「はい、それならうけたまわっておりますとも、ドクター。さ、どうぞこちらへ」
彼らは焼きハマグリと、そしてついにステーキと、ワインを二本平らげた。
帰り道マークはほとんど歌いどおしだった。エリザベスの家に着くと、彼女の手をしっかり握って暗い居間へと導いた。
「ぼくはこれからきみを誘惑する。コーヒーも、ブランディも、音楽もいらない、ただ誘惑あるのみだ」
「わたしはとても運がいいわ」
彼らは長椅子の上に倒れこんだ。
「あなた、飲みすぎよ」
「まあいいから見てろ」彼はたっぷり時間をかけて彼女の唇を吸い、それからシャツのボタンをはずしにかかった。
「ほんとにコーヒーはほしくないの？」と、彼女がからかうようにいった。
「ああ、ほしくないとも」彼はスカートのなかからシャツの裾を引っぱりだして、片手で背

中を愛撫し、もう一方の手を脚に這わせた。

「それじゃ音楽は？　とっておきの曲よ」エリザベスはハイファイのボタンを押した。またもやシナトラだったが、きょうの歌はこの場の雰囲気にぴったりだった。

地震なのか、それともただのショックなのか
本物のタートル・スープなのか、それともまがいものなのか
カクテルのせいなのか、この喜ばしい気持は
それとも感じたままの、本物なのか？

永遠なのか、それともかりそめの戯れなのか
いま見ているのはグラナダなのか、それともアズベリ・パークなのか
取るに足らない空想なのか
それとも……これが……ついに見つけた……恋なのか？

彼女はマークの腕のなかに倒れこんだ。
彼はスカートのジッパーを引きおろした。
すらりとした脚が仄明りのなかで美しかった。彼はやさしく彼女を愛撫した。
「きょうのことをすっかり話してくれるわね、マーク？」

「話はあとだよ、ダーリン」
「わたしを思いどおりにしたら、きっと話してね」
彼はシャツを脱いだ。エリザベスが肩の繃帯に目をみはった。
「勤務中に怪我したのはここなの？」
「いや、これは前の恋人に嚙まれたところさ」
「その人はきっとわたしのときより時間があったのね？」
彼らはぴったりと寄りそった。
彼は受話器をはずした――今夜はごめんだよ、ジュリアス。

「だれも出ません」と、エリオットがいった。「話し中の信号が聞えるだけです」
「もう一度やってみろ。あいつはきっといるはずだ」
「交換手に確かめてもらいましょうか？」
「ああ、そうしてくれ」と、長官はいらいらしながらいった。
長官はクイーン・アン・デスクを指でこつこつ叩き、机の赤いしみを眺めてどうしてそんなしみがついたのかと首をかしげながら待った。
「交換手は受話器がはずれているといっています。信号を出すように頼みましょうか？　そうすればきっと気がつきますよ」
「いや、もういいよ、エリオット。わたしは家へ帰る。あすの朝かけるよ」

「そうですか。では、おやすみなさい」

この男はお払い箱だ――アイダホだかどこだかへ帰ってもらおう。長官はそう考えながら明りを消して帰宅した。

三月十一日　金曜日朝

午前七時〇〇分

マークが先に目をさました。たぶんなれないベッドのせいだろう。寝返りをうってエリザベスを見た。彼女は化粧をしないので、朝のベッドで見る顔もディナー・テーブルで向いあっているときと同じように美しかった。黒髪がうなじのほうにやわらかくカールしているのを、そっと手で撫でてみた。彼女が体を動かして寝返りをうち、彼にキスをした。

「起きて歯を磨いてらっしゃい」

「一日のはじめの台詞にしては、なんてロマンティックなんだ」と、彼はいった。

「あなたが戻るころには目がさめてるわ」彼女はうーんと唸って伸びをした。

マークはペプソデントを手にとりながら——これだけは替えさせなくちゃ、ぼくはマクリーンズのほうが好きだ——自分の洗面用具をバスルームのどこに置くことにしようかと考えた。バスルームから戻ったとき、まだ受話器がはずれたままなのに気がついた。時計を見ると七時五分だった。ふたたびベッドに戻った。入れかわりにエリザベスが抜けだした。

「ちょっとの辛抱よ」と、彼女がいった。

どうも映画とは調子がちがうぞ、とマークは思った。

彼女が戻ってきてかたわらに横になった。しばらくして彼女がいった。「ひげで顔がちくちくするわ。はじめてのときはもっときれいに剃ってあったのに」

「あの晩はとくに念入りに剃ったんだよ」と、マークは答えた。「どうも変だな、なにをやっても自信がない。予定とは大ちがいだ」

「なにを予定していたの？」

「どうも映画とは調子がちがうんだ。フランス人が女の死体を犯した罪に問われたとき、なんて答えたか知ってるかい？」

「知らないわ」

「まさか死んでるとは思わなかった、てっきりイギリス女だと思った、だとさ」

エリザベスはイギリス女でないことを証明してみせたあとで、朝食になにを食べるかとマークにたずねた。

マークは注文してからシャワー・ルームに消えた。

マークはシャワーをひねって温度を調節した。

「がっかりだわ、一緒にお風呂に入れると思っていたのに」

「ぼくは召使いとは一緒に入浴しない主義なんだ。朝食の用意ができたら呼んでくれ」と、マークはシャワーの下から答え、いくとおりかのちがったキイで『これがついに見つけた恋なのか』を歌いだした。

ほっそりした腕がお湯をくぐって現われ、蛇口をひねって止めた。ぷっつり歌声がやんだ。

エリザベスの姿はどこにも見えなかった。
マークは急いで服を着て、受話器を戻した。それを待っていたようにベルが鳴った。エリザベスが短いスリップをつけただけで姿を現わした。
マークはもう一度ベッドに戻りたかった。
彼女が電話をとった。「おはようございます。ええ、ここにおりますわ。あなたによ、マーク。やきもち焼きの恋人からみたい」
彼女はドレスを着て台所へ戻った。
「マーク・アンドリューズです」
「おはよう、マーク」
「ああ、おはようございます」
「ゆうべ八時からきみを捜していたんだぞ」
「そうでしたか、たしかぼくは休暇中のはずですが。ワシントン支局の記録をごらんください、休暇届が出ていますから」
「わかってるよ、マーク。しかしきみの休暇は中断だ、大統領がきみに会いたいそうなんでね」
「大統領というと？」
「アメリカ合衆国大統領だよ」
「なぜ大統領がぼくに？」

「きのうわたしはきみを殺したが、きょうは英雄にしてやった。大統領はきみがハリスン上院議員の命を救おうとした勇敢な行為に、じきじきおほめの言葉をくださるそうだ」

「なんですって？」

「朝刊を読んでみたまえ。いまはなにもいうな。わたしがなにをしたかはあとで説明する」

「何時にどこへ行けばいいんですか？」

「それはいずれ連絡があるだろう」電話がぷつんと切れた。

マーシーは受話器をおいて、いまのやりとりを考えてみた。それからエリザベスに朝刊はきているかとたずねようとしたとき、また電話が鳴った。

「あなた出てよ。恋人たちがあなたの居場所を知ったらしいから、今度もきっとあなたによ」

マーシーは受話器をとりあげた。

「ミズ・マーシー・アンドリューズ？」

「そうです」

「そのままお待ちください。大統領がお出になります」

「おはよう。フロレンティナ・ケインです。きょう十時ごろホワイト・ハウスにちょっと寄っていただけませんか？　あなたと会って話をしたいのです」

「光栄です、大統領閣下」

「では待っていますよ、ミスター・アンドリューズ。直接お会いして讃辞を呈したいのです。ホワイト・ハウスの西口で、ジャネット・ブラウンがお待ちしています」

「ありがとうございます」

しばしば新聞がこぞって書きたてるあの伝説的な電話のひとつだった。長官はそのために彼の居場所を確かめただけだったのだ。大統領も昨夜八時から彼の居場所を捜していたのだろうか？

「だれからだったの、ダーリン？」

「アメリカ合衆国大統領からだよ」

「こちらからかけなおすといってやればいいのに。大統領はいつでも国民からの電話に出るんでしょう、それもコレクト・コールで」

「いや、真面目な話なんだよ」

「そうよね、あなた」

「大統領がぼくに会いたいってさ」

「そうなの。場所はあなたの家、それとも彼女の家？」

マークは台所へ行って、ホイーティズに襲いかかった。エリザベスが《ワシントン・ポスト》を振りまわしながら入ってきた。

「これ見て」と、彼女はいった。「ほんとの話よ。あなたは悪者じゃなくて英雄だわ」

見出しはこうだった。《ハリスン上院議員、議事堂階段で暗殺さる》

「ほんとに大統領からだったのね？」
「そうだよ、ダーリン」
「なぜ言ってくれなかったの？」
「言ったよ、だけど耳をかさなかったじゃないか」
「ごめんなさい」
「愛してるよ」
「わたしも。でも毎週こんなことの繰りかえしはいやよ」
彼女はその先を読んだ。マークはホイーティズをむしゃむしゃ食べ続けた。
「なんだってハリスン上院議員が狙われたのかしら、マーク？」
「知らんね。《ポスト》にはどう書いてある？」
「まだ理由はわからないと書いてあるわ。彼には国の内外に敵が大勢いたそうよ」彼女は記事を声に出して読みはじめた。

「ロバート・ハリスン上院議員（民主党――サウス・カロライナ選出）は、昨日午前十時六分に、議事堂階段上で暗殺者の凶弾にたおれた。
事件は、昨日上院での投票が予定されていた銃砲所持規制法案のために最後の努力をおこなうべく、ケイン大統領が上院に到着する直前に起きた。シークレット・サーヴィスは明らかに議事堂階段におけるデモを予想して、大統領車のルートを上院ラッセル・ビルデ

ィングへと変更した。

凶弾はハリスン上院議員の頭蓋内にとどまり、ウッドロー・ウィルソン・メディカル・センターに運びこまれたときすでに同議員は死亡していた。第二弾は上院議員の生命を救うべく身を挺して同議員をかばったFBI捜査官マーク・アンドリューズ（二十八歳）の肩にかすり傷を負わせた。アンドリューズ捜査官は病院で傷の手当を受けたのち帰宅した。

暗殺の直前に、大統領不在の大統領車が議事堂階段に到着した事実に関しては、目下のところなんの説明もおこなわれていない。

ブラッドリー副大統領はハリスン上院議員の死を悼んで、ただちに上院の休会を宣言した。一方下院も満場一致で七日間の休会を決議した。

ラッセル・ビルディングから議事堂地下鉄経由で議事堂に到着した大統領は、上院ではじめてハリスン暗殺の報に接した。大統領は目に見えて動揺しながらも、銃砲所持規制について話しあう昼食会を予定どおり続けると発表し、出席した上院議員一同に死せる同僚を悼んで一分間の黙禱を捧げることを提案した。

さらに大統領はつぎのように語った。『わたしたちはついいましがた起った悲劇的かつ恐るべき事件のために、大いなる衝撃と悲しみを感じております。すぐれた一人の人間のこの無意味な殺戮は、武器を容易に入手できる現状からわが国を護るために協力しようというわれわれの決意を、なおいっそう強めずにはおかないものと信じます』

大統領は今夜九時に全国民向けの演説を予定している」

「これでなにもかもわかっただろう、リズ」

「なんにもわかってないわ」

「ぼく自身もよくわかってないんだよ」と、マークは白状した。

「あなたと一緒に暮すのは先が思いやられるわ」

「ぼくがきみと一緒に暮すなんて、だれがいった？」

「当然そのつもりだと思ったのよ、わたしの卵料理を食べているその顔を見て」

フォンテーヌブロー・ホテルで、一人の男がプールサイドに腰をおろして、《マイアミ・ヘラルド》を読みながらコーヒーを飲んでいた。少なくともハリスン上院議員はもう禍いの種ではなくなった。これで男は一安心だった。サンはちゃんと約束を守ったのだ。

彼はコーヒーをすすった。少し熱すぎたが、そんなことはかまわなかった。どうせ急ぐことはない。彼はすでに新しい命令を出していた。いかなる危険も避けなければならないからである。サンは夕方までに死んでいるだろう。その手配はもうちゃんとしてある。マトスンとトーニーは証拠不充分で釈放されるだろう。これはいままで一度も彼を失望させたことのない弁護士の保証つきだった。そして彼自身はしばらくワシントンに足を向けないようにする。

彼はくつろいだ気分でビーチ・チェアにあおむけになり、暖かいマイアミの陽ざしを全身に浴びた。そして新しい葉巻に火をつけた。

九時四十五分、長官はホワイト・ハウスで大統領の官房長、ジャネット・ブラウンに迎えられた。彼らはおしゃべりをしながら待った。長官がマーク・アンドリューズ捜査官の経歴をジャネットに説明し、彼女は丹念にメモをとった。

マークは十時直前に到着した。家へ帰って新しいスーツに着がえるだけの時間がかろうじてあったのだ。

「おはようございます、長官」と、彼は落ちつきはらっていった。

「おはよう、マーク。間に合ってよかったな」ややからかい口調だが、非難の響きはなかった。「こちらは大統領官房長のジャネット・ブラウンだ」

「おはようございます」と、マークがいった。

ジャネット・ブラウンがその先を引きとった。「じゃ、わたしの部屋で待っていただきましょうか。大統領は十一時十五分にキャンプ・デーヴィッドへ飛ぶために、これから今夜のテレビ放送のビデオ撮りをするところです。あなたと長官はおよそ十五分大統領とお話しできるでしょう」

ジャネット・ブラウンは二人を自分の部屋へ案内した。西翼にあるその大きな部屋からは、弓形の張出し窓を通してローズ・ガーデンのすばらしい眺めが見えた。

「コーヒーでも飲みましょう」と、彼女がいった。

「たまにはコーヒーもいいな」と、マークが呟いた。

「え、なにかおっしゃいましたか？」

「いや、べつに」

長官とマークはふかふかの椅子にくつろいで、正面の壁にはめこまれた大きな液晶モニター・スクリーンを眺めた。すでに大統領執務室の忙しそうな人の出入りが画面に映っていた。演説にそなえて大統領の額には白粉が刷かれ、カメラマンたちが周囲を動きまわっていた。

ジャネットは電話中だった。

「CBSとNBCはいつでも始められるけど、ABCの中継ユニットの準備がまだなのよ、ジャネット」と、興奮気味の女性の声がいった。

ジャネットはABCのプロデューサーを電話に呼びだした。

「急いでよ、ハリー、大統領は忙しいんだから」

「ジャネット」

フロレンティナ・ケインがスクリーンの中央に現われた。

「はい、なんでしょうか、大統領閣下」

「ABCはどこ？」

「いま急かせているところです」

「急かせている？　彼らには四時間前に連絡してあるのよ。この調子じゃキリスト再臨にもカメラが間に合わないわ」

「ほんとに。もうそろそろだと思います」

よ、ジャネット。五分後に録画撮りを開始できる」

ABCのプロデューサー、ハリー・ネイサンの顔がスクリーンに映った。「準備ができた

「結構」フロレンティナ・ケインは時計を見た。十時十一分だった。数字が変った――つぎに現われたのは心搏数だった――72、正常だと彼女は思った。その数字も消えて、かわりに血圧が出た。140／90、少し高すぎる、週末に医者に診てもらうとしよう。つぎに数字はダウ・ジョーンズ平均指数に変った。朝から1.5ポイントさがって1409になっていた。それも消えて、時計は十時十二分を指していた。大統領はスピーチの冒頭の一行の最後のリハーサルをおこなった。その朝ベッドのなかでエドワードと一緒に最終稿に目を通して、出来ばえに満足していた。

「マーク」

「はい」

「きょうの午後ワシントン支局のグラント・ナーナのところへ顔を出してくれ」

「わかりました」

「それから、きみに休暇をとってもらいたい。つまり、本物の休暇だ、五月に入ってからがいいだろう。エリオット君は五月いっぱいでわたしのもとを去って、コロンバスの支局長に就任する。きみを彼の後任に据えて、わたしの専属アシスタントになってもらうつもりだ」

マークはあっけにとられた。「どうもありがとうございます。喜んで」これで五か年計画

はおじゃんだ。
「なにかいったか、マーク？」
「いいえ」
「これからずっと一緒に仕事をするんだから、二人だけのときはそのサーをやめたまえ。どうも他人行儀でかなわん。ホールトかホレイショーと呼んでくれ——わたしはどっちでもかまわんよ」
　マークは笑いださずにいられなかった。
「わたしの名前がそんなにおかしいか、マーク？」
「いいえ。ただ、ぼくはたったいま三千五百十六ドル儲けましたよ」
「マイク・テスト、ワン、ツー、スリー。感度良好。発声テストをお願いします、大統領閣下」と、やや落ちつきを取り戻したフロア・ディレクターがいった。「朝食になにを召上りましたか？」
「トーストとコーヒーよ」と、大統領がよく通る声でいった。
「ありがとうございます。たいへん結構です。では始めましょう」
　すべてのカメラが、厳粛な表情で机に向って坐っている大統領に向けられた。
「いつでもお始めください」
　大統領はカメラ・ワンのレンズをみつめた。

CamScannerでスキャン

「国民のみなさん、わたくしは議事堂階段で起きたハリスン上院議員の血なまぐさい暗殺事件のあとで、今夜大統領執務室からみなさんに話しかけております。ロバート・エヴァラード・ハリスンはわたくしの友人でありかつ同僚でありました。すべての国民が彼の死を深く悲しんでいるものと信じております。わたくしたちは悲嘆に暮れるご家族の方々にも深い同情を禁じえません。この邪悪な行為は、銃の売買および不法所持をきびしく制限する立法を、新しい会期のはじめに強力に推進しようというわたくしの決意を、ますます強固にするものであります。彼の死を無駄（むだ）にしないためにも、わたくしはロバート・ハリスン上院議員を記念してこれを遂行するつもりであります」

長官がマークの顔を見た。二人とも一言も発しなかった。大統領は銃砲所持規制の重要性と、アメリカ国民がこの法案を強く支持すべき理由を諄々（じゅんじゅん）と説き続けた。

「では国民のみなさん、お別れに当って、わたくしはアメリカが依然として公僕（こうぼく）として生命を危険にさらすことを辞さない人々を生みだす可能性を持った国であることを、神に感謝します。ご清聴ありがとう、おやすみなさい」

カメラがパンして大統領の紋章を映しだした。やがて中継ユニットがそのあとを引きついで、半旗を掲げたホワイト・ハウスの外景に画面が切りかわった。

「大成功よ、ハリー」と、女性のフロア・ディレクターがいった。

「よし、再生してみよう」

大統領は執務室で、長官とマークはジャネット・ブラウンの部屋でビデオの再生を見守っ

た。上々の出来だった。銃砲所持規制法は間違いなく成立するだろう、とマークは思った。

式部長がジャネット・ブラウンの部屋の戸口に現われた。彼は長官に向って話しかけた。

「大統領があなたとマーク・アンドリューズ様に執務室へお越し願いたいと申しております」

二人は立ちあがって無言で西翼の長い大理石の廊下を通り抜け、歴代大統領とその夫人たちの肖像画や、アメリカ史の有名な出来事を描いた油絵の前を通りすぎた。リンカーン大統領のブロンズの胸像の前も通りすぎた。やがて東翼に達すると、巨大な大統領の紋章をあしらった執務室の白い大きな半円形のドアの前で立ちどまった。廊下の机を前にしてシークレット・サーヴィスが一人坐っていた。彼は式部長を見あげたが、どちらも口をきかなかった。マークはシークレット・サーヴィスの片手が机の下にもぐるのを見、カチッという音を聞いた。紋章が二つに割れてドアがあいた。式部長は入口に残った。

だれかが大統領の襟（えり）の下から小さなマイクロフォンをはずし、若い女性がもうすぐ大統領のメーキャップを落し終るところだった。テレビ・カメラはすでにかたづいていた。式部官が大きな声で告げた。

「FBI長官H・A・L・タイスン様と、捜査官マーク・アンドリューズ様がお見えになりました、大統領閣下」

部屋の奥で大統領が彼らを迎えるために立ちあがった。彼らはゆっくりと大統領のほうへ歩いて行った。

「あの」と、マークが声をひそめていった。

「なんだ、マーク」
「大統領に知らせますか？」

解説

永井淳

『大統領に知らせますか？』は、希代の株式詐欺師と四人の被害者チームの対決を描いた傑作ユーモア・ミステリー、『百万ドルをとり返せ！』（新潮文庫）でおなじみの、ジェフリー・アーチャーの二番目の作品である。前作のいかにもイギリス的な味のある作風とはうって変って、今度はアメリカ合衆国大統領暗殺の陰謀をテーマにしたサスペンスものである。大統領暗殺を扱った小説といえば、フレデリック・フォーサイスの『ジャッカルの日』を思いだすが、本書もアメリカ版はそれと同じヴァイキング社から刊行されていて、事実ヴァイキング社は本書によって『ジャッカルの日』の成功の再現を狙っているらしい。

ヴァイキング社といえば、この作品の刊行と関連して、一つの事件が内外の新聞をにぎわしたことを記憶している読者もおられるだろう。故ジョン・F・ケネディ大統領の未亡人で、ギリシャの富豪オナシスと再婚したジャクリーン・オナシスが、本書の刊行前までヴァイキング社の美術書の編集者をしていた。ところが、いくら未来の話とはいえ、前夫の実弟エドワード・M・ケネディが暗殺者に狙われるという内容の作品が自分の社から刊行されるとあっては、それでなくともとかくの噂が絶えず、ケネディ一族からも白い眼で見られている彼

女にしてみれば、痛くもない腹をさぐられるようで面白くないというわけで、同社を辞めてしまった事件である。

ジャクリーンの辞任騒ぎがこの作品に世間の関心を惹きつけたことはたしかだし、見方によってはそれさえアメリカ流の思いきった宣伝方法の一つとして仕組まれたものと考えられなくもないが、そうしたスキャンダラスな雰囲気から『大統領に知らせますか？』を救っているのは、ＥＭＫの大統領就任が——現実にその可能性が皆無ではないとはいえ——一九八一年という未来に設定されていることと、この作者が天性持ちあわせているらしいユーモアの感覚である。ＥＭＫにかぎらず、容疑者リストに名をつらねる上院議員も大部分が実名で、われわれ日本人の感覚からすればこれで名誉毀損騒ぎにならないのが不思議なくらいだが、これは未来の出来事であり、したがって完全な虚構であるという大前提があればこそ、実名小説やモデル小説が持つある種のえげつなさが消えて、エンターテインメントに不可欠な健全な遊びの精神だけが残るのだろう。現実の事件を人物の名前だけ架空のものにして書いた小説と、この作品の本質的な違いがそこにある。

サスペンスとユーモアは本来水と油のようなものだが、『大統領に知らせますか？』はそれをみごとに融合させることに成功している。『百万ドルをとり返せ！』をお読みになった方は、マーク・アンドリューズ対Ｈ・Ａ・Ｌ・タイスン＝ジェームズ・ブリグズリー対ハーヴェイ・メトカーフの取合せを連想せずにいられないだろう。新米のＦＢＩ捜査官が同僚や上司の頭ごしにトップのＦＢＩ長官と手を組んで、重大事件の捜査に当らなければならない

状況が、右往左往するマークの行動を通じて、なんともいえないおかしみをかもしだす。ことにフレンチ・レストランでの会話と独白の対比の妙、エリザベスの家のラブ・シーンに見られるユーモアなどは絶妙の味がある。タイスン長官の性格描写も魅力的で、実に生き生きとしている。

ジェフリー・アーチャーは一九七七年十月三十一日号の《ピープル》のインタビューで、なぜエドワード・ケネディを使ったのかという質問に、「高度にプロフェッショナルな政治家の一人として彼を選んだだけで、その点カーターはあまりに正直すぎて政治的プラグマティズムに欠けるし、だいいち人間が退屈だ」と答えている。そして相手の非難めいた口調を気にしたのか、「ウィリアム・バックリーはイギリス女王の暗殺計画をテーマにした小説を書いたが（ただし女王の名前はエリザベスではなく、キャロライン）、イギリスの新聞は一紙としてその是非を問題にしなかった」とつけくわえている。

アーチャーは元短距離ランナーで――記録は百ヤード九・六秒――小説を書きはじめる前は保守党の国会議員だったことはさきに紹介したが（『百万ドルをとり返せ！』巻末解説参照）、一九七四年にアクアブラストというカナダのエネルギー企業――ちなみにこの会社は『百万ドルをとり返せ！』に実名で登場する――への投資で破産し、「電話料金を払い、子供のミルクを買うために」書いたのが処女作の『百万ドル……』である。

現在の彼は毎朝鏡をにらんでつぎのように自戒の言葉を呟（つぶや）くのだそうだ。

「ジェフリー、きみは三作目が勝負だぞ。そしてどのみちスコット・フィッツジェラルドの

ようにはなれっこないだろう。彼は作家だったが、きみはストーリー・テラーにすぎない」

（一九七八年五月）

新版への訳者付記

冒頭の著者覚書に見られるように、本書に登場するアメリカ合衆国大統領は、旧版のエドワード・M・ケネディから、新版ではフロレンティナ・ケインという架空の人物に変っている。いうまでもなくポーランド移民から世界的なホテル王になったあのアベル・ロスノフスキの娘である。しかし作品の性格が本質的に変っているとは思えないので、旧版の訳者解説をそのまま残すことにしたしだいである。作家がいったん世に問うた作品の登場人物を変えてしまうことの是非はひとまず措くとして、時代が旧版よりさらに未来へ移行した結果、その時代を取りまく国際情勢や社会状況が微妙に変化してゆくところが、新版ではきめこまかに書きかえられている。ただ機械的に大統領を入れかえただけのものではないようである。

（一九八七年八月）

アーチャー
永井 淳訳

百万ドルをとり返せ!

株式詐欺にあって無一文になった四人の男たちが、オクスフォード大学の天才的数学教授を中心に、頭脳の限りを尽す絶妙の奪回作戦。

アーチャー
永井 淳訳

ケインとアベル
(全二冊)

私生児のホテル王と名門出の大銀行家。典型的なふたりのアメリカ人の、皮肉な出会いと成功とを通して描く〈小説アメリカ現代史〉。

J・アーチャー
永井 淳訳

ロスノフスキ家の娘
(全二冊)

ホテル王の一人娘は、父の敵の息子と結婚して家を出るが、やがてホテルを引継ぎ、米国初の女性大統領を目指して政界に進出する。

J・アーチャー
永井 淳訳

めざせダウニング街10番地

イギリス首相の椅子をめざし、熱い闘いを続ける三人の同期生議員たち。そして一九九一年、新国王チャールズが選んだ人物は——。

アーチャー
永井 淳訳

ロシア皇帝の密約

ロシアが米国に売却した領土には、買戻しの条項があった。期限切れ寸前の条約書の在処をめぐる熾烈な戦い。スピルバーグ映画化!

J・アーチャー
永井 淳訳

十二本の毒矢

冴えない初老ビジネスマンの決りきった毎日に突如起った大椿事を描いた「破られた習慣」等、技巧を凝らした、切先鋭い12編を収録。

CamScannerでスキャン

十二の意外な結末
J・アーチャー　永井淳訳

愛人を殴った男が翌日謝りに行ってみると、家の前に救急車が……。予想外な結末が待ち受ける「完全殺人」など、創意に満ちた12編。

無罪と無実の間
J・アーチャー　永井淳訳

不治の病に苦しむ妻に劇薬を手渡したのは、果して故意だったのか？　かばいあう夫婦の姿を描いて感動を呼んでいる舞台を再現する。

ホテル（全二冊）
アーサー・ヘイリー　高橋豊訳

欲望と混濁渦まく町ニューオーリンズの倒産寸前の大ホテル――巨大な組織の劇的な五日間を描き、極限状況の人間模様を映し出す。

最後の診断
アーサー・ヘイリー　永井淳訳

すべての治療の基礎になる病理部門を牛耳る頑迷な老医師の診断が招いた重大事態！　総合病院に展開される生と死のドラマを描く。

自動車
アーサー・ヘイリー　永井淳訳

この小説の主人公は車である！　デトロイトの巨大な自動車会社の全貌をあらゆる角度から詳細に描き、現代企業の生態をとらえる。

マネーチェンジャーズ（全二冊）
A・ヘイリー　永井淳訳

アメリカの大銀行の次期頭取を狙う二人の副頭取の経営方針が鋭く対立した。利潤追求か、公共性の重視か。銀行の内幕をあばく長編。

クライブ・カッスラー
中山善之訳

QD弾頭を回収せよ

地球に終末をもたらすQD微生物の入った弾頭2発が、アフリカ革命軍団の手に渡った！ そしてワシントンが砲撃の的に狙われている。

クライブ・カッスラー
中山善之訳

タイタニックを引き揚げろ

沈没した豪華客船・タイタニック号の船艙に、ミサイル防衛網完成に不可欠な鉱石が眠っている！ 男のロマン溢れる大型海洋冒険小説。

C・カッスラー
中山善之訳

マンハッタン特急を探せ

条約書はどちらも水の底だった。沈没した客船と、ハドソン河底のマンハッタン特急の中に……。ダーク・ピット・シリーズ第三作。

C・カッスラー
中山善之訳

氷山を狙え

氷山に閉じこめられたまま漂う、死の船の謎——ダーク・ピットが体力と知力のかぎりを尽して、恐るべき国際的な野望に立ち向う。

C・カッスラー
中山善之訳

海中密輸ルートを探れ

エーゲ海の島が、一次大戦のドイツ機に爆撃された。旧式飛行艇で応戦したピットは、謎の密輸ルートに挑戦することになる……。

カッスラー
中山善之訳

大統領誘拐の謎を追え（全二冊）

ポトマック河畔の専用ヨットから、大統領・副大統領ら政界の実力者四人が失踪した。呼び出されたピットの活躍。シリーズ第六作。

フリーマントル 稲葉明雄訳

消されかけた男

KGBの大物カレーニン将軍が、西側に亡命を希望しているという情報が英国情報部に入った！ ニュータイプのエスピオナージュ。

フリーマントル 稲葉明雄訳

明日を望んだ男

旧ナチ高官のリストが見つかった。イスラエル政府とナチ親衛隊組織は必死の奪回作戦を開始したが、深く関わるもう一人の男が……。

フリーマントル 稲葉明雄訳

呼びだされた男

逃亡中のチャーリーに、たった一人の友人から電話があった。恩義ある人を助けようと、危険を承知で元スパイは香港に出向いた。

フリーマントル 池 央耿訳

ディーケンの戦い

死の商人アジズの息子が誘拐された。犯人は、大量の武器を取戻そうとする反対勢力。妻を誘拐され、犯人の代理を強要された男の戦い。

フリーマントル 稲葉明雄訳

罠にかけられた男

保険引受人の親友を助けるために再び姿を現わしたチャーリーは、貴重な切手コレクションを狙う計画が進んでいるのを嗅ぎつけた。

フリーマントル 飯島 宏訳

収容所から出された男

ソ連対外交渉専門家のブルトヴァは、一度粛清されかけた。かつての仇敵から、ノーベル賞候補作家の保護者役を命じられたが――。

CamScannerでスキャン

A・J・クィネル
大熊 栄訳

スナップ・ショット

世界を瞠目させたイスラエル空軍のイラク原子炉爆撃事件。その陰で、一枚のスナップに命を賭けた男がいた――白熱のスパイ冒険小説。

A・J・クィネル
大熊 栄訳

血の絆

特殊な血液型の息子を捜す未亡人、冒険を求めて船出した中年男――四人の男女を乗せたおんぼろヨットの運命は？　異色の冒険小説。

A・J・クィネル
大熊 栄訳

サン・カルロの対決

中米の小国で革命がおこり米大使が人質となる。重大な機密を握る彼の前に〝尋問の天才〟と呼ばれる男が現れた――息詰るサスペンス。

R・ラドラム
山本光伸訳

暗殺者（上・下）

僕はいったい誰なんだ？　記憶を失った男は執拗に自分の過去を探るが、残された僅かな手掛りは、彼を恐ろしい事実へと導いてゆく。

R・ラドラム
山本光伸訳

狂気のモザイク（上・下）

恋人を殺させてしまった秘密情報員は、絶望のあげくに、引退を決意した。しかし死んだはずの彼女が……。狂気と陰謀渦巻く長編。

R・ラドラム
山本光伸訳

四億ドルの身代金

元将軍ホーキンスは、彼を退役させた国に復讐を誓った。美しい四人の前妻たちと共謀して考え出したのは、ナント法王の誘拐!?

S・キング
深町眞理子訳

ファイアスターター（全二冊）

十二年前少女の両親は極秘の薬物実験に参加した――念力放火の能力を持って生れた少女の悲哀と絶望、そして現代の恐怖を描く。

S・キング
永井 淳訳

クージョ

狂犬病にかかったセント・バーナード"クージョ"。炎天下、車に閉じこめられた母子の恐怖を克明に描いて、ひたすらコワい長編。

S・キング
永井 淳訳

キャリー

狂信的な母を持つ風変りな娘――周囲の残酷な悪意に対抗するキャリーの精神は、やがてバランスを崩して……。超心理学の恐怖小説。

S・キング
山田順子訳

スタンド・バイ・ミー
―恐怖の四季 秋冬編―

死体を探しに森に入った四人の少年たちの、苦難と恐怖に満ちた二日間の体験を描いた感動編「スタンド・バイ・ミー」。他1編収録。

S・キング
吉野美恵子訳

デッド・ゾーン（上・下）

ジョン・スミスは55カ月の昏睡状態から奇跡的に回復し、人の過去や将来を言いあてる能力も身につけた――予知能力者の苦悩と悲劇。

S・キング
P・ストラウブ
矢野浩三郎訳

タリスマン（上・下）

母親の生命を救うには「タリスマン」が必要だ――謎の黒人スピーディにそう教えられた12歳のジャック・ソーヤーは、独り旅立った。

CamScannerでスキャン

S・L・トンプスン
高見　浩訳

A-10奪還チーム出動せよ

東独領内に墜落したA-10機に搭載された新兵器を奪還すべく、特殊装備の救援車が出動した。国境線上の緊迫のカー・チェイス。

S・L・トンプスン
高見　浩訳

サムソン奪還指令

スパイ衛星がソ連の中国侵攻を察知した。そのフィルムを回収した〈奪還チーム〉は、四輪駆動車で東西ドイツ国境線突破を決意する。

S・L・トンプスン
高見　浩訳

鉄血作戦を阻止せよ

ドイツ統一を目差す東西両独軍の鉄血部隊が、米ソの核ミサイル基地を占拠した——日本向け書下ろしの〝奪還チーム〟シリーズ第三作。

J・トレンヘイル
矢野浩三郎訳

消えたAWACS機

米空軍の誇る早期空中警戒管制機AWACSがソ連に強奪された。CIAの工作員は奪われた機体を破壊すべくシベリアへ向かうが。

E・トーポリ
江川　卓訳

赤いパイプライン

収容所脱走事件を引き金に凍土帯に広がったパニックと暴動。パイプラインを守れ！　亡命作家が描く迫真のエンターテイメント。

B・ブロンジーニ
B・N・マルツバーグ
黒丸　尚訳

決戦！　プローズ・ボウル
——小説速書き選手権——

巨大スタジアムの中で、作家と作家が死力をつくし、制限時間内に一万語の小説をたたきだす——前代未聞のスポーツ・パロディ小説。

新潮文庫最新刊

池波正太郎著

秘伝の声（上・下）

師の臨終にあたって、秘伝書を土中に埋めることを命じられた二人の青年剣士の対照的な運命を描きつつ、著者最後の人生観を伝える。

城山三郎著

秀吉と武吉
目を上げれば海

瀬戸内海の海賊総大将・村上武吉は、豊臣秀吉の天下統一から己れの集団を守るためいかに戦ったか。転換期の指導者像を問う長編。

小林信彦著

時代観察者の冒険

東京の変容、人間観察、ショウと笑い、アイドル、本と読書の周辺……。旺盛な好奇心と鋭敏な感受性が読みとった〈時代の風〉。

林　京子著

三界の家
川端康成文学賞受賞

父は山頂の墓地を離れロッカー式納骨堂に静かに眠る——敗戦による父の権威の崩壊とその死を共有する母と私の現実を描く短編集。

矢作俊彦著

複雑な彼女と単純な場所

好きなものは横浜と裕次郎と長嶋。嫌いなものは警官とでぶ——快刀乱麻の毒舌が冴える、鬼才の抱腹絶倒面前罵倒エッセイ集決定版。

関川夏央著

水のように笑う

一見何気ないシーンにも、著者の個性は鮮やかに刻印され、著者と共に同時代を共有した思いに誘われる。優雅で感傷的な名エッセイ。

CamScannerでスキャン

新潮文庫最新刊

中島みゆき著
泣かないで・女歌
たっちゃん、"猫"、フミちゃん、テレサ。中島みゆきが、優しく、そして逞しく生きる女たちを描く、「女歌」に続く小説第二弾。

山口淑子
藤原作弥著
李香蘭 私の半生
生粋の日本人でありながら、中国人としてデビューした女優・李香蘭。時代に翻弄された彼女の半生を通して昭和の裏面史を描く。

川島四郎著
たべもの心得帖
朝食は通勤途中に昆布と水で——いずれも簡単で安上がりな、"健康で長寿を保つ秘訣"を満載。効果は著者自身の体が証明済みです。

加藤正和著
念術小僧
—大江戸サイキック・ボーイ—
さらわれた将軍のお姫さまを救え！ ハーフの超能力少年・百合五郎が、カラス天狗相手に大奮戦。前代未聞奇想天外明朗SF時代劇。

村上哲哉著
ラスト・マジック
プロ野球史上初、少女監督誕生！ 東京の三軒茶屋球場を舞台に、パ・リーグの万年最下位球団の優勝を賭けて女子高生監督が奮闘する。

D・アーロン
小梨直訳
危険な人物（上・下）
全米一の巨大メディアに謎の男が乗っ取りをしかけた——東西緊張緩和後の情報活動を扱って、新しいスパイ小説の方向を示す注目作。

新潮文庫最新刊

真の刑事（上・下）　T・ウィーズナー　小菅正夫訳

小さな港町に突然起こった、小児性愛者による少年誘拐事件。ヴェテラン刑事は誠実に職務を果たしつつ、犯人を追い詰めていくが。

高度四万一〇〇〇フィート　燃料ゼロ！　M・W・ホッファー　M・M・ホッファー　松田銑訳

燃料切れのハイテク旅客機に乗り合せた人々の運命は？　恐怖の29分間を再現し、その奇妙な事故原因を追及する戦慄のドキュメント。

ありふれた手法　星新一著

かくされた能力を引き出すための計画。それはよくある、ありふれたものだったが……。ユニークな発想が縦横無尽にかけめぐる30編。

姥（うば）うかれ　田辺聖子著

女には年齢（とし）の数だけ花が咲く、花の数だけ夢が咲く。愛しのシルバーレディ歌子サン、大活躍！『姥ざかり』『姥ときめき』の続編。

砂場の少年　灰谷健次郎著

35歳で臨時採用の教師になった男はどのような教育を実践するのか——子どもと大人の真の関係の在り方を問う文庫書下ろし長編小説。

ドラゴンセンターを破壊せよ（上・下）　C・カッスラー　中山善之訳

漂流船に乗り込んだ男たちは、次々に倒れた。船はやがて爆発し、そのために生じた大地震が、ピットたちの秘密海底基地を襲った……。